カリナム、然レバ速ニ軍ヲ調ヘテ、彼ノ國ヲ可レ被レ罰キ也ト被レ定テ、其時鎭守府ノ將軍藤原ノ利仁ト云ケル人ヲ、彼國ニ遣ケリ、利仁心猛クシテ、其道ニ達セル者ニテ、此仰ヲ承テ後、心ヲ勵シテ出立ツ間、多ク猛キ軍共ヲ、員不レ知多ノ船ニ調ヘ被レ乘ル、而ル間、彼新羅ニ此事ヲ不レ知、其ニ此事ニ依テ樣々ノ物怪有ケレバ、占セ申ケレバ、異國ノ軍發テ可レ來キ由ヲバ、占ヒ申ケレバ、其國ノ國王ヨリ始、大臣公卿驚騷テ云ク、異國ヨリ猛キ軍發テ、我國ニ來ラムニ、手向ヘシテ、可レ支キ樣無シ、然レバ只不レ如三寶ノ靈驗ヲ、深可レ憑也ト定メテ、大宋國ニ在マス灌金阿闍梨ト云人有リ、惠果和尙ノ御弟子トシテ、眞言ノ密法ヲ受傳ヘテ、止事無キ聖人也、忽ニ其人ヲ請ジテ、調伏ノ法ヲ令レ行ム、其時ニ三井寺ノ智證大師ハ、若クシテ宋ニ渡テ、此阿闍梨ヲ師トシテ、眞言習テ御ケルガ、其モ共ニ新羅ニ渡テ御ケレドモ、我國ノ事ニ依テトハ何デカハ知給ハムト爲ル、然間、調伏ノ法既ニ七日ニ滿ヌル日、壇ノ上ニ血多ク流タリ、阿闍梨必法ノ驗可レ有也ト云テ、結願シテ本ノ宋ニ返ニケリ、而ルニ、利仁ノ將軍出立ツ間、山崎ニシテ、病付テ臥タリケル間俄ニ起走テ□□ニ空ニ向テ、太刀ヲ拔テ、踊上リ踊上リ、度々切ケル程ニ、倒レテ死ニケリ、然レバ他人ヲ亦遣ス事モ無クテ止ニケリ、其後智證大師、宋ヨリ此朝ニ返リ給テ、新羅ニ渡タリシ事ヲ語給ケルヲ聞テナム、此國ノ人、然バ利仁ノ將軍ノ死ニシ事ハ、其調伏ノ法ノ驗ニ依テナリケリトハ知ケル、此ヲ思フニ、利仁將軍モ糸只人ニハ非ズトナム思ユル、然カ空ニ向テ切ケムハ、定メテ目ニ見エケル（ママ）ニコソハ有ケメ、然レドモ法ノ驗シ掲焉キガ故ニ、忽ニ死ヌル也ケリトナム、語リ傳ヘタルト也、

〔御仕置類例集二十一〕文化七午年御渡

京都町奉行伺

一泉州福田村與源寺妙嚴調伏之修法致し候一件、

大覺寺御門跡末寺

眞言律宗

泉州大鳥郡福田村

與源寺住持　妙嚴

右のもの儀、六字明王調伏之儀ハ、人命を斷候儀に無之、平調歸伏を祈念致し候修法に候とも、不容易儀に候處本寺役人より、達て申聞御門跡構內護摩堂にて、修行致候儀故、重役之ものよりも申出候儀と相心得候迚、森田外記より請取候書付にハ、爭論一件、懸り奉行始、役人等之名前も有之、不輕儀、旁再應相斷、取計方も可有之處、無其儀承知いたし、調伏修法全備ハ不致候へ共、莊方之內護摩爐、護摩木ハ假に三角を用ひ、調伏の梵語を加、調伏之法相行敬愛之法をも兼修いたし候旨申之候へ共、紛敷相聞乍略式も奉行を始、調伏致し候始末、不恐公儀仕形、其上法流と懸密會候段、清僧之身分にて、不律不如法之儀共、旁不届に付遠島、

此儀清僧之身分にて、懸密會候不届も御座候へ共、掛り奉行を、初より調伏いたし候段ハ、對公儀候儀に付、重々不届に御座候、吟味書之趣にては森田外記任差圖、乍略式二七日之間、調伏修行いたし候ものにて、右朱書に、六字明王の法ハ、人命を斷候と申にハ無之、怨敵之邪念を拂除候傳之由、智積院役者申立候と有之、然ル上ハ大和守を初め懸りのもの共を、怨敵と心得、調伏致し候ものに付、安永三午年評議に、御下ゲ被成候御勘定奉行石谷備後守、川井越前守相伺候、飛州大野郡久々野鄕宮村一之宮神主森伊勢外一人儀、強訴徒黨之百姓どもと馴合、一之宮拜殿又ハ銘々居宅へ寄合候もの共を引入、殊に後難を可遁と相巧取拂候、神願狀、幷證文取置、剩太七申聞候に同意致し、不届成祈禱致、金錢貰請候段、重々不届至極に付、於其所磔と相伺、評議

法驗

之上伺之通と申上、其通相濟候例有之、右修法ハ、其節之書留相見え不申候間、難相分候得共、不届成祈禱いたし候段ハ同樣ニ有之、併本寺役人達ての任差圖修法致し候者にて、素より利欲に拘り候儀にも無之間、右例より格別品輕死罪。

〔古今著聞集二釋教〕平等院の僧正行尊は小一條院の御孫侍從宰相の子なり、母の夢に、中堂にまいりたりけるに、三尺の藥師如來をいだき奉ると見て、いくほどをへずして、くはいにんありけり、すべからく台嶺の法師にて有べかりけれども、流にひかれて寺法師に成給にけり、實相坊大あじやりに隨逐して、三部の大法諸尊別行護摩秘法をうけ、秘密灌頂をつたへ給へり、出家の後住寺の間、一夜も住房にとゞまらず、金堂彌勒を禮拜して、四五更を送りけり、十二歲の六月廿日より、不動の供養法を勤修せられけり、十七にて修行に出て、十八年歸洛せず、其間に大峯の邊ちかづらき、其外靈驗の名地ごとに歩をはこばずといふ事なし、かく身命をすてゝ、五十有餘におよぶ、その行たいてんする事なし、その間に、護摩をしゆする事に、小壇支度物等にあひぐして、あへてだんせつする事なし、其日數をかぞふれば、前後都合八千餘日なり、又每日數百へんのらいはいありけり、本寺の住房にして、はじめて不動の護摩をしゆせられける時、夢中に不動尊の仕者かたちをあらはして見え給けり、たけ三四尺ばかりなる童子の、青衣の上にむらさきなるをぞきたまひたりける、左の手に劍幷に索をもち、右の手に劍印をなす、壇上よりあゆみきたりて、乳上にあたりて、種々の事をしめし給ふ中に、やくそくのごとく護摩二千日勤行せらるべき也との給はせければ、僧正承諾せられにけり、其後大みねの神佛に、五七日宿したることありけり、これ稀なる御事なり、同行一人もしたがはず、たゞひとり庵室にゐて、經をよみ、呪をみてゝ日を送り給ひけるに、陰雲靉靆、雨滂沱、庵室のうち河流のごとくして、身をいるべき所なし、わづかに岩の上に蹲居して、存命ほとんどあぶなかりけり、高聲に經をよみ奉る、我不愛身命、但惜無上道の義なり、夜ふけて夢ともなく、容貌美麗なる總角の幼童、左右におの〳〵壹人、僧正のあしをさゝげたり、おどろきて幼童をもとむるに、はじめて夢としりて、感涙おさへがたし、いよ〳〵本尊を念じてねぶれば、又さきのごとく童子見えけり、麗景殿の女御、僧正を御猶子にして、憐愍の心ざし實子に過たりけり、僧正修行に出られて、大みねにおこなはるゝ間、女御日來やまひにわづらひ給ひて、存命たのみなくなり給ひけるとき、僧信禪をつかひとして、今一度みたてまつらんために、いそぎ歸洛し給ふべきよし申されけり、草庵の内に、たゞ壹人經をよみて、かげの如くにおとろへて、其人とも見えず、なみだにおぼれて、しばし物もいはれず、あひかまへて、かの仰のむね申ければ、僧正われ此行をくはだてゝ、世の中を思ひすてゝ、三寶の加護を頼み奉れば、もろ〳〵の怖畏なし、女御の御腦もおのづからのぞき給はんとて、柑子一つゝみを加持してまいらせられけり、信禪かへり參て、そのよし申されて、くだんの柑子を奉ければ、ずなはちふくせしめ給ひて、御腦へいゆうし給てけり、大峯に入られける日、齋持の粮米白米七升也、其内四升は日來うせにけり、のこる所三升也、笙の岩屋にて、疲極の山ぶしをもてなし、大りやくのこる物なかりけり、其比の事にや、かの岩屋にて、

草の庵なに露けしとおもひけんもらぬ岩やも袖はぬれけり

〔長明發心集四〕淨藏貴所飛鉢事

淨藏貴所ト聞ユルハ、善宰相清行ノ子、幷ビナキ行人也、山ニテ鉢ノ法ヲ行ヒテ、鉢ヲ飛シツヽ、過ケル比、或日、空シキ鉢バカリ歸來テ、入ル物ナシ、アヤシク思程ニ、此事ツヾケテ三日ニナリヌ、驚テ、道ノ間ニ、何ナル事ノアルゾ、見ントト思テ、四日ト云日、鉢ノ行方ノ、山ノ峯ニ出テ伺ケル程ニ、我鉢ト覺クテ、京ノ方ヨリ飛クルヲ、北ノ方ヨリ、又アラヌ鉢ノキ合テ、ソノ入物ヲウツシ取テ、本ノ方ヘ來リ行アリケリ、是ヲ見ルニ、イト安カラズサリトモトコソ思フニ、タレバカリカハ、我鉢ノ

物ウツシトルワザヲセン、此事目ザマシキ者ノシワザ哉、見ント思テ、我ガ空キ鉢ヲ加持シテ、其ヲシルベニテナン、バルゝ〳〵ト北ヲ指テ、雲霧ヲシノギツヽ、分入ケル、今ハ二三百町モキヌラント思程ニ、アル谷ハザマノ、松風ヒヾキ渡テ、イサギヨク、コノモシキ所ニ、一間バカリナル、草ノ庵アリ、砌ニ苔青ク、軒近ク清水流レタリ、内ヲ見レバ、年タカキ僧ノ、ヤセヲトロヘタル、只ヒトリ居テ、脇息ニヨリカヽリツヽ、經ヲヨム、イカニモ只人ニアラズ、此人ノシワザナメリト思程ニ、淨藏ヲ見テ、云ヤウ何クヨリイカニシテ來リ給ヘル人ゾ、ヲボロゲニテモ、人ノマウデクル事モ侍ラヌヲト云、其事ニ侍リ、我ハヒエノ山ニスミ侍ケル行者也、シカルニ月日ヲ送ルバカリ事ナクテ、此程鉢ヲトバシツヽ、行ヲシ侍ルニ、昨日今日、コト〳〵シク、アヤシキ事ノ侍リツレバ、ウレヘ申サントテ、マイリ來ルナリト云、僧ノ云樣、ヱコソシリ侍ラネ、イト不便ニ侍ル事哉、尋侍ラントテ、シノビニ人ヲヨブ、卽庵ノウシロノ方ヨリ、イラヘテ來ル人ヲミレバ、十四五バカリナル、ウツクシキ童子ノ、ウルハシク唐裝束シタルナリ、僧是ヲイサメテ云樣、此仰セラルヽ事ハ汝ガシワザカ、イトアタラヌ事也、今ヨリハ、サルワザナセソト云ヘバ、カホウチアカメテ、物モイハデ歸リヌ、〔宇治拾遺物語 三〕これもいまはむかし、ゑちせんの國かぶらきのわたりといふところにわたりせんとて、ものどもあつまりたるに、やまぶしあり、けいたう房といふ僧ありけり、熊野みだけはいふにおよばず、しら山、はうきの大山、出雲のわにぶち、大方しゆぎやうし、のこしたるところなくかりけり、それにこのかぶらきのわたりに行て、わたらんとするに、わたりせんとするもの雲霞のごとし、おの〳〵物をとりてわたす、このけいたう房、わたせといふに、わたし守き、も入れてこぎいづ、そのときにこの山ぶし、いかにかくは無下にはあるぞといへども、大かたみ、にもきゝいれずしてこぎ出す、そのときにけいたう房、はをくひあはせて、念珠をもみちぎる、このわたし守見かへりて、をこの事と思ひたるけしきにて、三四町ばかりゆくを、けいたう房見やりて、あ

じをすなごに、はぎのなからばかりふみ入て、目もあかくにらみなして、ずゞをくだけぬと、もみちぎりて、めし返せ〳〵とさけぶ、なを行きすぐるときに、けいたう房、けさと念珠とを取りあはせて、汝ちかくあゆみよりて、護ずめし返せ、めしかへさずば、長く三寶に別れたてまつらんとさけびて、このけさをうみになげいれんとす、それをみて、此つどひゐたるものども、色をうしなひてたてたり、かくいふほどに、風もふかぬに、このゆく舟のこなたへよりく、それを見て、けいたう房、よりめるは〳〵、はやういておはせ〳〵とすはなちをして見るものいろをたがへたり、かくいふほどに、一町の內によりきたり、そのときけいたう房、さて、いまはうち返せ〳〵とさけぶ、その時につどひて見るものども、一こゑにむさうの申やうかな、ゆゝしき罪にも候ふ、さておはしませおはしませといふとき、けいたう房、今すこし氣しきかはりて、はやうち返し給へとさけぶときに、このわたし舟に、二十餘人のわたるもの、つぶりとなげ返しぬ、そのときけいたう房、あせをしのごひて、あないたのやつばらや、まだしらぬかといひて、たちかへりにけり、世のすゐなれども、三寶おはしましけりとなん、

〔太平記 二〕長崎新左衞門尉意見事 附阿新殿事

阿新晝ハ病由ニテ、終日ニ臥シ、夜ハ忍ヤカニヌケ出テ、本間ガ寢處ナンド、細々ニ伺テ、隙アラバ彼入道父子ガ間ニ、一人サシ殺シテ腹切ランズル物ヲト、思定テゾネラヒケル、或夜雨風烈シク吹テ、番スル郎等共モ、皆遠侍ニ臥タリケレバ、今コソ待處ノ幸ヨト思テ、本間ガ寢所ノ方ヲ忍テ伺ニ、本間ガ運ヤツヨカリケン、今夜バ常ノ寢處ヲ替テ、何クニ有トモ見ヘズ、又二間ナル處ニ燈ノ影ノ見ヘケルヲ、是ハ若本間入道ガ子息ニテヤ有ラン、其ナリトモ討テ、恨ヲ散ゼント、ヌケ入テ是ヲ見ルニ、其サヘ爰ニハ無シテ、中納言殿ヲ斬奉シ、本間三郎ト云者ゾ、只一人臥タリケル、〇中略先刀ヲ取テ腰ニサシ、太刀ヲ拔テ心モトニ指當テ、寢タル者ヲ殺バ、死人ニ同ジケレバ、驚サン

驗競

ト思テ、先足ニテ枕ヲハタトゾ蹴タリケル、ケラレテ驚ク處ヲ、一ノ太刀ニ、臍ノ上ヲ疊マデツツキトヲシ、返ス太刀ニ喉ブエ指切テ、心閑ニ後ノ竹原ノ中ヘゾカクレケル、（中略）阿新其日ハ扈ノ中ニテ日ヲ暮シ、夜ニナレバ湊ヘト心ザシテ、ソコトモ知ズ行程ニ、孝行ノ志ヲ感ジテ、佛神擁護ノ眸ヲヤ回ラサレケン、年老タル山臥一人行合タリ、此兒ノ有樣ヲ見テ、痛シクヤ思ケン、是ハ何クヨリ、何クヲサシテ御渡リ候ゾト問ケレバ、阿新事ノ樣ヲアリノ儘ニゾ語リケル、山臥是ヲ聞テ、我此人ヲ助ケズバ只今ノ程ニ、カハユキ目ヲ見ベシト思ケレバ、御心安思食シ候ヘ、湊ニ商人船共多候ヘバ、乘奉テ、越後越中ノ方マデ送付マイラスベシト云テ、足タユメバ、此兒ヲ肩ニ乘セ、背ニ負テ、程ナク湊ニゾ行著ケル、夜明テ、便船ヤアルト尋ケルニ、折節湊ノ內ニ、船一艘モ無ケリ、如何セント求ル處ニ、遙ノ澳ニ、乘ウカベタル大船、順風ニ成ヌト悅テ、檣ヲ立、篷ヲマク、山臥手ヲ上テ、其船是ヘ寄タビ給ヘ、便船申サント呼リケレドモ、曾テ耳ニモ聞入ズ、船人聲ヲ帆ニ上テ、湊ノ外ニ漕出ス、山臥大ニ腹ヲ立テ、柿ノ衣ノ裾ヲ結テ、肩ニカケ、澳行船ニ立向テ、イラタカ誦珠ヲサラ〳〵ト押揉テ、一時秘密呪、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵ト云ヘリ、況多年ノ勤行ニ於テヲヤ、明王ノ本誓アヤマラズバ、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、其船此方ヘ漕返テタバセ給ヘト跳上々々、肝膽ヲ碎テゾ祈リケル、行者ノ祈、神ニ通ジテ、明王擁護ヤシタマヒケン、澳ノ方ヨリ、俄ニ惡風吹來テ、此船忽覆ラントシケル間、船人共アハテヽ、山臥ノ御房、先我等ヲ御助ケ候ヘト、手ヲ合、膝ヲカヾメ、手ニ手ニ船ヲ漕モドス、汀近ク成ケケバ、船頭船ヨリ飛下テ、兒ヲ肩ニノセ、山臥ノ手ヲ引テ、屋方ノ內ニ入タレバ、風ハ又元ノ如ニ直リテ、船ハ湊ヲ出ニケル、

〔古事談三 僧行〕天長元年二月、天下大ニ旱魃ス、仍空海和尙奉勅、於神泉苑請雨經ノ法ヲ可修也者、守敏大德奏狀云、守敏已是上臈也、同學此經須先勤行云々、依守敏勤行之經七ケ日、結願ノ朝、兩京如暗夜、雷響尤盛、甚雨洪水ス、衆人所感嘆也、以勅使令檢知ノ處、只兩京ノ內而不及山外云々、亦令空海勤修同經、七ケ日全無雨氣、空海入定觀察、守敏以呪力依駈入諸龍水瓶內、出定延修二ケ日、夜神人告云、無熱池中有龍、號曰善女、爲人在慈、不致殘害、而貴眞言奧旨、早勸請之云了失、空海卽勸請之、彼現形如金色、長八寸許、居在長九尺許紫金色蛇頂、弟子實惠、眞濟、眞雅、眞雉、賢惠、眞曉、眞然等見之、自餘弟子不能見、具註此由奏聞之、則以勅使和氣眞綱、御幣種々之物奉供龍王給、然結願日、重雲覆天、雷鳴起四方、降膏雨、池水涌滿、已三日、寶雨普天下、愁消萬民歡喜、賀其効驗、三月廿五日任少僧都、

〔古今著聞集二 釋教〕淨藏法師は、やんごとなき行者なり、かづらき山におこなひける頃、金剛山の谷に、大なる死人のかばねありけり、かしら手足つゞきてふしたり、苔あをくおいて、石を枕にせり、手に獨鈷をにぎりたり、こんじきさびすして、きらめきたり、淨藏大にあやしみて、其谷にとゞまりて、これなに人のかばねといふことをしらんと本尊にきせいしけるに、第五日の夜、夢に、人告ていはく、是はなんぢがむかしの骨なり、すみやかにかぢして、かの獨鈷を得べきなりといふ、さめてかばねにむかつて、聲をあげてかぢするに、かばねはたらきうごきて、おきあがりて、たなごころをひらきて、獨鈷を淨藏にあたへてけり、其後たきゞをつみて、ほふりて、うへに石のそとばを立たりけり、くだんのそとば、今にかの谷に有となん、爰に淨藏は、多生の行人なりといふ事をしりぬ、又ひえい山橫川に、三年こもりて、六道衆生のために、每日法華經六部をよみ、三時の行德を修し、六千べんの禮拜をいたして廻向しけり、其時護法かたちをあらはして、花をとり水をくみて給仕しけり、同住山の頃の事にや、七月十五日安居の夜、驗くらべをおこなひけるに、朗善和尙の弟子に、修入といふやんごとなき人を、驗者につがひにけり、其頃は、石に護法をばつけけり、第六のつがひにて、先淨藏出でゐる、次に修入出でゐる、淨藏がいはく、生年七歲より、父母のふところを出て、山林を家として、雲きりをしき物とす、日々に身をくだき、夜々に心をいやす、ねん頃

に肝たんをくだひて、全く身命をおしまず、これあへて名利のためにせず、無上ぼだひのためなり、もし我をしらば、はくの石わたすべしと云、其時、はくの石とび出て、おちあがる事、鞠のごとし、こゝに修入いはく、はくの石、はなはだ物さわがし、はやくおちゐ給へと、ことばにしたがひて、則しづまりぬ、大威徳呪をみて、しばらく加持するに、あへてはたらかず、浄藏又云、衆命によりて、かたじけなくも、禪師につがひ奉る、禪下行業年ふかくして、くはんねんよはひかたぶけり、其威徳を見るにすでに在世の摩訶迦葉に同じ、あへて驗を尊者にあらそひ奉にあらず、たゞ三寶の證明をあらはさんがためなりといひて、常在靈鷲山の句をあぐ、其聲雲をひゞかして、聞人心肝をくだく、其時はくの石又うごきをどりて、つひに中よりわれて、兩人のまへにおち居ぬ、二人ともに座を立て、たがひにをがみつゝ、入にけり、見る人、なみだをながさずといふ事なし、

〔平家物語八〕名とらの事

御祈の高僧たち、いづれかそりやく有んや、ゑんせい僧正は、東寺にだんをたて、ゑりやう和尚は、大内のゑんごんゐんにだんを立ていのられけるが、ゑりやうはうせたりといふひろうをなさば、ゑんせい僧正、すこしたゆむ心もやおはすらんとて、ゑりやうはうせたりといふひろうをなして、かんたんをくだいていのられけり、すでに十ばんのけいばはじまる、〇略中やがてすまふのせつ有べしとて、一の御子これたか親王家よりは、なとらのう兵衛のかみとて、をよそ六十人が力あらはしたるゆゝしき人を出されたり、二の宮これ仁親王家よりは、よしをの少將とて、せいちいさうたへにして、かた手にあふべし共見えぬ人、御むさうの御つげ有とて、申うけてぞ出られける、〇略中御母ぎそめ殿の后より、御つかひくしのはのごとくに、ゑげうはしりかさなつて、御かたすでに、まけいろに見ゆ、いかゞせんと仰ければ、ゑりやう和向は、大ゐとくのほうを行はれけるが、こは心うき事なりとて、とつこをもつて、かうべをつきやぶり、なづきをくだし、にうにわして、ごまにたき、くろけぶりを立て、一もみもまれたりければ、よしをすまふにかちにけり、二の宮位につかせ給ふ、清和の帝是也、後には水のおの天皇と申き、其よりして山門には、いさゝかの事にも、ゑりやうなづきをくだけば、二帝位につき、そんいちけんをふつしかば、菅相納受し給ふ共つたへたり、

〔元亨釋書十二忍行〕釋慧亮、叡山圓澄之徒也、兼稟慈覺、初仁壽帝二皇子爭儲位、帝令二皇子鬪レ藝、勝者得レ立、兄惟喬弟惟仁、藝敵不レ決、乃賭二力士相撲一、於是乎惟仁有二羽林郎將善雄一、惟喬武衛將軍那都羅、羅脅力過二善雄一、惟仁付レ亮乞二法救一、亮乃修二大威德護摩法一、惟喬又詣二眞濟修梨一、修二密供一、都下皆知二沙門加二皇子一也、期日二人角力、那都羅身體壯大、善雄不レ及、群臣以爲二惟仁失一也、于レ時惟仁馳使告レ亮、亮即執二鈷杵一、擊二破頭腦一、投二爐火一而供持念、須臾忽大威德尊所レ騎青牛大吼一聲、此時宮中善雄得レ勝、惟仁立爲二太子一、貞觀帝〇清和是也、

〔大鏡五伊尹〕華山院の御出家の本意あり、〇略中御驗もいみじうつかせ給ひて、中堂にのぼらせ給へる夜、驗くらべをしけるを、こゝろみむとおぼしめして、御心の內に念じおはしましければ、護法つきたる法師、おはしまず御屏風のつらに、ひきつけられて、ふつとうごきもせず、あまりひさしくなれば、いまはゆるさせ給ふをりぞ、つけつる僧どものがりをどりいぬるを、はやう院の御護法のひきとるにこそありけれと、人々あはれに見奉る、それさることに侍り、驗もしなによるこりとも、いかでかなずらひ申さむ、前生の戒力に、又國王の位をすて給へる出家の御功德、限なき御事にこそおはしますらめ、行末までも、さばかりにならせ給ひなむ御心には、懈怠せさせ給ふべき事かはな、

〔宇治拾遺物語十三〕今はむかし、三河入道寂昭といふ、もろこしにわたりてのち、唐の王、やんごとなき聖どもをめしあつめて、堂をかざりて、僧膳をまうけて、經を講じ給けるに、王の給はく、今日

の齋筵は、手ながの役あるべからず、をの〳〵我鉢を飛せ遣りて、物はうくべしとの給ふ、その心は、日本僧を試みんがためなり、さて諸僧一座より、次第に鉢をとばせて物を受く、三河入道末座に著きたり、その番に當りて、鉢をもちてたゝんとす、いかで鉢をやりてこそうけめとて、人々せいしとゞめけり、寂昭申しけるは、鉢を飛することは別の法をおこなひてする態なり、しかるに寂昭いまだこの法を傳行はず、日本國におひても、この法行ふ人ありけれど、末世にはおこなふ人なし、いかでか飛さんといひてゐたるに、日本の聖、鉢をそし〳〵とせめければ、日本の方に向ひて、祈念して云、家國の三寶神祇たすけ給へ、はぢ見せ給ふなと念じ入りてゐたるほどに、鉢こまつぶりのやうにくるめきて、唐の僧の鉢よりも、はやくとびて物をうけてかへりぬ、そのときより、はじめて、やんごとなき人なりとて、拜けるとぞ申し傳へたる、（又見二今昔物語一）

○按ズルニ、經文中ニ、放鉢經アリ、今此鉢ヲ飛バシヽ事ハ、是ニ據リシモノナリ、

〔宇治拾遺物語、二〕今は昔、延喜の御とき旱魃したりけり、六十人の貴僧を召して、大般若經よましめ給けるに、僧共黒けぶりをたてゝ、しるしあらさんといのりけれども、いたくのみ晴まさりて、日つよくてりければ、帝を始て、大臣公卿百姓人民、此一事より外の歎なかりけり、藏人頭をめしよせて、靜觀僧正（○增命）に仰せくださるゝ、樣殊更おぼしめさるゝやうあり、かくのごとく、方々に御祈共、させるしるしなし、座を立て別に壁のもとに立て祈れ、おぼしめすやうあれば、取り分仰せつくるなりと、仰せくだされければ、靜觀僧正、その時は律師にて、上に僧都僧正上臈共おはしけれ共、面目かぎりなくて、南殿の御階よりくだりて、屏のもとに北面に立て、香爐取りくびりて、額に香爐をあてゝ、祈せいし給事、みる人さへくるしく思けり、熱日のしばしもえさし出ぬに涙をながし、くろけぶりを立て祈せいし給ければ、香爐のけぶり空へあがりて、扇ばかりのくろ雲になる、上達部は、南殿にならびゐ、殿上人は弓場殿に立て見るに、上達部の御前は美福門よりの

雜載

ぞく、如此みる程に、其雲むらなく大空に引ふたぎて、龍神震動し、電光大千界にみち、車軸のごとくなる雨降て、天下たちまちにうるほひ、五穀豐饒にして、萬木果をむすぶ、見聞の人、歸伏せずといふことなし、さて帝大臣公卿等隨喜して僧都になし給へり、不思議の事なれば、末の世物語にかくしるせる也、

〔續日本後紀、八仁明〕承和六年八月己巳、勅二太宰大貳從四位上南淵朝臣永河等一、得下今月十四日飛驛所レ奏遣唐錄事大神宗雄送二太宰府一牒狀、知二入唐三ヶ船、嫌二本船之不一レ完、倩駕楚州新羅船九隻、傍二新羅南一以歸朝、○略中是日令二十五大寺讀經祈願一以二船到著一爲二修法之終一、

〔續日本後紀、十三仁明〕承和十年八月庚辰、請二百僧於大極殿一、○略中亦分二卅僧一於二眞言院一修法五箇日間諸司潔齋爲レ攘二物恠一也、

〔小右記〕長和三年十二月廿七日己卯、丑刻許當二丑寅方一燒亡之由、義光申二驚趣一見レ之遣二隨身一卽歸來云、皇后宮御領元華山院者、小一條殿東隣也、中務卿親王修理大夫住、又大僧正慶圓修二公家百日御修法一之處、與二枇杷殿一甚近、○略中次以二忠時一訪二大僧正、及修理大夫、大僧正御修善壇所舍不レ燒、東對南舍廊等皆悉燒亡、中務宮修理大夫住二此舍一、件火者人々所レ傳云々、上下者只修善所不レ燒大僧正力也、尤可レ感者、頭辨談資平云、左府一人不レ被二感歎一有レ致二謗難之詞一者、依二天台座主事一歟、定有二私之事一也、

〔太平記、三十四〕二度紀伊國軍事、附住吉楠折事

又住吉ノ神主津守國久、密ニ勸文ヲ以テ申ケルハ、今月十二日ノ午剋ニ、當社ノ神殿鳴動スル事良久シ、其後庭前ナル楠、不二風吹一中ヨリ折レテ、神殿ニ倒レ懸ル、サレ共枝繁ク地ニ支テ、中ニ橫ハル間、社壇ハ無恙トゾ奏シ申ケル、○略中贔テ住吉四所ノ明神、日吉七社ノ權現ヲ勸請シ奉テ、座サ。マサズノ御修法ヲ、百日ノ間行ハセラル、主上毎朝ニ御行水ヲ召レテ、玉體ヲ投地、除災與樂ノ御祈リ、誠ニ身ノ毛モ彌立計也、

〔公卿補任後陽成〕慶長三戊戌年、自二十月八日一七ケ日、於二清涼殿一被レ行二御修法一、同依二御祈一也阿闍梨梶井宮奉行總光、

〔嵯嚢抄十〕僧靈病用二驗者一例事○中略

縦ヒ顯密修學ノ僧モ靈病鬼病等ニハ、有驗ノ加助ヲ可レ專哉否、尤モ可レ然事歟、典○典上恐脱二外字一ノ陰陽家ニ、泰山府君厭百鬼等ノ除災延命ノ秘術、皆其益アリ、尚不レ可レ輕、何ニ況ヤ、內典ノ呪力ヲヤ、サレバ天台ノ玄昭法師ハ、慈覺大師ノ弟子、淨藏貴所ノ灌頂ノ師也、然ニ於二亭子院一紀僧正ノ靈爲レ鵄來リケルヲ、爐壇ニ投テ燒レ之、依二怨結一小僧ニ化シテ、自空降リ來リシ時、玄昭是ヲ見テ、心身忽ニ惱亂ス、其時弟子淨藏ニ加持ヲ乞テ彼靈ヲ降伏ス、仍テ現師玄昭法服ヲ著シテ、貴所ヲ拜スト云々、

古事類苑

宗教部二十二

佛教二十二

灌頂　傳衣併入

灌頂ハ、字或ハ二合シテ汀ニ作ル、法水ヲ受者ノ頭頂ニ灌ギテ、以テ付法ノ信トスルモノナリ、故ニ傳法、結緣ノ二種アレドモ、傳法ヲ以テ主トス、傳法灌頂ハ、付法ノ灌頂ニシテ、其器ヲ選ビテ之ヲ行ヒ、以テ血脈ヲ相承セシムト、其濫觴ハ、延曆二十四年、最澄高雄山ニ於テ、之ヲ行ヒシ時ニ在リ、結緣灌頂ハ、多ク修福追善ノ爲メ行フモノニシテ、隨喜志願ノ者ハ、其人ヲ撰バズ之ヲ授ク、サレドモ天台ニテハ結緣灌頂ニモ、尚ホ且ツ血脈ヲ相承シテ、他門ノ人ノ受灌ヲ許サズ、

灌頂ハ、大日如來ヨリ出デ、、南天竺ノ龍猛ガ、金剛薩埵ヨリ、親授セラレテ後、相續シテ之ヲ傳フト云フ、故ニ密敎ニ限レル法ニシテ、眞言宗ヲ一ニ灌頂宗ト云フモ、此法ヲ尊尚スルガ故ナリ、

灌頂ハ、其受灌ノ前ニ加行ヲナス、加行ハ受者潔齋シテ灌頂ノ準備ヲナスモノナリ、灌頂ハ、又其方法ニヨリテ、五相、受明等、種々ノ名アリ、其中ニハ法水ヲ用キザルモノアリ、而シテ三摩耶戒ハ、密宗ノ人、灌頂ノ前後ニ之ヲ行フヲ以テ、コヽニハ灌頂ニ附屬セシムト雖モ、元來密宗ノ受戒ナリ、

灌頂道場ハ、一定ノ場處ナシ、大抵各寺便宜ニ之ヲ設ク、サレドモ東寺、觀音院、尊勝寺、最勝寺

ハ、之ヲ四灌頂ト稱シ、勅會恒例ノ結緣灌頂ノ道場ニシテ、其儀式モ亦各、一定セシガ如シ、歷代天皇ノ灌頂ヲ受ケ給ヒシモノ、平城、宇多、醍醐、朱雀、村上、圓融、後三條、龜山、後宇多、後醍醐等、數十代アリ、其儀式ハ、普通ノ傳法灌頂ト同ジクシテ、只其規模ノ大ナルノミ、

阿闍梨職衆以下、勅會恒例ノ灌頂役僧ハ、朝廷ノ命ズル所ニシテ、宣下、勸賞等、皆定例アリ、其他ハ、臨時適宜ノ方ヲ用キ、寺力ノ大小、受者ノ貴賤ニ依リテ、其別アルガ如シ、

傳衣ハ又受衣トモ云フ、付法ノ時、師其袈裟ヲ傳ヘテ、傳法ノ信トナスモノニテ、原ト釋迦ノ迦葉ニ傳ヘタルヨリ起レルモノトイフ、是ハ禪宗ニ限レルコトニテ、鎌倉室町ノ頃ヨリ、其宗ノ盛ナルニ由リ、天皇卿相モ多ク之ヲ受クルニ至ル、其間ニハ受戒ノ時ハ、師ヨリ三衣ヲ受クルモノアリ、是ハ其宗ヲ擇バズ、

名稱

〔伊呂波字類抄久疊字〕灌頂

〔秘藏記鈔七〕第五十九章

灌頂義、灌者、諸佛大悲、頂者上之義、菩薩初地乃至等覺究竟遷妙覺時、諸佛以大悲水灌頂、卽自行圓滿得證佛果、是頂義也、諸佛大悲是灌義、世人皆以幡號灌頂、是以幡功德先爲輪王、後終成佛、以致佛果、名爲灌頂、是故知、以果名因也、若然者從因至果、其間一切功德莫不灌頂、

〔眞俗佛事編五雜記〕灌頂得益　灌頂道場ニ入ル功德ヲ問、答曰、守護國界經九十葉云、若得灌頂者、法王子灌頂不久當成、千世爲輪王、那由劫帝釋、億劫四王位、無數世人主、乃至轉生所受身、得樂大名稱、能脫諸病腦智慧決無疑、文　私曰、入壇深秘ノ文ハ不克出、今道場ニ結緣スル者ノ爲ニ得益ヲアラハス、

起源

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿四年三月壬辰、遣使伯耆國請玄賓法師、　丙申、於殿上行灌頂法、

〔濫觴抄下〕灌頂

桓武廿五年乙酉〇延曆二十四年九月一日、於高雄寺始行之、傳教大師歸朝初也、道證、修圓、勤操、正能、正秀、廣圓等諸寺高僧八人、受金剛之寶戒、登灌頂之眞位、爲灌頂受法之弟子云云、

種類

〔秘密漫荼羅教付法傳一上〕第三祖者、昔釋迦如來掩化之後八百年中、有一大士、名那伽閼賴樹那〇中略菩提薩埵〇卽於唐呼龍猛菩薩人是也誕迹南天、化被五印、〇中略或建正幢、以宣揚佛威、作千部論摧邪顯正、上遊四王自在處、下入海中龍宮、誦持所有一切法門、遂則入南天鐵塔中、親授金剛薩埵灌頂、誦持此秘密最上漫荼羅教、流傳人間、楞伽經及摩訶摩耶經等、釋迦如來所懸記則是其人也、

〔阿娑縛抄七〕二種灌頂

演密抄四云、一傳教灌頂、二結緣灌頂、

〔秘藏記鈔七〕第五十九章

灌頂義、〇略中又於灌頂有三種、一摩頂灌頂、諸佛摩頂授記、二授記灌頂、諸佛以言說授記、三放光灌頂、諸佛放光、令被其人得益、

〔阿娑縛抄七〕三種灌頂〇略中

義尺十一云、然灌頂有三種、一者但以印法作之、離諸作業、此是入秘密曼荼羅、謂有弟子、誠心殷重深、樂眞言之行、志求大乘、然資力乏少、若令一一具求衆事、及當於道有得、〇略中二者以作事業而灌頂、卽是師及弟子皆先作事業也、謂先令弟子七日已來誠心禮悔之類、師亦於七日以來爲其持誦秘求感應、及令辦諸供物香花之類、〇略中三者、但以心而作灌頂、猶如摩頂授記也、

〔阿娑縛抄七〕十種灌頂

灌頂見聞集上卷云、具支灌頂文、灌頂有四、傳教灌頂阿闍梨々々々、持明々々、結緣々々、又加二種爲六、爲八、滅罪灌頂又加一爲九、自灌頂又加一爲十、本尊灌頂若於傳法灌頂開爲二種、及阿闍梨灌頂開爲三種、幷此十

種成十三種灌頂云々、上來灌頂亦有三種、一印法灌頂、二事業灌頂、三心灌頂云々、

〔阿娑縛抄七〕五種三摩耶○中略

四種灌頂事

瞿醯云、凡入曼陀羅、必有四種灌頂、一者除難灌頂、二者成就灌頂、三者增益己身、四者得阿闍梨位、文

五相灌頂

義釋云、一者光明灌頂、謂諸佛菩薩放光加持也、二者甘露灌頂、謂以部主眞言加持香水、三者種子灌頂、謂部尊字門提布身心、四者智印灌頂、謂部主所執持印契加持、五者句義灌頂、謂部尊眞言、及思中義理想布彼心、文內作業灌頂、

瑜祇經云、持眞言行者觀身如佛形、○中略

受明灌頂事或云受法灌頂者、受明灌頂異名也云々、

帖云、諸別尊義中所說灌頂、是一尊受明灌頂也、○中略

蘇悉地灌頂事

玄隆草云、問慈覺大師在大唐、隨何師受悉地灌頂給耶、答、隨義眞阿闍梨受之給、御印信左右敎時淨五大院云、

〔東寺要集一〕太政官牒　東寺

應聽付法灌頂傳燈大法師位

元杲年五十四　臈卅五　眞言宗東大寺

右得僧正法印和尙位寬空去月廿七日奏狀偁、謹撿案內、密敎灌頂法門者、蓋是菩薩大士究竟至佛道也、於此法門有其二種、一結緣、二傳法也、其結緣者、卽是普令一切衆生結善緣於現世、期大覺於當生者也、故人之賢愚器之大小、不須撰定、只競進者以授之、其傳法者、又是待敎授於後進、法智行於先賢者也、故款而不許、撰器於切瑳、秘而又傳、待價於珠玉、抑件二種灌頂、依去承和十年十一月十六日官符、始行、經年只結緣灌頂、永爲年事、依其所被之廣傳法灌頂只依其人、不可期年、依其所傳之限、○中略望請殊蒙天恩、任格准例、授與件元杲大法師傳法阿闍梨位、將播先鳴之美聲、彌勵後進之懇志者、左大臣宣、奉勅依請者、寺宜承知依宣行之、牒到准狀、故牒、

康保元年十二月九日

左少辨正五位下紀朝臣

左大史正六位上粟田朝臣清明牒

傳法灌頂

〔合灌記未〕合行灌頂、慈覺智證共傳之給、慈覺大師傳給事、山門不知之、口惜事也、三井寺人智證許傳給、知川流離作業智證流也云々、

○按ズルニ、阿娑縛抄、及ビ叡山四大師傳、弘法大師傳等ニ據ルニ金剛界ト胎藏界トヲ各別ニ受クルコト見ユ、合灌ハ之ヲ合同シテ一時ニ受クルヲ謂フナリ、

〔傳法灌頂日記上〕一修圓勤操等八人灌頂事

顯戒論緣起云、大師延曆廿三年甲申歸朝、奏聞於唐土所稟承灌頂、卽可書、卽有勅許、仰治部省、爰大師蒙勅許、爲鎭護國家、於高雄灌頂被始修、是本朝灌頂元初也、其八人云者

道證　修圓　勤操　正能

永範云、傳敎大師、授灌頂八人、今二人者、豐安靈福云、泰命寺大德灌頂既說云、灌頂八大德外、更加豐安靈福云々、

治部省　國昌寺僧最澄

右九月一日、有勅、於清瀧峯高雄寺、造毘盧遮那都會大壇、令傳授三部三昧耶妙法、預灌頂者總八人、苦行之力、果志早歸、德○此間恐有脫字所感、遂弘此道、依宣旨奉行如右、延曆廿四年九月十六日

卿四品葛原親王　大輔和氣入鹿　少輔藤原友人、勅使小野朝臣峯守　撿校諸事

大師年三十八
　受者年勤操贈僧正五十二
〔嘉元四年結緣灌頂記〕結緣灌頂濫觴事
本朝結緣灌頂始
延曆廿四年九月日、傳教大師於二高雄一始行レ之、或云傳法灌頂云々
〔灌頂記〕弘仁三年十一月十五日、於二高雄山寺一、受二金剛界灌頂一人々曆名、
釋最澄因　幡磨大掾和氣眞綱金寶　大學大允和氣仲世喜　美濃種人寶
弘仁三年十二月十四日、於二高雄山寺一受二胎藏灌頂一人々曆名、
都合一百卅五人之中太僧廿二人　沙彌廿七人　近事卅一人　童子卅五人
太僧衆數廿二人
一僧最澄與福寺　二僧賢榮元興寺、大白與寶憧、○中略
沙彌衆數卅八人
善信飛驒菩薩虛空藏　神德甲比人、金剛發生、○中略
近士衆數卅一人
民部少輔高階眞人空藏　成三无量壽○中略
童子等數卅五人
廣繼施波羅密　西滿施波羅○中略
音聲人
物部員主文殊　秦眞吉降三世○中略
合壹佰玖拾人

弘仁九年
灌頂衆　金剛界三月六日高雄山寺
合
僧五
泰範師護　圓澄師愛○中略
沙彌十二
眞叡師薩埵　眞者師薩埵○下略
〔傳教大師消息〕最澄稽首和尚最澄以レ今月十四日、參二向都下一、卑僧心裏常思二蒙一阿闍梨加被習一學秘密宗一、但穩便難レ得、久過二歲月一、此度向二彼御院一受二遍照一尊灌頂一七箇日許一、待二佛子等後一習二學法門一、和尚若垂二无限慈一、卽日必參奉、伏乞垂二指南一進止、日晚捻々不レ具レ狀、弟子最澄稽首和南、
下資最澄狀上
弘仁二年二月十四日
高雄大阿闍梨座下
〔享祿本類聚三代格二〕太政官符
應レ修二灌頂一事
右入唐廻請益傳燈大法師位圓仁表偁、○中略大興善寺灌翻經頂院不空三藏第三弟子元政阿闍梨邊受二灌頂一、學二金剛界大法幷諸尊法一、至二會昌元年一受二傳法灌頂一、其年五月、於二青龍寺一勅置本命灌頂道場不空三藏弟子義眞阿闍梨邊一受二灌頂一、○中略去年季秋將レ法歸朝、用添二前蹤一、冀飾二遺風一、今望於二此雲峯一先帝本願之地一奉二爲國家一永修二灌頂一、增二飾皇祚一、鎭二護聖境一、伏乞天恩特垂二允許一、則先帝御願塵劫逾隆、今上寶祚、万代長榮者、右大臣宣、奉レ勅依レ請、
嘉祥元年六月十五日
〔阿娑縛抄百〕傳法灌頂日記上

一安惠惠亮兩人灌頂事 同壇也

傳云、大師○仁壽四年甲戌十一月十四日、大師安惠惠亮三部大法、文

傳法灌頂阿闍梨位

應レ授二傳法灌頂僧貳口一事　下延曆寺

傳燈大法師位安惠

傳燈大法師位惠亮

右得二座主傳燈大法師位圓仁奏狀一偁、圓仁去承和初、伏奉二綸旨一、遠入二呂唐一、遍訪二奥玄一、止觀眞言粗聽幽源、山家緇徒講傳不レ少、但至レ如二密敎一者、未レ有二相續一、若不レ許二其傳法一、恐定墜二道風一歟、今謂僧安惠等、學二習眞言一无有二厭倦一、天性聽口、堪レ爲二器焉一、伏望件僧等、與二授傳法灌頂一、令レ誓二護聖主一、兼又敷二弘三部大敎一、伏聽二天裁一者、

右大辨藤原朝臣氏宗傳宣、右大臣宣、奉レ勅依レ請者、

仁壽四年○齊衡元年十一月十四日

左少史家原綱雄 奉

是本朝阿闍梨位最初也

大師御年六十　安惠四十九　惠亮四十二

一慈叡　承雲　性海　南忠灌頂事已上四人同壇也

右大辨官下　延曆寺

應レ授二傳法灌頂僧四口一事

傳燈大法師位慈叡

〃〃〃〃〃承雲

〃〃〃〃〃〃性海

傳燈大法師位南忠

右得二座主傳燈大法師位圓仁奏狀一偁、件僧等、頃年勤心學二習兩部大法一、心性无レ變、頗堪二持法一、是以今月十四五兩日、欲レ授二傳法灌頂一、奉二護聖主一、祈二誓國家一、謹准二前例一、伏聽二天裁一者、右大臣宣、奉レ勅依レ請者、寺家宜レ承知依レ宣行之、

貞觀二年閏十月十三日

左少史志記宿禰氏經

同註記帳云

傳法灌頂事

十五日胎藏

先神分檀波羅密　普施金剛

慈叡大德開敷如來　平等金剛

南忠大德鼓音如來　不動金剛

承雲大德寶幢如來　福壽金剛

性海大德彌勒菩薩　迅疾金剛

貞觀二年歲次庚辰閏十月十六日、於二總持院西堂一修仍注進、

僧承岑

私云、宣名、十四五日性海承雲注記不同也、不審々々、

大師御年六十七

〔阿娑縛抄七〕第八弟子事

一受者年限事

傳法灌頂、不レ簡二老少一事也、安慶阿闍梨井房小兒之時入壇云々、○略中

一受者數

結緣灌頂

瞿醯上對云、應所受持弟子等數、或一或三、或七及五乃至廿五隻、不得雙取、文

〔永和二年結緣灌頂記〕六月七日庚寅（角宿火曜）來七月七日令相當故光嚴院御十三廻給之間、於伏見大光明寺（光嚴院御建立云々）可被行結緣灌頂之由、〇中略〇抑結緣灌頂由來事、

先大唐不空三藏、於大興善寺初修灌頂、爲每年恒例事、大師御請來表云、三不空三藏天寶中、却歸大唐、于時玄宗皇帝始受灌頂、屈尊師資自降、肅宗代宗相續受法禁內、則建神龍精舍城中、則普開灌頂壇、一人百寮臨壇受灌頂、四衆群生膝歩學密藏、密藏之宗、是日鬱興、灌頂之法自茲接軫文本朝大師弘仁三年壬辰十一月十五日庚午、於高雄寺修金剛界結緣灌頂、件受者最澄和尚、播磨大掾和氣眞綱、大學大允和氣仲世、美濃種人等也、十二月十四日、於同寺行胎藏結緣灌頂、件受者、大僧沙彌近士童子若干數人爲受者、光定紀云三百許人興福寺最澄、光興寺賢榮、泰範、西大寺澄得、東大寺平智、願澄、大安寺圓澄、叡勝等也、又大師、弘仁四年癸巳三月六日、於同寺行金剛界結緣灌頂、件受者、泰範、圓澄、長榮、光定、康敎等也、勤操僧正影讃云、弘仁七年丙申孟秋、率諸名僧於高雄金剛道場授三昧耶戒、沐兩部灌頂、文同十三年春爲平城太上天皇開金剛道場、奉授佛性三昧耶戒、灌頂、並四衆同受之、同十四年、嵯峨天皇奉受灌頂於大師、本朝天子上皇入壇受法、始自平城嵯峨、依尊重大師也、凡平城嵯峨、淳和仁明四代帝王、幷嵯峨太后、淳和后宮、皆令受灌頂、東寺灌頂者、小僧都實惠受大師之敎命、始修灌頂御願、從爾以來、爲每年二季之勤、其後代々長者非无興癈、或寄阿闍梨補入寺僧、或減僧員止灌頂一字、仁和寺觀音院者、保延五年四月、依上皇之宣、御室高野爲皇子降誕御產平安、修孔雀經法、一七ヶ日中、皇子誕生、御產平安、依彼効驗、勤宣請、以觀音院爲御願寺、東寺灌頂如本改春秋二季、而於春季者、於觀音院修之、漢家本朝先規等大概注之、色衆幷奉行等事、一向新御所爲御計、綱所覺暹總在廳爲奉行、以綱牒催之、內之奉行宗賢法眼申沙汰之、阿闍梨勅許事、或說宣綸旨或綱牒、先規不同、然而任德治二年壽量院供養佳例、今度被下院宣之由

申入了、仍被成院宣、載左、來月七日、於大光明院可被行結緣灌頂、阿闍梨可被參勤之由、院御氣色所候也、仍上啓如件、

五月廿五日　　左少弁俊任謹々上

眞光院僧正御房

〔嘉元四年結緣灌頂記〕追善佛事行灌頂之例

金剛峯寺灌頂者、大御室御忌日、

長和親王御傳云、匡房卿作　金剛峯寺北建立一堂、稱灌頂堂、每至親王遠忌、行結緣灌頂、（私云々、堂云灌頂、觀音院前大僧都寬意願也、）

眞乘院灌頂者、北院御室御忌、

菩提院灌頂者、宣陽門院御忌、

弘長元年七月廿八日、爲金剛定院御室十三年御忌於開田秘密莊嚴院、以行遍僧正行結緣灌頂、永仁四年十一月廿一日、爲淮三宮十三年御追善、於同院、以了遍僧正行同會、自今年爲每年之恒規、嘉元三年八月十日、於（高雄山）（高雄御室平生之時幽閑之後改佛閣）翫玉院（源寬卽世之）御忌、

〔嘉元四年結緣灌頂記〕九月十二日庚辰、太上天皇、囑前大僧正禪助、爲大阿闍梨、所懃結緣灌頂□□爲故御室周閑、御佛事行之、大阿闍梨前大僧正禪助、自今年爲每年之式、

□□如來壽量院、蓋是堂□□闕帝都之西畔、龜山仙洞之乾角、後嵯峨院建長草創之地、文永登遐之砌也、而迎前龜山院周□之御忌、自去七月被仰入道邦經卿、以足羽庄爲料所、改料理加修功、忽爲灌頂秘密之道場、被始卽身頓悟之叡願、永爲先皇御追福、每年可被行此會云々、御忌者雖爲十五日、依爲供養之會式、撰吉月日、今日所被遂行也、抑准最勝尊勝圓宗寺灌頂堂之例、以万茶羅供可被供養之由、兼日雖有其沙汰、兩會大阿闍梨一人兼行之條、可謂傍若無人、傍難治之由依被申子細、一會可

勤仕之由被仰了、遍僧正之處、灌頂者、晝夜數刻出仕、老體難治也、可勤万多羅供之由申之、而御堂供養者、可用眞光院之由、爲日來之叙情之上、觀音院灌頂堂者、寬弘七年三月廿五日、爲淮三后倫子（御堂關白北政所、左大臣雅信公女、御願囑僧正雅慶、流勸修寺、雅信公弟、爲大阿闍梨、以結緣灌頂、率四十五口色衆、所被供養也、仍摸彼嘉例、被遂此供養者也、

〔永和二年結緣灌頂記〕六月七日庚寅、角宿曜來七月七日、令相當故光嚴院御十三廻給之間、於伏見大光明寺（光嚴院御建立云々）可被行結緣灌頂之由、自去四月比太上天皇被申合御室（新御所）之間、大阿闍梨事、可有御勤仕之由、被申下河原宮乘朝之處、先御領狀之趣ニ而俄ニ又御故障、仍愚身可參勤之旨、以成運法印內々被仰下之間、尤參勤之條、雖可爲眉目、門跡休困之間、難參勤之由、再三辭申畢、依之右山僧正宗守可參勤哉之由、難有御問答、難義同前之間、於今者、無其仁之上者、猶必可存知、且面々依故障、於寺中者、無其器用之趣、被申仙洞之條、無御本意者哉、可勵徽力之由、種々被仰下之間、凡灌頂大會者、宗之重事、敎之源奧、於事不容易之間、愚鈍徽質、勤仕之條、冥慮難測者哉、然而再三之仰、同篇故障、還而相似有其恐之間、懇申領狀訖、世出世每事可仰御扶持之由、申入御返事者也、

〔結緣灌頂雜記〕康曆元年己未十一月晦日（虛宿日曜）爲征夷將軍贈從一位寶篋院左大臣義詮公十三廻之進貢、於等持寺被行之、（中略）

一先例事

三寶院恒例結緣灌頂者、當流之前鑑也、仍之大都雖被守其儀、依道場隨時宜、聊可有用捨、然間去延文四年四月廿九日、於等持贈大臣尊氏公第三回之追福、爲先門主大阿闍梨、於當寺被行結緣灌頂、記、今度專被依用之畢、

〔賴印大僧正行狀繪詞九〕光德寺結緣灌頂者、鎌倉左武衞發願也、源右幕下（朝）、（賴）鎌倉草創以來、御願トシテカノ大法事ヲ行ハレヌ、何況不朽御願イマダ其例ナシ、武衞ト院主ト、師檀他ニコトニシテ、此大會ヲ申行ル事、利益衆生ノ方便、何事カコレニシカム、洛中勅願御願皆ナキガゴトシ、末世今ニ至リテ、每年勤行ノ料所トシテ、下總國大河戶鄉寄附セラル、仍テ永德三年十二月四日開白以來、イマニ退轉無キ者也、爰三百五十七年（三百五十六字一本無）至德元年十二月四日懃行ノ處、必結緣アルベキヨシ、武衞命ゼラルヽ間、職衆十六口ヲ調テ、庭儀タルベキトコロニ、同三日指令ニヨリテ、鴛ヲ枉ベカラザルヨシ、仰ラルヽ間、期ニ臨テ仰天ナリ、院主云、明日カナラズ來臨アルベシ、用意ヲイタスベキヨシ仰ラレテ、翌朝ニハ、悉ク堂莊嚴ニシテ待チ申サル、處ニ未ノ剋ノ始ニ、唯今光行ノヨシ、方々ヨリ告來ル、則渡御、萬人希代ノ思ヒヲナス者也、御馬幷御劒、小袖五重進覽、三獻以後イトマヲ申テ、三昧耶戒儀式ヲトリ行ル、御聽聞所ニシテ御結緣アリ、初夜時ニハ、優婆塞ノ始ニ印明ヲ受玉フベキ、誠ニ大乘結緣之初、眞言再興ノ基也、スベテ四輩結緣三百餘人、其爲體嚴重也、

灌頂式

〔阿娑縛抄四〕南行吠羅次第

先莊嚴道場、以大幕二帖始自東北引（以表爲外）道場八方懸八色幡（白紅黑烟赤水黃、自東方順右旋懸之、）茶羅道場近比、並懸兩曼（胎東金西）大壇對曼茶羅向北立之、（五寶等其下隱置之、）以絹一疋敷壇上、並引廻立蠟引糸如例、

灌頂壇　大壇西南邊立之、壇北立禮盤、半疊之上敷蓮臺、其上敷草座（是受者座也）壇南立禮盤敷半疊（是阿闍梨座也）壇西立机（金時安東壇與机蓮臺中分立之）机南端安道具箱蓋（中鏡四方五鈷鐸、中轉螺又白佛入之）北端立五瓶（五瓶胎時中四角、金時中四方立之、）護摩壇

大壇東南邊對正覺壇立之、向北以絹四丈可引壇、中心置葉火爐（滿炭火）壇南立禮盤、半疊上敷草座（受者座也）禮盤左邊板敷上敷草座（受者座也）

淨筵

大壇東南邊（屬二東壁一）南北敷レ之、筵南端立二小牀子一、（懸二濕衣一料也）筵北端置二廣筥一、（蓋寶冠臂釧四、第環二、白繒一、花鬘二、修多羅一、

又邊壁寄立白傘（○中略）

廟曲　門前便所、立二屏風一、敷レ座、

讃衆座　隨二道場一便、宜敷レ之

次排二比供物一、大壇、壇四端敷二食道一、其上備二四面內外供一、（飯餅油根菓葉）

更可レ加二十二執金剛等供一、（○中略）五部鈴杵立レ之、塔鈴中瓶外立レ之、餘四鈴杵四面火舍內方敷二曼荼羅一、（緣也）立レ之、

左机灑水　塗香　名香　居箱置レ之

古机佛布施　香爐箱置レ之（○中略）

灌頂壇一面內外供（○註略）

護摩壇爐、右油粥飯、生大小杓扇箸、（○中略）

十方神供

先以二淨葉一敷二十方一供、（草座十一枚也、始レ自二東方一敷レ之、）

次稠粥盛レ器、（堅粥上加二五穀一）於二一處一總加二持之一、（○中略）

雜神供　常如二修法之時一備レ之

加二持五瓶一

各入二香水一、並寶藥香穀並插二時花一枝、（白色著造）次五色帶繫二其頂一、立二灌頂壇一加二持之一、

以二不動眞言一（慈救力印）於二五瓶一去二垢辟一除

先加二中台瓶一（○中略）次加二赤帶瓶一（○中略）次加二黃帶瓶一（○中略）次加二青帶瓶一（○中略）次加二黑帶瓶一（○中略）加持了大壇

移レ之（中四角立レ之）次阿闍梨入レ堂、讃衆在レ前發レ音、（四智讃）鐃鉞放響、受者以二傘侍一後蓋、阿闍梨入レ堂、但到二門

前一、受者留二堂外廟曲所一、令二隱居一也、次阿闍梨讃衆、入レ堂內、三匝繞壇（讃打鐃）繞了、讃衆出二於幕外一、次阿闍梨就二座加持香水一、（乃至啓二白神分等一、）次供養文　次唱禮　合唱禮在レ別　次九方便（弟子在二堂外一、供養文）

次五大願　次供養法（胎）乃至讃（○中略）次諸方神供、（兩部諸天可レ兼歟）此間讃衆誦二諸天灌語讃一（供了）

次阿闍梨自座起、順二廻堂內一、三匝供レ之、（二手捧レ器誦二嚕迦一々々呪、）（○中略）此間於二堂外一可レ修二雜神供一（如レ常○中略）

次奉二佛布施一　阿闍梨著二禮盤一、左手執二布施一、右手取二散杖一灑水、次右取二布施一薰二香烟一　次兩手捧レ之當二額云一（○中略）次就レ座念誦、普門持誦是也、（○中略）次引二入弟子一、先移二大壇一、五瓶置二灌頂壇一、（先依二胎中四隅一立レ之、以二灑水一散）杖加二中瓶一（○中略）次阿闍梨順二禮諸尊一、（○中略）召二弟子一來立二机邊一、次門前灑水、（○中略）次含レ香、令二弟子含一レ之

次授二塗香一　誦胎塗香明、授二弟子兩手一、（並印）令塗　次師右手捻レ香、申二五指一塗二弟子胸一、次授二淨花一、（○中略）次

教令弟子結誦四禮印明、（向二道場一立作レ之）

次阿闍梨自護身、（○中略）次覆面、阿闍梨取二白疊一（左手持レ之）以二不動眞言一（慈救中略）次當深起二慈悲一護念之心、

耳語告彼三昧耶戒、勿令諸餘未入壇者聞レ聲、（○中略）次誓水（○中略）次令飮レ之三反、（乍レ立レ壇前飮レ之）次以二花曼一

令掛二弟子印上一、當授二此密語三反一、（○中略）

次取二其花一、以二葉末一倒置、受者頂上、一誦一安三反教云、（○中略）次令二弟子一以二香花等一普供養曼荼羅聖衆於

壇前、半跏座右方五供、一々捧レ之、（○中略）次引二入餘弟子一、次寂災護摩、（○中略）次以二寂災眞言一護摩一々諸

尊各七反、（○註略）次將二弟子一於二護摩所一、於二阿闍梨左邊一坐（草座上○中略）次神袋、（○中略）次左袖覆二弟子右膊一、以二塗

香一塗二手按一其胸一、次觀施法、（○中略）次令レ依二吉祥座法一而座、（○中略）次令レ結二薩埵印一、（五古印也）明白、（○中略）次師往

大壇一供二十二尊一、（蹲居二手捧一器、先稱二名號一之、○中略）次還二灌頂壇一面向二北方一對二受者一坐、（半跏）供二受者一、（○中略）次闕伽、塗香

次四執金剛、（○中略）次四奉教者、（○中略）次還二灌頂壇一面向二北方一對二受者一坐、（半跏）供二受者一、（○中略）次闕伽、塗香

花鬘　燒香　飮食　燈明（已上右）一々供レ之　次師從レ座下一到二弟子邊一、以二不動慈救加持白傘一、（右杵左傘）

誦二大日如來眞言一（歸命阿）加持、用覆二其上一、（左手執レ傘○中略）

次師取白拂口誦吉慶伽陀（讀同音衆）以拂漸々拂弟子肩拂弟子頂惱吉塵令成佛也、次一段了止拂披伽陀文說其訓耳語受者讀曰、○略中次師置白拂及傘至佛前頂禮曼荼羅一切尊然後合掌起立壇前啓白諸尊云○略中次擎水鋮繞壇阿闍梨捧中瓶誦明廻餘人隨後次各捧一瓶誦明繞壇三匝、○略中繞壇了、

五瓶如本立花机上（教王記云如前大日四菩薩印明加持之）

次灌頂　資向西方同胎藏大日師向受者先結火印當心想弟子以爲阿字方壇中安弟子次用囉字爲火燒之悉成灰已字猶存　次以四瓶次第灑之（師起座作立各誦其瓶眞言一洒之三反訖）

先赤帶瓶（普賢中略）○　次黃瓶（文殊中略）○　次青瓶（慈氏中略）○　次黑瓶（觀音中略）○　次白帶瓶（大日中略）○　次鋮字觀、○略中次五輪觀次十二眞言王、○略中次暗字等觀次結佛頂印弟子心上、○略中次結火印弟子胸上、○略中次正灌頂　先本尊灌頂（若直得大日師別不作之）

師結其印置弟子頂誦其明（弟子同結誦之）次誦其明以其瓶水灑之次普賢、○略中赤帶瓶灑之（其作法同前）次文珠、○略中黃瓶次慈氏、○略中青瓶次觀音、○略中黑瓶、次寶幢、○略赤瓶次花開、○略註黃瓶次阿彌陀、○略註青瓶、次觀音、○略註黑瓶次大日、○略註白瓶、已上作法同前○中略即想弟子同大日亦想已同十方諸佛灌以法水授法王位（已上可名佛果）次金界灌頂（移五瓶机立蓮臺東五瓶立替中四方、○中略）次師往大壇供十二尊（作法如前胎灌頂了更居替）次還至灌頂壇向蓮臺前花机而座供弟子、○略中次左方閼伽五供養供之、○略註次師加持白傘、○略註次覆弟子上、○略註次唱吉慶伽陀右手取白拂排受者肩次說其訓其語受者讀曰、○略中次師置佛傘至佛前頂禮曼荼羅一切尊、○略中次擎水灌繞壇三匝、（中次衆捧之名誦當瓶明○中略阿闍梨捧之餘四瓶隨繞讀）繞了如本立瓶、次資向東同金界大日師向受者、

先作本尊灌頂、○略中弟子從蓮臺下往淨筵（往問不乍立脫濕衣懸小牀子、○略註師自手取新衣等令著之、○略中次取廿一結線自右肩左腋下繫之（前後腰程一結也）

次臂鈷腕鈷先左臂（大同腕小）次右臂（大同腕小）次弟環（懸无名指中節）（左先右次）次寶冠（或自本不脫寶冠）次白繒、○略中次師對座捧供五供養（左方次讀僧讀四智）次閼伽、次授道具、○略中次授金剛名號於

弟子、本名上加金剛字、作名呼之、（金剛佛子某甲遍昭得師○中略）次道具加持、○略中次以金鋏螫拭其目、○略中次現前示彼明鏡、○略中淨其心、次遶壇三匝、○略中次令坐一處教彼本印眞言、次召餘弟子、一々如是灌頂畢、次爲說三昧耶戒、○略中次中間護摩、○略中師立壇前讀般若令彼等聽、○略中次授兩部密印法、○略註次欲令弟子堅持歡喜爲說偈言、○略中次最後護摩、○中略次四智讀漢語、○略中次弟子左方五供、○略中次香華等分賜弟子、○略中次令諸弟子各還本位、○略中次引入結緣灌頂者、次移五瓶於大壇（以散林水加香）敷禮盤等、次阿闍梨著座、○略中次解界奉送（可兩界衆用之）○中略次隨方廻向、次闍梨讀衆受者相共行道（逆）三匝、誦四智讀少鈸如常）即出堂、

〔觀音院恒例結緣灌頂記〕壽永元年壬寅十二月十四日庚戌天霽、明日可被行觀音院恒例結緣灌頂、（胎藏界）大阿闍梨二品法親王、今年爲初度、以北院爲出立所、仍今日渡御、其次令巡檢堂莊嚴給、又綱所（宿裝束）幷色衆（裳裝束）十有餘輩參會、粗被行習禮、是非指法式爲令無當日違失也、堂莊嚴儀閉灌頂堂南戸上孫廂七箇間格子、開東戸敷滿弘筵、東南西三面每間懸彩幡華鬘、代中央間去內陣戸三許尺立高座（在登階）敷高麗端半帖、當其上釣天蓋（四隅懸高座南頭立前机一脚在前垂）中央安金剛盤立鈴、左邊（四彩幡）置灑水塗香兩器幷散杖一支（國木一支置加之）、右邊居片供折敷（置加之）高座左右各立机一脚、前机南立小机一脚、其南立禮盤敷半帖、東立磬臺、中央而腰間廻迫同戸立十二天屏風一帖、其前東西行重敷高麗端帖二枚爲大阿闍梨法親王御座、同東腋間傍闇東西行敷同帖一枚爲小阿闍梨座、西第一二間（陳西孫廂計之）迫西北闇東西行敷同帖二枚（二間依敷三枚少出第三間）爲僧綱座（例年南北行敷之而兩院御聽聞所依相當座後被改之）、同第六七兩箇間南北行敷紫端帖各二枚爲凡僧座（以西第一行爲持金剛衆座也）第六間簀子迫欄東西行敷同帖一枚爲威儀師座（例年設二枚從儀師加著也）中央間簀子立敷花机二脚（左右共東西行合妻立之各迫南階敷地錺在覆帶等、納華箱廿枚同以西簀子迫欄敷高麗端帖四枚爲公卿座（行事上卿參議辨列座）西簀子迫西南欄南北行敷紫端帖一枚爲行事弁座、其北當登階間中央東西行敷同帖一枚（折反西端須折東也）爲右方堂童子座（登階切簀子仍

假敷板 東簀子迫東南欄南北行敷同帖一枚爲左方堂童子座、西孫廂南西兩方覆御簾、東戸垂之、南西北三方立五尺山水屏風、其中南北行並敷繧繝端帖四枚、中央立隔四尺几帳、兩方供唐錦茵、以南爲法皇〇後白河御在所、以北爲八條院〇藤原暲子御在所、向巽三尺几帳、佛母院廊南面懸三間御簾、或云、東遣戸間數云東三箇間加作合計之、被立儲几帳、爲法皇御休息所、第一間南北東三方立五尺山水屏風、迫北南北行敷繧繝端帖三枚、二枚幷敷上敷一枚、北端供御枕、以檀紙裏之、法勝寺修例云々、又西御座北端置紙一帖幷御硯箱紙北、硯蓋之、南、御座前居御火桶、第二三間東西二行敷高麗端帖、庇二箇間東西行敷紫端帖、傍東立御御厨子一脚、居御菓子幷椋盥、同北頭置炭取、遣戸以東一ケ間爲御裝物所、同廊西三ケ間出几帳帷、爲八條院御休息所、東第一間立屏風、爲裝御座、向坤三尺几帳、供御枕、置硯紙、居御火桶、同第二三間、幷庇儀一同、法皇御所、御塔子午廊、母屋四ケ間、敷滿弘筵、南北行敷高麗端帖八枚、北上對座、爲上達部座、同卯酉廊四ケ間、北面幷東西一ケ間、假立布障子、敷滿弘筵、其上東西二行敷紫端帖八枚、東上對座、爲侍臣座、佛母院供所屋敷黃端帖、爲兩院進物所、灌頂堂前庭巽角迫觀音院壇、立二間御誦經幄、東西妻敷小筵三枚、立案三脚、積三所達親物、西端院座、次八條院座、次宮座、各麻布五十段、插諷誦文、去同堂砌一許丈、東西二行南北壹丈八尺、立亘龍頭棹、各五本、自灌頂堂東第二柱通至于仙懸、糸幡十流、自同南階下、南行一丈、更西折十三丈四尺、當幡中央至于幔門、展佛筵、柱九尺、其上施褥、置鎭子、抑須臨刻限、掃部寮敷筵道、內藏寮施褥、而諸司勤或致擁怠、或存疎略、頗爲違亂之基、仍相儲寺家兼令專當法師敷之、敷不可爲恒規、筵道西端立机二脚、南北妻合立之、頗置鐃鈸寶螺各二具、東方倚立玉幡各一流、懸龍頭棹、當同堂東階北頭、去砌五許尺、南行六丈二尺、從觀音院乾柱西行九丈九尺、北折一丈五尺、又去東五許尺、北行二丈四尺、從佛母院乾柱北頭北行二丈五尺、自御塔子午廊東西去砌下五許尺、自北第三柱南行一丈五尺、同廊東西去砌下五許尺、自北第三柱南行二丈四尺、東折一丈六尺、同去砌五許尺下、自卯酉廊立廂坤柱東行四丈二尺、引繧繝幔、各入二橫板一引之不レ用レ綱之觀音院南門內左右腋、立二色幔幄、南北妻敷黃端帖、爲式部省彈正臺座、省東臺西佛母院南庭去南幔一許尺、西幔一許丈、東西行敷同帖二枚、爲同出居座、省東臺西以北院藥師堂南孫廂、爲衆僧集會所、上南面格子閉東北戸、每間懸彩播花鬘代、敷滿弘筵、傍東妻戸立五尺山水屏風一帖、其前重敷高麗端帖二帖、爲大阿闍梨御座、第二間以西四ケ間、迫南柱傍北間東西二間敷高麗端帖四枚、南北各二枚、爲衆僧座、

臨申刻法皇臨幸、蓮花心院、密儀當日長途御幸、依可爲時刻遲々之基也、

亥刻八條院御幸觀音院、庇御車後被出女房衣、供奉公卿源大納言、定房下略〇

〔幸心鈔下末〕結緣灌頂事

至奧佛名以後作法者、近來不用之、自揚枝打至授與金剛水、全分不用之也、大阿闍梨教化常途時不用歟、行後朝之時可用也、大阿闍梨表白、常途之時者、只指聲微音也、行後朝之時如說可勤歟、若習聲明之人、聲明可勤也、但先師僧正指聲也、心得被勤之間、乞戒師勤ヨカリケル也、師云、當寺コソアラメ、東寺ニテモ、此サダメニ被勤ケリ、其覺教僧正申ケルトカヤ、〇中略

又師云、當時結緣灌頂後朝中絕畢、先師僧正御時者、後朝供養法時、不令向供養法阿闍梨給、六借カリテ障子コレ也、先寶法印之時無其儀、壇前相對如佛、被供養シゾトテ令唉給、

〔龜山院御灌頂記〕嘉元三年乙巳三月三日己酉、法皇出御、同裝束御簾令到中門切妻給、〇中略大阿闍梨降西砦脫不及著鼻廣、依垂役人之便、色衆又同前、一向所著草鞋也、法皇降切妻砦脫令立賜、性玄法印進御鼻廣、主典代傳之、上童染王〇註略可傳之由、兼有其沙汰之處、申子細云々、仍如此、有其沙汰云々、相助法印進御香爐、乍入箱進之、預法眼實幸臨其期、持參時、燭置火、大阿闍梨入中門內、綱掌縰取、兼入大多勝院淨衣著白袈裟儲威從許前行、一行寄右立、十弟子扈從許相從、于時法皇深令磬折、御前駈小欲群入云々、裹頭衆止之歟、法皇令從其後、御威儀僧上童許相從、上皇御蹲居、大阿闍梨到正面程、駕腰輿、仲遍取草鞋、駕輿丁八人舁之、退紅立烏帽子藁沓取尻、府駕輿藏人朝衡執蓋、、按察大納言前駈云々、、權大納言前駈張綱到筵道

西端止レ與、先レ之專當撤二幔門一并高利一降レ與、仲遍獻二草鞋一、性玄進二御草鞋一、師資同令レ立二筵道上一、給、維縁予加二列扈從一、法印先レ之加列、前右府以下直衣布衣卿相雲客群二居東中門下一、于時微雨降、仍引二傘右一加レ列以前、宜二遍發一音頭許、鉢只四突レ之、則進行、上堂衆僧前退歸、十弟子威儀僧相從、筵道外上童止二幔門外一、公卿等尚可レ奉二相從之處一、不動座尚蹲居、後朝被レ召二御裝束之時一、於二御前一有二其沙汰一、上皇御蹲居之間、依無口不參歟之由、有二勅定一、讃衆繞持爲相從群二立東簀子一、持金剛衆群二立散花机以東南簀子一、十弟子經二散花机一、幷壁代東西入二壁代內一、○中略

受者御著座、持金剛衆行道三迎、○中略傳聞、長者僧正參入之時、於二上皇御蹲居前一著二草鞋一、同召二具僮僕等一云云、進退尤見苦云々、繒素加誹謗之由風聞、○中略爰受者令レ取二三衣香爐一給、教授先歸入、受者入二御壁代內一、乾角大阿闍梨作法有レ序、受者令レ打二磬給一、教授復座、但不レ得二復座一、同磬音、法印權大僧都實緣取二香爐一、唱レ唄、堂童子左方左衞門權佐藤朝勘解由次官仲定、右方民部大輔長隆右衞門權佐資冬、就レ机下一取二花筥一各入二當間一、賦之、散花師權律師長賢持二香爐花箱一、出二當間一、左廻透廊一、東到登レ階取二座具一、從僧兼相儲、庭上右廻經二本路一入二東脇間一、敷レ座、其禮拜、此間唄唱後二句拜了、著二草鞋一、唱二散花一、○略註唱了申二對揚一、經二本路一返賜レ座具一、復レ座、堂童子收二花筥一、退出、參退共直進退、散花之間許著レ座、說戒了、受者打レ磬給一、教授聽二磬音一參入、壁代內、召二十弟子上衆三人、持二參齒木具一、作法了撤レ之、受者御復座、三衣袋香呂等令レ入レ箱給、教授消レ燈、取二重片供一之後復レ座、大阿闍梨復レ座、十弟子移二置居箱一左香爐箱一右於二平座一卷二東南西三面壁代一、取二如意戒體箱座具等一、群居本座、○中略

表白始威儀師維縁、昇二切妻一、經二簀子一跪候、透渡殿西邊、大法師了清起レ座、出二當間一、左廻向、維縁跪二平突一、左取二御誦經文二通一、一通內藏寮一通受者廳取二公家一誦御經文一懷中一、次取二受者御誦經文一懷中一、共經二本路一退歸、堂達復レ座、表白、其詞云、

夫以

法身內證秘宮之說　是名二眞言教一
自心本有二果海之談一　是號二總持藏一

依レ之

麗則麗　五乘手已不レ伺　幽又幽　四家足斷無到
爲傳二法灌頂一者

中臺之鵝王　讓二上機之全薩一
初地之龍猛　開二南天之鐵扉一

自爾以降

師々列レ步　白閨之香煙雖レ舊
弟々繼踵　青龍之玄風未レ衰

爰現前大阿闍梨耶前大僧正法印大和尚位
出二桃蹊榮貴之家一　入二蕭寺秘密之室一
所レ披者十住心續之教文　度數千萬軸之卷舒
所レ達者五相成身觀解　積二八十餘年之薰修一

然則

速至二東寺之官長一、經二法務之顯要一
忽倍二北闕之護持一、極二僧正之崇班一
忝爲二一人之師範一、奉レ授二兩日之佛位一
凡厥爲レ德　得不レ可レ稱
方今、受者禪定法皇、

天照大明之苗裔　日域和國之本主也
執膺圖十五廻　遙照四海之安危於掌內
浮虛舟十四年　猶懸萬機之語詢於心中
求賢撫士　傅巖之嵐入夢
撰才立儒　魯堂之月留跡
　然間
知朝務之勞　遁俗趣眞
覺世累之空　歸佛敬法
終受性德無漏三昧耶之淨戒
始傳逼照如來廿二代之職位
溫先規於異域、有無畏以來兩國之勝概
顧芳塵於本朝、貽眞觀以降六代之住躅
　就中
寬平者、圓城之上流也、已爲吾宗之明祖、
天祿者、廣澤之貴弟也、豈非皇家之曩好、
倩思故事　相叶今儀
　于時
太上天皇之座長嫡　引群英幸法筵
陛下聖主之在頂孫　遣詔使助齊席
昔無諍念王之排紺閣、來入五智灌頂之淵源、

今禪定法皇之臨輪壇、早得三密卽身之印璽、
　觀夫
松杉響嶺　自成唄讚之曲詞
櫻梅飾檐　專添道場之莊嚴
天意與善　地形增花光者
　於此座
鳴讒誦之疎磬　退四魔之障難
鑒陸嘯之匪石　垂諸尊之證明
裏書云
內藏寮
　請讒誦事
　　麻布片端
右三寶衆僧、御布施所請如件、
嘉元三年三月三日
　院廳
　御讒誦事
　　三寶衆僧御布施麻布伍伯端
右爲悉地成就讒誦所請如件、
敬白
嘉元三年三月三日

正四位下行右兵衞督兼頭藤原朝臣敎定

別當從三位左兵衞督藤原朝臣親氏奉

道場

〔幸心鈔（下末）〕付法傳來事

小野僧正（聖寶）或人被レ授二灌頂一之時、此手救大壇可二料理一之由被レ申之間、致二沙汰一之時、初夜時胎藏壇令二料理一兩壇相儲タリケルニヤ、其時僧正入二道場一登二金界壇一被レ始レ之平救別座職衆密音ツクロヒシテ、胎藏々々ト申ケルヲ僧正聞テ、サカシキ公ノ云事カナト被レ申云々、

胎藏先行、金界先竹事、古來異說也、以外相論也、正大師令レ授給一之時先胎藏也、而延命之時先被レ授二金界一云々、其有二深意一被二注置一歟仍小野僧正如レ然被レ行レ之歟但彼僧正胎藏初夜被レ行レ之時、少々有ケルニヤ、

〔書言字考節用集十數量〕四灌頂（シクハンテウ）（東寺、觀音院、尊勝寺、最勝寺）

〔拾芥抄（下本諸宗）〕四灌頂

東寺灌頂〇（略）中　觀音院灌頂〇（略）中　尊勝寺灌頂〇（略）中　最勝寺灌頂〇（略）下

〔濫觴抄（下）〕東寺結緣灌頂。

同年十（承和）年〇十一月十六日、依二東寺一口定二眞言宗傳法職位一幷修二結緣灌頂一云々、

〔初例抄（下）〕東寺結緣灌頂始

承和十年十一月日、依二實惠（僧檜尾都）一奏聞一於二東寺一灌頂院一被レ始二置金剛界結緣灌頂一、同十一三十五日、於二同寺一灌頂院一始行結緣灌頂一、被二置一春秋二季金剛胎藏兩灌頂一、

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應レ爲二國家一於二東寺一定二眞言宗傳法職位一幷修二結緣等灌頂一事

右得二少僧都傳燈大法師位實惠表一偁、吼盧遮那包二括萬界一、密印眞契呑二納衆經一、唯其教宜レ有レ頓有レ漸、漸謂二聲聞一、小乘登壇學處、頓謂二菩薩一、大士灌頂法門、是詣極之夷途、爲二入佛之正位一、頂謂二頭頂一、表二大行之尊高一、灌謂二護持一、明二諸佛之護念一、超昇出離、何莫レ由レ斯、所レ冀每載春秋二節一、百花皆榮、草木結レ實、當レ嚴二淨香花一以開二覺眼一、誘導有レ識以歸二直境一、〇（略）中若衆中有二稟學兩部大法及宗義幷五種護摩法等一、修練加行、堪レ爲二

師範一者、先受二阿闍梨位一者、覆審試定、錄二其名簿一、別當相署奏聞、然後待二報答一、令下其宗長老阿闍梨於二東寺一授二傳法職位一、凡物必有二條貫一、若無レ貫者亂墜、委レ令二當時爲一レ法首一者令レ行レ之、不レ聽レ輒爾他處授二與傳法位一、又受二阿闍梨位一、及學二一尊契一之法師、准二諸宗智者帳一、明記二其年臘及所居之寺一、幷所レ學秘法等一加二宗俗別當署一、牒之所レ司、不レ載二此牒之類一、一切不レ聽二私輒作一レ法、若諸傳法者可二他處結緣灌頂一、更受二執法者之許可一、兼經二宗俗別當隨一レ宜令レ行者、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣、奉レ勅依レ請、宜二普告一諸寺一嚴加二捉搦一、若有二違犯者一、一依二養老六年七月十日格一科罪、

承和十年十一月十六日

○按ズルニ、養老六年七月十日ノ格ハ、續日本紀ニ見ユ、

〔東寺要集一〕玄蕃寮牒　僧綱

應レ爲二國家一於二東寺一定二眞言宗傳法職位幷結緣灌頂一事

右被二省今月廿二日符一偁、太政官同月十六日符偁、云々者、省宜レ承知依レ宣行レ之者、寮宜レ承知依レ件行レ之者、僧綱寮狀依レ件行、故牒、

承和十年十一月十六日

預廣宗宿禰系繼

小屬平群朝臣明

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

大允飛鳥戸造眞長

應レ停二春節灌頂一永成二修法一事

右得二少僧都傳燈大法師位實惠表一偁、依二太政官去承和十年十一月十六日符一、自二去十一年三月十五日一始行二春秋灌頂一、而寺家之務、觸類繁多、左右兼行、事頗擁滯、望請停二春灌頂一、永成二修法一、即以二灌頂料一充二修法具一、但秋來一廻、恒行二灌頂一、敬爲二國家一修二件二法一者、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出

羽安察使藤原朝臣良房宣、奉勅依レ請、

承和十〇據二年中行事秘抄承和十三年實惠表一、十下恐脫二三字一年三月十五日

○按ズルニ、春季結緣灌頂ヲ復舊セシ事ハ、永和二年結緣灌頂記ノ文中ニ在リ、參看スベシ、

〔中右記〕永久二年九月廿七日、頭辨來仰云、東寺灌頂僧名日時可二定申一〇中略

件東寺灌頂、從二去年一公家所レ被レ行也、是宗長者、權僧正寬助所二申始一也、從レ昔爲二本寺事一不レ爲二公事一而依二寬助奏狀一被レ行也、

〔濫觴抄下〕觀音院灌頂〇〇同（保延）六年三月十五日始レ之

同年〇保延五年五月廿九日被レ仰二下之一、去十八日未剋皇子降誕、二品法親王孔雀經法賞、

〔初例抄下〕觀音院結緣灌頂始

保延五年五月十四日定、保延六年三月廿二日、觀音院灌頂被レ初レ之、胎藏依二去年宣旨一也、院宣、仁和寺宮高野美福門院御產御祈修二孔雀經法一、御室同十八日王子御誕生、依二法驗揭焉一被レ行二勸賞一、東寺灌頂一會春八日被レ置二仁和寺觀音院一、以二小灌頂阿舍梨一可レ被二僧綱一之由被レ進二宣旨一、〇下略

〔釋家官班記下〕灌頂事者、〇中略觀音院

保延六年三月廿五日、於二仁和寺觀音院一被レ始レ修二結緣灌頂一、二品親王覺法去年五月春宮降誕之時御祈、孔雀經法賞被二申請一之、

○觀音院灌頂ハ、東寺文書ニ正中元年マデ見ユ、蓋シ東寺ト相前後シテ廢絕セシヤ明ナリ、

〔濫觴抄下〕尊勝寺灌頂

康和六年甲甲改長治元始行レ之、大阿闍梨法親王、天皇臨二幸東寺一慈覺大師智證門人等勤レ之云々、

〔釋家官班記〕灌頂事者〇中略尊勝寺

長治元年三月廿四日、於二尊勝寺一始被レ修二結緣灌頂一、始大阿闍梨覺行親王賜二勸賞一、仁和寺圓堂院被レ寄二阿闍梨五口一少

阿闍梨、寬智任二權律師一、當座自今已後、東寺天台各兩年准二三會二會一可レ被レ任二僧綱之由宣旨一、永久元年九月廿五日、宣旨偏天台兩延曆園城可レ勤之云々、仍自今以後、東寺不レ勤二此御願一、依二天台衆徒訴一也今年大阿闍梨座主法印權大僧都山仁豪、小阿闍梨山行嚴、

〔阿娑縛抄八〕兩寺灌頂

第二式日事

尊勝寺、三月廿四日、東寺慈覺智證門徒、爲二阿闍梨胎藏金剛兩年輪轉一、蓮臺阿闍梨一宗二年勤仕之、任二僧綱一、但東寺被レ始二小灌頂之後一、山門園城寺許勤レ之、

〔濫觴抄下〕最勝寺灌頂

保安三年壬寅十二月庚子始行レ之、大阿闍梨寬助大僧正、

〔初例抄下〕最勝寺結緣灌頂始

保安三年十二月廿五日、〇十五日、釋家官班記作二廿五日一於最勝寺灌頂堂一被レ始二置胎藏界結緣灌頂一、大阿舍梨慶實、自今以後付二尊勝寺灌頂阿闍梨一各可レ行二兩界一也、

〔阿娑縛抄八〕最勝寺、十二月十五日、

禾云、近代兩寺共、及二歲末一無二定日一、凌遲故歟、

〔濫觴抄下〕天台灌頂

仁明十六年戊辰嘉祥元六月十五日、慈覺大師表云、南岳惠恩禪師後身聖德太子、以二不世之德一轉二生此土一、先師最澄十有五年、禪念之暇、披二覽經教一、遂知二天台止觀與一真言法義一、理冥符隨緣宣傳等乃至圓仁去承和五年、遇二不空弟子全雅阿闍梨於天台第七資志遠和尙一、稟二三觀之旨一、六年之間等文同十七年嘉祥二年五月於二延曆寺一始修之、

〔中右記〕天仁元年四月朔日辛巳、夜前從二台嶺一所二下向一之大衆等、舁二日吉神輿一發向、西坂下神人衆徒數

千人群集、爰又爲相禦公家所指遣之撿非違使幷源氏、平氏、天下弓兵之士、武勇之輩數萬人、從法成寺東河原及松前邊引陣結黨相守不入、玄甲連道、白刃映日、數十町間、人馬相滿云々、相互不進、今日已暮、遙望山上採火往反、其光如星、京中騷動、二日或人來談云、去夜夜半許、山之衆徒訴申旨、〇略中差使申上云、今年灌頂已被行了、不可申左右、但於後々年者、猶弘法慈覺智證大師等門跡、相次可被行者、是本之訟訴源也、於院人々被相定可依請之由、以撿非違使資清被仰了、爰衆徒大歡喜舍咲歸山了、件事可有裁許者、前日可被仰下歟、此十餘日未定之間、數千軍兵相禦之間、東山川原、賀茂吉田之邊、下人之田畠爲兵士等被滅亡了、後遂隨申請有裁許、爲彼法會、爲世間頗無益歟、凡此灌頂阿闍梨、本自任弘法慈覺智證門徒、次第可被行之義也、今年彼破件次第、頗不穩便、又被破者、縱衆徒雖訴申不可有裁許歟、破次第又有裁許、彼是共爲朝威、甚以不便也、凡末代法、衆徒所爲人力不可及也、彌及末世者、定滅亡朝家歟、可恐可愼之、

〔阿娑縛抄（八）〇延曆寺灌頂

第二式日事

每年九月十五日也、胎、金、隔年有之、

延曆寺灌頂行事（慈覺大師云、九月一日、可始行灌頂雜事、

〔憲教類典（四寺社ノ十三下）〕慶安二己丑年九月廿一日

高野山學侶方

定〇略中

一大曼陀羅供、庭儀、堂上灌頂者、爲秘法之間、非學侶者、雖及競望不可許容、縱雖爲最略之灌頂、於學侶之坊外不可執行之、勿論以私之最員、戒臈不至、學門未熟之輩、不可附法事、〇略中

右條々、今度相定、攸追加也、堅可守此旨、幷衆徒中諸法度知行配當方彌相守、慶長六年五月廿一日、

元和三年九月十一日、兩先判之旨、永不可違失者也、仍如件、

慶長二年九月廿一日　御朱印

〔東叡山文書〕態以飛札令申候、然間連年於日光山可被修密灌之由、珍重ニ存候、殊拙僧可令開壇之旨、別而々々滿足候、內々重仰等可致修行候、其用意不存油斷候、以事繁中、御懇情之段殊奉謝次第ニ候、萬端御指圖賴入存候、猶期接音之時候、早々、

十二月十八日　堯然〇妙法院堯然法親王

大僧正御房〇天海

〔續日本高僧傳（一）〕江戶靈雲寺沙門淨嚴傳

釋淨嚴〇略中延寶四年春二月、建曼荼羅於常樂寺、授受明灌頂於諸弟子、抑受明灌頂、東密一派失其傳五百年于茲、嚴撿尋經軌、再興此法、

〔東寺要集（一）〕東寺傳法灌頂舉狀官符等

十禪師傳燈大法師位眞紹年卅七薦卅三　東大寺

右僧十歲入道、精進無倦、年百不混、戒珠清潔、學涉兩部、可爲師範、觀豁三密、能堪兼濟、謹依太政官今年十一月十六日符、爲授傳法職位、簡定貢擧、若允所請、宜付所司、

承和十年十一月廿七日　傳燈大法師位

權律師傳燈大法師位

少僧都傳燈大法師實惠

沙門眞忠（別當從五位下左衞門權佐藤原朝臣）法皇第三親王

役僧

右大辨從四位上和氣朝臣

大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣

〔東寺要集　一〕太政官牒　東寺

應レ聽二付法灌頂傳燈大法師位一

右得二僧正法印和尚位寬空一去月廿七日奏狀偁、〇中略件元杲情性之清閑也、撤二壺水一而潔白、智惠之深遠、瀉二瓶水一而幽玄、學窓送年、久收二先生之雪一、道場觀レ月、遠傳二祖師之風一、慈悲喜捨只是修身戒行、威儀已以具足、誠是道之師範、國之大瑞者也、何況爲二醍醐寺定額僧一、奉レ修二御願之上一、三會聽衆、御修法御讀經、仁王會幷神寺御祈願法事等、如レ此公事供奉口勞、格條所指豈非二若人一、抑寬空誤以二不肖之身一、猥昇二莫大位一、既爲レ得二兎之蹄一、蓋轉二推賢之徑一、卽依レ格兩部大法宗義、幷五種護摩法等、覆審誠定、既有二其實一、修練加行兼無二其滯一、望請殊蒙二天恩一、任レ格准レ例授與件元杲大法師傳法阿闍梨位一、將播二先鳴之美聲一、彌勵二後進之懇志一者、左大臣宣、奉レ勅依レ請者、寺宜二承知依レ宣行レ之、牒到准レ狀、故牒、

元杲年五十四　眞言宗　東大寺

康保元年十二月九日

左少弁正五位下紀朝臣

左大史正六位上粟田朝臣清明牒

〔小槻時元記〕宣旨消息案

太政官符、治部省、

應レ授二傳法灌頂職位一事

傳燈大法師位性守

右得二准三宮性深今月日奏狀一偁、謹考二舊貫一、歸二眞言秘藏一、受二傳法灌頂者一蒙二阿闍梨之職位一、天裁之恒規也、爰性守汲二南天之遺流一、居二西郊之古洞一、爲二攝錄之餘裔一、汚二先皇之法室一、薰修年漸積、練行日益新、尤堪二

瀉瓶一、望請鴻慈早被レ授二件職一者、誇二自門之光榮一、知二聖猷之明德一、彌仰二三密之瑜伽一、奉レ祈二万樂之寶祚一者、正三位行權中納言源朝臣通世宣、奉レ勅依レ請者、宜二承知依一レ宣行レ之者、符到奉行、

正五位上行右少辨藤原朝臣

修理東大寺大佛長官從四位下左大史小槻宿禰

明應六年二月十三日

〔阿娑縛抄　七〕第七阿闍梨事

一大阿闍梨　一助阿闍梨　一色衆持金剛四口　一讃衆十口

讃衆事

ム云人數廿人、十二人、十人、八人、六人、四人、隨時不レ定、仁和寺宮灌頂必卅人請レ之、

梶井宮〇尊快御灌頂卅人請レ之、山門傳法灌頂讃衆卅人之始也、

寬平法皇御灌頂于益信之時、讃衆八十人也、

〔山密往來〕抑結緣灌頂廣作佛事、奉二隨喜一候、舊記等追可二撰進一覽候、裝束事、寺家者、著二法眼平袈裟一候、尊重護法寺出雲路門跡摸二寺家之儀式一候、兩寺家者座主必勤修、不レ能二左右一、有レ障之時、被レ用二手替一候、智證大師依二身障一、以二承雲和尚一被レ爲二阿闍梨一以來、常事候哉、元初去嘉祥仁明三年九月十五日夜、於二讃衆一者、山路廻請候、於二住侶一者可レ注二進入壇師範等之由、被レ仰二于寺家執當候一、於二異門灌頂等之輩一者不レ應二御請一之事候、讃衆所二仰付一等事、寺家者會行事所司、持二參于貫首座主一申二御判一候也、先年淨土寺故慈勝大僧正勤仕之後、斷絶候畢、次兩寺者、去長治堀河元年、尊勝寺灌頂令二始行一候、阿闍梨仁和寺覺行法親王號二中御室一白川院御候、於二私記一者、敎王坊賢遲製作候歟、然者御室者爲二闕請一哉之由沙汰候、元初之外、古來被レ撰二山門三井便宜之智德一候、寺回祿之後者、去曆應光明年中歟、故二品前大僧正慈嚴於二法勝寺藥師堂一、移修之後、無二其儀一候、於二弘法御流一者、以二東寺

觀音院號二兩寺灌頂一候、又天王寺五智光院灌頂、是又爲二勅願一當寺別當勤仕候、讃衆廿口之內、十口阿闍梨引率、十口寺讃衆（天王寺供僧借任器用輩也）委曲不レ遑二羅縷一、老耄當座之注進、可レ被二早破一候也、誠恐謹言、

孟冬五日　　僧正

〔山密往來〕初度授職事、雖レ無二指本文一、半百未滿古來制戒候歟、○略　中　具蒙二處分一、○略　中

夾鐘十六日　　法印

密嚴院新僧正御房

〔山密往來〕山門暫依二用山王院大師奏狀一候歟、然而又其例繁多、所レ謂慈應（皇慶　卅六歲）和尚　寂場房座主（仁實　卅八歲）吉水大僧正（慈源　梶井入道親王（尊快　等候、是皆以レ謂二竹園攝關之貴種一、門主貫長之座目一、稱二別義一者於二凡皐之輩一者、房全僧正四十五云々、法曼戒光共五十未滿候歟、已上故慈勝僧正勘例也加之近則菩提院二品親王（覺雲　桓守（山本　大僧正（卅六夏廿三）二品親王（尊胤　卅二歟）座主宮（尊道、四十未滿、當門主、承胤、四十四、）前大僧正王慈嚴（卅八　梶井故二品親王尊胤　卅二歟）座主宮（梶井院宮、道覺　故二品親王、覺雲　此等候歟、依レ之去弘安年（後宇多　以往近例共如レ此、澆末之習斟酌之條、還可レ招二斷種之咎一候乎、又兩寺（尊勝、最勝）灌頂、大阿闍梨者、傳法之宣下候、是亦知命未滿、自他門其例多候、僧綱補任載二大阿闍梨一候也、旁可レ資二准的一候歟、次於二十五灌頂之例者、井房、安慶　西山、善蓮院　宮、道覺　故二品親王、覺雲　此等候歟、依レ之去弘安年（後宇多　中、澄覺親王被レ奉二授一于覺雲三戒一、御表白云、南師遺例、西山繼跡、皆是我道之明匠、一流之法燈也云々、管見之所二覃、能所共可レ無二巨難一歟、但依レ人隨時謹愼可レ協二眞慮一之條勿論也、何況禪下者、久爲二三密瑚璉一、飽歷二一流之源底一、爭可レ有二豫議一哉、只隨二貴命一、慙述二鄙懷一、老耄之注進、宜レ有二取捨一者也、恐々謹言、

仲春十三日　　權僧正

北谷長宴（號北師）
南谷安慶（號南師）——良祐

〔初例抄〕灌頂師範、一周忌內、從公請二例一、

長德五年正月八日、權少僧都雅慶參二勤眞言院御修法一、去年六月十二日、大僧正寬朝入滅、

〔釋家官班記〕灌頂事者、勅願結緣灌頂、小阿闍梨被レ宣下之也、二年勤仕之後、任二權律師一也、東寺、仁觀音院、山　總持院、山　寺　尊勝寺、同　最勝寺、於二此寺所々一被レ修之者也、

〔延喜式（二十主稅六）〕凡延曆寺灌頂料、白米五石、以二近江國年料一、進二官米之內一充レ之、

〔延喜式（三十大藏）〕凡延曆寺○略　中　九月十五日、修二灌頂一、衆僧菜料直布五端、合九端（○合二計八月試度之分四端一）省家申請、七月以前送二彼寺一、

〔建武二年結緣灌頂記〕九月廿六日、宣政門院令旨到來、其詞云、來月十二日、御京極院御第三廻可レ被レ行二結緣灌頂一、大阿闍梨可レ令二參勤一給レ之由、宣政門院令旨所レ候也、○略　中

廿七日、御布施等奉行事、難治之由、以二賴意法印一申二御返事一、愚狀云、

結緣灌頂御布施以下事、被仰下之趣謹承候畢、尤可二存知一候處、旁以難治事候、其子細以二使者一令レ申候、可レ然之樣、可レ令二計披露一給之狀如レ件、

九月廿七日　　道意

賴意法印、帶二此狀一相二向俊長朝臣宿所一、結緣灌頂御布施以下事、雖レ被二簡略一、不レ可レ劣二二萬疋一歟、而以二萬三千疋一悉致二沙汰一之條、難治上、爲二大阿闍梨一調進御布施一无二先規一歟、且就二省略之儀一者、定違二衆僧以下諸人所存一歟、然者謗難頗難レ遁、旁難レ申二領狀一之由、示遣之處、以二此趣一可レ經二奏聞一云々、

十月一日、賴意法印、向二俊長朝臣宿所一、御布施以下事、條々問答之云々、其次結緣灌頂道具等事、注二進俊長朝臣一、彼注文云、

玉幡二旒（在レ竿）　高燈臺二本（在二打敷一）
兩界曼荼羅各一鋪（在二佛臺一基一）　同敷二曼荼羅一面一
輪一枚（在レ座）　羯磨四枚（在レ座）

鈴一口　五鈷一枚
金剛盤一枚　三鈷一枚在レ座
獨鈷一枚在レ座　閼伽器四前在二火垸一
火舍四口在レ蓋　花瓶五本在レ座
橛四本　五色糸四條
灑水器一口在二蓋火垸一散杖一　塗香器一口在二蓋火垸一
蓮臺一面　花足七十二枚
半帖六枚　燈臺二本
塗香灑水器各一口在二蓋火垸一散杖一同机二脚
十二天屏風二帖　山水屏風一帖
覆面四帖　香口一頭
八祖料、閼伽器八前在二火垸一　火舍八口在レ蓋
花瓶十六本　机八脚
鳥箒四支
以上自二勝寶院一可レ渡二進之一
筵道十三枚　高机二脚
鐃鉢二具在二鐘木一　寶螺二口
要與一張在二半帖一綱八筋、　白蓋一張在二骨四枘、寶珠覆一、綱一筋、上卷四筋一、
高座一基在二昇階半帖一　大前机一脚在二前垂栗形一
脇机二脚　小前机一脚

許可加行

禮盤一基在二半帖一　磬臺一基在二磬鐘木一
天蓋一張在二骨栗形一覆、綱幡四旒、散花机一脚在二面綱一覆、帶二地敷一、
水瓶一口　手洗一口
八大師御影八鋪　花形壇一面
脇机一脚　燈臺四本
倚子一脚在二半帖一　禮盤一基
小燈臺四本　硯筥二合在二各硯筆墨水入小刀一
以上可レ被レ仰二菩提院幷眞乘院一、神護寺廣隆寺等有レ之云々
庭幡十旒在二柱布一付柱久糸一　院廳可二用意一
幄屋皆具　西圍寺大覺寺等有レ之歟
幡三十二旒　花鬘代十五枚
以上可レ被レ仰二他所一

〔眞言受法最要　坤〕許可加行事

私云、此許可作法、擬下大師○法於二大唐青龍寺一所レ受六七兩日灌頂上是卽受○明○灌○頂○也授レ之、若最初受二受明灌頂一兩部共得佛大日尊之人、則不レ可レ用二此許可一、爾者許可加行無用也、若兩界之內一界之得佛大日者、就二餘一界一可レ行二許可一也、○略中
許可已後、傳二授諸佛法一、更以無妨、但大法秘法等、可レ有二分別一也、多分傳法已後授レ之

〔阿娑縛抄　六〕許可

先繫二兩部曼陀羅一其前小壇一面立レ之、壇敷水引如レ常○中略
三度、○略註次加二持香水一、○略註次入二佛三昧耶一、師教レ之次啓白、打金○中略次灌頂胎向レ西、資向レ東、金可レ翻レ台、○中略次內五貼、○中

略外五貼、〇中次師五古插合掌唱三、〇中略次三身印、〇中略次報身眞言、〇中略次師打金唱云、〇中略次二手橫取五古、資亦橫受之、當胸拜之返師、三反〇中資取次第向願以此功德、乃至云々、次師資共禮佛、次出堂、

〔眞言受法最要乾〕十八道加行事

十八道加行ト云ハ、一尊ノ供養法ヲ行ハンガ爲ニ、先ヅ前方便ニ、禮拜懺悔等ヲ作シテ、已造ノ罪根ヲ消滅スル事也、是故ニ加行ト云ハ、根本ノ正行ニ加ヘ行ズル名ナリ、正行一七日ノ供養法ハ、根本肝心ノ行也、然レバ則チ强チニ苦行ヲ以テ、眞實トスルニハアラズ、唯餘事ヲ放下シテ、一心一念ニ修行シテ、重罪ヲ滅センコトヲ願フベシ、〇中略十八道、不動、兩界、護摩皆以加行者百箇日、正行一七日、灌頂加行者百箇日也、但隨其人之機根當有延保也、如於高野山、孜々敎學無有餘力、故或七十五日用之而已、雖然如上云、爲悉地成就、則不可厭期限之長也、

〔眞言受法最要坤〕許可加行事

金剛界供養法、三時、一七日行之、表白別在、大師所作作法如例、

許可加行終之日、初夜應授許可、若其日惡宿曜等、則翌日可授之若亦翌日惡日、則加行結願之後、猶三時修之、以至修行當日行之也、

〔阿娑縛抄七〕第九加行事

禾云、灌頂加行百箇日也、

〔花園院御記〕元亨三年七月十一日辛丑、自此日始加行、是可傳受十八道於慈嚴僧正之故也、其所作注折紙、不及別道場、於持佛道每日一度念誦也、不及著指貫、又非淨衣、但非古例也、是者略儀不可然歟、但有何事乎之間如此、十五日乙巳、此日受十八道於前權僧正慈嚴、先年遇增基僧正受兩部法幷護摩等了、又弘法大師之流於仁和寺宮、十八道、金剛界等傳受了、慈覺流未受之、又此僧正、細々參

三摩耶戒

住、齡雖未闌、頗爲法器歟、仍所令傳受也、

〔報恩院入壇資記〕遍智院前權僧正

卅二人内具支廿八人許可十四人

覺洞院

廿二人此内一人印可

〔阿娑縛抄七〕五種三摩耶〇三摩耶者卽是不可違越義也、略而言之、卽是戒義也、

釋十二云、第一但得遙見曼荼羅位、〇略中第二、是曼荼羅位、〇略中第三見曼荼羅及印位幷作諸事者、〇略中第四者、已能依隨行法、彼眞言門所有法則、一々通解、具知緣壇所須方便、衆蠆堪在師位悅可師意、〇略中第五、是卽秘密三昧耶、如敎所說、印壇配位皆見、若不經入此壇、秘密智不生也、是故當於秘密壇中、如法作灌頂、是名第五智者應知也、若異此者、不名三昧耶也、卽前所說第三灌頂時可入也、文

江師云、第二三昧耶結緣灌頂也云々、

延曆寺灌頂第三三摩那、東寺灌頂第二三昧耶、

秘密灌頂、與第五三昧耶同物也、〇中略

〔阿娑縛抄七〕三摩耶戒儀

先壇場莊嚴〇中略

次入堂作法、如曼荼羅供、但无行道〇中略

次師發座、〇略註受者坐机前半疊、次讚衆誦四智讚漢語中略

次念界禮佛、〇中略次前方便用否在人意、〇中略或次振鈴、〇中略次乞戒偈、〇略註禮師、三反〇

次應修四律儀、〇中略次廻向發願、〇略中次五供養、次加持誓水、〇略中次塗香塗手、授弟子雙手、如常儀、〇中

略次唱淨三業、〇略中次護身眞言曰、〇略中次加持塗香、授弟子掌、〇略中次加持白花、〇略中次加持香爐、〇中

血脈

略次授與金剛水、○中略次讀衆同音誦四智讃（打鐃鈸）次下座受者起了、

〔神皇正統記 宇多〕御年三十三にや、わかくよりその御こゝろざしありきとぞおぼせたまひける、弘法大師四代の弟子、益信僧正を御師として、東寺にて灌頂せさせたまふ、また智證大師の弟子、增命僧正（于時法橋なり、後證云二靜觀一）にも比叡山にてうけさせたまへり、弘法の流れをむねとせさせたまひければ、その御法流としていまにたえず、仁和寺につたへはべるはこれなり、おほよそ弘法の流に、廣澤仁和寺小野醍醐井のふたつあり、廣澤は法皇の御弟子寬空僧正、寬空の弟子寬朝僧正、敦實親王子、法皇之御孫也、寬朝廣澤にすまれしかば、かのながれといふ、そののち代々の御室相つたへて、たゞ人はあひまじはらず、法流をあづけられて、師範となることは兩度あり、されど御室は代々親王なり、小野の流れは、益信の相弟子に聖寶僧正とて、智法無雙の人ありき、大師の嫡流と稱することのあるにや、しかれど年戒おとられけるゆゑにや、法皇御灌頂の時は、色衆につらなりて、嘆德といふことをつとめられたりき、延喜の護持僧にて、ことに崇重したまひき、その弟子觀賢僧正も、相つぎて護持申し、おなじく崇重ありき、綱中の法務を、東寺の一阿闍梨に付けられしも、この時よりはじまる、正の法務は、いづれも東寺の長者なり、諸寺なるは、みな權法務なり、また仁和寺の御室、總の法所を召仕はるゝことは、後白河院以來のことか、綱この僧正は、高野にまうでゝ、大師入定の崛を、ひらきて、御髮を剃、法服などきせかへ申せし人なり、その弟子淳祐石山の內供といふ相ともなひけれども、終に見奉らず、師の僧正、その手を取りて、御身にふれしめけりとぞ、淳祐罪障の至りを歎きて、卑下の心ありければ、弟子元杲僧都に（延命院と云ふ）許可ばかりにて、（異說歟、傳法授職、不能二左右一勿論なり、）授職を許さず、勅定に依りて、法皇の御弟子寬空にあひて、授職灌頂を遂ぐ、彼元杲の弟子仁海僧正、又知法の人なりき、小野と云ふ所にすまれけるより、小野の流といふ、然れば法皇は、兩流の法主にましますなり、王位を去て釋門に入る事は、その例おほしといへども、かく法流の正統となり、しかも御子孫繼體し給へり、ありがたきためしにや、

〔密宗血脈抄 上〕益信聖寶、醍醐仁和兩流分レ之、是則非レ無二所以一、於二眞言大方有一二筋一、故相分授二益信聖寶一給也、可レ思レ之、

○按ズルニ、小野廣澤ノ二流、更ニ分レテ各〻數十流ノ血脈ヲ爲セリ、然レドモ其中ニ就キテ、著名ナルモノ各〻六流アリ、此六流ハ、共ニ古來眞言院御修法ニ關係スルヲ得ルモノナリ、故ニ左ニ揭グル血脈モ、獨リ此六流ニ止ム、

〔醍醐寺文書〕○高祖大日如來——○傳法祖金剛薩埵菩薩——○第三祖龍猛菩薩——○第四祖龍智菩薩——○第五祖金剛智三藏——○第六祖不空三藏——○第七祖惠果阿闍梨

- ○第八祖弘法大師（○空海）
  - 實惠
  - 眞濟
  - ○眞雅
    - 益信（圓城寺建立○卽廣澤流始祖）
      - ○道雄
        - ○聖寶（○卽小野流始祖而建二立醍醐寺一）
          - 圓明
          - 眞如
          - 果隣
          - 泰範
          - 智泉
          - 忠延
        - ○觀賢——○淳祐——○元杲
        - ○仁海——○成尊——○義範——範俊

嚴覺（寺流祖）
- 勸修（寺流祖）
  - 增俊（隨心院流祖）
  - 宗意（安祥寺流祖）

勝覺（三寶院流祖）
- ○實運
  - ○勝憲
    - ○成賢
      - ○憲深
      - ○定海
        - 聖賢（金剛王院流祖）
        - 賢覺（理性院流祖）

○定濟
- ○定勝
  - ○定任
    - ○賢助
      - ○賢俊
        - ○實濟
          - ○滿濟

○義賢
- ○重賢
  - ○賢深
    - ○澄惠
      - ○義堯
        - ○深應

○雅嚴
- ○寬濟
  - ○高賢
    - ○房演
      - ○賢繼
        - ○實雅

○元雅
- ○信隆
  - ○照範
    - ○杲觀
      - ○高演（略節）
        - ○定演（略節）

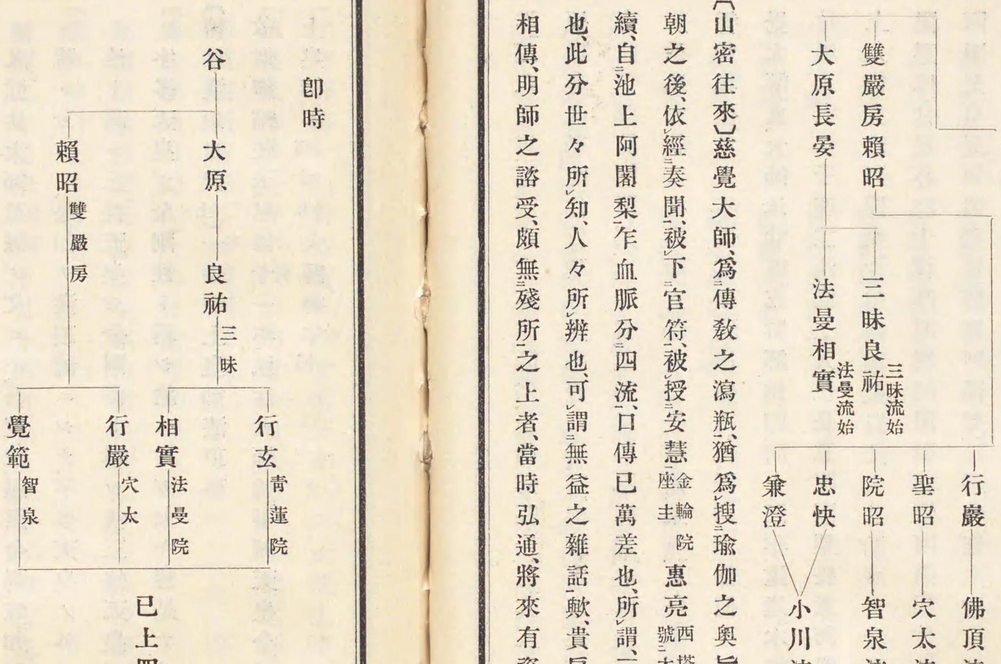
〔東寺文書〕（廣澤元祖）益信
- 法皇（宇多）
  - 寬空
    - 寬朝
      - 濟信
        - 性信
          - 寬助

覺法親王　號御流
覺鍛上人　號傳法院流
寬遍　號忍辱山流
永嚴　號保壽院流
信證　號西院流
性惠　號花藏院流（略節）

○按ズルニ、廣澤六流ノ名稱ハ、寬助僧正ノ時、地名ニ約シテ起ルコト、東寺文書ニ見ユ、〔阿娑縛抄百七十六〕塔院惠杲阿闍梨、惠杲阿闍利復付成都府僧惟尙當院僧義操法潤等一十二人、皆是傳教阿闍梨灌頂位者也、次東塔院義操阿闍梨、傳付同學僧義眞深達等五人、並皆傳教次阿闍梨位者也、又東塔院法潤阿闍梨傳付玄法寺僧法全惟謹等也、慈覺大師去承和五年奉綸旨、跋涉大洋遠入大唐、遍歷諸方尋訪師宗、邊州僻縣无有其人、遂得到上都、長安城左衞軍客上將軍仇士良、卽便聞奏、准勅配住資聖寺、爰慈覺大師尋善財之志、巡訪師友、以常啼之誠、搜覓秘教宿緣所感儻得遇青龍寺義眞阿闍梨、此和尙柔和爲心、忍辱爲鎧、傳教有勤、教人無倦、仍於此邊稟受經中眞言密印及蘇悉地大教、其後復詣玄法寺法全阿闍梨所、更研學胎藏大教王、和尙心踰水兼、行等十地、傳法利生誓爲我任、見人不惜其法、隨機便有傳授、所謂佛使人師者也、卽以大毘盧遮那大悲胎藏大教、傳付慈覺大師也、大師沐甘露訖、辭師歸國、同十四年、遂達本朝、寔遇聖運敷弘秘教、大師以此大悲胎藏大教、付屬入室弟子座主法橋上人位長意阿闍梨、長意阿闍梨以此大教付屬內供奉十禪師權律師法橋上人位玄昭阿闍梨、玄昭阿闍梨以此大悲胎藏大教王、傳付小僧都法眼和尙位智泓阿闍梨、智泓阿闍梨傳付定心院十禪師明清阿闍梨、明清阿闍梨付法與院十禪師靜眞阿闍梨、靜眞阿闍梨付皇慶阿闍梨、皇慶阿闍梨付勝範阿闍梨、延曆寺座主僧正法印大和尙位勝範阿闍梨付定慶阿闍梨、去長治元年九月十二日、定慶阿闍梨以此大教灌頂之法、傳付延懷阿闍梨、延懷阿闍梨傳付明玄阿闍梨、權少僧都法眼和尙位明玄阿闍梨傳付阿闍梨大法師家寬矣、家寬厚有宿緣、得把此法、方今爲令不斷師迹、以此大法、傳付大法師寬忠、則以今日、晝受佛性三昧耶戒、夜受阿闍梨灌頂法、入於道場、得文珠師利菩薩號、曰妙智金剛、則授與傳教阿闍梨位、已訖、所願固守遺跡、莫斷佛種、秘教遠敷福利群生、法眼遍照俱登極位、永曆二年辛巳二月廿八日辛未、阿闍梨傳燈大法師日本國左衞長壽寺金剛界大曼荼羅所、

伏檢金剛界師資相承傳法次第、毘盧遮那如來以此金剛界最上乘法、付囑普賢金剛薩埵、菩薩普賢金剛薩埵付妙吉祥菩薩、妙吉祥菩薩以法付囑龍猛菩薩、龍猛菩薩以法付囑龍智阿闍梨、龍智阿闍梨以法付金剛智阿闍梨三藏、和尙是南天竺國王第三皇子、爲弘法故、杖錫五天來遊震旦、將此金剛界大教王付中天竺國三藏善無畏及大興善寺三藏不空智阿闍梨、不空智三藏和尙、又以此法付囑

倉光惠果等五人阿闍梨也、惠果阿闍梨以此大教付嘱惠應、惠則惟尙、辨弘等十四弟子、皆傳授大教、次阿闍梨位者也、惠則阿闍梨以法付嘱大興善寺翻經院元政阿闍梨也、慈覺大師、去承和初、特奉綸旨跋渉大洋、遠入巨唐、遍歷諸方、尋訪師宗、邊州僻縣无有其人、遂得到上都長安城、左衞軍客上將軍仇士良、卽便聞奏、准勅配住資聖寺、爰慈覺大師、善財之志、巡訪師友、以常啼之誠、捜覓秘教、宿緣所感、儻得遇大興善旨元政阿闍梨、此阿闍梨卽以金剛界大教王傳付慈覺大師矣、大師既沐甘露、辭師歸國、卽以金剛界大教王、付嘱於安惠阿闍梨、安惠阿闍梨以此大法傳付玄昭阿闍梨、玄昭阿闍梨以大教王傳付小僧都法眼和尙位智淵阿闍梨、〇略下圓光大師行狀畫圖翼贊四十一〇山門ノ密傳、池上ノ皇慶ニ至テ、分レテ三派トナレリ、〇略註法曼院ノ相實ハ、此流ノ始祖、仙雲ハ實公ノ法孫、三派ノ中ニハ長宴ノ末流ナリ、山家者圖云、



〔山密往來〕慈覺大師、爲傳教之瀉瓶、猶爲捜瑜伽之奥旨於異域、去承和仁明年中入唐、同荷擔顯密、歸朝之後、依經奏聞、被下官符、被授安慧金輪院座主惠亮西塔院主始、號大樂大師承雲梨下和尙、號峯等、自爾以來、脈譜相續、自池上阿闍梨乍血脈分四流、口傳已萬差也、所謂三昧、良祐法曼院、相實穴太、行嚴又號智泉、覺範法、此分世々所知、人々所辨也、可謂無益之雜話歟、貴房者爲法曼院之嫡流、稟常寂院之秘蹟、秘書之相傳、明師之諮受、頗無殘所之上者、當時弘通、將來有資、早可參賀者也、恐々謹言、

卽時

已上四流

法務

〔山密往來〕傳教 慈覺 長意 玄昭
德圓 智證 遍照 安然 五大院 不及傳法 歟
最圓

三昧灌頂事

大原 三昧 行玄 覺快 不及傳法 斷絶了 證號也實名慈圓
三光房 天教房 範胤 最嚴 全玄 慈鎭
〔山密往來〕慈嚴 山二品前大僧正 後醍醐天皇 許可
光嚴院法皇 許可灌頂 但不分明 可尋記之、 御傳受云々、
〔阿娑縛抄〕延曆寺灌頂
灌頂見聞集禪定云、私云、今見寺家灌頂作法、當于受明灌頂、然多略事、又尋諸師傳存略不同、隨宜斟酌而已、

灌頂號

受灌頂例

寺家灌頂、第三三昧耶學法灌頂也、

東寺灌頂、第二三昧耶結緣灌頂也、

持明房決云、結緣灌頂、只入壇散花得尊唯受一印一明也、（東寺等也）而我山結緣灌頂授道具等、著冠登臺、殆同受明等作法、計知大師爲一門徒衆、結緣灌頂之次、加用受明作法、卽授之、更重不授受明、而受大法、學眞言、而後卽授傳法灌頂也、故我山結緣頂頂、只許一門之僧衆、不許餘道俗童子等也、

〔台記〕久安三年六月十八日庚戌、今夜法皇（羽鳥）談話及我朝古事（法皇好見古記、明我朝舊事）、仰曰、後三條院法名人不知之、不見日記、朕獨知之、金剛行是被奉其子一品內親王之處分帳所見也、又仰曰、我朝天子出家時、法名多是三字、雖誤所行已久、余奏曰、何以知誤乎、仰曰、寬平法皇、法名空理、灌頂號金剛覺（灌頂時名）之灌頂後御消息奧、猶書空理、不書金剛覺、則知僧灌頂號猶男字、而古賢知有金剛覺之法名、不知有空理之御諱、是故天子法諱三字、又有金剛之字、雖古賢不免失誤之譏、愼之令努力云々、依知此事、朕名空覺也、又仰曰、寬平法皇御出家後、御消息多書本名、（空理）若欲作名時、以梵字書空理、更無作名、

○按ズルニ、付法傳ニ、洎肅宗臨朝、彌加尊重、不付名字、號曰不空、此取登壇散花號也、トアリテ、纂解ニ不空具應云不空金剛所謂金剛名號也、

又弘法大師遺誡ノ文ニハ、吾漢號遍照金剛宜知行ト云ヒ、又五秘密儀軌ニハ、灌頂受職、金剛名號ト云ヘリ、是卽チ灌頂號ニシテ、宇多天皇ノ外ニ、醍醐天皇ガ金剛寶ト稱シ、圓融天皇ガ金剛法ト稱シ、三條天皇ガ金剛淨ト稱シ、後三條天皇ガ金剛行ト稱シ、龜山天皇ガ金剛源ト稱シ、後宇多天皇ガ金剛性ト稱シ給ヘルガ如キ皆是ナリ、

〔傳法灌頂日記上〕一平城上皇御灌頂事

故僧綱補任云、弘仁十一年、弘法大師、爲平城天皇令行灌頂、上皇御年四十九大師御年同

〔元亨釋書一傳智〕釋空海、○略中十有三年、○仁弘大同上皇、○城平入壇灌頂、帝者密灌於此始焉、

〔慈覺大師傳〕三年○衡齊六月廿一日、天皇○德文請大師於冷然院書堂南殿、受兩部灌頂、○略中左兵衞佐藤原朝臣基經○略中等同受之、

〔傳法灌頂日記上〕一水尾法皇御灌頂事

故僧綱補任云、元慶三年、宗叡僧正、清和上皇奉授灌頂、同十月廿三日任僧正云々

〔濫觴抄下〕上皇灌頂

醍醐二年己未（昌泰二）十月十四日、太上天皇○宇多入道、法諱金剛覺、大僧都益信奉授三歸十善、翌日十五日於東寺御灌頂、

〔傳法灌頂日記上〕一寬平法皇御灌頂事

故僧綱補任云、延喜元年辛酉十二月十三日、辛卯鬼宿日曜、於東寺隨益信僧正、傳法灌頂、御年卅五、僧正年七十五、色衆八十三人、（御法名金剛覺理空有論之）

又隨靜觀僧正御灌頂在之、

〔濫觴抄下〕法皇天台御灌頂

醍醐十三年庚午（延喜十）九月廿五日、於叡山座主法橋增命爲師、練習護摩法、兼受五瓶灌頂秘法、明日法皇鋪座具於露地、禮拜和尙、其辭曰、非器之身、依大師恩、浴灌頂擔水、受秘密印明、生々世々、將何報謝哉、起居敬禮、每度落淚、滿山僧侶、流淚隨喜、皆相語曰、天台之榮花、佛日之再中也、帝傳聞之、和尙授法眼和尙位、勅使右少將藤原俊蔭、法皇自捧其位記、敬授之、副獻菩提子珠數、鑰石香呂、唐衲袈裟幷夏冬法服各一襲、布施供養物等有員、于時法皇御年四十二也、

〔傳法灌頂日記上〕一圓融法皇御灌頂事

故僧綱補任云、永祚元年三月奉授圓融法皇灌頂、御年三十一、

大阿闍梨寬朝僧正七十四

〔百練抄八高倉〕治承二年二月一日、太上法皇○後白河於園城寺可令入灌頂大壇給之由被仰下、而天台大衆蜂起訴訟、仍園城寺沙彌如舊可受天台戒之由被仰下、三井寺承伏、進請文、依之天台和合可被遂御願之由、再三雖被仰山門、不承引、發向三井寺可燒拂之由結構、仍御灌頂可延引之由被仰下也、

〔玉海〕治承二年二月七日壬申、晩景、頭中將定能朝臣來語云、御灌頂一定停止了、法皇○後白河還御本御所（日來爲御加行御壇所也、行八者、又云、三井寺僧強不對捍請文、只山僧不論、又是非、依此御灌頂事、一定可燒寺之由風聞、因之御幸停止了由、重被仰山上了云々、

〔源平盛衰記八〕法皇三井寺灌頂事

法皇○後白河ハ三井寺ノ公顯僧正ヲ御師範トシテ、眞言ノ秘法傳授セサセ給ケルガ、今年ノ春○治承二年三部ノ秘經（大日經、金剛頂經、蘇悉地經）ヲ受サセ給ヒ、二月十九日、三井寺ニテ御灌頂有ベキ由、思召立ト聞エシ程ニ、山門ノ大衆憤申ケルハ、昔ヨリシテ今ニ至ルマデ、御灌頂御受戒、ミナ我山ニシテ遂サセ給ヘリ、山王ノ化導專受戒灌頂ノ爲也、就中園城寺者、昔天智天皇ノ御子大友王子、國家ヲ亂ラントテ、軍ヲ起給シ謀叛惡逆ノ境也、始テ今御入寺有テ御灌頂アラン事、旁以不可然ト申ケレバ、樣々誘ヘ仰ケレ共、例ノ山大衆更ニ院宣ヲ用ズ、三井寺ニシテ御壇衆有ラバ、彼寺ヲ可燒拂之由僉議スト聞エケレバ、權大納言隆季卿ノ奉書ニテ、院宣ヲ被下云ク、御入壇偏ニ可爲秘密結緣之處、還及騷動ノ條、不慮ノ次第歟、因茲園城寺御幸所延引也、是延曆園城安全ノ謀也ト有ケレ共、大衆猶憤申ケルハ、延引ノ院宣、全ク山門ノ眉ヲ開カズ、永ク三井ノ御幸ヲ不被停止、彼寺ニ發向シテ、佛閣僧坊一宇モ殘サズ可燒拂之由騷動スト聞エケレバ、重テ院宣ヲ被下テ云、御幸ノ事被停止ノ由、一日被仰下畢、○中略法皇ハ卽御加行結願シテ思召止ラセ給ニケリ、去ドモ猶、御宿願ヲ遂サセ給ハンガ爲ニ、年序ヲヘテ、文治二年ノ春ノ此、三井寺ニシテ御灌頂有ベキヨシ聞エケレバ、山門ノ大衆又騷動シテ云、園城寺ノ御幸ノ事、治承年中ニ其沙汰有テ被停止畢、而ヲ彼寺ニシテ御灌頂アラバ、三井寺ヲ可燒拂ナンド聞食サレケレバ、當時ノ座主全玄僧正ヲ、法住寺ノ御所ニ召レテ、行隆ヲ以被仰下云、求法ノ御志有ニ依テ、公顯僧正ヲ以テ智證流之灌頂ヲ可受ノ由思食處ニ、公顯ノ申サク、智證大師一行禪師ノ釋ニ依テ、一流ノ灌頂ニ於テハ、不可出寺中之由殊所誡也、然バ早ク當時ニ御幸有テ、可有御傳法ト所申既ニ道理也、仍三井寺ニ御幸有ベシ、爰ニ山僧此事ヲ訴申之條、甚其謂ナシ、○中略不日登山シテ可加制止也ト、座主ノ御返事ニハ、勅定ハ古ヨリモ重シ、爭カ子細ヲ申ベキ、不日罷上テ可加制止候、○中略然而勅定ノ趣キ、不日披露仕ベク候、又山門ノ訴訟ハ、叡慮ニ背ニ似タレドモ、其本意ヲ論ズレバ、忠節ノ至也、長寬ニ、三井ニ幸有テ後、天下不吉也、萬人所知也、彼寺三代叛逆ノ地タルニ依テ、此災ヲ成、適安樂ニ屬スル處ニ又臨幸アラバ、天下ノ滅亡歟、鎭國ノ御祈禱ヲ致、山僧等、諫諍ノ制止ヲ加ヘ奉ルヲヤ、抑公顯申狀不審甚多シ、不可出寺中之由、智證大師ノ遺誡ナラバ、何ゾ智證大師歸朝ノ後、叡山ニシテ度々灌頂ヲ修ベキ、又智證ノ門流靜觀僧正、爭カ我山總持院ニシテ、灌頂ヲ寬平法皇ニ奉授ベキ、智證ノ遺誡頗不足信用、○中略ケレバ、叡感ノ氣アリテ、三井寺ノ御幸ハ被止ケリ、

〔傳法灌頂日記下〕一御白川法皇御灌頂事

文治三年八月廿二日、法皇從前僧正公顯傳法灌頂、讃衆廿人勸賞公顯大僧正幷法務四天王寺別當官僧正、給法眼一人大阿闍梨公顯、御年十一代要記龜山〕文應元年庚申四月十三日、去正月四日、園城寺三摩耶戒宣下、上卿權大納言師繼卿、左中弁光國、職事高俊、五日、丑刻、依此事、山門衆徒等、振上七社神輿於中堂、六日、卯刻、奉振四社客人、八王子、十禪師、祇園、波利女、於皇居富小路里第、北野神輿奉振一院御所万里小路京極寺神輿者、奉棄三條坊門、而同午刻奉渡皇居神輿四基於祇園社、其儀頗輕忽也、座主宮沙汰、未刻、北野又還御、凡皆以忘如

在之禮、貴賤拭レ淚不可說々々々、十四日、山門訴訟可レ被レ申二關東一之、院宣下、衆徒不レ叙レ用之一、十七日、山門訴訟難二默止一可レ有二裁許一之由、既被レ申二關東一了、且可二開眉之趣一院宣下、衆徒猶不レ承レ引之彌以蜂起、十八日、衆徒赤山詣二萬餘人云々、同日山門僧綱、含二院宣一宥二衆徒一登山、行合衆徒、自レ路被二追返一、其中眞承法印及二恥辱一、十九日、園城寺三昧耶戒可レ召二返官符之由院宣下一、經業奉レ之、二十日、彼官符可レ被召返之由、被二宣下一、二十一日、日吉神輿自二祇園一歸二坐本社一、衆徒參二御迎一三十人許云々、

〔龜山院御灌頂記〕嘉元三年乙巳三月三日己酉（華宿日曜）朝程雨降、午上天晴、然而尚不快、連々微雨下、於二龜山離宮一、太上法皇（御年五十、御戒三）、令レ受二傳法灌頂職位一給、大阿闍梨前大僧正了遍（年八十、戒三）自二去月十六日一被レ始二行御加行一、不動護摩三時、右少辨平仲高以二院宣一廻二諸色衆一、民部卿（前中納言）賴藤卿（法皇御方執權）又所レ令二奉行一也、去月廿九日、被レ行二習禮一、眞光院僧正參仕、威儀僧性玄相助、兩法印許參仕云々、予道場方可二奉行一之由、眞光院被レ仰レ之、云仁治禪定殿下於二東寺一御灌頂之時、大阿闍梨故行遍僧正、道場方奉行、院宣、法眼依レ爲二僧正門弟一令二奉仕一、予兩門跡多年門弟、不レ可レ存二豫議之間申一領狀了、仍自二昨朝一爲二奉仕一、堂莊嚴令二參仕一、以二棧敷殿御堂廊一爲レ候所、法皇出御被レ召レ予、條々被仰下、民部卿被レ候、予著二宿裝束一參二堂上一奉レ仕之、院御方連々出御委々細々蒙レ仰、可レ謂二面目一、

〔後宇多院御灌頂記〕（大覺寺殿）太上天皇御灌頂事

初夜　无量壽　後夜　大日

同日於二同道一　御傳受（上）

御加行八日、御始行之定、御重受之儀也、

不動護摩一七ケ日　御裝束

〔後宇多院御灌頂記〕抑勘二先規一、平城嵯峨二代、逢二弘法大師一有二灌頂一、已爲二自宗之濫觴一歟、爾降宇多圓融兩院、於二此精舍一稟二大師之法流一、被レ受二覺王之職位一、而道儀久絕、源流寔隔、爰我君太上法皇、（略中）被レ行二此勅願一、希代之重事、後世之美談也、

〔神皇正統記（後宇多）〕遊義門院（内親王かくれまして、御歎のあまりにや、出家せさせたまふ、前大僧正禪助を御師として、宇多圓融の例により、東寺にて灌頂せさせたまふ、めづらかにたふとき事に侍りき、その日は、後醍醐の御門、中務の親王とて、王卿の座につかせましまします、（略中）御出家の後もねんごろにおこなはせまし〳〵き、上皇の出家せさせたまふ事は、聖武、孝謙、平城、清和、宇多、朱雀、圓融、花山、後三條、白河、鳥羽、崇德、後白河、後鳥羽、後嵯峨、後深草、龜山にましまします、醍醐、一條は御病おもくなりてぞせさせたまひし、かやうにあまた聞えさせしかど、戒律を具足し、始終かくる事なく、密宗をきはめて、大阿闍梨をさへせさせたまひし事、いとありがたき御事なり、この御すゑに、一統の運をひらかるゝ、有德の餘薰とぞおもひたまへる、

〔師守記〕康永四年五月九日

寺院行幸御逗留例

建武二年閏十月十五日、天皇（後醍醐）行二幸高雄神護寺一、依二灌頂一也、

十六日早旦、臨二幸梅尾（高山寺）一、申刻還御、則臨二幸金堂一、被レ行二曼荼羅供一、

十七日、臨二幸大覺寺殿一、入レ夜還御、

〔神皇正統記（後醍醐）〕佛法にも御志深くて、むねと眞言を習はせ給ふ、始めは法皇（後宇多）にうけましましけり、後に前大僧正禪助に、許可までうけ給ひけるとぞ、天子灌頂の例は、唐朝にもみえ侍り、本朝にも清和の御時、禁中にて、慈覺大師灌頂を行はる、主上を始め奉り、忠仁公（藥房）、基經（原房）などもうけられたり、これは結緣灌頂かとぞ申すめる、この度ハ誠の授職と思召しゝにや、されど猶許可に定りきとぞ、それならず人々にも諸流をもうけさせ給ひぬ、

〔傳法灌頂日記（上）〕一慈圓大僧正御灌頂事

久壽元年十二月廿六日、慈圓（本名道快、有御灌頂事、道場粟田口御房、沐浴所蓮華院、大阿闍梨全松殿御子）玄大僧正、良尋法印（九條殿真經御子）御灌頂、建久七年十一月十五日、道場粟田口御房、一入道親王尊快御灌頂事、承久二年（庚辰）二月十九日、（庚辰）入道親王（後鳥羽院皇子、御年十七歲）御灌頂、以淨金剛院（三條殿御堂）爲道場、（暫奉移本佛於他所）以寢殿爲三昧耶場、新被造加五間廊、其間或修理、爲雨澆臨幸御所云々、

〔光明峯寺殿傳法灌頂記〕仁治二年四月　闕

同十六日甲戌（尾宿火曜）天晴、今日御灌頂也、前一日堂莊嚴（隆寬法眼奉行之）

○按ズルニ、光明峯寺殿ハ藤原道家ナリ、其儀式、布施等ノ盛狀、龜山天皇傳法灌頂ニ亞ゲリ、サレドモ事煩シキヲ以テ之ヲ省ク、又按ズルニ、此後卿相等八人ノ灌頂セシコト所見ナシ、

隆澄僧正草

〔嚢囊抄（十）〕ナガレカンデヤウトハ何ゾ多義事

カントハ云ハ誤リ也、流灌頂ナルベシ、其ノ義上ニ同ジ、今其體ヲ見ニ率都婆ヲ連ネ樒ノ花ヲ貫キ流ス歟、此水ニ觸レシ鱗、若ハ无緣ノ死骸白骨等、必ズ得脫ノ緣ト成ルベシ、灌トハ如來ノ大悲也、頂トハ上ノ義ト云々、

〔眞俗佛事編（五雜記）〕流灌頂（此法經軌ニ出ルニ非ズ、吾朝古德經軌ノ旨ニ依テ設タルナリ、灌頂ト號コトハ、本旛ヲ灌頂ト名ルニ就テ、今旛ノ功德ヲ彰シテ、流灌頂ト云フ、謂心ハ凡ソ此法卒都婆ヲ流水ノ上ニ建テ、造旛懸之、水此旛ニ觸テ流テ大海ニ至リ、水中群生永劫沐斯福、只魚鱗ノミナラン哉、此流ヲ飲或ハ此水ニ浴スル輩皆同功德ヲ被リ、輪王ノ果報ヲ得、遂ニ法王ノ太子トナツテ灌頂ヲ受、果德圓滿スルニ至ル、今因中說レ果、流灌頂ト云、秘藏記云、灌頂義、灌者講佛大悲、頂者上義、菩薩初地乃至等覺究竟還ニ妙覺一時、諸佛以ニ大悲水一灌レ頂、自行圓滿得ニ證佛果一、是頂義也、諸佛大悲、是灌義也、世人（世ノ人ト天也）皆以レ旛號ニ灌頂一、是以ニ旛功德一、先爲ニ輪王一、後終成佛、以レ到ニ佛果一名爲ニ灌頂一、是故知以レ果名レ因也、已上）

傳衣

○

〔濟北集十二〕清言

師曰、六代（○達磨ヨリ慧能ニ至ルマデヲ指ス）傳衣（○以表ニ信證一、）以表得證、傳レ衣在ニ一人一、故其勤在ニ于師一矣、燒香在ニ衆人一、故其勤在ニ于資一矣、雖ニ師資不一同、其爲ニ證者一也、

〔夢窓正覺心宗國師塔銘幷序〕特賜夢窓國師（○南嶽懷讓青原行思並慧能弟子）靈龜山臨川禪寺開山初祖、建武元年秋后崩、上（○後醍醐天皇）留師禁中二七日、罷レ政問レ道、九月望請師入レ禁、爲ニ受一衣、說ニ戒執一弟子禮、

〔康富記〕寶德二年八月廿二日、禁裏樣（○後花園）今日內有ニ御受衣事一、夢窓國師御影有ニ持參一、又爲ニ拜塔一、御尊號圓滿智云々、廿七日、是日、嵯峨開山夢窓國師、重被ニ贈國師號一、（去廿二日天子有ニ御授衣一）

〔五山賜國師號勅書之留〕光嚴帝宸翰

勅道振ニ三朝一、名飛ニ四海一、（○中略）往年已受ニ袈裟一、慕ニ釋氏風一、（○中略）

觀應二年八月十五日

〔臥雲日件錄〕康正二年丙子八月十九日、三會院書來、一紙記錄曰、等持院殿法名妙義、寶篋院殿法名道權、此以上無ニ受衣一、

〔京都將軍家譜〕義滿

應安五年十一月廿七日、御受衣（夢窓國師拜塔、法名道義、號天山、但不ニ剃髮一、）

○按ズルニ、荒暦ニ據レバ、此後應永二年六月剃髮セリ、

〔京都將軍家譜〕義持

應永六年六月、御受衣、（絶海國師弟子、法名道詮、道號顯山、但不剃髮、）

義敎

永享元年十二月、御受衣、（絶海國師拜塔、法名道興、號慈山、但不剃髮也、）

同三年、重御受衣、（夢窻國師拜塔、改道興爲道惠、改慈山爲光山、又改善山、）

〔京都將軍家譜〕義政

寶德二年八月廿二日、御受衣、（夢窻國師拜塔、法名道禎、但不剃髮、掛夢窻國師影像於御所被行之、僧連竺雲侯焉、）

義尙

文明十一年十一月、御受衣（夢窻國師塔、法名道治、道號玉山、後改玉山爲悦山、）

〔空華日工集〕應安四年十二月十九日、高修理亮官臣三人者受衣、余因示曰、凡曰受衣者、自吾佛所傳衣、至六祖而止、自爾各自受衣、如世傳國等器、掛此衣者不怕生死、古人云、諸惡莫作、衆善奉行、忠於君、孝於父、慈於下、敬於上、則現當二世佛神冥加、福壽如川、汝等宜奉行、三子拜受而去、六年五月四日、宇都宮三郎受衣身十八、仍爲說云、凡爲人者先須發願、願者何謂、諸惡莫作、諸善奉行云々、（○中略）十五日、爲諸徒弟受衣、因說大國爲僧不易、或買牒或經、種々艱苦備嘗、而後乃免、今日本爲僧甚濫、佛試法之衰兆於此矣、可不愼哉、

〔親長卿記〕文明十九年十二月廿三日、依安禪寺御喝食已令出鹿苑寺方丈給、予卽參入、（聊遲參）御喝食著端御座給、和尙（惟馨和尙）進起、取髮剃、當項上、次剃畢、（承隆藏主）進寄奉剃之、剃了、又長老進立如先、奉當頂上髮剃、次奉授十戒、次頂戴鉢袈裟等、次讀誦梵網十重禁了、次嵯峨開山幷普明國師等影（兼懸之）禮拜、次禮拜和尙、（各三度）令退與御座給、（敷重例式疊上）此次伴比丘尼（西園寺前左府□□等）有授戒事、次長老退本座、有一獻事、予申云、御座上御座不可然、已御戒師爲平敷、御下座可然之由申之、長老頻不可叶之由、堅依被申、御座敷重疊之上給如何云々、三獻畢庭等御覽之後御歸、予同歸宅之次、先參內裏、今日無爲之趣申入了、

〔玉海〕壽永元年三月廿日庚寅、此日請大原聖人（湛敎）受幷三衣等、先受戒、（子細銘心府、涙雙眼者也、）次傳受三衣、（先五帖、次七帖、次九帖、次坐具、）抑在俗傳受三衣事、正敎許也、但用縫單縫之三衣、（謂單縫者、カヘシヌヒニセズヒトヘヌヒ也云々、）而余所持之三衣、（故北政府出家之時、宇治僧正被進云々、）及縫也、仍忽欲闕如、宿運未至歟、信心又不及歟、大願已欲破、悲歎尤深之處、借遣尊忠僧都之許、付使借送云、是慈覺大師御三衣也云々、卽披見之處、已單縫也、誠是誠精之至、已叶聖意歟、感應之新、仰而可被信、往古大師所持之三衣、單縫了條、更以非可思寄之事、誠撿知之處、已以爲單縫、大願成就、爰而炳焉、歡喜之至、深無物于譬者歟、聖人又以大悦曰、若新調之已、衣有ましかはと、今此證驗者なからまし、尤可云々、此次尼女房二人、同傳受三衣、（他三衣也、兼經法ノ右眞理、正元元年甍、然則非此人先祖、亦名眞理歟、不審、基通法名行理、後改名歟、）余又密々付法名、（眞理也、雖在俗付法名、又有先蹤事也、）

古事類苑

宗教部二十三

佛教二十三

僧尼總載上

僧ハ、ソウ、又ホウシト云ヒ、尼ハ、ニ、又アマト云フ、男女ノ頭髪ヲ剃リ、染衣ヲ著シテ、以テ佛道ニ歸依シタル者ヲ謂フナリ、初メ欽明天皇十三年、百濟王ノ佛像經論等ヲ獻ズルヤ、僧徒ノ俱ニ來リシコトハ、同十五年、百濟王又僧曇惠等九人ヲ貢シテ、僧道深等七人ニ交替セシメシ事ノ、日本書紀ニ見エタルヲ以テ、之ヲ知ルヲ得ベシ、尋デ敏達天皇ノ十三年ニ、歸化人司馬達等ノ女出家シテ、善信尼ト稱ス、是レ實ニ僧尼ノ事ノ、我國史ニ見エタル始ナリトス、我國ノ佛教ハ、原ト海外ヨリ渡來セシヲ以テ、古來僧尼ノ往キテ遊ビシ者甚ダ多シ、崇峻天皇ノ朝、尼善信等ガ、百濟ニ赴キ、戒法ヲ學ビシヨリ、三韓ニ往來スル者、陸續トシテ絶エザリシガ、推古天皇ノ時、遣隋使ノ事起ルニ及ビ、新ニ支那ニ赴キテ其法ヲ求ムルモノ生ジ、遂ニ眞如親王ノ如キ、更ニ佛教ノ本國タル印度ニ入リテ、以テ其蘊奥ヲ究メント欲スルモノアルニ至レリ、當時支那ハ、佛教ノ最モ隆盛ヲ極メタル李唐ノ代ナリシカバ、入唐ノ僧愈、增加シ、遂ニ法相、三論、律、華嚴、天台、眞言、禪等ノ諸教ヲ弘布スルニ至レリ、然ルニ宇多天皇ノ時、菅原道眞ノ建議ニヨリ、遣唐使ノ停廢セラルヽニ及ビ、僧徒ノ遠遊スルモノ、一旦杜絶セシガ、鎌倉幕府ノ始、禪宗ノ勃興ト共ニ、彼地ニ渡ル者、復タ漸ク多キヲ加ヘ、足利幕府ノ時、將軍義滿ノ明ト交通スルニ及ビテハ、常ニ五山ノ僧ヲ役シテ以テ、其使節ニ充ツルノ途ヲ開ケリ、

蓋シ當時戰亂ノ餘、武門多クハ文學禮節ニ乏シク、且ツ往來ノ簡易、應接ノ圓滑、亦僧徒ニ若クモノアラザリシニ由リテナルベシ、而ルニ德川幕府ノ時、外國ノ交通ヲ嚴禁セシヨリ、此事全ク其跡ヲ絕ツニ至レリ、

外國僧ハ、始メ三韓ヨリ入朝スルノミナリシガ、其後李唐ノ交通頻繁ナルニ及ビテハ、支那僧ノ之ニ代リテ渡來スルモノ、漸ク多キヲ加ヘタリ、天平ノ前後ハ、卽チ其最モ盛ナリシ時代ニシテ、前ニハ道璿ノ歸化アリ、後ニハ鑑眞ノ來朝アリ、印度僧菩提ノ如キモ亦此時ヲ以テ來レルナリ、然ルニ延曆以降、外國僧ノ入國スルモノ、甚ダ稀ニシテ、獨リ杭州ノ僧義空ガ、禪宗ヲ傳ヘシ事アルノミ、然レドモ鎌倉幕府ノ時、禪宗ノ大ニ弘布スルヤ、兀庵蘭溪、佛光、一寧、東明等ノ如キ、宋朝禪林ノ碩德、前後相繼ギテ來朝シ、足利幕府ノ頃ニ至ルマデ、彼元明ノ僧ノ歸化スルモノ、亦頗ル多カリキ、德川幕府ノ始、禪僧隱元ノ徒歸化シテ、黃檗ノ一派ヲ傳フルヤ、幕府ハ特ニ其僧徒ニ限リテ之ガ入國ヲ聽シ、以テ其弘法ヲ助ケシメタリ、

凡ソ遊外僧、及ビ外國僧ハ、弘法ノ傍、文學技藝ヲ傳ヘ、我國ノ文化ニ稗益シタル所、固ヨリ尠少ニアラズ、觀勒ノ曆、天文、地理等ノ書ヲ齎ラシ、曇徵ノ畫法、行善ノ易術ヲ傳ヘシガ如キ、亦以テ其一端ヲ見ルニ足ルベシ、

文武天皇大寶ノ時、僧尼ニ關スル法令ヲ制定シ、中務省ニ玄蕃寮ヲ置キテ、僧尼ノ名籍等ヲ掌ラシム、後其法漸ク弛廢シ、僧行モ亦大ニ濫レテ、其罪ヲ犯シ、兵器ヲ弄スル者モ多カリシカバ、屢、嚴制ヲ降シテ、戒飭ヲ加ヘタリ、平安朝以降、神佛習合ノ說起リテ後、僧尼ノ神祇ニ奉仕スル者アリ、之ヲ社僧ト稱ス、事ハ神祇部ニ詳ナリ、而シテ僧尼ノ忌服、犯罪、及ビ僧兵等ノ事ハ、禮式部、法律部、兵事部等ニ分載シタレバ、宜シク參看スベシ、

〔類聚名義抄人〕僧。蘇曹及ソウ

〔伊呂波字類抄所人倫〕僧

〔書言字考節用集四人倫〕僧（ソウ）韵會、浮屠道人也、事詳二要覽一、

〔釋氏要覽上稱謂〕僧（梵語具云二僧伽一、唐言レ衆、今略也）髮、著二袈裟一、捨レ家、從レ佛學レ道、是名レ衆（中略）僧史略云、凡四人已上名レ僧、今一人亦稱レ僧者、蓋從レ衆名之也、亦如二萬有二千五百爲一レ軍、一人亦稱レ軍也、

〔日本書紀十九欽明〕十五年二月、百濟遣二下部杆率將軍三貴、上部奈率物部烏等一、乞救兵、仍貢（中略）僧曇惠等九人一、代二僧道深等七人一、

〔日本書紀二十推古〕三十一（一原作二、據二一本長曆一改）年四月戊申、百濟觀勒（ホウシ）僧表上以言、（下略）

〔伊呂波字類抄所字〕僧。僧侶。僧徒。僧衆。

〔書言字考節用集四人倫〕僧家（ソウケ）僧徒（ソウト）僧侶（ソウリョ）釋氏（シャクシ）沙門通稱、道安云、凡剃髮、染衣、紹二釋迦種一、則無二異姓一、宜二悉稱一二釋氏一、又見二法苑珠林一、釋門（シャクモン）。

〔伊呂波字類抄比人倫〕比丘（ヒク）。

〔書言字考節用集四人倫〕比丘（ビク）梵語、唐翻云乞士、見二代醉一、

〔釋氏要覽上稱謂〕比丘梵語云二比丘一、秦言乞士、謂上於諸佛乞レ法、資二益慧命一、下於二施主一乞レ食、資二益色身一、肇法師云、因果有二三名一、一名怖魔、卽因二出家時魔宮震動故一、至二果上一名二殺賊一（註略）二名二怖魔一、卽因二出家時魔宮震動一故、至二果上一名二殺賊一（註略）二因中名一乞士一、果上名一應供一、三因中名一破惡一（卽破持或破惡）至二果上一名二無生一（中略）大威德陀羅尼、有二一長者一、名二選擇一、投レ佛出家、剃髮已時、有二尊者婆難陀一、喚云二長者一、選擇答曰、我今出家、剃髮爲二比丘一、非二長者一也、時婆難陀語曰、不但剃髮名爲二比丘一、乃以偈說云、若斷二欲希望一、不レ可二說有法一、隨順向二涅槃一、隨順趣二厭離一、入レ信到二彼岸一、此成爲二比丘一、（○下略）

〔翻譯名義集一衆弟子〕比丘（大論云、比丘名二乞士一、清淨活レ命故、復次比名二怖魔一、能破二煩惱一、故、復次比名二乞士一、破レ惡名二破一、能怖二魔王及魔人民一、（○下略）

〔伊呂波字類抄志字〕沙門。

〔書言字考節用集四人倫〕沙門（シャモン）出家之總名、正曰二沙門一、唐翻云二勤行一、又云二勤息一、謂此人勤二修善品一、息二諸惡一、故又秦譯云二勤行一、謂勤二修善法一、行趣二涅槃一也、或云二沙門一、那、或云二桑門一、皆譯人楚夏異稱、槃經云、沙門、此云二善覺一、（○下略）

〔釋氏要覽上稱謂〕沙門肇師云、出家之都名也、梵云二沙門一、那、又云二桑門一、又云二善覺一、詳二要覽一、

〔翻譯名義集一衆弟子〕比丘（大論云、比丘名二乞士一、清淨活レ命故、復次比名二怖魔一、能破二煩惱一、故、復次比名二乞士一、破レ惡名二破一、能怖二魔王及魔人民一、（○下略）

〔日本書紀孝德二十五〕天豐財重日足姫天皇〈皇極〉四年六月庚戌、輕皇子〈孝德〉不得固辭、升壇卽祚、〈○中略〉是日以沙門旻法師、高向史玄理爲國博士、

〔日本書紀持統三十〕六年二月丁未、賜〈○賜原脫、據類聚國史補、〉陰陽博士沙門法藏、道基、銀人二十兩、

〔日本靈異記上〕人畜所履髑髏救收示靈表而現報緣第十二

高麗學生道登者、元興寺沙門也、〈○下略〉

〔伊呂波字類抄保人倫〕法師

〔書言字考節用集四人倫〕法師〈僧之通稱、事見要覽、〉

〔釋氏要覽上稱謂〕法師〈雜阿含經云、何名法師、佛言若於色說、是生厭離、欲滅盡、寂靜法者、名法師、法師、若於受想行識說、是生厭離、欲滅盡、寂靜法者、名法師、○下略〉

〔萬葉集十六有由緣幷雜歌〕戲嗤僧歌一首

法師等之、鬚乃剃杭、馬繫、痛勿引曾、僧半甘、

〔源氏物語帚木二〕のりの師の、世のことはりときかせん所のこゝちするも、かつはおかしけれど、〈○下略〉

〔伊呂波字類抄與人倫附鬼神類〕桑門〈ヨステヒト〉

〔書言字考節用集四人倫〕桑門〈同〉僧

〔名物六帖人品二隱倫僧道〕苾蒭〈善覺要覽、僧曰苾蒭、苾蒭草名、體性柔軟引蔓旁布、馨香遠聞、不背日光、故以喻出家人、〉

〔釋氏要覽上稱謂〕苾蒭〈梵語也、是西天草名、具五德、故將喻出家人、古師云、苾蒭所以不譯者、蓋含五義故、一者體性柔軟、喻出家人能折伏身語麁獷故、二引蔓旁布、喻出家人傳法度人連延不絕故、三馨香遠聞、喻出家人戒德芬馥爲衆所聞、四能療疼痛、喻出家人能斷煩惱毒害故、五不背日光、喻出家人向向佛日故、〉

〔書言字考節用集四人倫〕除謹男〈比丘也、又比丘尼、謂之除謹女、〉

〔釋氏要覽上稱謂〕除饉男〈康僧會註法鏡經云、凡夫貪著六塵、猶餓夫貪食不知厭足、今聖人斷除貪愛、除六情飢饉、故號除饉、分別功德論云、世人飢饉色欲、比丘除此愛饉之想故、〉

〔書言字考節用集四人倫〕坊主〈本朝俗語、僧徒之總稱也、〉

〔沙石集五上〕學匠之見解僻事

伊豆ノ山ニ、中比學匠有ケリ、弟子モ下人モ他行ノ時、鹽賣一人來テ、鹽ヤ召候トイフ、坊主誠ニ鹽ハ大切ノモノ也、〈○下略〉

〔皇大神宮儀式帳〕法師〈乎〉髮長〈止〉云、〈○中略〉如是一切物名忌道定給支、

〔延喜式五齋宮〕凡忌詞、內七言、〈○中略〉僧稱髮長、尼稱女髮長、

〔運步色葉集志〕沙彌

〔庭訓往來〕禪家者、〈○中略〉庵主、沙彌、喝食、〈○中略〉律僧者、〈○中略〉典座、沙彌、

〔釋氏要覽上剃髮〕沙彌〈此始落髮後之稱謂也、梵音訛也、此譯爲息慈、謂息世染之情、以慈濟群生、故又云、初入佛法、多存俗情、故須息惡行慈也、大毘婆沙論云、室利摩拏洛迦、唐言勤策男、謂此人離四性罪六遮罪、勤自策勵不犯、令淸淨故、又此人息寄歸傳云、室羅末尼羅、唐言求寂、夫稱寂者、卽涅槃也、言此人出煩惱家、求趣涅槃故、〉

〔書言字考節用集四人倫〕入道〈本朝剃髮者自稱、言入道心之義、高僧傳、法顯云、本不以有父而出家也、今正欲遠塵離俗故入道而已、〉

〔沙石集二上〕佛舍利感得人事

河內ノ國ニ、生蓮トイフ入道有ケリ、〈○下略〉

〔書言字考節用集四人倫〕法體〈又作髮剃〉

〔書言字考節用集四人倫〕道人〈漢書註、有道術之人也、智度論、得道者名爲道人、餘出家者未得道者、亦名道者、〉道者

〔釋氏要覽上稱謂〕道人〈智度論云、得道者名爲道人、餘出家者未得道者、亦名道人、道者亦同此說、〉

〔日本書紀推古二十二〕十七年五月壬午、德摩呂等復奏之、則返德摩呂、龍二人、而副百濟人等送本國、至于對馬、以道人等十一皆請之欲留、乃上表而留之、因令住元興寺、

尼

〔類聚名義抄七尸〕尼〈俗尼、和ニ、アマ〉

〔伊呂波字類抄安人倫〕尼〈アマ〉

〔書言字考節用集四人倫〕尼公〈ニコウ〉尼〈韵會、女僧也、正曰比丘尼、詳要覽、〉尼公〈アマギミ〉

優婆塞
優婆夷

〔釋氏要覽上稱謂〕尼梵音、具云比丘尼、亦名除饉女、天竺以佛姨母摩訶波闍波提、此云大愛道、也、師姑、今呼尼爲阿姨、師姨者、此効佛召愛道也、詳尼有八敬法、去聖已遠、不復遵行、繁不錄也、

〔釋日本紀十述義〕尼

私記曰、阿魔者梵語也、

〔倭訓栞前編二〕あま○中略　尼をいふは、釋日本紀に梵語也といへり、名義集に阿摩此云女母と見えたり、日本紀に阿尼と書り、阿尼も漢語也、一說に阿嫣也といへり、三藏法數に梵語尼華言女と也、

〔伊勢物語下〕昔こととなる事なくて、あまになれる人有けり、かたちをやつしたれど、物やゆかしかりけん加茂のまつり見に出たりけるを、男歌よみてやる、

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよとも賴まるゝかな

〔日本書紀二十敏達〕十三年、是歲、蘇我馬子宿禰、○中略於播磨國、得僧還俗者、名高麗惠便、大臣乃以爲師、令度司馬達等女島、曰善信尼、年十三歲、又度善信尼弟子二人、其一漢人夜菩之女豐女、名曰禪藏尼、其二錦織壺之女石女、名曰惠善尼、○下略

〔書言字考節用集四人倫〕比丘尼

〔日本書紀二十敏達〕六年十一月庚午朔、百濟國王付還使大別王等、獻經論若干卷、幷律師、禪師、比丘尼、呪禁師、造佛工、造寺工六人、

〔書言字考節用集四人倫〕優婆塞是受五八戒者、見涅槃經要覽、

〔釋氏要覽上稱謂〕優婆塞秦言善宿男、謂離破戒宿故、又梵云鳥波索迦、唐言近事男、謂親近承事諸佛法、故天竺受五八戒俗人稱之、亦云清信士、○中略

優婆夷

〔書言字考節用集四人倫〕優婆夷是受五八戒者、見涅槃經要覽、

〔釋氏要覽上稱謂〕優婆夷秦言近事女、謂親近承事諸佛法、故天竺受五八戒俗人稱之、亦云清信女、並同、大藏一女曰優婆夷、又曰尼、

〔書言字考節用集四人倫〕優婆夷

〔金光明最勝王經八〕金光明最勝王經大吉祥天女品第十六

爾時大吉祥天女、卽從座起、前禮佛足、合掌恭敬白佛言、世尊我若見有苾芻苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦、受持讀誦、爲人解說是金光明最勝王經者、我當專心恭敬供養此等法師、○下略

〔皇大神宮儀式帳〕優婆塞乎角波須止云、○中略如是一切物名忌道定給支、

〔延喜式五齋宮〕凡忌詞、○中略又別忌詞、堂稱香燃、優婆塞稱角筈、

〔倭訓栞中編十五都〕つのはず　延喜齋宮忌詞に、優婆塞を角筈と稱すといへり、髮の體をいふなるべし、通海參詣記には、冠をいふともいへり、

〔諸宗階級〕覺○略

一優婆塞を近事男と翻譯いたし、五戒を受候在家男子之儀ニ御座候、五戒は不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不飮酒也、

一優婆夷を近事女と翻譯いたし、五戒を受候在家女人之儀ニ御座候、五戒は前のごとし、○中略

增上寺役者　察常

享和元辛酉年十一月　秀海

寺社御奉行所

〔日本書紀二十天武〕十四年十月庚辰、遣百濟僧法藏、優婆塞益田金鍾於美濃、令煎白朮、因以賜絁絹布、

〔日本靈異記上〕修持孔雀王呪法得異驗力、以現作仙飛天緣第廿八

役優婆塞者賀茂役公氏、今高賀茂朝臣者也、○下略

〔續日本紀十聖武〕天平三年八月癸未、詔曰、比年隨逐行基法師、優婆塞優婆夷等、如法修行者、男年六十一已上、女年五十五以上、咸聽入道、自餘持鉢行路者、仰所由司、嚴加捉搦、其遇父母夫喪、期年內修行、勿論、

制度

〔灌頂記〕弘仁三年十二月十四日、於高雄山寺受胎藏灌頂人々曆名

都合一百卅五人（中略）○近事卅一人○中略

○近士衆數卅一人

民部少輔高階眞人空藏　成三无量壽　大神朝臣廣野大日　麻田吉門大吉祥　勝忍降三　福

滿大日如來　安法迦羅　秋成孔雀明王　淨貞空藏　圓繼一髻尊　安豐金剛拳

金剛般若　紀哲六足　智鏡般若　大成般若　貞孝空藏　淨人空藏　三哲六足尊　圓通大不空　新學降三世　壽滿寂流　眞成忍辱波羅　壽妙禪波羅密　加是九戒波羅　廣吉戒波羅密　孫繼六足尊　益勝一髻尊　氏繼金剛針　順孝金剛拳　長敏不空　聞覺戒波羅密　貴福無量壽　摠多無量壽　法行□波羅密　善榮空藏　善慧馬頭　石繼降三世　戒足大日如來

淨主一髻尊　○下略

〔令義解〕僧尼、凡僧尼、上觀玄象、假說災祥、語及國家、妖惑百姓、（謂天文爲玄象也、非眞曰假也、天反時爲災也、吉凶先見爲祥也、過謏爲妖言也、語及國家、不敢斥尊號、故託曰國家也、言假說之語、關涉人主也、妖惑百姓者、以假說之言、惑一人以上、其及國家、不敢斥尊號、故託曰國家也、言假說之語、關涉人主也、妖惑百姓者、以假說之言、惑一人以上、其自觀玄象、至惑百姓、總是一事、相須得罪也、若上觀玄象、所說他災祥、并雖說玄象、而不惑人者、并習讀兵書、謂雖不成業亦是、若畜之而不習者、亦入下條也、）殺人奸盜、（謂若殺及奸家人奴婢、并奸盜未得者、並依下條也、）及詐稱得聖道、（謂四果聖人之道也、）並依法律、付官司科罪、（謂不論罪之輕重皆先還俗、何者、案道僧格、犯下詐稱得聖道等名、依律、犯除名者、罪雖輕、從例除名、若重仍依聖道等者、罪雖輕猶還俗、故必先還俗、其僧尼還俗猶依當賤法、准此言之、僧尼詐稱得罪若重者、仍依下以告賤當之法上也、）

凡僧尼卜相吉凶、（謂灼龜曰卜、視地曰相、占筮亦同也、）及小道之類也、（厭禱、巫術、並雖不終事理、而已始行者、皆處還俗也、）療病者、皆還俗、其依佛法、持呪救疾、不在禁限、○略

凡僧尼將三寶物、餉遺官人、（謂三寶者佛法僧也、餉遺者無心囑請、直將送與、若送私物、妄相囑請者亦同、官人者內外百官主典以上、若遣凡人、并自用者、須准同居卑幼用財之法、其三寶物、混在一處、未經分割、故不科盜罪、若僧物分訖之後、各還自用、准同居卑幼之律也、）若合構朋黨、擾亂徒衆、（謂假有一邪僧、欲排擯正法、招引黨類、合成一寺、其同財弟子盜者、亦從同居卑幼之律也、）及詈辱三綱、（陵突長宿、謂罵老宿德、其罵辱者、重陵突者、輕長宿既尊、三綱稍卑、卽明陵突長宿者、長宿者、慢易、突者、猝也、長宿者、恥辱也、陵者、侵陵、突者、觸發、亂人視聽之類也、）

（三綱者、不合苦使之、）者、百日苦使、若集論事、辭狀正直、以理陳者、不在此例、

凡僧尼非在寺院、別立道場、聚衆敎化、（謂道場敎化相須還俗、若雖立道場、不敎化者、須下科違令毀去道場上也、）并妄說罪福、（謂在寺院妄說也、）及毆擊長宿、（謂據上條長宿三綱、尊卑既異、今此條毆傷輕重、依格律條論、但不可輕於罵辱之罪、其凡僧相毆者、亦依下條也、）者、皆還俗、○略　其有乞食者、三綱連署經國郡司、勸知精進練行者、（練精進者、懲勵也、言精進者、懲而以求上道、進而不退也、言練情性、而以求解脫也、）更乞徐物、（謂衣服之類也、）○中略

凡僧尼飲酒食宍、服五辛者、（謂飲酒者、不至醉亂也、食宍者、廣包含生之肉也、五辛者、大蒜、二曰慈蔥、三曰興渠也、四曰蘭蔥、五曰興渠也、）并日苦使、若爲疾病藥分、所須三綱給其日限、若飲酒醉亂、及與人鬪打者、各還俗、（謂若本罪徒以上、及僧尼相鬪打者、並依下條也、）

凡僧尼有事須論、不緣所司、輒上表啓、（謂有事者寺家事也、所司者玄蕃其外國可經國司也、）并擾亂官家、妄相囑請、（謂不論主司許與不許、唯止囑請者、卽是也、）者、五十日苦使、再犯者百日苦使、（謂已發再犯、與律更犯其意同、若先上表啓、後妄囑請者、亦是再犯文、爲承兩事故、其第三度犯者、更始五十日苦使、第四度犯者、百日苦使、與三犯徒流之律、其義同、若二罪以上俱發者、亦依律取例、其前後四度累犯、而一度總斷者、不得過二百日、何者爲准杖法故也、）

凡寺僧房停婦女、尼房停男夫、（謂男女不限年之多少、但須臨時斟酌之也、）經一宿以上、其所由人、（謂所停僧尼、其被停男女、雖是爲從、猶科苦使、不合減罪也、）者、自依首從律、但僧尼者、十日苦使、五日以上卅日苦使、十日以上百日苦使、三綱知而聽者、同所由人罪、○略

凡僧不得輒入尼寺、尼不得輒入僧寺、其有覲省師主、及死病看問、（謂雖非師主、齊戒會也、）皆聽、（謂聽看問也、）齊戒、（謂修善也、）聽學者聽、（謂學問也、）

凡僧尼有禪行、（謂禪靜也、）修道意樂寂靜、不交於俗、欲求山居服餌者、（謂服辟穀藥而靜居行氣也、雖不服餌、亦聽山居也、）三綱連署、在京者僧綱經玄蕃、在外者三綱經國郡、勘實並錄申官、判下山居所隸國郡、（謂假如山居在金嶽者、判下吉野郡之類也、）在山不得別向他處、○略

凡僧尼有犯苦使者、修營功德、（謂書寫經典、莊嚴佛像之類也、）料理佛殿、（謂丹堊塔廟之類也、）及灑掃、（謂灑散水、卽洒掃堂宇、其斫斧春稻之役、非道人所可親、

制度

故立其限制、使不滥執也、等使、須有功程、若三綱顏面不使者、即准所縱日、罰苦使、（謂顏面面柔也、言犯苦使僧無所請求、而三綱自阿容、不使者、即准所縱日多少、反罰苦使、其被縱僧者、不可科罪也、）其有事故、須聽許者、並須審可陪使、何者下文云、輒許之人、與妄請人同罪、即明非妄請者、（猶亦准所縱、須苦使、）其事情、知實然後依請、（謂僧尼以已公驗授與俗人、令其爲僧尼、或還成白衣、皆同、但防其猶爲僧尼、故立還俗之文、）還俗、依律科罪、（謂犯苦使之僧、無可許之狀、而貨賂潛進、三綱受容、挾情輒許者也、）者、輒許之人、與妄請人同罪、

凡僧尼詐爲方便、移名他者、（謂僧尼以已公驗授與俗人、令其爲僧尼、或還成白衣、皆同、但防其猶爲僧尼、故立還俗之文、）還俗、依律科罪、其所由人與同罪、（謂所由人者、俗人受公驗、還俗罪合徒一年、與同罪者准還俗罪合徒一年、）

凡僧尼有私事訴訟、來詣官司者、權依俗形參事、（謂依俗形者、既爲俗形、即須稱俗姓名也、參事者參對官司、申論事緒也、）其佐官（謂僧綱之事也、）若功德須詣官司者、並設床席、

凡僧尼不得私畜園宅財物、及與販出息、（謂畜者聚、其尋常所須、及緣身資用、如此之類、不在禁限、然不得仍出息與販也、與販者賤買貴賣、物生子、凡僧尼犯此法者、其物皆沒官也、）

凡僧尼於道路遇三位以上者隱、（謂若無處可隱、馬側立也、）五位以上、斂馬相揖而過、若步者隱、

凡僧尼有犯准格律、合徒年以上者、還俗、許以告牒當徒一年、（謂格者臨時詔勅量情處分、是其格律者、元爲主權斷詔勅也、律云、事有時宜、故人俗人設法、不爲僧尼立制、是以稱准也、徒年以上者、死罪以下也、告牒者僧尼得度公驗也、依律、雜犯死罪者亦先還俗、然後處死、其流罪者比徒四年、以告牒當徒一年、其餘三年依下文、役身也、若犯加役流者、亦還俗而配流、不得以告牒當加至配所、不免居作也、）若有餘罪者、依律科斷、（謂假有犯徒二年者、以告牒當一年徒、其餘一年者、依律役身、其犯徒以上、還俗之後、猶有餘罪、若爲科斷、答、歷、撿律令、過失疑罪者、一依俗人之法也、問、今依此條、徒以上還俗、杖以下苦使、未知疑罪、不同正犯、仍聽收贖、但僧尼者私無財物、理雖可贖、量事議放免、）合如犯百杖以下、每杖十、令苦使十日、若罪不至還俗、及雖應還俗、未判訖、（謂犯苦使已斷訖、未付三綱者、）散禁、（謂若不經斷者、付寺參對、其應還俗、已斷訖者、一同俗人之禁法也、）如苦使條制外、復犯罪不至還俗者、（謂准據格律、所犯之罪、既非苦使、亦非還俗、故付三綱、量事令科罰、是內法之制、非俗律之科、其違令違式、及擧輕明重、并不應得爲等類者、並律有科條、不可更依佛法也、）令三綱依佛法量事科罰、其還俗并被罰之人、不得

告本寺三綱及衆事、（謂還俗之人、至于終身、被罰之僧、苦使之間、並不得告言也、）若謀大逆、謀叛、及妖言惑衆、（謂以妖言而惑三人以上、卽雖妖言、而不惑衆者、不在此例、）

凡有私度及冒名相代、（謂冒覆也、言甲冒承乙名、而官司不覺、與死僧尼名、相代爲僧尼者也、）并已判還俗、仍被法服者、依律科斷師主三綱、及同房人知情者、各還俗、（謂此唯據私入道未除貫、若已除貫者、自依格律條也、）雖非同房、知情容止、經一宿以上、皆百日苦使、卽僧尼知情居止、浮逃人、經一宿以上者、亦百日苦使、其俗人者依律論、（謂既云僧尼令俗人歷門教化、卽明僧尼是爲造意、其俗人者自依停反逆之類也、）

凡僧尼等、令俗人付其經像、歷門教化者、百日苦使、其俗人者依律論、（謂既云僧尼令俗人歷門教化、卽明僧尼是爲造意、其俗人者自依從減一等之律、合杖九十也、）

凡家人奴婢等若有出家、（謂稱等者、官戶奴婢亦同、其依內教、奴婢者不稱出家者、緣其入道、免賤與度故、）後犯還俗、及自還俗者、並追歸舊主、各依本色、其私度人、縱有經業、不在度限、（謂責其初犯法制、故不聽其度、若改正之後、更應得度者、不在禁限也、）

〔續日本紀二文武〕大寶元年六月壬寅朔、令正七位下道君首名、說僧尼令于大安寺、

〔類聚三代格三〕太政官謹奏

垂化設教、資章程以方通、道俗訓人、違彝典而卽防、比年在京僧尼、不練戒律、淺識輕智、巧說罪福之因果、門底廛頭、誑誘都裏之衆庶、內黷聖教、外虧皇猷、遂令人之妻女、動有事故、自剃頭髮、輒離室家、無懲綱紀、不顧親夫、或於路衢負經捧鉢、或於坊邑害身燒指、聚宿爲常、妖訛成群、初似循道、終爲奸亂、永言其弊、特須禁制、望請京城及諸國々分遣判官一人、監當其事、嚴加捉搦、若有此色、所由官司卽解見任、其僧尼一同詐稱聖道、妖惑百姓、依律（據一律原脫、一本補）科罪、其犯者卽決百杖、勒還鄉族、主人隣保及坊令里長、並決杖八十、不得官當蔭贖、罪狀如前、伏聽勅裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

養老六年七月十日（又見續日本紀、中略、）

太政官符

禁斷僧尼出入里舍事

右奉勅、出家之人、本事行道、今見衆僧多乖法旨、或私定檀越出入閭巷、或誣稱佛驗、註誤愚民、非唯比丘之不慎教律、抑是所司之不勤捉搦、不加嚴禁、何整緇徒、自今以後如有此類、擯出外國、安置有供養定額寺、

延暦四年五月廿五日○（又見續日本紀、中略、）

太政官符

應依教正僧徒事

右被大納言正三位神王宣偁、奉勅、沙門之行護持戒律、苟乖斯道、豈曰佛子、而今不崇勝業、或事生産、周旋閭里、無異編戶、凡庶以之輕慢、聖德由其陵替、非只黷亂眞諦、固亦違犯國典、自今以後如此之輩、不得住寺、以充供養、凡厥齋會勿關法筵、三綱知而不糺者與同罪、自餘之禁一依令條、若有改過修行者、特聽還住、使夫住法之侶彌篤精進之行、厭道之徒更起慚愧之意、所司承知立爲恒例、

延暦十七年四月十五日○（中略、）

太政官符

應僧尼之犯依令條勘事

右被太政官去六月廿三日符偁、撿案内、太政官大同元年十月五日下彼省符偁、奉勅、内典之門持戒爲首、苟有犯破、誰弘厥道、然則道之盛衰良由其人、保護國家莫不率斯、故緇徒之禁具載科條、凡在非違準法應勘、今得少僧都忠芬狀偁、僧尼行業成不如法、卽律教中已設明制、禁斷之事請準教旨、夫緇素異形、内外殊趣、宜依所請任令遵行、但殺人奸盜此是不輕、隨犯還俗一如外法者、今右大臣宣、奉勅、如聞頃者僧尼多犯法禁、所司專任律教不加推勘、朝憲稍絕爲弊良深、宜自今以後僧尼犯罪不論輕重、一依僧尼令勘、

弘仁三年七月十日

太政官符

應許晝日男入尼寺女入僧寺事

右太政官去五月廿八日下左右京五畿内七道諸國符偁、太政官去弘仁三年四月十六日符偁、大納言正三位藤原朝臣園人宣、奉勅、僧尼之制事明令條、男女之別非無禮法、頃者諸寺僧尼其數寔多、外託勝因、内虧戒律、精進之行無顯、淫犯之狀屢聞、僧綱顏面不加捉搦、官司寬容無心糺正、又法會之時懺悔之日、男女混雜彼此無別、非禮之行不可勝論、敗道傷俗莫甚於斯、永言其弊理合懲肅、宜牒示諸寺幷道場、令加禁斷、若不遵承輒容受一人已上者、三綱幷入者、等並科違勅罪、所司不糺亦與同罪、其病者可就寺治病、幷請僧看病者、經僧綱若講師聽其處分、檀越有勾當寺家雜事者、聽令暫入、不得因茲經宿留連、其寺家奴婢及尼寺鎭不在禁限者、今被右大臣宣偁、奉勅、立制之心爲崇法門、如聞士女縱慕禮佛怕畏皇憲不得向寺、是以慈悲之道一子猶違、圍繞之場四衆半缺、宜在白晝任令出入、但至夜時固加禁止、俾彼修善者遂其善、迷途者絕其迷、又緇徒志道須勤清靜、而或住閭里未免釁疑、凡僧綱講師者僧尼之師表也、殷勤教喩誰不順行、自今而後如有此類、擧衆白堂成令懺悔、三告不悛依法還俗、自餘之事一同先符、

弘仁九年五月廿九日○（中略、）

太政官符

應禁制僧俗飲酒及贈物事

右被從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗宣偁、奉勅、頃年習俗澆薄、飲宴無度、損人費物職此之由也、是以今年正月廿三日、殊施嚴科重加禁止、唯爲俗人制茲淫費、卽於僧侶有何嫌疑、然恐有破戒濫行之輩、違佛教乖王法、非因療病妄自飛觴、不知有識之嘲、無顧護法之厭、宜令所司牒示僧綱、下知諸寺、嚴加禁遏、勤致清愼、若有違越者、必錄其名令送所司、科罰一如法條、又出家之人理無生

産、唯仰二一鉢當一有二何蓄一、而今或聞復試業之時、資供豐盈贈遺煩費、是以身素清貧無レ階二營設一者、雖レ有二高才一難一レ果二其業一、豈云二釋迦之元意一緇徒之淑行乎、自レ今而後亦宜〇宜下一本有二禁僧侶飲酒及贈物八字一同上禁、猶有二僧猶有一〇有二二字一本无一當一衍、犯二其罪一準上僧綱三綱知聞不レ糺、及隱忍不レ言、卽與同レ罪曾不レ寬有一、

貞觀八年六月四日

〔御當家令條九〕覺

一黄檗派之帽子衣を著し、紛たる出家方之徘徊ニ付、急度可レ遂二穿鑿一之旨、瑞聖寺看坊ニ申付訖、惣而黄檗門派之由にて、江戸中其外御代官所ニおゐて、借家又は地を求、住宅之出家於レ有レ之は、瑞聖寺江相届、慥成もの之由、證文取レ之可二差置一、向後瑞聖寺より紛たる出家之旨、其家主五人組江申斷候者、寺社奉行所江訴レ之、可二追拂一者也、

丑〇延寶元年四月日

〔德川禁令考四十二僧侶作法〕文政十二丑年

寺院取締方之事

文政十二丑年十二月、諸寺院之僧侶取締方之儀ニ付、別紙之通、諸觸頭江申渡候旨、寺社奉行中ヨリ通達有レ之候間、爲二心得一申達候旨、公事方奉行衆ヨリ御達有レ之、

諸寺院之僧侶不律不如法之儀ニ付、天明八申年、御沙汰之趣も有レ之、其後寬政十一年ニも取締方申渡置候者、一寺住職者勿論、所化僧ニ至迄、本寺觸頭、或ハ其法之師兄弟始法類寮主等より、常々厚教戒を加へ、不律不如法之沙汰等無レ之様、堅固ニ可二相愼一處、近來猶又相弛候哉、女犯破戒ニ及び、罪科ニ被レ處候者も不レ絶、夫而已不レ成、利欲ニ耽、或ハ不相應之金子借入、濟方不實等閑ニ致し候輩も有レ之哉ニ相聞、且僧侶衣體者、夫々宗門之規矩も有レ之儀ニ候處、小寺之住職、或ハ所化僧共之内には、俗人ニ紛敷衣服幷被布等を著、剩市中茶店等江罷越、飲食を恣にし、就レ中所化僧共ニ至迄、猶更法外之振舞にも有レ之哉ニ而、悉く僧侶之行跡ニ有レ之間敷事ニ候、右ハ畢竟本寺役寺觸頭其外法類寮主等迄、先年御沙汰之趣相心得、敎示之、不行届故之事ニ候、寺院借財之儀ハ俗家と違ひ、子孫相續ニ無レ之故、宗門ニ寄、夫々爲二取締一、規矩仕來も有レ之儀ニ候得共、俗人者不レ辨筋ニ付、寺附之金子借入候節は、宗法之趣を以得と申聞、濟方等不實等閑ニ不二相成一様可二取計一儀ニ候、尤金主等より出訴ニ及び候節は、吟味之上、事實次第令二裁許一者、勿論之儀ニ候得共、畢竟宗體ニ寄、夫々規矩仕來等有レ之儀も、寺院相續之ため、借財濟方等を、不實之取計ニ成行候樣ニ而者、自分金銀融通ニも拘、品ニ寄、寺院衰微之基ニも可レ成筋ニ付、右等之次第相心得、女犯破戒ハ勿論、都而不律不如法之儀無レ之、借財等之儀ニ付而も、不實無レ之樣、末々迄敎示一同行届、風儀立直、堅固ニ相愼、如法質朴ニ寺務相續候樣、厚可二申合一候、

右之通、今般御沙汰之趣を以、猶又御老中方江伺之上申渡條、精々無二油斷一可レ令二敎示一、尤本寺觸頭等ニおゐて、取計難二行届一儀有レ之歟、或ハ取計方難二決儀一も候はゞ、一宗一派遂二評議一、相伺候樣可レ致候、

天保十亥年

市中ニ罷在候尼僧之儀ニ付御書取

町奉行江達之覺

近來御府内ニ罷在候尼僧共庵主と唱、弟子取致し候儀は不二相成一段、可レ被二申渡一候、尤其身困窮ニ迫リ、剃髪之上三衣を著し候、道心者比丘尼ニハ當人ニ限リ、是迄之通、町方人別ニ加置、右身分ニ而弟子取致し候儀ハ、尼僧道心者之無差別、一同差留、當時弟子と唱差置候分は、身寄又ハ店受人江夫々爲二引渡一、右之内身寄無之、幼年之分は、店受人方江引取、候も、迷惑可レ致筋ニ付、右ニ限獨立經營相成候迄は、其儘差置、十五歳相成候はゞ、店受人方江引取、其段届出、向後取締方嚴重ニ心付候樣、町役人共江可二申渡一候事、

名籍

〔令義解一職員〕治部省　玄蕃寮

頭一人掌二佛寺僧尼名籍一（謂在京幷諸國佛寺、及事中略）

〔令集解六職員〕朱云、雖他國人居住京寺僧尼皆京職可知者、未明可見雜令一但寺此司不掌也、玄蕃預掌、故又往外國寺僧尼名籍何若、京人外國人不論國司掌何、答、然者、○下略

〔令義解十雜〕凡僧尼京國官司、每六年造籍三通、（謂如外國人、爲京僧尼者、各顯出家年月、夏臈、及德業、謂臘猶年也、年終有歲、故稱年、爲臈、言僧尼夏月安居、乃得一臈一故云夏臈一也、德者得也、猶云得業、假如華嚴三論之類、依式印之、一通留職國、以外申送太政官、一通送中務、一通送治部、所須調度、並令寺准人數出物、

〔日本書紀二十一推古〕三十一〇一原作二、據一年九月丙子朔、校寺及僧尼、具錄其寺所造之緣、亦僧尼入道之緣、及度之年月日一也、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年十月丁亥朔、治部省奏言、勘二撿京及諸國僧尼名籍一、或入道元由、披陳不明、或名存二綱帳一、還落二官籍一、或形貌誌騐、既不相當、總一千一百二十二人、准二量格式一、合レ給二公驗一、不レ知二處分一、伏聽二天裁一、詔報曰、白鳳以來、朱雀以前、年代玄遠、尋問難明、亦所司記注多有二粗略一、一定見名、仍給二公驗一、

剃髮

〔下學集態藝〕祝髮（シュクハツ）祝斷也　落髮（ラクサイ）卽落髮之義也

〔書言字考節用集五肢體〕薙髮（チハツ）祝髮（キルカミヲ）韵瑞、祝斷曰二祝髮一、出二穀梁傳唐書一、又云落飾（ラクショク）剃髮、法體並同、因果經、捨二飾好剃髮一、落髮（ラクハツ）同　落髻（ラクサイ）同　落髫（ラクテウ）上

〔嚢囊抄十一〕當時所レ被レ用、出家ノ作法ニ、三五ノ周羅髮ニハ數義アリ、或ハ胎髮ト云、或ハ中間髮ト云、又ハ寶髻共云、珠髻共云、又頂髮共云、小共云、此中多クハ、小ノ義ヲ用ト云ヘリ、然バ少中ニ、尙ヲ數ヲ著テ、三五ト云歟、四分律鈔批十四云、周羅髮ト者、置（チ）ノ謂ク、是胎髮也、淑云、此ハ是梵音、此ニハ云二中間髮一、亦曰二胎髮一、謂ク、小兒剃二頭留頂髮一、此周羅惡、留與二和上一剃レ之、或鈔云、置與レ淑共人ノ師名歟ト云々、翻梵語集云、摩尼周羅聚落、此ニハ曰二寶髻一、

亦云二珠髻一、又云二周羅一、此ニハ云レ小ト云々、起世經一云、周羅ト者隋之髮也、外國人頂上ニ結二小許長髮一、文、此作法者、北院御室、守覺法親王ノ御作也、是最略儀也ト云々、就レ之出家唄ニ、割愛所親ヲバ、聲明ノ口傳ニケツアイト引ト云ヘリ、言便惡キ故ト云々、

〔釋氏要覽上剃髮〕周羅髮（卽今親教和尙、最後修、所斷有八十一品、卽第九地末品煩惱、名二小結一、微細難レ除、今此頂髮、喩二彼煩惱一、九十六種外道、皆不レ能二盡除一、唯佛弟子能斷故、親教師最後剃者、表爲下除二殘結一令上出二三界一故、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字八年九月甲寅、詔曰、〇中略國家乃政乎不レ行阿流止已止不レ得、〇下略

〔源氏物語四夕顏〕めのとにて侍るもの、この五月のころほひより、おもくわづらひ侍しが、かしらそり、いむことをうけなどして、そのしるしにやよみがへりたりしを、〇略下

〔伊勢物語下〕むかし男有けり、わらはよりつかふまつりける君、御ぐしおろし給ふてげり、〇略下

〔源氏物語五若菜〕かの國の人にもすこしあなづられて、なにのめいぼくにてか、又都にもかへらんといひて、かしらおろし侍にけるを、〇略下

〔徒然草上〕不幸にうれへにしづめる人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、侍ことともなく明しくらしたる、さるかたにあらまほし、

〔倭訓栞前編二阿〕あまそぎ〇略中　源氏にいへるは尼そぎの義也、清少納言に、尼にそぎたる乳兒といへり、昔の尼はたれ尼とて、額髮をそぎたるをいふなり、又さげあまあり、

〔源氏物語十九薄雲〕この春よりおふす御ぐし、〇明石上所生姬君らつきまみのかほれるほどなど、いへばさらなり、〇下略

〔枕草子二〕うつくしきもの

あまにそぎたる兒の、目に髮のおほひたるを、かきはやらで、うちかたぶきて、物など見るいと

うつくし、

〔花鳥餘情二十六總角〕いむ事なんいとしるしありて、いのちのぶることゝ、き、しを、いむことは受戒なり、女の戒をうくるといふは、ひたいのかみをはやして、さげ尼といふものになるを云なり、

〔源氏物語二十乙女〕しきりに參り給時は、大宮もいとゞひたい引つくろひ、うるはしき御こうちきなど奉りそへて、こながらもはづかしげにおはするひとざまなれば、まほならずぞみえ奉り給、

〔細流抄七乙女〕あまびたい　さげあまの事なり

〔梅窓筆記上〕今ノ世ニ、髮切ノ尼ト云ハ、サゲ尼ナリ、サテ又ノチニ髮ヲオロシテ、尼ニナリシコトモアルベシ、

〔日本靈異記中〕打二法師一以現得二惡病一而死緣第三十五

宇遲王者、天骨邪見、不レ信二三寶一、〇中略王眷屬奏二於天皇一、〇武譯鏡法師咀二于宇遲一、令レ捉將レ殺、〇中略天皇勅二除鬚髮一、受二戒行道一、故償二此法師一、不レ殺二誦鏡一、

〔續世繼一望月〕萬壽三年正月十九日に、御さまかへさせ給、〇一條后藤原彰子御とし卅九、御名は清淨覺と申けり、〇中略長曆三年五月七日、御ぐしおろさせ給、あきもとの入道中納言、

世をすてゝ宿を出にし身なれども猶戀しきは昔成けり、とよみて、この女院へたてまつり給へる御返事に、

つかのまも戀しきことのなぐさまば二たび世をもそむかざらまし、とよませ給へる、はじめは御ぐしそがせ給て、のちにみなおろさせ給心なるべし、

〔台記別記〕久安四年七月二十日乙巳

鷹司殿源倫子〇中略

長和五年六月十日、准三宮、贈二年官年爵一、治安元年十月、出家、

或說、長曆元年三月十四日、於二法成寺西北院一有二御出家事一、先度垂尼歟、

〔女院小傳〕皇嘉門院藤聖子（シュウシ）　崇德后、〇略保元元年十一垂尼、〇清淨惠長寬元年十二廿六爲尼、〇四十二

〔書言字考節用集四人倫〕出家（シュッケ）智度論、家者是煩惱因緣、夫出家者爲レ滅二垢累一、故宜二遠離一也、又見二瑜伽論一、代醉、

〔釋氏要覽上出家〕出家由　瑜伽論云、在家煩撓、若レ居二塵宇一、出家閑曠、猶レ處二虛空一、是故應レ捨二一切於善說一毗奈耶中正信、捨レ家趣中於非家上、毗婆沙論云、家者是煩惱因緣、夫出家者爲レ惱二垢累一故、宜二遠離一也、

〔伊呂波字類抄止字〕遁世（トンセイ）　ヨヂノカル

〔書言字考節用集四人倫〕新發意（シンホチ）　梵云二阿夷恬一、唐翻云二新發意一、又新學、

〔日本書紀十九欽明〕十六年八月、百濟餘昌謂二臣等一曰、少子今願奉爲考王、出家（シテ）修道（イエデシテ）、

〔日本書紀二十崇峻〕〔一〕三年、是歲度二尼大伴狹手彥連女善德、狛夫人新羅媛善妙、百濟媛妙光、又漢人善聰、善通、妙德、法定、照善、智聰、善智惠、善光等一、鞍部司馬達等子多須奈同時出家、名曰二德齊法師一、

〔日本書紀二十五孝德〕天豐財重日足姬天皇〇皇極四年六月庚戌、天豐財重日足姬天皇思二欲傳一位於中大兄一、〇中略中大兄深嘉二厥議一、密以奏聞、〇中略輕二皇子一、〇孝德再三固辭、轉讓於古人大兄一、〇中略於是古人大兄避座逡巡、拱手辭曰、奉順天皇聖旨、何勞推讓於臣一、臣願出家入二于吉野一、勤修佛道一、奉二祐天皇一、辭訖解所レ佩刀一、投二掷於地一、亦命二帳內一皆令レ解レ刀、卽自詣於法興寺佛殿與レ塔間一、剔除髯髮一、玻著袈裟一、

〔日本書紀二十七天智〕十年十月庚辰、天皇疾病彌留、勅喚二東宮一、〇天武引二入臥內一、詔曰、朕病甚、以二後事一屬レ汝云云、於是再拜、稱レ病固辭不レ受曰、請奉二洪業一、付二屬大后一、令二大友王一奉二宣諸政一、臣請願奉二爲天皇一、出家修道、天皇許焉、東宮起而再拜、便向二於內裏佛殿之南一、踞二坐胡床一、剃除髮髮、爲二沙門一、

〔日本書紀二十八天武〕四年〇智天十月癸未、至吉野而居之、〇武天是時聚諸舍人、謂之曰、我今入道修行、故隨欲修道者留之、若仕欲成名者、還仕於司、然無退者、更聚舍人而詔如前、是以舍人等半留半退、

元年五月、是月、天皇惡之、因令問察、以知事已實、於是詔曰、朕所以讓位遁世者、獨治病全身永終百年、然今不獲已、應承禍、何默亡身耶、

〔日本書紀三十持統〕三年正月丙辰、詔曰、〇集解云、詔曰二字衍、務大肆〇務大肆三字、集解、置城養蝦夷下、陸奥國優嗜曇郡城養蝦夷脂利古男麻呂與鐵折、請剔髮髮爲沙門、詔曰、麻呂等少而閑雅寡欲、遂至於此、蔬食持戒、可隨所請出家修道、

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、〇中姉廣虫及笄年、許嫁從五位下葛木宿禰戸主、既而天皇〇諒落飾、隨出家爲御弟子、法名法均、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月辛丑、嵯峨太皇太后〇嵯峨后橘嘉智子依病入道、

〔文德實錄一〕嘉祥三年三月己亥、仁明皇帝崩於清凉殿、丙午、左近衞少將從五位上良岑朝臣宗貞、出家爲僧、宗貞先皇之寵臣也、先皇崩御、哀慕無已、自歸佛理、以求報恩、時人感焉、

〔日本紀略一醍醐〕昌泰二年十月廿四日甲申、太上皇〇宇多落髮入道、權大僧都益信奉授三歸十善戒、御名金剛覺、

〔日本紀略一醍醐〕延長三年三月□日、三品綏子内親王落髮、

〔多武峯少將物語〕本よりかゝる御心〇高光藤原ありけれど、ちゝおとゞ〇師輔藤原おはしけるほどは、せいしきこえ給ければ、えおぼしたゝざりけれど、うせ給てのち、はら〳〵のきみだちは、みなころとおはしませば、おとゞおはしまさねども、ことにものしき事もなし、〇中ひえにのぼりたまひて、御おとうと〇尋禪のおはしけるむろにおはして、とうせんじの君をめして、かしらそれとの給

ひければ、いとあさましくて、せんじのきみ、などかくはのたまふ、御心かはりやし給へるとて、のたまふまゝになき給、それとのたまふ、阿闍梨もなきて、うけ給はらざりければ、御もとゞりをてづからかうそりして、きりたまひにければ、いかがはせむとて、なをそりたまひける、〇下略

〔今昔物語十九〕參河守大江定基出家語第二

今昔圓融院ノ天皇ノ御代ニ、參河ノ守大江ノ定基ト云フ人有リ、〇中略定基此ノ女ヲ妻トシテ過ケル間ニ、相具シテ任國ニ下ニケリ、〇中略而ルニ女遂ニ病重ク成テ死ヌ、〇中略其後定基世ハ疎キ物也ケリト思ヒ取テ、忽ニ道心ヲ發シテケレバ、髮ヲ切テ法師ト成ニケリ、名ヲ寂照ト云フ、

〔古事談一王道后宮〕一條院御時、長保比、右中將成信、左少將重家、同心示合出家、發心之根元、有仗座定之日、兩人立聞之、一條左大臣〇源雅信一上ニテ、中納言面々、吐才學ヲ、ケルヲ聞テ、致奉公昇進セント思ケルハ、身ノ恥ヲ不存ナリケリトテ、共出家云々、〇中略或說ニ云、此兩人三井慶祚ノ室ニ往合ント、契リタリケルニ、中將ハトク往テ、待給ケレド、夜フクルマデニミエザリケレバ、自猶豫事ナドアルニヤトテ、先出家シテ曉歸ントスルトキ、少將ハ霜ニヌレテ來タリケリ、中將新發、イカニヤヨベハ待カヲ申テナン、先遂侍リニシト被示ケレバ、〇下略

〔日本紀略十三後一條〕寬仁元年四月廿九日丁酉、三條院太上天皇依不豫落飾、年四十二

〔古事談一王道后宮〕顯基中納言者後一條院寵臣也、天皇崩給之後、忠臣不仕二君ト云テ、七々聖忌之後、登天台楞嚴院、落飾入道云々、發心之根源、天皇晏駕之期、梓宮不供燈、問其由所、主殿司皆依勤新主之事云々、聞此事忽發心云々、

〔皇胤紹運錄〕白河院　嘉保三〇永長元年八、十、御落飾、四十法諱融觀、依郁芳門院〇白河皇女提子内媛王崩也、

〔兵範記〕嘉應元年六月十七日壬寅、今日太上皇〇後白河令遁世給、御年四十三、

〔源平盛衰記三十九〕時賴横笛事

三條齋藤左衞門大夫茂賴ガ子ニ、齋藤瀧口時賴ト名ヲ付ラレタリ、時賴人シレヌ見參シテ、白地ト思ケレ共、松蘿ノ契色深、蘭菊ノ情匂細ヤカニシテ、志切ニシテ思ケル、○略中父茂賴重テ時賴ヲ呼向ヘテ、樣々教訓シテ、所詮不レ隨二親命一者不幸也ト云ケレバ、仰畏テ承候ヌト申テ、父ガ前ヲ立、常ニ住ケル所ニ立入テ、安然トシテ思ケルハ、穴アヂキナノ事共ヤ、程ナキ此世ニ住居ツヽ、心ニ任ヌ悲サヨ、縱長命ヲ保トモ、七八十ニハヨモ過ジ、若又槿花ニ誇トモ、二十年ヲバ不レ可レ出、夢幻ノ世中ニ樂ケレバトテ惡カラン、女ニ相具セン事心憂シ、同僚傍官ガ欲ニフケルト笑ハン事モ最恥シ、但是程ノ父ノ教訓シ給事ヲ不レ用ハ逆罪也、不孝父母當墮惡道ト云故ニ、サテモ終リナバ、地獄ニ入ベシ、親ノ命ニ隨、女ノ心ヲ違ヘバ、永キ世ノ恨アリ、繫念無量劫ト云故ニ、兎ニモ角ニモ世ニアラバ惡緣也、不孝也、不如奇恩入無爲ハ、眞實報恩ノ者トイヘリ、然ベキ善知識ニコソト思キリ、生年十八ノ歳、菩提心ヲ發シツヽ、嵯峨奥法輪寺ニシテ出家シ、法名阿淨ト名ヲ付テ、行澄テ居タリケリ、深ク契シ中ナレ共、時賴角共云ザレバ、横笛ツユモ知ザリケリ、○略下

〔吾妻鏡十二〕建久三年十一月廿五日甲午、早旦熊谷次郎直實與二久下權守直光一、於二御前一遂二一決一、是武藏國熊谷久下境相論事也、直實○略中綽末レ終卷二調度文書等一、投二入御壺中一、起レ座、猶不レ堪二忿怒一、於二西侍一自取レ刀除レ髮、○略中則走出南門一不レ及レ歸レ宅、逐電、十二月十一日己酉、走湯山住侶、專光房進二使者一、申云、直實事就二承御旨一、則走向海道之處、企二上洛之間一、忽然而行逢畢、既爲二法體一也、○略下

〔太平記十一〕金剛山寄手等被レ誅事附佐介貞俊事

阿曾彈正少弼時治、大佛右馬助貞直、江馬遠江守、佐介安藝守ヲ始トシテ、宗トノ平氏十三人、幷ニ長崎四郎左衞門尉、二階堂出羽入道道蘊已下、關東權勢ノ侍五十餘人、般若寺ニテ各入道出家シテ、律僧ノ形ニ成リ、三衣ヲ肩ニ懸ケ、一鉢ヲ手ニ提テ、降人ニ成テゾ出タリケル、

○按ズルニ、天皇、太上天皇、及ビ後宮出家ノ事ハ、帝王部ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

還俗

〔下學集下態藝〕還俗（グンゾク）　落墮（ラクダ）　還俗

〔令義解二僧尼〕凡僧尼自還俗者、三綱錄其貫屬、謂還俗者、先已還俗、故下文云、師主三綱隱而不レ申也、三綱者、上座寺主都維那也、京經僧綱、自餘經國司、並申省除附、若三綱及師主、謂依止師是也、自下爲二白衣一時之服一事者也、出家以後受レ業亦同也、隱而不レ申卅日以上五十日苦使、六十日以上者百日苦使、

〔令集解八僧尼〕戸婚律、私入道及度之者、杖一百、謂僧尼等非是官度而私入道及度之者、已除貫者徒一年、○略中

戸律云、犯レ法還俗合レ出レ寺、官人斷訖牒レ寺令レ知、仍不レ還俗者、從二私度一法、○略中

戸律子注云、斷後陳訴須レ著二俗衣一、仍被二衣服一者、亦從二私度一、科杖一百也、

〔延喜式二十九刑部〕凡僧尼犯二徒以上一、還俗應レ徒、若會レ赦、免罪者聽爲二僧尼一、

〔延喜式二十九刑部〕凡僧尼犯罪應レ訊者、皆據二衆證一定レ刑、不レ須二捶拷一、其應二還俗一者、具注二本貫姓名年紀簡數一、移二送治部民部等省一、除附二帳籍一、

〔日本書紀三十持統〕七年六月癸未、詔高麗沙門福嘉還俗、

〔續日本紀一文武〕四年八月乙丑、勅僧通德惠俊並還俗、代度各一人、賜二通德姓陽侯史名久爾曾一、授二勳廣肆一、賜二惠俊姓吉名宜一、授二務廣肆一、爲レ用二其藝一也、

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月壬寅、勅僧惠耀信成還俗、並還俗復二本姓一、代度各一人、慧耀姓錄名兄麻呂、信成姓高名金藏東樓姓王名中文、

〔續日本紀六元明〕和銅七年三月丁酉、沙門義法還俗、姓二大津連一、名意吡登、授二從五位下一、爲レ用二占術一也、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年五月庚辰、先是僧善神殉レ心以縱二奸惡一、僧專住極レ口而詈二宿德一、並擯佐

渡、令、其悔過、而戻性不悛、醜聲滋彰、至、是還俗、從、之差科、

〔類聚國史百八十七　佛道〕延暦十七年五月丙午、正五位下羽栗臣翼卒云々、父吉麻呂、靈龜二年以、學生阿倍朝臣中麻呂、入唐、娶、唐女、生、翼及翔、翼年十六、天平六年隨、父歸國、以、聰穎、見稱、多、所、通渉、出家爲、僧、未、幾學業優長、朝廷惜、其才、而還俗、特賜、度二人、十九年八月辛巳、藥師寺僧景國言、己元攝津國西成郡大國忌寸木主也、爲、性遲鈍、不、堪、修學、謹案、格旨、息、子之僧、一切還俗、以懲、將來、者、伏望、還俗附、帳、許之、十月己卯、大安寺僧孝聖言、己元右京人、田中朝臣名貞也、自性庶弱不、堪、修行、老母在堂、無、由定省、還俗色養、許之、

〔三代實錄十二　清和〕貞觀八年三月二日戊寅、是日、勅沙彌深寂賜、姓貞朝臣名登、叙、正六位上、貫、右京一條一坊、先、是貞觀五年九月二十日、三品行中務卿諱、光孝天皇親王四品兵部卿兼行上總太守本康親王、參議正四位下行左兵衞督源朝臣多、從四位上行伊勢守源朝臣冷、散位從四位上源朝臣光等奏言、深寂是仁明天皇更衣三國氏所、生也、承和之初、賜、姓源朝臣、預、時服月俸、厥後依、母過失、被、削、屬籍、仍出家入道、嘉祥之末、更垂、優矜、同、於法榮、尋、道之掌藥、登遐之時緣、身出家、不、豫、處分、今善緣不、遂、再落、俗塵、所生之子隨亦有、數、而名猶編、僧身、未、有、貫附、出仕之理既絶、沈淪之悲良深、夫爲、子之道、緇素無、別、出家之時既列、皇子、還俗之日何爲非、兒、然則准、之人間、宜、復、本姓、但伏聞、嵯峨遺旨、母氏有、過者、其子不、得、爲、源氏、望請賜、姓名貞朝臣、登、叙、位階、貫、京職、至、是詔許、之、

〔今昔物語三十一〕繪師巨勢廣高出家還俗語第四

今昔、一條院ノ御代ニ、繪師巨勢ノ廣高ト云フ者有ケリ、古ニモ不、恥ズ、今モ肩ヲ並ブル者无シ、而ルニ廣高本ヨリ道心有ケルニ、身ニ重キ病ヲ受ケテ、日來煩ヒケルニ、世ノ中ヲ无、端シト思取リテ出家シテケリ、其ノ後病愈テ有ケルヲ、公此由ヲ聞シ食テ、法師ニテモ繪書カム事ハ憚リ不、有マジケレドモ、內裏ノ繪所ニ召テ被、仕ムニ便无カルベケレバ、速ニ可、還俗、シト被、定テ、召テ可、還俗、キト被、定ル由ヲ仰セ給ヒツ、廣高本意ニ非、歎キ悲ムト云ヘドモ、宣旨限リ有レバ力不、及ズ、而ル間公、近江守ノ□ト云フ人ニ廣高ヲ預テ、髮ヲ被、生ケルニ、守東山ニ有ル所ニ廣高ヲ籠メ居ヱテ、人ヲ付テ髮ヲ令、生ム、

〔平家物語二〕座主ながしの事

治承元年五月五日の日、天台ざす明雲大僧正、公請をちやうじせらるゝうへ、藏人を御つかひにて、如意輪の御本尊をめしかへいて、御ぢ僧を改易せらる、〇略中そうをつみする習とて、度緣を召かへし、げんぞくせさせ奉り、大納言の太輔藤井の松えだと云、ぞく名をこそ付られけれ、

〔玉海〕安元三年五月廿一日庚申、明雲以、一乘妙經奉、授、公家、以、菩薩淨戒、奉、授、法皇、〇後白河而忽令、還俗、處、流刑之條、頗可、及、豫議哉、宜在、勅定、廿二日辛酉隆職稱、示送、云、去夜前僧正明雲被、配、流伊豆國、了、〇中略可、爲、此儀者素不、可、被、及、仗儀歟、政道之體、彼筌有、恥可、隣之世也、此事濫觴者、

○按ズルニ、法親王ノ還俗セシ事ハ、帝王部皇親篇ニ載ス、

〔性靈集十〕見、還俗人、作

昔日剃、頭今長髮、出家二種心惟重、紅華綠實一株物、君見春秋顏色同、世理無常人如、此心緣不、動大道通、長江萬里以相答、雖、爾處、身如、虛空、

遊外僧牒狀等文書

古事類苑

宗教部二十四

佛教二十四

僧尼總載中

〔日本紀略十一條〕長保四年三月十五日辛亥、入道前三河守大江定基、法名寂昭、上狀向大宋國、

〔日本紀略十二三條〕長和四年五月七日丙戌、入唐僧寂昭、元燈、念救、覺因、明蓮等五人、度緣請印撰能書、以白色紙書之、以朱砂捺印、可渡大宋故也、

〔朝野群載二十大宰府〕阿闍梨傳燈大法師位成尋誠惶誠恐謹言、請特蒙天裁給官符於本府隨大宋國商客歸鄉、巡禮五臺山并諸聖跡等狀、

右成尋伏尋往跡、先賢入唐之輩、本懷各以相分、或爲決法流之奧旨、或爲禮聖跡之靈勝、互請天裁於本朝、方遂地望於異域、因慈探賾討、深究學顯密之教文、跋山涉水、巡禮幽邃之名地、而某聊開法門之樞鍵、纔見數家之傳記、五臺山者、文殊化現之地也、故華嚴經云、東北方有菩薩住處、名清涼山、過去諸菩薩、常於中住、彼現有菩薩、名文殊師利、有一万菩薩眷屬、常爲說法、又文殊經云、若人聞此五臺山名、入五臺山、取五臺山石、蹈五臺山地、此人超四果聖人爲近無上菩提者、天台山智者大師開悟之地也、五百羅漢常住此山矣、誠是炳然經典文、但以甲於天下之山、故天竺道猷登華頂峯而禮五百羅漢、日域靈山、入清涼山、而見一万菩薩、某性雖愚魯、見賢思齊、巡禮之情、歲月久矣、加之天慶寬建、天曆日延、天元齋然、長保寂照、皆蒙天朝之恩許、得禮唐家之聖跡、爰齡迫六旬、餘喘不幾、若無遂舊懷、後有何益、宿緣所催、是念彌切也、以六時六行道、一生齊食、常座不臥、勇猛精進、凝一心誠、及三箇年、於戲航海之

棹非不畏也、偏任殘涯於疊浪之風、懷土之淚、非不落也、唯寄懇望於五峯之月、師跡之遺室、興隆之思豈廢、母老兮在堂、晨昏之禮何忘、然而先世之因、欲罷不能、今世之望、又思何事、望請天裁給官符於太宰府、隨商客歸向之便、遂聖跡巡禮之望、某誠惶誠恐謹言、

延久二年三月十一日　　阿闍梨傳燈大法師位成尋

〔日本紀略一醍醐〕延長五年正月廿三日、僧寬建等賜太宰府牒、欲趣大宋國福州府、爲巡禮五臺山也、

〔日本紀略七圓融〕天元五年八月十六日乙亥、天台僧斎然依本寺牒入唐、

〔朝野群載二十大宰府〕日本國東大寺牒大唐青龍寺

傳燈大法師位斎然

牒、往年祖師空海大僧正、入唐受法、惠果大和尚、聖教東流以降、殆垂二百載矣、我朝入覲久絶、書信難通、蒼海自隔、雖爲一天之參商、白法是同、寧非八代之弟子、件斎然遙赴大方、慕禮聖跡、漬汙之間、顧懽海而既燼、朝火之光望烏景而不息、期於必遂、理不可奪、乞也察、狀將慰万里泣岐之心、令得五臺指南之便、謹牒、

天元五年八月十五日

〔扶桑略記二十圓融十七〕天元五年八月十六日、日本國天台山延曆寺牒大唐天台山國清寺、東大寺傳燈大法師位斎然陳狀、僕十餘年間有心渡海、蓋歷觀名山、巡禮聖跡也、適遇商客將付歸艘、斎然鄉土非不懷、尚寄心於台嶺之月、波浪非不畏、偏任身於清凉之雲、往者眞如出漬派而趣中天竺靈仙拋家國而往五臺山、縱雖庸才、欲追古跡、伏望垂允容、給小契、以爲行路之遠信者、夫以二方異域、雲水雖迥一味同法師資是親、件斎然學傳三論、志在斗藪、願令万里之飛蓬、付一符之行李、以牒、已上斎然法橋度唐牒

〔延喜式三十大藏〕諸使給法○略中

入諸蕃使

遊外僧費用

入唐大使絁六十疋、綿一百五十屯、布一百五十端○略中請益生○略中各絁五疋、綿卅屯、布十六端○略中留學生、學問僧、傔從各絁四疋、綿廿屯、布十三端○略中留學生、學問僧各絁卅疋、綿一百屯、布八十端、還學僧絁二十疋、綿六十屯、布卅端、已上布各三分之一給上總布○略中學問僧、還學僧各彩帛十疋、

○按ズルニ、請益僧ノ給法ハ、請益生ニ同ジカルベシ、又學問僧ハ留學僧ナルコト、留學生ノ下ニアルニテ知ルベシ、

〔日本書紀三十持統〕三年六月辛丑、詔太宰粟田眞人朝臣等、賜學問僧、明聰觀智等、爲送新羅師友、緜各一百四十斤、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年七月癸未、又勅曰、在唐天台請益僧圓仁、留學僧圓載等、久遊絕域、應乏旅費、宜附下圓載傳賚徒僧仁好還次、賜各黃金二百兩者、所司准勅、分付如前、

〔三代實錄二十五清和〕貞觀十六年六月十五日辛未、傳燈大法師位似船○似船原作以船、據日本紀略改、求法入唐、勅太宰府賜菅内正稅稻千束、

〔菅家文草十牒狀〕奉勅爲太政官報在唐僧中璀牒

太政官牒在唐僧中璀報上表狀

牒、奉勅、省中璀表悉之、○略中又頃年頻災、資具難備、而朝議已定欲發使者、辨整之間或延年月、大官有問得意叙之者、准勅牒送、宜知此意、沙金一百五十小兩、以賜中璀、旅庵衣鉢適支分銖、故牒、

寬平六年七月二十二日　左大史云々

〔扶桑略紀二十醍醐四〕延長四年五月廿一日、召興福寺寬建法師、於修明門外奏請就唐商人船入唐求法、及巡禮五臺山許之、又給黃金小百兩、以充旅費、法師又請此間文士文筆、菅大臣○道眞紀中納言○長谷雄、橘贈中納言○廣相、都良香等詩九卷、菅氏紀、各三卷、橘氏二卷、都氏一卷、但件四家集、仰追可給、道風行草書各一卷、付寬建、令流布唐家、可相從入唐僧幷雜人等、從僧三口、童子四人、近事二人、勅遣元方於

遊外僧渡航

左大臣（藤原忠平）宿所、寬建法師入唐之由、宜遣書大二（大宰大貳）扶幹朝臣許可仰其旨、　六月七日、依有院仰、勅奉黃金五十兩、此爲給入唐求法沙門寬建也者、（已上出御記）

〔叡山大師傳〕延曆廿二年閏十月廿三日、於太宰府竈門山寺、爲四船平達、敬造檀像藥師佛四軀高六尺餘、其名號無勝淨土善名稱吉祥王如來、講說法華涅槃華嚴、金光明等大乘經各數返、其如願文、廿三年秋七月、上第二船直指西方、於滄海中、卒起暴風侵船異常、諸人懷悲無有恃生、於是和上發種々願起大悲心所持舍利施海龍王、忽息惡風、始扇順風、未久著岸、名爲明州鄮縣、此台州近境也、天感人欲泊船有便、聖風遠扇往還無滯、大唐貞元廿年九月上旬、船頭判官等上京、但和尚別向天台山、

〔慈覺大師傳〕承和二年、有人來告曰、頃者朝家有師膝語曰、吾將使汝爲求法入唐、但愴漂流風波之上、辛苦船舫之中、我甚愍之、語畢夢覺、俄而朝家有勅忽充請益、山中僧徒相共擇取諸法難義授大師曰、愚暗群生、妙義難解、幸遇大師之渡海、欲斬我等之疑關、唯恐萬里煙浪再會難期、不忍情感隨淚先言、（略）三年四月（中略）厥後自難波離宮、與大使參議右大辨兼相摸守藤原朝臣常嗣相共上船到太宰府、未得順風徒送二年、五年六月十三日、上第一舶、廿二日解纜進發、溟海萬里、危急多端、洪濤折楫、濁水沈舶、先師夢誨遂不空矣、七月二日得著大唐揚州海陵縣、

〔天台宗延曆寺座主圓珍傳〕嘉祥四年四月十五日、辭京輦向太宰府、五月二十四日得達前處、以無便船暫寄住城山四王院、更蒙天恩賜給月粮、少監正六位上藤原朝臣有蔭、筑前介正六位上紀朝臣愛宕麻呂、勾當其事、至仁壽二年閏八月、値唐國商人欽良暉交關船來、三年七月十六日、上船到値嘉島、停泊鳴浦、八月初九日、放船入海、十三日申時、望見高山、緣北風敏、十四日辰頭漂到彼山腳、所謂琉球國噎人之地、四方無風莫知所趣、忽遇巽風、指乾維行、申剋見小山、子夜至腳下、十五日午時遂獲著岸、而未知何國界、便問所在、知此大唐國嶺南道福州連江縣界、于時國號大中七年矣、合船喜躍如死得

蘇、十六日、上州、便宿海口鎭（略）（中大中十二年、我天安二年）六月八日、辭州上商人李延孝船過海、十七日申頭南海望見高山、十八日丑夜至止山島下碇停住、天明、十九日平明、傍山行至本國西界肥前國松浦縣管曼美樂崎、天安二年六月廿二日、廻致大宰府鴻臚館、

〔安祥寺惠運傳〕儻值大唐商客李處人等犯來、和尚就他、要望乘公歸船入唐、巡禮薦福興善曼荼羅道場、得見青龍寺義眞和尚、請益於秘宗、兼者南岳五臺之聖迹、船主許諾云、東西任命、駈馳隨力、遂則承和九年、即大唐會昌二年歲次壬戌夏五月端午日、脫蠶兩箇講師、即出去觀音寺、在太宰府博太津頭、始上船到於肥前國松浦郡遠値嘉島那留浦而船主李處人等、弃唐來舊船、便採島裏楠木、更新繼作船舶、三箇月日其功已訖、秋八月廿四日午後上帆過大陽、乘入唐、得正東風六箇日夜、著大唐溫州南風三箇日夜、纔歸著遠値嘉那留浦、纔入浦口風即止、擧船難云、奇怪々々、

〔參天台五臺山記〕延久四年三月十五日乙未寅時、於肥前國松浦郡壁島乘唐人船、一船頭曾聚（字曾）三耶南雄州人、二船頭吳鑄（字吳）三耶福州人、三船頭鄭慶（字鄭）三耶泉州人、三人同心令乘船也、船頭等皆悅給物、密々相稱也、悉與物、米五十斛、絹百疋、褂二重、沙金四小兩、上紙百帖、鐵百廷、水銀百八十兩等也、同乘唐船人賴緣供奉、快宋供奉、聖秀、惟觀、心賢善人、汝彌、長明、不乘船還人、永智、尋源、快尋、良德、一德、一能、翁丸、拭淚離去、辰時依西風吹、不出船在壁島西南浦、法華法後夜經第六卷如意輪供、海邊人來時、諸僧皆隱入一室內閉戶絕音、此間辛苦不可宣盡、午時日中經第七卷如意輪供、唐人酒盛最以有興、申時文殊供、戌時初夜經第八卷如意輪供、十六日丙申寅時依有東風、出船上帆、無幾有西風、船還著本泊了、卯時後夜經第一卷如意輪供、海邊男女頻來賣買、終日閉戶、極以難堪、午時日中經讃嘆品如意輪、申時文殊供、船頭抄紙十以雜酒祭諸神、燒紙錢幡讀祭文、其後酒宴、五六日度双六興宴、戌時初夜經第二卷了、如意輪供、每日念聖觀音呪一萬遍、風天眞言一萬遍、祈乞海安、　十七日丁酉卯時、後

遊外僧漂流

夜經第三卷如意供、辰時邊人來集、閉戸絕聲、午時日中經第四卷如意供、申時文殊供、戌時初夜經第五卷如意供、依無順風、猶在壁島、廿六日丙午、天翳不知東西、未出船、巳時天時依無順風以艫進船、未時著明州別島徐翁山、廿七日丁未、巳時出船依有北風以艫進船、未時著明州黄石山、山石幷土其色如紅、大海水大濁最黄、從此島得順風、一日至明州云、四月十二日辛巳、巳時出船雨雖少下、依潮滿風宜、未時著越肅山泊、三船頭林少郎梢工陳從來向、慇懃與小刀各一柄了、少郎陳從各進糖餅六枚從陸來人、送六枚船人了、分與了、〇略中未時著杭州湊口、津屋皆瓦葺、樓門相交、梅面方甍石高一丈計長十餘町許、及江口河左右同前、大橋立河、如日本宇治橋、賣買大小船不知其數、廻船入河十町計、橋下留船、十六日乙丑巳時問官著客商官舍乘轎子具數多眷屬來著予〇尋成上官舍住一屋内運納船物以官夫運納、予行向問官許付申文一見了後返與、明日自參府可獻上者、即還舍休息、

〔元亨釋書三慧解〕釋眞濟姓紀氏、洛陽人、朝議郎御國之子也、〇略中幼齡出家、學大小乘兼綜外學、又從弘法大師受密法、〇略中承和初奉勅入唐、洋中舶破濟駕片木、隨浪蕩漾者二十三日、如濟者三十餘人、皆盡餓死、只濟及眞然二人得活、南島人遙望海上、每夜有光怪而尋之得濟然焉島民哀恤得返本朝、〇略中貞觀二年二月二十五日逝、年六十一、

〔天台宗延曆寺座主圓珍傳〕貞觀末、總持院十禪師濟詮將入唐求法、幷供養五臺山文殊、師利菩薩、主上及公卿多捨黄金、以爲供養文殊之資、濟詮辭山之日拜別和尚、便問大唐風俗兼將習漢語、和尚默然、无一所對、濟詮深有恨色、起座之後、和尚語門人云、此師雖有才辨、未曉空觀、入唐之謀似衒名高、若心殿不掃、何得三尊之加持、若加持不至、何蹤万里之險浪、其後濟詮果不著唐岸、又不知所至、〇略下

〔正統南海和尚傳〕師諱寶州、號南海、上野州良田人也、姓源、〇略中十八而有渡唐之志、時月書記中岩和上歸朝不幾、潛識師之志切、相率而再欲有江南之行、蓋以有與師忘年之故、既到九州之地俄有流言、自公府見晉〇晉恐留誤兩人渡唐也、二十餘歲而結同志十餘輩而再乘南海之船、中流風急而俄値覆舟之患、有一大函浮水上渡之、終得到三韓之地、如有神助也、師登海岸暫憩、日將三竿、見龐眉皓首老僧著金縷衣、持經負暄座于岩上、行而欲語、俄而失所在也云々、〇略中入滅六十有二也、實至德元年癸亥十一月廿日也、

遊外僧往而不歸

〔善隣國寶記中〕寛正二年　朝鮮書

朝鮮國王李瑈奉書、〇略中僧貴使秀彌、前去不幸海上遇颶風、〇略中貴使舡得脱泊對馬島、〇略中

天順肆年三月二拾捌日　朝鮮國王李瑈

〔懷風藻〕辨正法師者、俗姓秦氏、性滑稽善談論、少年出家頗洪玄學、大寶年中、遣學唐國、時遇李隆基龍潛之日、以善圍棊、屢見賞遇、有子朝慶朝元、法師及慶在唐死、

〔本朝高僧傳六遠遊十七〕唐國補陀落寺沙門慧夢傳

釋慧夢、不詳其姓其許、稟性堅固、涉遠不倦、承和初奉橘太后之命、齎幣入唐、達登萊界、自雁門上五臺、經過略偏、乃屆杭州鹽官靈池寺、謁齊安國師、而歸、始唱禪法、齊衡初、又入支那、再登五臺、於嶺頭得觀音聖像、以大中十二年、〇我天安二年奉像駕船、將歸本國、過寧波府故昌縣海濱、船著石上、盪而不行、舟子思載物重、罄出諸物、船尚如故、及聖像出、即能浮矣、此地往時高麗日本新羅諸國旅人、泊此取道以候風信、蓋觀音大士、欲現靈於此、而惠勝福於衆人也、夢不忍離聖像、遂廬奉侍、漸成寶所、號補陀落迦山寺、爲南海禪刹名藍、從是本路往來者、香火默禱分東西風、隨各人願、〇略下

〔續本朝往生傳〕同〇大江定基、〇略中深起道心、遂以出家、法名寂昭、長德年中、〇略中到大宋國、〇略中長元七年、於杭州遷化、

〔元亨釋書十六力遊〕釋寂昭、諫議大夫江齊光之子也、俗名定基、〇略中投叡山源信之室、早名講學、長保二年、信作台宗問目廿七條、付昭寄南湖知禮法師、禮延昭爲上客、丞相丁晉公、欽昭德義、禮答釋成、昭欲持歸本土、晉公思留之、咯以姑蘇山水之美、昭愛其奇秀、止于吳門寺、令其徒送禮答釋、晉公披襟厚遇昭、

有黑金水瓶與普公、以詩曰、題攜三五載日用不曾離、曉井斟殘月、寒爐釋碎冰、斷鄰銀難兌、後、菜石易成廚、此器堅還實、寄公應可知、初景德元年、昭上進無量壽佛像、本朝名刻也、眞宗大悅賜紫方袍、

〔詞花和歌集六別〕もろこしへ渡り侍りけるを、人の諫め侍りければよめる、　寂昭法師

留らん留らじともおもはえずいづくもつひの住かならねば

〔新古今和歌集九離別〕寂昭上人、入唐し侍りけるに、裝束おくりけるに、たちけるを、ゑらでおひて

讀人ゑらず

つかはしける、

きならせと思ひし物を旅衣たつ日もゑらずなりにけるかな

寂昭法師

かへし

これやさは雲のはたてにおるときくたつ事ゑらぬ天の羽衣

〔後拾遺和歌集八別〕寂昭法師入唐せんとて、筑紫へまかり下るとて、七月七日、舟にのり侍りける

前大納言公任

に遣しける、

天の河後の今日だに遙けきをいつとも ゑらぬ舟出かなしな

入唐し侍りけるみちより、源心がもとにおくり侍りける、　寂昭法師

そのほど、ちぎれる旅の別だに逢ふことまれにありとこそきけ

〔續後撰和歌集十九羇旅〕寂昭上人、入唐の時つかはしける、　性空上人

夢のうちに別て後は長き夜のねぶりさめてぞ又はあふべき

〔宋史四百九十一外國〕日本國者本倭奴國也、○中略景德元年、○我寛元年其國僧寂昭等八人來朝、

〔本朝高僧傳六十遠遊十七〕作州眞島山沙門日圓傳

釋日圓、延曆寺學徒也、○中略圓嘗欲覽支那清凉山、會得商船、截海入宋、名山靈區、隨意登踐、後有歸自宋僧云、圓遊歷年久、終於天台山國清寺、臨亡亦吉祥也、

遊外僧入朝鮮

〔續本朝往生傳〕沙門日圓者、本天台之學徒、○中略爲禮清涼山、附大宋商船渡海、後聞於彼朝天台山國清寺入滅、臨終之相往生無疑、

〔本朝高僧傳十淨禪九〕京兆建仁寺沙門明全傳

釋明全、俗姓蘇氏、勢州人也、○中略貞應二年、誘永平道元、帆海入宋歷遊諸老之門、登天龍山拜先師明菴祠堂、値其忌日、捐橖券千紙、設大會齋、供山中衆、居三年化於了然齋火浴流舍利無算、元公齎囊歸於本邦、

〔隣交徵書二篇一〕石城山天碧樓記（樓在博多津今已爲墟矣）　來復

吾無我上人樽桑產也、參歷中國有年矣、一日謁余而告曰、吾受經之地瀕于東海、四顧混然、水雲一碧、嘗作小樓、爲先師月堂禪燕之所、因顏曰吞碧、以識其勝、敢請師一言記之、（中略）洪武歲在閼逢接格春二月二十有四日、杭州府靈

〔釋氏稽古略續集三〕大初禪師、諱啓原、號大初、日本國人、九歲禮物外禪師得度、年十九、與宗猷等十八乘游參上國、丙午二月、進京見季潭禪師、後見了寶天童無著懶牧等四十五員大善知識、於傑峯和處入室、付頂相大衣拂子法語、後住羅陽三峯寺及山交龍護禪院、有三會語錄、是歲三月二日、○中略逝壽七十五、行化四十餘年、塔院南、

〔扶桑禪林僧寶傳八〕成道寺寰中志禪師傳

禪師諱元志、號寰中、未詳其姓氏、肥後州人也、自脫白之後、有遠遊之志、一日航海入支那國、依楚石琦和尚、久之發明大事、親承印記、遂終於支那、臨終遺偈曰、日本非生土、大唐亦客鄉、虛空兼法界、平等我家常、

〔日本書紀二十崇峻一〕二年○用明二年六月甲子、善信阿尼等、請大臣○馬子曰、出家之途、以戒爲本、願向百濟○我蘇學受戒法、是月、百濟調使來朝、大臣謂使人曰、率此尼等、將渡汝國、令學戒法、了時發遣、使人答曰、臣等

歸蕃先道國王而後發遣不遲也、〔元年○崇峻〕蘇我馬子宿禰請百濟僧等問受戒之法以善信尼等付
百濟國使恩率首信等發遣學問、〔三年三月學問尼善信等自百濟還住櫻井寺、〕
○按ズルニ、日本書紀敏達天皇十三年紀ニ、度善信尼弟子二人、其一、漢人夜菩之女豐女、名曰禪
藏尼、其二錦織壺之女石女、名曰惠善尼トアリ、今善信尼等トアルハ、此二尼ヲ伴ヒシコトヲ知
ルベシ、況ヤ三國佛法傳通緣起ニ、馬子宿禰請百濟僧問受戒儀式云々、禪藏等三尼、遂往百濟、十
戒六法具戒三重皆已成就、經三年歸トアルヲヤ、
〔日本書紀三十持統〕三年四月壬寅、新○羅遣級飡金道那等奉弔贐眞人天皇○天武喪幷上送學問僧明聰觀
智等、
〔續日本紀三文武〕慶雲四年五月乙丑從五位下美努連淨麻呂及學問僧義法義基總集慈定淨達等、至自
新羅、
○按ズルニ、明聰觀智義法義基等ハ新羅ニテ學ビシ力、入唐留學シテ、新羅ヲ經テ還リシカ明
ナラズ、姑ク此ニ收ム、
〔元亨釋書十六遊〕釋行善、入高○麗求法養老二年歸朝、
〔今昔物語十六〕僧行善依觀音助從震旦歸來語第一
今昔口口天皇ノ御代ニ行善ト云フ僧有ケリ、俗姓ハ堅部ノ氏、佛法ヲ習ヒ伝傳ムガ爲ニ高麗國
ニ遣ス、然レバ行善彼ノ國ニ至ルニ、其國他國ノ爲ニ被破ケル時ニ當テ、國ノ人皆王城ノ方ニ籠
リテ、國ニ人无ケレバ、行善騒ギ迷テ逃テ行ケルニ、大ナル河有リ、其ノ邊ニ至テ河ヲ渡ラムト爲
ルニ、○中略可渡キ樣无シ、○中略只觀音ヲ念ジ奉ル忽ニ老タル翁、船ヲ指テ河ノ中ヨリ出來、○中略行
善喜テ舟ニ乘、○中略日本ノ遣唐使口口トト云フ人ノ歸朝シケルニ付テ、養老二年ト云フ年日本ニ
返リ來ニケリ、

遊外僧爲使節入朝鮮

○按ズルニ、此ニ載スル所ノ外三韓ニ遊ビシモノ多シ、靈雲、慧妙、慧雲、常安、慧隣、智圓、慧師等ノ
名、國史僧史ニ散見スレドモ、著シキ事蹟ナキヲ以テ之ヲ略ス、

〔善隣國寶記中〕應永十六年　遣朝鮮書　　嚴中撰
日本國管領源道將○斯波義將拜覆、朝鮮國議政府左右承相公閣下、
貴朝一大藏教、鏤板流布、儻憐陋邦之乏少、賜以七千軸全備之藏、則其恩其惠何日而忘之、特遣周護
書記德林藏主、專達此意、○中略

永樂七年六月十八日　　日本國管領源道將拜覆朝鮮國議政府左右承相公閣下、

〔東文選九十二〕送日本天祐上人還歸序　　己亥之夏、日本國遣使來聘、沙門祐公隨至、蓋欲託行事而實訪乎名山者也、其爲人也、端潔有道氣、
字畫詩律俱有可觀、殿下嘉其慕儀納款、命有司館待既隆、及將還也、祐上人進言於朝曰、金剛山靈
異之迹擅名於天下、吾禪而遊者、以不利是山爲嫌、願留錫觀之、仍賦詩達其志、使轉告於吾君、於是
命禮官從其願留、又特賜鞍馬而待之益隆、其年秋、使乘傳次訪、所謂金剛山極其遊觀之差、隨遇隨
記、其爲文無慮萬言、予借一讀之、詞綵曄然溢目、非禪寂者所能也、留二載、又進言曰、吾道雖曰辭親
割愛、然有老母而無他兄弟、願得歸覲、朝之文士咸嘉其志、皆詩之贈其行、俾余題其卷首、

〔異稱日本傳下三〕今按、己亥蓋應永二十六年、金剛山在朝鮮江原道、與本朝金剛山同名、

〔東文選九十三〕日本國使齡上人松泉幽卷詩序　　日本氏國於扶桑之域、政簡民淳、其俗多尚浮屠、參訪之人、因奉使而遊列國者、前後相望、唐宋以來
有若烟然寂恕及榮睿之徒、是已我殿下卽位之初、有倪上人祐文溪之徒繼踵而來、亦皆譝釋也、今
齡上人、亦因求法、自歲壬寅至乙巳四年之中、奉使於我國者三矣、○中略上人年芳而學碩、神淸而形
耀粲々淸立望之、如出叡之氷盛之玉壺也、一日以其所扁松泉幽、○中略於是朝中咸詩之矣、而俾余

序、○下略

〔異稱日本傳下三〕今按齡上人者、足利義持時人、見應永三十年七月、道詮（義法名）奉朝鮮國王李裶書曰、玆從使者之所請、搜索被虜人於處處、以歸之、今重遣專使籌知客、副使齡藏主、別有所陳云云、自壬寅至乙巳、自應永二十九年至應永三十二年、

〔善隣國寶記下〕日本國准三宮道慶○（足利義政）奉書朝鮮國王殿下

兩國通好何代無之、海路夐阻、不克以時聘問、匪慢也、抑大藏經、吾國未得鋟板以行之、苟有所欲必求之上國、爲賜不少、感荷々々、仍告吾國越後州安國寺迺北方植福之地也、以無藏殿爲缺典矣、掌寺務者、慨然有求藏起殿之志、可嘉故今遣專使等堅首坐等遙諭其意、儻得頒七千歲、以如願、則所謂毘盧法寶從藏海出捆載而歸、善隣之寶莫大於焉、不腆土宜、具于別幅、伏希采納、仲秋漸凉、若時保重万福、

龍集丙午、○（文明十八年）八月四日

日本國准三宮道慶

〔善隣國寶外記〕日本國源義高奉書朝鮮國王殿下

我邦與貴國修好也久矣、以故聘問僅隔三兩年、則弗克無間濶之情、今遣釋正安首坐、以奉使命、雅況康裕否、境內安泰否、我弊邑比年多虞不遑寧處、佛宇僧廬殆發壞矣、繇是常有經藏之求聞煩於索搜、且不求焉、方物財布、庶允使者之請、惠及遐方、德之至也、不腆土宜、具如別幅、伏希采納、惟時海陬雪消春色入悼、自愛保重不宣、

○按ズルニ、本朝通鑑ニ、明應八年正月、征夷大將軍源義高、遣書翰國王曰、我邦與貴國修隣交也久矣、（僧周麟トアルモノ、卽チ此ニ揭グル所ノ文ナリ、作之）

〔善隣國寶外記〕日本國源義高奉書朝鮮國王殿下、

歲晚無他否、凡我發使修好必需藏經、是何謂也、我國伽藍皆安大藏爲利民安國之寶、以故昔者我先

遊外僧入支那

君○（義政）需印板於貴國、報書曰、經板只是一本、祖宗所傳不獲從命、由是允以賜經爲信、從來久矣弊邑經丁亥○（應仁元年）亂、各寺裏所安十之八九散失矣、國人慊然、今遣正龍首座以需之、當有所開說、貴境雖阻海洋、造巨舶通交易者、如駕輕就熟、此乃德化之使然也、我國多虞不遑接外賓、聞治朝風、有所慚焉、且又求珍禽、雖出戲翫、思人愛鳥常情也、不腆土宜、具在別幅、伏冀照領、天寒雪下順時保重不宣、

明應八年己未月日

〔日本書紀二十六推古〕十六年九月辛巳、唐客裴世清歸、則復以小野妹子臣爲大使、吉士雄成爲小使、○（中略）學問僧、新漢人日文○（日文舒明四年紀、南淵漢人請安志賀漢人惠隱、漢人作新漢人）廣齊等幷八人也、

○按ズルニ、僧ノ支那ニ遊ブモノ之ヲ始トス、時ニ隋煬帝大業四年ナリ、

〔日本書紀二十二推古〕三十一年七月、是時大唐學問者僧惠齊、○（扶桑略記、元亨釋書、並作惠濟）惠光、及醫惠日福因等並從智洗爾○（新羅使）等來之、於是惠日等共奏聞曰、留于唐國學者、皆學以成業、應喚、且其大唐國者、法式備定珍國也、

〔日本書紀二十三舒明〕四年八月、大唐遣高表仁、送三田耜共泊于對馬、是時學問僧靈雲、僧旻、及勝鳥養、新羅送使等從之、十一年九月、大唐學問僧惠隱、惠雲從新羅送使入京、十二年十月乙亥、大唐學問僧請安、學生高向漢人玄理傳新羅而至之、仍百濟新羅朝貢之使、其從來之、

○按ズルニ、請安ハ推古天皇十六年入唐シ、三十三年在留シテ歸朝ス、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉四年五月壬戌、發遣大唐大使小山上吉長丹、○（中略）學問僧道嚴、道通、道光、惠施覺勝、辨正、惠照、僧忍、知聰、道昭、定惠（定惠內大臣藤原鎌足之長子也）安達（安達中臣渠毎連之子）道觀（道觀春日粟田臣百濟之子）學生巨勢臣藥、○（中略）幷百二十一人、俱乘一船、○（中略）又大使大山下高田首根麻呂、○（中略）學問僧道福、義向、幷一百二十人、俱乘一船、以室原首御田爲送使、

〔日本書紀三十持統〕四年九月丁酉、大唐學問僧智宗、義德、淨願、○中略從新羅送使大奈末金高訓等、還至筑紫、十月癸丑、大唐學問僧智宗等、至于京師、

〔貞慧傳〕貞慧○中略以白鳳五年歲次甲寅、隨朅唐使到于長安、住懷德坊慧日道場、依神泰法師作和上、則唐永徽四年、○四年恐五年誤時年十有一歲矣、始讀聖道、日夜不怠、從師遊學十有餘年、既通內經、亦解外典、文章則可觀、隸則可法、以白鳳十六年歲次乙丑秋九月、經自百齊來京師也、

〔續日本紀二十淳仁五〕天平寶字八年七月甲寅、唐國勅使韓朝彩自渤海來云、送日本國僧戒融、令達本鄉、已畢、若平安歸鄉者、當有報信、而至于今日寂無來音、

〔元亨釋書十六遊〕釋永忠京兆人、姓秋篠氏、寶龜之初入唐留學、延曆之季、隨使歸、涉經論、解音律、善攝威儀、齋戒無缺、桓武帝勅主梵釋寺、

〔唐詩鼓吹一〕劉禹錫

贈日本僧智藏

浮杯萬里過滄溟　徧禮名山適性靈　深夜降龍潭水黑　新秋放鶴野田青
身無彼我那隳土　心會眞如不讀經　爲問中華學道者　幾人雄猛得寧馨

○按ズルニ、異稱日本傳ニ、懷風藻所載ノ智藏ト、元亨釋書所載ノ吳國ノ智藏トハ、共ニ劉禹錫ノ前ニ當レバ、今此智藏ハ別人ナラントト云ヘリ、

〔菅家文草九奏狀〕請令諸公卿議定遣唐使進止狀

右臣某謹案、在唐僧中璿去年三月附商客王訥等所到之錄記大唐凋弊載之具矣、更告不朝之間、終停入唐之人、中璿雖區々之旅僧、爲聖朝盡其誠、代馬越鳥豈非習性、臣等伏撿舊記、度度使等、我有渡海不堪命者、或有遭賊遂亡身者、唯未見至唐有難阻飢寒之悲、如中璿所申報、未然之事推而可知、臣等伏願以中璿錄記之狀、遍下公卿博士、詳被定其可否、國之大事不獨爲身、且陳款誠、伏請處分、謹言、

寬平六年九月十四日、大使參議勘解由長官從四位下兼守左大辨行式部權大輔春宮亮菅原朝臣某、

〔空華日工集〕永和三年八月廿二日、道可藏主、至近回自江南、說云、近年大明禁日本僧行脚、皆集在天界寺、不許妄出入及著俗書、○書恐誤等、廿三日過如意菴謝可藏主、且問江南近年儒佛二氏人物、則禪林諸老往々西歸、今惟溫恕中一人、儒則宋景濂而已、大明開國僅十一年、天下雜道諸寺觀、大半遭火未復、兩浙五山、徑山靈隱、火後凄凉、徑山尤甚、居僧不滿百人、

〔日本書紀二十齊明六〕三年、是歲、使使於新羅曰、欲將沙門智達、問人連御厩、依網連稚子等付汝國使、令送中到大唐、新羅不肯聽送、由是沙門智達等還歸、四年七月、是月、沙門智通、智達、奉勅乘新羅船往大唐國、受無性衆生義於玄奘法師所、

〔元亨釋書十六遊〕釋智鳳、太寶三年入唐學唯識、僧正義淵、鳳之徒也、

〔元亨釋書二慧解〕釋義淵、世姓阿氏、和州高市郡人、其父無子祈觀自在像、一夕聞兒呱出見之、紫籬上有一包香氣芬郁、開而見之小兒也、父母喜而收養不數日而長、天智帝聞之、同皇子鞠育崗本宮、後出家從智鳳學唯識、又入唐禀智周法師相宗之訣、周者、慈恩基公之上首也、歸朝盛倡相宗、受其業者行基、道慈、玄昉、良辨、宣教、隆尊等也、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年六月己亥、僧玄昉死、玄昉俗姓阿刀氏、靈龜二年、入唐學問、唐天子尊昉、准三品、令著紫袈裟、天平七年隨大使多治比眞人廣成還歸、齎經論五千餘卷及諸佛像來、皇朝亦施紫袈裟著之、尊爲僧正、安置內道場、自是之後榮寵日盛、稍乖沙門之行、時人惡之、

〔類聚國史百四十文〕延曆二十二年三月己未、大僧都傳燈大法師位行賀卒云々、法師生年廿五、被充入唐留學、學唯識法華兩宗、住唐三十一年、歸來之日、歷試身才、東大寺僧明一難問宗義、頗有所塞、罵遊外僧入支那受法相

遊外僧入支那受三論

曰、費粮兩國、學植庸淺、何違朝寄、不實歸乎、法師大愧、涕泣滂沱、久在他鄉、粗忌言話、長途一蹶、豈妨千里之行、深林枯枝、何薄万畝之影、何則在唐之時、居百高座之第二、有法華經疏、弘贊略唯識僉議等、四十餘卷、是則法師之筆削也、又寫得持來聖經要文五百餘卷、

〔扶桑略記拔萃桓武〕延曆廿二年二月己未日、大僧都行賀遷化、春秋七十有五也、俗姓上毛野公、大和國廣瀨郡人也、〇中略廿五被充入唐留學、〇中略寫得持來聖教要文五百餘卷、聖朝深喜弘益、授以僧統、詔付門徒卅人、分傳其業矣、已上國史

〔懷風藻〕智藏師者、俗姓禾田氏、淡海帝〇天智世、遣學唐國、時吳越之間有高學尼、法師就尼受業六七年中、學業穎秀、同伴僧等、頗有忌害之心、法師察之、計全體之方、遂被髮陽狂、奔蕩道路、密寫三藏要義、盛以木筒、著漆秘封、負擔遊行、同伴輕蔑、以爲鬼狂、遂不爲害、太后天皇〇持統世、師向本朝、同伴登陸曝涼經書、法師開襟對風曰、我亦曝涼經典之奧義、衆皆嗤笑、以爲妖言、臨於試業、昇座敷演辭義峻遠、音詞雅麗、論雖蜂起、應對如流、皆屈服莫不驚駭、

〔三國佛法傳通緣起中〕三論宗

慧灌僧正、以三論宗授福亮僧正、智藏越海入唐重傳三論、遂乃歸朝、弘通所傳、是第二傳也、

〔懷風藻〕釋道慈者、俗姓額田氏、添下人、略中大寶元年、遣學唐國、歷訪明哲、留連講肆、妙通三藏之玄宗、廣談五明之微旨、時唐簡于國中義學高僧一百人、請入宮中、令講仁王般若、法師學業穎秀、預入選中、唐王憐其遠學、特加優賞、遊學西土十有六歲、養老二年、歸來本國、帝嘉之、拜僧綱律師、

〔續日本紀八元正〕養老三年十一月乙卯朔詔僧綱曰、〇略中道慈法師、遠涉蒼波、冀異聞於絕境、遐遊赤縣、研妙機於秘記、參跡象於龍旅、英秦漢、〇略中儻使天下桑門智行如此者、豈不殖善根之福田、渡苦海之寶筏、

遊外僧入支那受律

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年十月辛卯、律師道慈法師卒、天平元年爲律師、法師、俗姓額田氏、添下郡人也、性聰悟、爲衆所推、大寶元年、隨使入唐、涉覽經典、尤精三論、養老二年歸朝、是時釋門之秀者、唯法師及神叡法師二人而已、著述愚志一卷、論僧尼之事、〇中略弟子傳業者于今不絕、

〔元亨釋書二慧解〕釋善議、姓慧賀氏、內州錦織郡人、奉道慈受三論之學、又蹈滄海入唐請益、當時學徒推博於議、歲八十四滅、弘仁三年也、

〔三國佛法傳通緣起下〕律宗

僧尼雖多、未傳戒律、天武天皇御宇、詔道光律師爲遣唐使、令學律藏、奉勅入唐經年學律、遂同御宇七年戊寅歸朝、彼師卽以此年、作一卷書、名依四分律抄撰錄文、卽彼序云、戊寅年九月十九日、大倭國淨御原天皇〇天武大御命勅、大唐學問道光律師、撰定行法、已上奧題云、依四分律撰錄行事卷一、已上淨天皇御宇、已遣大唐、令學律藏、而其歸朝與定慧和尚同時、道光入唐未詳何年、當日本國天武天皇御宇元年壬申至七年戊寅歲者厥時唐朝道成律師、滿意懷素道岸、弘景融濟、周律師等、盛弘律藏之時代也、道光定謁彼律師等習律宗、南山律師行事鈔、應此時道光賫來、所以然者、古德記云、道宣律師四分律鈔自傳來、而人不讀披、空送年月、爰道融禪師自讀披之、爲人講之、自爾已後事鈔之義、人多讀傳、

〔元亨釋書十三明戒〕釋普照、共榮容入唐留學、照思本朝戒學未備、勸福先寺道璿東遊、又誘揚州鑑眞來朝、〇中略榮容沒海、照遂以天平勝寶六年共鑑眞乘遣唐副使大伴胡〇古麻呂船而來歸、勅居東大寺、

○按ズルニ、普照榮容ノ事ハ、唐大和上東征傳ニ詳ナリ、而シテ東征傳ハ外國僧條ニ載セタレバ、宜シク參看スベシ、

〔元亨釋書十三明戒〕釋俊芿、字不可棄、肥之後州飽田郡人、母藤氏、〇略中建久九年欲入宋、謂諸徒曰、我思赴異域、求勝法、若不精勵豈堪傳授、我又自見志操始、十月十六、剋二百日絕眠精坐、以徒三十人、結爲六

番置一枝子約各更持、待睡眠時、以杖撞醒、歷期無怠睡、所命禪杖、屋角塵深、百日之間、晝乃開講、夜伴番衆、身無少惱、目精又不有患、十年四月、率秀賀二弟附商船泛滄海、五月初著宋之江陰軍、即寧宗慶元五年也、遊歷兩浙名刹、登天台蹊石橋、蒸餅峯左麓供茶於五百應眞、又到雪竇中嵓、咨受禪要、入臨安、登徑山、見蒙菴聰禪師、明年春還四明、依景福寺如菴了宏律師習律部之三年矣、持犯開遮宿滯氷泮、嘉泰二年冬、離明州、又之台州、居赤城寺、明春禮智者塔、安居佛隴大慈寺、所謂銀地者也、偶有浙西僧、盛稱北峯之道譽、彷激慕蘭之志、徑到秀州華亭縣超果教院、即開室湔拂歷八歲、天台教觀精習無遺、即或時召門人十輩、試問曰、四明兩重能所之義、不用繁詞、以乃祖疏記之文加判釋否、時諸子各呈句解、彷預數焉、答曰、知陰即是而能成觀、此輔行記句略而答　印顧諸徒曰、和彷得之矣、又就台教觀出五試問、唯以彷答爲最也、台教中至有律義、印避解於彷、儕輩因而受諮決者多矣、印嘗謂曰、傳聞日東盛行密教、恨此土一廢不起、子已通串蓋廻、既倒之瀾乎、開禧虜寇、印薦奏彷、欲習李唐不空三藏安西結壇例、然時論骫靡而不果、爲可惜而已、彷就律部、出五十三問、時之律匠皆爲難答、而莫不把翫誦憶、臨安府不空教院了然芝嵓淨懷、淨梵妙音、會稽極樂院智瑞各送答釋、皆不合彷意、歸朝後、日山寺守一作答釋寄送、嘉定三年秋、往四明問卿舶、其歲又如温州、依德廣律師學七滅諍、四年春二月、反明州、乘蘇長六船駕溟波著長州安武郡、乃建曆改元辛未歲也、○中略榮西禪師聞彷來歸、馳至博多、慰問曰、早入京師、四月、至建仁寺、西公率衆迎接請待甚厚、二年冬移崇福寺、

○按ズルニ、佛祖統記ニモ俊芿ノ事アリ、

〔本朝高僧傳五十八　淨律〕京兆戒光寺沙門淨業傳

釋淨業字法忍、一號曇照、山城州人、十五削染、冠歲受具、投園城寺、得顯密學、璽足南京游泳教海、聞宋國律學之盛行、以建保二年春遠涉、當寧宗七年、鐵翁一公時、住中峯直至輪下、重受具戒、深明篇聚、遊獵州縣、偏探教律、理宗召對賜忍律法師之號、紹定元年春、求藏經船載歸朝、此方安貞二年仲春也、○中略天福初、再入宋、多得佛像梵夾、仁治二年、歸太宰府、關西士庶建西林寺、迎請問法、○下

〔本朝高僧傳五十九　律〕和州西方院沙門有嚴傳

釋有嚴字長忍、別號慈禪、○中略寛元丙午○四年秋、隨覺如律師入宋、謁見諸師、索問戒疏、歸招提寺、建西方院、

遊外僧入支那受華嚴

遊外僧入支那受天台

〔元亨釋書一傳智〕釋慈訓、世姓船氏、內州人、初事興福寺良敏玄昉二師、學相宗、後偕審祥法師○新羅人入唐、謁賢首國師法藏、稟華嚴深旨、歸來付良辨、建賢首宗、稱德帝貴之、賜食邑、

〔叡山大師傳〕大師諱最澄、俗姓三津首、滋賀人也、○中略延曆二十一年、又請求法譯語、表云、沙門最澄言、最澄聞、秦國羅什度流沙而求法、唐朝玄奘踰葱嶺以尋師、並皆不限年數、得業爲期、是以習方言於西域、傳法藏於東土、伏計此度求法往還有限、所求法門、卷軸數百、仍須歷問諸州、得遇其人、最澄未習漢音、亦闇譯語、忽對異俗、難述意緒、四船通事隨使經營、相別訪道遂不可得、竊慮分途問求、乃可以聞、輕犯威嚴、伏增戰慄、謹言、又同年九月七日、主上見知天台教迹特超諸宗、南岳後身、聖德垂迹、即便思欲興隆靈山之高迹、建立天台之妙悟、詔問和氣祭酒、祭酒告和上、和上與祭酒終日與議、弘法之道、故上表云、沙門最澄言、最燈早預玄門、幸遇昌運、希聞至道、遊心法筵、每限法華深旨、尚未詳釋、幸求得天台妙記、披閱數年、字謬行脫、未顯細趣、若不受師傳、難得不信、誠願差留學生還學生各一人、令學此圓宗、師々相續、傳燈無絕也、此國現傳三論與法相二家、以論爲宗、不爲經宗也、三論家者、龍猛菩薩所造、中觀等論爲宗、是以所一切經文、成於自宗論、屈於經之義、隨於論之旨、又法相家者、世親菩薩所造、唯識等論爲宗、是以引一切經文、成於自宗義、折於經之文、隨論之旨也、天台獨付論宗、特立經宗、論者此經末經者此論、本捨本隨末、猶背上向下也、捨經隨論、如捨根取葉、伏願我聖皇御代、令學圓宗、妙義於唐朝、令運法華寶車於此間、然則聖上法施之基、更厚於往日、釋氏法財之用、亦富於永代、所望法華圓宗與日月齊明、天台妙記將乾坤等固、庶百代下歌詠無窮、有得所志之旨、當年得度沙彌義眞、幻學漢音、

略習唐語、少壯聰悟、頗涉經論、仰願殊蒙天恩、俯從之外、請件義眞爲求法譯語、兼復令學義理、然則天台義宗諮問有便、彼方聖人通情不難、若猶有所殘者、須囑留學生經年訪求矣、不任區々之至、謹奉表以聞、卽依上表勅允許譯語已畢、○略中大唐貞元廿年九月上旬、船頭判官等上京、和尙別向天台山、○略卽受牒上道、同月下旬到台州天台山國清寺、衆僧遞來慰勞、歸寺歎曰、昔聞西域騰蘭馱梵夾於白馬、降邪道於南郊、今見東域圓梨、渡妙法於滄波、極蒼生於水陸、各竭禮敬頂載隨喜、時台州刺史陸淳、延天台山修禪寺座主僧道邃於台州龍興寺、開揚天台法門摩訶止觀等、卽便刺史見求法志、隨喜云、弘道在人、人能持道、我道興隆、今當時矣、則令邃座主勾當寫天台法門纔書寫已、卷數如別、邃和上親開心要、咸決義理、如瀉水瓶似得寶珠矣、又於邃和上所爲傳三學之道、願求三聚戒、卽邃和上照察丹情、莊嚴道場、奉請諸佛授與菩薩三聚大戒、在所受所聞、憶持不漏失、將來傳受、猶尙無遺、又同時有付法佛隴寺僧行滿座主、見求法深心、自相語言、昔聞智者大師告諸弟子等、吾滅後二百餘歲、始於東國興隆我法、聖語不朽、今遇此人矣、我所披閱法門捨與日本圓梨將去海東、當紹傳燈、凡法華疏、涅槃釋籤、止觀幷記等、八十二卷、自手書云、比丘僧行滿稽首天台大師、行滿幸蒙嘉運、得遇遺風、早年出家、誓學佛法、遂於毗陵、大曆年中得値荊溪先師、傳燈訓物、不揆暗拙、忝陪末席、荏苒之間、已經數歲、再於妙樂聽聞涅槃、敎是終窮堪爲宿種、先師言歸佛隴、已送餘生、學徒雨散、如犢失母、纔到銀峯、奄從灰滅、父去留藥狂子何依、且行滿掃灑龕墳、修持院宇、經今廿餘祀、諸無可成忽、逢日本國求法供奉大德最澄法師、云親辭聖澤、面奉春宮、求妙法天台學一心於銀地、不憚勞苦、遠涉滄波、忽夕朝聞亡身爲法、覩茲盛事、亦何異求半偈於雪山、訪道場於知識、且行滿傾以法財、捨以法寶、百金之寄、其在茲乎、願得大師以本念力、弘光遠照、早達鄉關、弘我敎門、報我嚴訓、生々世々、佛種不斷、法門眷屬、同一國土、成就菩提、龍華三會、共登初首、又大唐貞元廿一年四月上旬、來到船所、更爲求眞言、向於越府龍興寺、幸得値遇泰岳靈巖山寺鎭國道場大德內供奉沙門順曉、順曉感信心之願、灌頂傳受三部昧耶圖樣契印法文

道具等、目錄如別、順曉圓梨付法書云、大唐國開元朝、大三藏婆羅門國王子法號善無畏、從佛國大耶蘭陀寺、傳大法輪、至大唐國、轉付囑傳法弟子僧義林、亦是國師大阿闍梨、一百三歲、今在新羅國、傳法轉大法輪、又付大唐弟子僧順曉、是鎭國道場大德阿闍梨、又付日本國供奉大德弟子僧最澄、轉大法輪、僧最澄是第四付囑傳授、唐貞元廿一年四月十九日書記、令佛法永々不絕、阿闍梨沙門順曉錄付最澄、五月中旬、上第一船、蒙三寶護念神祇冥護、海中無恙著長門國、卽便上京所將來天台法門幷眞言法門道具等、奉進內裏、

〔傳敎大師將來目錄〕最澄圓梨形雖異域、性實同源、特稟生知、觸類懸解、遠求天妙旨、又遇龍象邃公、總萬行於一心、了殊途三觀、親承秘蘊、理絕名言、猶慮他方學徒、不能信受處、請當州印記、安不任爲憑、大唐貞元廿一年〇永貞元年、我延曆二十四年、二月廿日、朝議持節台州諸軍事守台州刺史上柱國淳給書、

日本國入唐使

持節大使從四位上行太政官右大辨兼越前守藤原朝臣葛野麿

准判官兼譯語正六位上行備前掾笠臣田作

錄事正六位上行式部省少錄兼伊勢大目勳六等山田造大庭

錄事正六位上行太政官左少史兼常陸少目上毛野公穎人

〔傳敎大師將來目錄〕孔夫子云、吾聞西方有聖人焉、其敎以清淨無爲爲本、不染不著爲妙、其化人也、具足功德、乃爲圓明、最澄圓梨姓稟生知之才、來自禮義之國、万里求法、視險若夷、不憚艱勞、神力保護、南登天台之嶺、西泛鏡湖之水、窮智者之法門、探灌頂之神秘、可謂法門龍象、靑蓮出池、將此大乘、往傳本國、求玆印信、執以爲憑、昨者陸台州已與題記、故具所覩、爰申直筆、大唐貞元廿一年五月十五日、朝議郎使持節明州諸軍事守明州刺史上柱國滎陽鄭審則書、

日本國入唐使

持節大使從四位上行太政官右大辨兼越前守藤原朝臣葛野麻
准判官兼譯語正六位上行備前掾笠臣田作
錄事正六位上行式部省少錄兼伊勢大目勳六等山田造大庭
錄事正六位上行太政官左少史兼常陸少目上毛野公穎人

〔宋高僧傳二十九〕唐天台山國清寺道邃傳

貞元二十一年、日本國沙門最澄者、亦東夷卉服中、剛決明敏僧也、泛溟涬達江東、
〔元亨釋書一傳智〕釋最澄〇略中延曆二十有一年、賜入唐求法詔、反以期月不許滯留、蓋愛材也、
〔天台霞標一〕比丘僧道邃稽首、〇略中昔智者大師、隋開皇十七年仲冬二十四日平旦、告諸弟子曰、吾
滅後三百餘歲、生於東國、興隆佛法、〇略中今聖語有徵矣、遇最澄三歲、不是如來使、豈有堪難辛、〇略中
大唐貞元二十一年歲次乙酉二月朔癸丑十五日丁卯、天台沙門道邃、付日本國最澄三藏、
〔顯戒緣起一〕送最澄上人還日本國井序
過去諸佛爲求法、故或碎身如塵、或捐軀强虎、嘗聞其說、今覩其人、日本沙門最澄宿植善根、早知幻
影、〇略中聞中國故大師智顗傳如來心印於天台山、遂賫黃金涉巨海、不憚滔天之駭浪、不怖映日之
驚鼇、外其身而身存、思其法而法得、大哉其求法也、以貞元二十年九月二十六日、臻於海郡、謁太守
陸公、獻金十五兩筑紫筆二管、筑紫墨四挺、刀子一加斑組二、火鐵二加、火石八、蘭
木九、水精珠一貫、陸公精孔門之奧旨、蘊經國之宏才、清比氷囊、明逾霜月、以紙等九物達於庶使、返
金於師、師譯言請貸金貿紙、用書天台止觀、陸公從之、乃命大師門人之裔哲曰道邃、集工寫之、逾月
而畢、遂公亦開宗旨審焉、最澄忻然瞻仰作禮而去、三月初吉、遐方景濃、酌新茗以餞行、對春風以送
遠、上人還國謁奏、知我唐聖君之御宇也、貞元二十一年巳日、台州司馬吳顗叙、
○按ズルニ、此他本書ニ詩九首ヲ載ス、其作者ヲ吳顗及ビ台州錄事參軍孟孔以下九人トス、今

煩ヲ以テ省略ニ從フ、

〔元亨釋書二慧解〕釋義眞相州人、從傳敎大師入唐、爲譯語沙彌、貞元二十年〇我延曆二十年十二月七日、於台
州國淸寺受戒爲大僧、又同敎入曉閣梨灌頂壇、弘仁十四年四月十四日、於根本中堂始行大乘菩薩
戒羯磨、眞爲和上、受者一十四人、

〔慈覺大師傳〕慈覺大師諱圓仁、俗姓壬生、下野國都賀郡人也、〇略中承和二年充請益、〇略中五年七月二
日、得著大唐揚州海陵縣、〇略中五年則是開成三年也、大師與朝使俱到揚州大都督府、府乃留朝使於
平橋館、住大師於開元寺、節度使李德裕監軍某更勞問、大師殊致敬禮、兼以十餘匹絹施與之、大師不
肯受、德裕猶固請、遂感其懇誠受之、卽遍施寺中衆僧、餘其一分領之、冬十月、朝使入京、大師苦請、獨留
揚府、爲攀躋天台及五臺山、巡禮諸聖跡、求顯密敎法也、德裕隨其意、相具以聞奏、有勅不許巡禮、大師
心以歎焉、數日有一高僧、從上都來、號宗叡、深解悉曇、能通梵語、大師從之習學梵書、又有一碩德、名全
雅、高六尺餘、又解梵書、來致勞問、旣而歸去、大師旣訪尋、請爲阿闍梨、蒙受灌頂、於是始授金剛頂大敎、
便附囑所持金剛界大曼荼羅、又授以師資相傳之法、於揚府所得念誦敎法經論章疏等一百九十八
卷、幷胎藏金剛界兩部大曼荼羅、及諸尊壇樣高僧眞影、及佛舍利等廿一種也、開成四年、隨使歸朝、比
到海中、逆風忽扇、歸著海州界、大師自謂、我渡滄溟遠到異境、爲博習法敎、及登五臺山、巡禮諸聖跡也、
而不遂本願、將還鄉國、事終如斯、於我何有乎、因懇請朝使、抽身下船、止海州東海縣海濱沙石上、弟子
惟曉惟正及僕雄萬等三人復俱從焉、於是使船已去、臨黃昏忽留沙濱、不知胡兒之、俄而會海賊十四
人、顏色非常、意在虜掠、大師弟子等相語云、我命今在此、不如捨資物、至于身上衣服、皆盡施與之、最後
授銚子、賊不受曰、客中無此何以資用、賊更發慈心曰、和尙今有何所欲、曰、欲得到村里、賊二人乃將和
尙至人里、旣而逃去、大師行歸海州、刺史配住本朝第二舶、舶乃解纜歸國、五六日後、逆風卒起又著、登
州界、大師猶爲遂宿念、又有意欲留、但知弟子等有歸鄉之懷、相語曰、爾曹去留任意而已、弟子曰、死生

隨師何有離去、大師喜之下、船、登當州赤山法華院、送過冬月、明年春大師祈願海會諸尊、當處山神心施冥助、令遂本願、若適歸本國、當建立禪院弘傳法門、資益山神○略中其後登縣牒持來、其狀曰、日本國僧等、今須任意巡禮諸聖跡、押衙副使送牒縣々、附送青州、州得縣牒、引僧等入州衙、刺史問以俗姓法名、入都所由、及本國境界、都城廣狹、天子姓氏、大師爲愼國諱準遣唐例文、皆悉答之、刺史喜其對、卽施兩碩米、兩碩麴、壹斛油、壹斛酢、一斗鹽、柴參拾根、以充旅粮、便付押衙配住開元寺、大師奉狀陳謝、以使君所施供寺中僧侶、既得州牒、往青州府、見節度及副使判官、乃住龍興寺、投暮副使至寺致慰勞也、明朝遣使延請私舍、而讓居牀、令大師坐、大師謙辭甚不肯當、副使曰、爲功德讓耳、願殊許聽焉、大師不固辭、遂就牀上、副使盛設羞膳供之、判官勞問亦復如此、判官姓蕭名慶中、能通禪門、受師資相傳之法、卽以此法付屬大師、大師經府衙牒到五臺山、巡禮聖跡○略中八月、到長安城、得見左街功德使觀軍容使開府儀同三司左神策護軍中尉知內侍省事上將軍封三千戶仇士良、士良具以聞奏、準勅住資聖寺、寺卿中散大夫賜紫金魚袋楊散之、朝議郎守尙書職方郎中上柱國賜緋銀魚袋魯士、左神策押衙銀青光祿大夫檢校國子祭酒殿中監察侍御史上柱國李元佐、及衆官曹等、僉曰、我國佛法旣以絕滅、唯今隨和尙東去而已、若後有求法者、心當向日本國、李元佐遂從大師送行四十餘里、日晩同宿、待明辭別元佐臨去語曰、和尙袈衣施與弟子、願以此衣遙仰高德、大師則脫與之、行數日至鄭州、得見長史御殿中監察侍御史賜紫金魚辛文昱、文昱先在長安、至誠慇懃、及重相見、製衣服贈素帛、以資費用、俱共

携送可十五里、攬手徘徊掩淚離別、已到密州界、道路艱險行步多危、時曠野中有一官舍、已及日夕便入留宿、○略中其秋九月、得著大宰府、今年唐大中元年、我朝承和十四年也、

〔三代實錄 清和八〕貞觀六年正月十四日辛丑、延曆寺座主傳燈大法師位圓仁卒○略中圓仁、齡始滿三〇、一本作四十、身羸眼暗、知命不久固、而尋叡山北極幽谷、結草爲庵、消三四年、闔山僧衆、苦勸云、吾師爲法早取入唐、尋而官補請益、承和五年七月二日、著大唐揚州海陵縣○下略

〔續日本後紀 仁明〕十七承和十四年七月辛未、天台留學僧圓載、傔從仁好、及僧惠蕚等至、自大唐、上奏圓載之表狀、唐人張友信等卅七人同乘而來著、十月甲午、遣唐天台請益僧圓仁、及弟子二人、唐人卅一本作卅、貳人到自大唐、

〔續日本後紀 仁明〕十八嘉祥元年三月乙酉、天台宗入唐請益僧圓仁、將弟子僧性海惟正等、去年十月駕新羅商船、來著鎭西府、是日歸朝、遣中使慰勞、各施御被、

〔今昔物語 一〕十一慈覺大師亘宋傳顯密法歸來語第十一

今昔、承和ノ御代ニ慈覺大師ト申聖在マシケリ、○略中顯密ノ法ヲ習フニ、少シキ愚ナル事无シ、而ル間傳教大師失給ヒヌレバ、心ニ思ハク、我レ唐ニ渡テ、顯密ノ法ヲ習ヒ極メムト思テ、承和二年ト云フ年唐ニ渡ヌ、天台山ニ登リ、五臺山ニ參リ、所々ニ遊行シテ、聖跡ヲ禮シ、佛法流布ノ所ニテハ、是ヲ習フ間、惠正○會昌天子ト云天皇ノ代ニ、此ノ天皇佛法ヲ亡ス宣旨ヲ下シテ、寺塔ヲ破リ壞テ、正敎ヲ燒キ失ヒ、法師ヲ捕テ令還俗ム、四方ニ分レテ亡、其ニ大師此ノ使ニ會ヌ、獨身ニシテ隨ヘル者无シ、使等大師ヲ見テ喜テ追フ、大師逃テ、一ノ堂ノ內ニ入ヌ、使來テ堂ヲ開テ求ム、大師可爲キ方无クテ、佛ノ中ニ居テ、□□□□□見ル時ニ、大師本ノ形ニナリテ在マス、使何ナル人ゾト問フニ、日本ノ國ヨリ、法ヲ求メムガ爲ニ來レル僧也ト答フ、使恐レテ令還俗ル事ヲバ、暫ク止メテ、天皇ニ此ノ由ヲ奏ス、宣旨ニ云

ク、他國ノ聖人也、速ニ可レ追弃一シト然レバ使大師ヲ免シツ、大師喜テ、其所ヲ走リ去テ、他ノ國ヘ逃ル間ニ、遙ナル山ヲ隔テ、人ノ栖有リ、見レバ城固ク築キ籠テ、廻リ強ニ固メタリ、一面ニ門有リ、其門ノ前ニ人立テリ、大師是ヲ見テ、喜テ寄テ、是ハ何ナル所ゾト問フ、答テ云ク、是ハ一人ノ長者ノ家也、聖人ハ何ゾト、大師答テ云ク、佛法ヲ習ハムガ爲ニ、日本國ヨリ渡レル僧也、然ルニ佛法ヲ亡ビナス世ニ會テ、暫ク隱レ居テ、忍ビタラム所ニ有ラムト思也、門ニ立タル人ノ云ク、此ノ所ハ、□□□□テ人不レ來シテ極テ靜ナル所也、然レバ暫ク是ニ在マシテ世ノ靜ニ成ナム後ニ出テ、佛法ヲモ習ヒ可レ給キ也ト、大師是ヲ聞テ、喜ビヲ成シテ、此ノ人ノ後ニ立テ入ヌ、其後門ヲバ卽チ差シツ、門ヲ入テ遙ニ奥ノ方ニ歩ヒ行ク、大師モ共ニ行テ見給ヘバ、樣々ノ屋共造リ重ネタリ、人多ク□□□□□□ノ空キ屋ノ有ルニ、大師ノ分居ツ、大師此ク靜ナル所ニ來ヌ、世ノ靜ナラム程、此ニ有ラム吉キ事也ト喜テ、若シ佛法ヤ在スト思テ、所々ヲ伺ヒ見行クニ、總テ佛經見エ給フ所无シ、○中略其時ニ一ノ大ナル狗出來ヌ、大師ノ衣ノ袖ヲ食テ引ク、大師犬ノ引ク處ニ隨テ行ク、可レ通出クモ无キ水門有リ、其ヨリ引キ出シツ、外ニ出、○中略人云ク、其所ハ纈纈ノ城也、人ノ血ヲシボリツ、世ヲ亘ル所也、其ニ行ヌル人ハ返ル事无シ、實佛神ノ助ケニ非ズバ、可レ遁キ樣无シ、无限貴キ聖人ニ在マスケリト、喜テ別レ去ヌ、其ヨリ彌ヨ逃ゲ去テ、王城ノ方ニ至テ、忍閇ク程ニ、惠正天子失給ヌ、他ノ天皇位ニ卽給ヌレバ、佛法亡ス事止ヌ、本意ノ如ク□□□寺ノ義操ト云フ人ヲ師トシテ、密敎ヲ習ヒ傳ヘテ、承和十四年ト云フ年、歸朝シテ、顯密ノ法ヲ弘メ置タリトナム、語リ傳ヘタルト也、

○按ズルニ、宇治拾遺ニ會昌年中に、唐武宗佛法をほろぼして堂塔をこぼち、僧尼をとらへてうしなひ、會昌六年に武帝崩じ給ぬ、翌年大中元年宣宗位につき給て、佛法ほろぼすことやみぬれば云々トアルモノ、卽チ本文今昔物語ノ文ヲ敷衍セシモノナリ、

〔天台宗延曆寺座主圓珍傳〕天台宗延曆寺第五座主入唐傳法阿闍梨少僧都法眼和尚位圓珍、俗姓和氣公、讃岐國那珂郡金倉鄉人也、○略中仁壽元年四月十五日、和尚辭京向太宰府、遂入唐之志也、同三年七月、解纜進發、天安二年歸本朝、乃奉奏狀、叙在唐行事、兼陳意趣、本末、其辭云、圓珍伏以、承和聖上○仁明登極之載、天長十年也分奉試讀大毗盧遮那經及第蒙度、依式一紀棲山習學遮那止觀之宗、而每披天台山圖、恒瞻華頂石橋之形勝、未遇良緣、久以存思、爰至田邑聖主○文德亨國、伏蒙特賜恩許出界、嘉祥四年四月十五日、辭京、○略中十六日、○仁壽三年八月上州便宿海口鎭、鎭將來浦慇懃安存、具狀申州、十七日、達州下郭門外、巡報主使、當時觀察使兼金紫光祿大夫御史中丞福建都團練處置等使兼福州刺史韋署差使軍將林師準存問、十九日、上州相看左廂都虞候兼押衙林師翼、纔見嘉歡、猶如舊識、廿一日、相看觀察使、亦甚顧問安堵、於開元寺優給生料、兼仰綱維供給熟食、卽於寺中遇中天竺摩揭陀國大那蘭陀寺三藏般若怛羅、受學梵字悉曇章、兼授金剛界大悲胎藏大日佛印、七俱知曼荼羅室、利印法、梵夾經等、又遇當寺講律大德僧存式、蒙捨與四分律東塔疏及喜祥慈恩兩家法華經疏、華嚴涅槃俱舍等疏義、近三百卷、更有處士林儒、自捨錢帛、與寫本國所缺法文、遠充流行、九月廿日、辭使向北、重蒙優賞、於開元寺遇臨壇大德僧宗梨、授四分新疏、俱舍論、楞伽經疏、十二月初一日、得達台州臨海郡、權下開元寺左注便逢老宿僧知建、斯乃貞元年末、天台山國清寺律大德僧清翰入室弟子也、乍見喜歡、宛如骨肉、捨與維摩因明二部疏義、又看刺史工部郎中勅賜緋金魚袋李肇、蒙具行由申上省使、兼給驗自牽州官入寺慰問、十三日、遂達唐與縣相見縣官、暫憩國清寺廨宅、當時綱維徒衆總相迎、晚頭至寺相看衆僧、而松林鬱茂、十里挾路琪樹璀璨、五嶺抱寺雙澗合流、巧注四絕標奇、智者眞容安坐禪牀、普明錫泉、潺灑殿艮、昔聞今見、宛如符契、當時貞元年中、七大德僧文舉老宿門人僧清觀元璋安置同房、視如兄弟、又有貞元年中、禪林寺傳敎大德僧道邃和尙入室廣修和尙聽習弟子僧物外、長講止觀傳大師敎乍見歡喜慇懃安排、十四日、留學僧圓載從越州來於國清寺、相接嘉懽、大中八年二月、

上天台山禪林寺、便禮定光禪師菩提之樹、又拜智者大師留身之墳、〇略中圓珍數日巡禮已畢、還至國清座、夏就僧物外邊、請本抄寫天台教法、近三百卷、又將太政大臣左注送供智者大師影砂金四十兩、修其墳塔及以國清佛殿、合國讃揚不可勝記、其事具於台州公驗、九月七日、出台山向越府、於開元寺相遇天台智者大師第九代傳法弟子沙門良諝、講授宗旨、時決舊疑、兼抄法文、以補未定、九年二月、請得越府公驗、〇略中四月上旬、僧圓載落後趁來、從此共行、〇略中廿一日、〇五月遂達上都長安城、權住春明門外、六月初三日、拜見唐天竺大那蘭陀寺三藏善无畏阿闍梨第五代傳法弟子左街青龍寺傳教和尚前長生殿持念供奉大德僧法全阿闍梨、蒙許授瑜伽宗旨、和尚卽與大瑜伽法文、不日而抄得、無任喜躍之切、數日入城、權寄左街崇仁坊、遂見本國巡禮田口圓覺、以爲良導、〇略中七月十五日、共僧圓載入大悲胎藏塡、校學大法灌頂、卽授受胎藏大瑜伽畢、十月初三日、入金剛界九會大曼荼羅道場、沐五智灌頂水、授學大瑜伽根本大教王最上乘教、幷兩部諸尊瑜伽、及蘇悉地羯羅大法等畢、兼召供奉畫工刁慶等於龍興寺、圖繪今上御願大曼荼羅像、青龍傳法和尚始終撿校、僧圓覺專勾當、爲國竭力、至十一月初三日、圓珍詣和尚處、諮請傳教灌頂事、和尚答曰、我早許汝、更無可作、若要入塡、任爾情者、仍四日、排比香花養賢聖、當日入定受三昧耶戒、五更蒙傳授兩部大教阿闍梨位灌頂、卽得般若母菩薩、大虛空藏菩薩、轉法輪大菩薩、和尚授記曰、汝蒙大毗盧遮那經般若母之加持、遊步阿字法性之大空、傳一切如來最上乘教者、圓珍又捨十千錢供合寺大衆、復冬至日、街東大興善寺不空三藏和尚院、禮拜三藏和尚骨塔、幷見三藏第三代傳法弟子三藏沙門智慧輪阿闍梨、參入道場、禮拜聖衆、諮承兩部大曼荼羅教秘旨、兼授新譯持念經法、〇略中廿七日、圓珍共僧圓載、拜辭本師、出長安城、〇略中五月〇大中十年晦、廻到越州開元寺、看良諝闍梨、〇略中從此拜別、向天台山、六月初六日、得達國清寺、圓珍尋訪舊事、祖師最澄大法師、貞元年中、留錢帛於禪林寺、造院備後來學法僧侶、而會昌年中、僧人遭難、院舍隨去、仍將右大臣給圓珍、充路粮砂金三十兩、買材木於國清寺止觀院堂、備長講之設、又造三間房、塡祖師之願、卽請僧清觀爲主持人、至十月初、台州刺史朝議郎殿中、端公勅賜緋金魚袋裴謨帖唐與縣、追命圓珍、甚與安存、猶如父母、歸寺之日殊給驛馬、圓珍辭恩不敢受、公更怙驛館、次供素飯、差館子家丁各一人、送至國清寺、大中十一年十月、秩滿歸京、十三年正月、刺史朝散大夫勅賜緋金魚袋嚴修睦新下、台州、圓珍二月初頭、至州相看篤蒙存問、便修撿求法來由及經論目錄、準貞元例請押判印、國恩所致遂于所懷、〇略中八月十四日、幸蒙先朝勅追、十二月廿七日、的達帝都、三年正月十六日、伏蒙今天召對、御覽御願胎藏金剛界兩部大曼荼羅僧、

〔三代實錄十清和二〕貞觀八年五月廿九日壬申、勅令内供奉十禪師傳燈大法師位圓珍弘傳眞言止觀兩宗教、先是、圓珍奏言、〇略中圓珍奉詔入唐、傳得眞言天台兩宗教文、以添先師之遺跡、奉翼皇王之至化、伏乞准例蒙賜勅印公驗、兼下知所由隨力流傳、擁護國家、利益群生、酬先師恩、謹具求法來由、伏聽天裁、從之、〇又見類聚國史百七十九

〔嚴神抄〕智證大師ハ、元ハ德圓和尚ノ御弟子ナリケレドモ、慈覺大師ニモ、一分ノ御弟子ニテ御シキ、俗姓ハ弘法大師ノ姪御子ニテ御シケル故ニ、弘法ト慈覺大師トノ、法流ノ不同ヲ、爲決其眞僞ヲ、入唐シ玉ヒケル也、

智證大師

〔新古今和歌集二十釋教〕入唐の時の歌

法の舟さして行身ぞもろ〳〵のかみも佛も我をみそなへ

〔元亨釋書十四檀興〕釋重源、黑谷源空之徒也、仁安二年、跨海入宋、適與明菴西公遇于四明、相伴上台山、拜蒸餅峯阿羅漢、又返相州、見貿嶺舍利瑞光、三年秋僧明菴歸、

〔東大寺造立供養記〕上人〇源重之德不限今度、壯年當初入唐三度、大宋國育王山舍利殿、三階三閣之精舍也、其最中一間弘三丈也、精舍之勢分以此可察也、而破壞年久、營作失便、於是上人運我朝之大材以訪大唐之造寺、渡万里之蒼波、以成希代大願、故造大唐上人像、安先德之列、

遊外僧入支那受眞言

〔上新請來經等目錄表〕空海去延暦廿三年季夏之月、隨入唐大使藤原朝臣（〇葛野麻呂）同上第一船發起咸陽、其年八月、到福州著岸、十二月下旬、到長安城宣陽坊官宅安置、廿四年仲春十一日、大使等旋軔本朝、唯空海乃然准勅留住西明寺永忠和尚故院、於是歷城中訪名德、偶然奉遇青龍寺東塔院和尚法諱惠果阿闍梨、其大德則大興善寺大廣智三藏之付法弟子也、德帷時尊道則帝師三朝尊之受灌頂、四衆仰之學密藏、空海與西明寺志明談勝法師等五六人同往見和尚、和尚乍見含笑喜歡告曰、我先知汝來、相待久矣、今日相見大好々々報命欲竭、無人付法必須速辨香花入灌頂壇、即歸本院營辨供具、六月上旬、入學法灌頂壇、是日臨大悲胎藏大曼陀羅、依法抛花偶然著中臺毘盧遮那如來身上、阿闍梨讃曰、不可思議々々々々再三讃歎、即沐五部灌頂、受三密加持、從此以後、受胎藏之梵字儀軌、學諸尊之瑜伽觀智、七月上旬、更臨金剛界大曼荼羅、重受五部灌頂、亦抛得毘盧遮那、和尚驚歎如前、八月上旬、亦受傳法阿闍梨位之灌頂、是日設五百僧齋、普供四衆、青龍大興善寺等供奉大德並臨齋筵、悉皆隨喜、金剛頂瑜伽五部眞言密契相續、而受梵字梵讃間以學之、和尚告曰、眞言秘藏經疏隱密不假圖畫、不能相傳、則喚供奉丹青李眞等十餘人、圖繪胎藏金剛界等大曼陀羅等一十鋪、兼集廿餘經生、書寫金剛頂等最上乘密藏經、又喚供奉鑄博士楊忠信、新造道具一十五事、圖像寫經漸有次第、和尚告曰、吾昔髫齓之時、初見三藏、三藏一日之後、偏憐如子入內歸寺如影不離、竊告之曰、汝有密敎之器努力々々、兩部大法秘密印契因是學得矣、自餘弟子若道若俗、或學一部大法、或得一尊一契、不得兼貫、欲報岳瀆旻天罔極、如今此土緣盡、不能久住、宜此兩部大曼荼羅一百餘部、金剛乘法、及三藏轉付之物、並供養具等、請歸本鄕流傳海內、纔見汝來恐命不足、今則授法有在、經像功畢、歸鄕國以奉國家流布天下增蒼生福、然則四海泰萬人樂、是則報佛恩報師德爲國忠也、於家孝也、義明供奉此處而傳、汝其行矣、傳之東國努力努力、付法慇懃、遺誨亦畢、去年十二月望日、蘭湯洗垢結毘盧遮那法印右脇而終、是夜於道場持念、和尚宛然立前、告曰、我與汝久有契約誓弘密藏、我生東國心爲弟子、委曲之言更不煩述、阿闍梨付囑受法之由、大體如是、（〇中略）

入唐學法沙門空海

大同元年十月廿二日

〔性靈集五〕與本國使請共歸啓一首

留住學問僧空海啓、空海器乏楚材、聽謝五行、謬濫求撥、涉海而來也、著草履歷城中、幸遇中天竺國般若三藏、及內供奉惠果大阿闍梨、膝步接足仰彼甘露、遂乃入大悲胎藏金剛界大部之大曼荼羅、沐五部瑜伽之灌頂法、忘食耽讀假寐書寫、大悲胎藏金剛頂等已蒙指南、記之文義、兼圖胎藏大曼荼羅一鋪、金剛九會大曼荼羅一鋪、（並七幅丈五尺）一幷寫新飜譯經二百餘卷、繕裝欲畢、此法也則佛之心、國之鎭也、攘氣招祉之摩尼、脫凡入聖之嘘徑也、是故十年之功、兼之四運、三密之印貫之一志、兼此明珠、答之天命、嚮使久客他鄕、引領皇華、白駒易過、黃髮何爲、今不任陋願、奉啓不宣謹啓、

〔後入唐聖敎目錄〕入唐學法沙門常曉言、常曉以去承和三年五月、御命留學、遠期萬里之外、其年漂廻、四年亦不果渡海、五年六月進發、同年八月、到淮南城廣陵館安置、孟冬使等入朝、常曉不得隨使入京、徒留館裏空經多日、至于歲盡、勅命未有受、則周遊郡內訪擇師依、幸遇栖靈寺灌頂阿闍梨法號文璨和尚、幷華林寺三敎講論大德元照座主、其文璨和尚、則不空三藏弟子、兼惠應阿闍梨付法人也、妙釣經律深通密藏、法之棟梁、國之所歸、同年臘月、講節度使處分、配住栖靈寺、文璨和尚以爲師主、始學法儀、兼往華林寺元照座主邊、問本宗義、得文書也、然大師尙佛法之流傳、歎生民之可拔、授我以金剛大法、許我以阿闍梨位也、膝步知未知、接足得未得、賴國家之築造大師之慈悲、學金剛界瑜伽、習大元帥秘法、斯法也、則如來之肝心、衆生之父母、於國城塹、於人筋脈、是大元帥者都內不傳於十供奉以外、諸州無出於節度、宅以表緣其靈驗不可思議也、諸佛菩薩金剛天等像雖在前來、此像未曾請來、今則太元帥諸身曼荼羅並諸靈像所要之書等、請來見到、雖云濤波猛沃新羅賊畔、越彼厄難、平達聖境、是則聖力所能也、伏惟皇帝陛下、樵德如天、佛日高轉、人之父、佛之化、悲群生而濡足、助佛囑而垂衣、以陛下

慈育、効祥靈像、敎希自遠新來、恰似符契、非聖誰測矣、常曉本謂、果三十年、經歷漢里、求佛法來、幸護國家、而緣唐朝不聽留住、隨使同歸、竊以一善此法敎、生而請來不任一喜一懼之至、附準判官藤原朝臣貞敏奉表以聞、幷請來法門等目錄一通、且以奉進輕黷威嚴、伏增戰越、常曉誠恐誠惶謹言、

承和六年九月二日　入唐學法沙門傳燈大法師位常曉上表

〔元亭釋書三慧解〕釋常曉、山州小栗栖路傍棄子也、稍長師事元興寺豐安、承和元年甲寅、入唐到淮南廣陵館、遇栖靈寺文璨、稟密敎、乃文宗大和八年也、璨者不空三藏弟子慧應之徒、妙明經律、深通秘藏、又謁花林寺三敎講誦大德、元年、請益密奧、照授以阿闍梨位、從受太元帥秘法、此法彼國不出都下、幾外諸州不許修供、照喜曉之才器、潛授焉、明年、歸申官、於小栗栖故里法琳寺修元帥法、齊衡之間、天下大旱、勅於神仙苑修太元法、白龍現幡上、大雨普灑、貞觀七年十一月晦逝、傳來經書六十卷、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年三月廿六日丁亥、僧正法印大和尚位宗叡卒、〇中略清和太上天皇爲儲貳之初、選入侍東宮、貞觀四年、高丘親王入於西唐、宗叡請從渡海、初遇汴州阿闍梨玄慶、受灌頂習金剛界法、〇中略尋至天台山、次於大華嚴寺、供養千僧、卽本朝御願也、至青龍寺、隨阿闍梨法令重受灌頂、學胎藏界法、盡其殊旨、阿闍梨以金剛杵幷儀軌法門等、付囑宗叡、用宛印信、便至慈恩寺造玄奧善寺智慧輪等阿闍梨、承受秘奧、詢求幽賾、廻至洛陽、便入聖善寺善無畏三藏舊院、其門徒以三藏所持金剛杵幷經論梵夾、請尊儀軌等授之、八年、到明州望海鎭、適遇李延孝遙指扶桑、將泛一葉、宗叡同舟順風解纜、三日夜間歸著本朝、

〔今昔物語十四〕壹演僧正誦金剛般若施靈驗語第三十四

今昔、山崎ニ相應寺ト云フ寺有リ、其ノ寺ニ壹演ト云フ僧住ケリ、此レ本ハ俗也、內舍人大中臣ノ正棟トゾ云ケル、奈良ノ西ノ京ニゾ住ケル、道心發シテ、出家シテ後、池邊ノ宮〇眞如親王ト申ケル人ノ弟子トシテ唐ニ亘ル、眞言ヲ受ケ習テ、法ヲ修行スル事不愚ズ、歸朝シテ後、彼ノ相應寺ニ住シテ、眞言ノ行法ヲ修シ、亦日夜ニ金剛般若經ヲ讀誦ス、而ル間貴キ思エ聞エ高ク成ヌル、〇下略

〔元亭釋書十六遊〕釋圓行、果隣法師之徒也、入唐從青龍寺義眞和尚受兩部密敎、承和六年、歸居靈嵓寺、

〔阿娑縛抄百〕圓行和尚灌頂事

進官錄云、其年日本承和五年臘月、得到長安城、歲次己未正月十三日、依奏奉勅經青龍寺、幸遇彼寺灌頂敎主法號義眞和尚、以爲師主、其大德則惠果阿闍梨弟子、同門義操和尚付法之弟子也、則閑三敎妙通五部、法之棟梁、〇梁下恐有脫字之所歸、圓行幸賴聖朝之鴻恩、師主之深慈、決疑兩部之大法、開悟諸尊之密法、閏正月二日、遂授阿闍梨位灌頂也、左衞功德使、幷僧錄和尚供奉大德金剛門徒悉集會道場、共致隨喜、

遊外僧入支那受禪

〔續日本紀文武〕四年三月己未、道照和尚物化、〇中略和尚河內國丹比郡人也、俗姓船連、〇中略初孝德天皇白雉四年、隨使入唐、適遇玄奘三藏師受業焉、三藏特愛令住同房、謂曰、吾昔往西域、在路飢乏、無村可乞、忽有一沙門、手持梨子與吾食之、吾自啖後氣力日健、今汝是持梨子沙門也、又謂曰、經論深妙不能究竟、不如學禪、流傳東土、和尚奉敎、始習禪定、所悟稍多、於後隨使歸朝、臨訣三藏以所持舍利經論咸授和尚、而曰、人能弘道、今以斯文附屬、〇中略船進還歸本朝、於元興寺東南隅、別建禪院而住焉、于時天下行業之徒、從和尚學禪焉、

〔元亨釋書六淨禪〕釋覺阿、世姓藤氏、幼上叙山、習學有聲、傍親文墨、善梵漢書、嘗聞商客稱宋地禪道之盛、奮然志遠游、遂以承安元年、其弟金慶踰溟達于杭都、乃孝宗乾道七年也、時佛海遠禪師踞靈隱、道價高輩下、阿至其室、遠問我國風未通語音、便書曰、國主無姓氏、號金輪王、一種系授未有移革、僧無進納、而講義高者賜度、風俗和順、奉佛歸僧、然無禪法、只講五宗經論、風聞德義、特詣函丈、願傳心印以度迷津、且如心佛及衆生是三無差別、離相離語、假言顯之、禪師乞垂開示、遠曰、衆生虛妄見、見佛見世界、阿叉書曰、無明因何而有、海便打、阿卽請遠陞座決疑、明年秋、游金陵、抵長蘆江、聞鼓聲忽然頴悟、始知佛

海垂手之旨趣、返靈鷲述五偈、呈所見、其一曰、求眞滅妄元非妙、即妄明眞都是錯、堪笑靈山老古錐、當陽拋下破杓、海印其所證、阿辭海書偈贈行、

（嘉泰普燈錄二十）日本國覺阿上人

覺阿上人日本國藤氏子也、十四得度、〇略中屬商者自中都回、言禪宗之盛、阿奮然拉法弟金慶、航海而來、歲餘始至、〔乾道卒卯夏也〕袖香拜靈隱佛海禪師、海問其來、阿輒書而對、後書曰、我國無禪宗、唯講五宗經論、國主無姓氏、號金輪王、以嘉應改元、捨位出家、名行眞、〇後白河年四十四、王子〇高倉七歲令受位、今五載、度僧無進物、而講義高者賜之、某等仰服聖朝遠公禪師之名、特詣文室禮拜、願傳心印、度迷津、

（明庵西公禪師塔銘）師諱榮西、號明庵、備之中州人、〇略中年二十八、夏五月乘商船到明州、與本國重源同入天台、九月共原歸國、以天台草疏六十餘卷呈、叡山法主明雲、時年三十八、迺宋孝宗乾道四年也、又欲往印度禮牟尼八塔、文治二年夏、重入宋境、時北虜強大、西域不通、遂止、船主告回、放洋三日、逆風俄起、反至溫州瑞安縣、自謂未究參訪、故風濤阻我、乃別商主直往天台萬年寺、謁虛庵曰、傳聞日本密教盛行、逕捷旨趣如何、對曰、初發心時、便成正覺、不動生死而證涅槃、庵曰、如子之言、與我宗無異、一語投機、群疑頓釋、親炙數載、庵曰、此山第一祖、西天吉祥三藏讖云、却後五百年有肉身菩薩東來受道、名曰榮西、汝既乘願輪而來、宜保任之、師恍如夢覺、自知前身爲三藏也、淳熙間、歲大旱、部請師禱雨、身發千光、燭天雨大澍、因號千光萬年寺、缺三門兩廡、師捨芝券三百萬舉工役、先是中天竺那蘭陀寺三藏室利跋羅之所造也、衆皆曰、梵語室利此翻吉祥、西公上字、其義相近、西天東域名義合符、莫非是歟、又修觀音院大悲寺、智者塔院、庵謂曰、菩薩戒禪門一大事也、汝遠來問禪、因以付之、并應器寶鈑柱杖白拂等、及圖迦文已下二十八祖、至虛庵相承凡五十三世、淳熙末、虛庵移天童、師亦隨之、又修天童千佛寶閣、紹熙二年秋、辭虛庵、庵付伽黎并書曰、日本千光大法師有靈骨、弘持此法不遠萬里入我炎宋、探賾宗旨、尋返本國、夢境恰二十年、今又載遊此方、相從老僧宿契不淺、志操可貴、不可不示法旨、昔釋迦老子將示滅時、以正法眼付大迦葉、二十八傳而至達磨、六傳而至曹溪、又六傳至臨濟、八傳至黃龍、又八傳而主余、今以付汝、汝當護持、佩此祖印、歸國布化、開示衆生、繼正法命、故傳衣以爲信、汝當爲東國之祖、遂辭庵歸國、〇略中六月〇建保三年晦日、〇略中至哺時坐椅安祥而逝、

（日本國千光法師祠堂記）太白名山甲天下、而千佛閣尤爲第一、後世欲過之、其材無及焉、蓋柱植緜三年、以爲未至誓往西域、求道二十八航海達四明、遊台山萬年寺、〇略中會虛庵敝公移主天童、因與僧行及建閣即東還、願有以助之、越二歲、土木果至而開成師之力、〇略中大宋寶慶元年八月九日、修職郎監臨安府都稅務虞樗記并書、

（興禪護國論）日本國千光院大法師西宿有靈骨、頓捨世間深重恩愛、從佛剃髮著僧伽梨、洪持此法、不遠萬里、航海而入我炎宋、探賾宗旨、乾道戊子年、遊天台、見山川國土勝妙道場清淨殊特、生大歡喜、嘗施淨財供十方學般若菩薩、〇略中尋復本國、〇略中恰二十年、〇略中今又懷舊遊復之、宿緣不殘志操玆深、不可不示法旨、夫昔釋迦老人將欲圓寂、以涅槃妙心正法眼藏付屬摩訶迦葉、乃至嫡々相承至於予、今以此法付屬汝、〇略中歸國布化末世、開示衆生、以繼正法之命、又授汝袈裟、大師昔傳衣爲法信、而表本來無物、然至六祖、衣止不傳、〇略中其風雖絕、今爲外國法信、授汝僧伽梨而已、又授菩

薩戒、〇略下

〇按ズルニ、此付法ノ文ハ懷敞〔盧庵〕ノ作ル所ナリ、

（永平開山道元和尙行錄）禪師諱希玄、後更名曰道元、京兆人也、〇略中貞應二年春二月、〔卽歲二十有四〕隨商船入宋著明州界、時寧宗嘉定十六年也、夏四月、徑登大白、于時派無際領景德禪師、無際一見使器許、〇略中未幾入以徑禮琰浙翁、跨台之小翠岩門見卓公、又謁惟一宗月々堂無象等諸大老、有問答機緣、師乎昔以氣自負諸方無嬰鋒者、是將理歸檄、有老璡者、謂師曰、子既徧游叢社、普參名宿、然天下第一等

宗匠尚言（淨）一人在、子見、彼必有、所得、于時寧宗以、淨公之道價高、當時、詔董、天童席、振、錫而依（嘉定十七年也）淨、和尚一見驚然器重之、（略）（中）寶慶三年冬、解、纜著、筑之前州博多、（異本作、著、肥之後州河尻、余行、河尻、則和作、著、河尻、非、是矣、）乃本朝安貞元年丁亥也、

〔永平寺三祖行業記〕初祖道元禪師

禪師姓源氏、諱道元、洛陽人也、（略）（中）遂從、明全、航、海入、宋、日本貞應二年癸未、大宋嘉定十六年也、掛、錫天童、（略）（中）始掛、錫于天童、時廿四歲也、不、依、戒次、欲、列、新戒位、師表書曰、此娑婆世界內釋尊遺法流布國、戒法已弘通、佛法位次、不、論、尊卑老少、先受戒者在、先座、後受戒者在、後座、蓋是七佛諸佛通戒也、何至、日本、大宗可、有、別異、天童一山住持、兩班前資、勸舊以、先例、尙定、新戒、其故先入唐諸僧如、于傳、敎弘法、至、于汝師翁用詳上人、盡著、新戒、蓋是國例也、大國小國之別異也、師又重表書諸佛敎法、依、國而豈可、異乎、一家之兄弟一佛之戒脈、都不、可、有、差異、先座先、後座後、支干分明、年月爭亂一寺不、能、斷、五山詳議、尙用、舊規、三表書曰、佛法偏、沙界、戒光照、十方、況乎經曰、今此三界、皆是我有、其中衆生悉是吾子、就、中此娑婆世界者、釋迦牟尼佛々主也、國已佛國、人皆佛子也、兄弟不、可、混亂、次位法爾具、佛法、世法皆任、正理、天神地祇不、昧、理非、此理若不、達恐是亂世也、賢者不、居、亂世、直人不、雜、誑者、佛家臘次已不、正者、王法正理豈可、明察乎、幸仰、中和之聖德、泣宣、倭僧之鄙懷、天裁若私伏乞、正、戒次、（取意）嘉定聖主被、下、勅宣云、倭僧所申有、其謂、須、依、臘次、自餘師名不、隱、叢林、倭國僧臘依之定了、遂掛、錫于天童、

〔元亨釋書（七淨禪）〕釋辨圓字圓爾以、字行、姓平氏、駿州藁科人、母稅氏、（略）（中）嘉禎元年泛、海、十寅夕而著、宋明州界、卽理宗瑞平二年也、先寓、城之景福律院、聽、月宗主之開遮、不、幾入、天童山、禮、癡絕冲、漸達、都下、跨、天竺寺月栢庭門、質、性具之旨、栢庭證、前學、卽授、台宗相承之圖、幷付、自撰楞嚴楞伽圓覺金剛四經疏鈔、於時笑翁堪領、淨慈、石田薰主靈隱、爾往來二開士之門、適寧退耕典、北山之賓、與、爾善語曰、輦下諸名宿、子已參遍、然天下第一等宗師只無、準範耳、子何不、承、顧耶、乎依、是登、徑山、佛鑑一見器許、未浹旬侍、巾瓶、晨昏參請、優柔飫厭、會中皆大龍象也、保寧覺卽庵掛、牌開室、曰東山慧西巖爲、兩版首、爾周旋三老而請益、倫斷橋、智別山、一環溪、敬簡翁、源靈叟、折方庵、寧兀庵、曇希叟之儔、預辨、衆事、爾咸莫、逆頗受、磋磨之功、五峯煨餘、佛鑑坐、瓦礫場、轉、大法輪、然天下指、凌霄爲、甘露之正門、蓋又得、人之多矣、敬叟簡棲飛來之北磵、望高一時、爾往謁、北磵、曰徑山執、不立文字之柄、拂、爾知解之塵、吾猶何言乎、延爲、上賓、佛鑑從容語曰、汝學海浩渺、比來我竹篦下一時乾枯、佗日歸本國、必於無涓滴處、橫、起波瀾、堅、無勝幢、發、揮吾道、須、踵從上乃祖遺芳、永利、未來際、淳祐元年四月、辭佛鑑、鑑出密庵師祖法衣、幷自贊頂相、與之、諸友送至、山下、特湘絕岸、欽雪巖二人、眷々來行在、仲夏發四明、孟秋著博多、本朝仁治二年辛丑也、居、崇福承天兩寺、盛倡、祖道、（略）（中）大相國（道家藤原）乃使、使招、爾、二月、入、京師、

〔元亨釋書（六淨禪）〕釋法心、過、壯歲、出家、不、知、文墨、聞、衲子之稱、宋地禪行、駕、商船、入臨安、徑登、經山、見佛鑑禪師、鑑於、圓相中、書丁字、示、之、心止、席下、單提研究、性堅硬、耐、禪座、骨殿骨腫爛而不、撓者九年、初持、丁相、於萬物中、現、丁字、心不、屑、漸經、歲序、始得、平穩、歸朝居、奥州松島、

〔鷲峯開山法燈圓明國師行實年譜〕師諱覺心、號、心地、信州近部、又曰神林縣人、姓恒氏、又曰常澄氏、（中）（略）己酉寶治三年三月十八日建長改元、（宋淳祐九年也）師四十三歲、正月十六日、發、入宋志、拜辭勝林順有、偈云、（略）（中）學道工夫須、著、力、從門入者、被、人瞞、三條椽下容、身易、六尺單前參、話難、退步遠觀明歷々、運思近覓黑漫々、銀山鐵壁雖、無、路、透出透來且自看、（略）（中）二月、依、願性成、祕從、紀州由良浦發船、赴九州、三月廿八日、從、博多津、附、船跨、宋、先禮、補陀、次到、長津、上岸與、覺儀觀明等、結、伴頂、包行脚初陟、經山、參、住持癡絕和尚、寓、一單於僧堂、昕夕孜々未、嘗暫出、堂、機語不、契、庚戌、淳祐十、本朝建長二、師四十四歲謁、荊叟班于道場、過、夏夏末東游、四明、駐錫育王、寓、衆寮、得、鰻菩薩舍利等傳、壬子、淳祐十二、建長四、師四十六歲、上、天台、禮應眞、過、石橋、供養有、感、偶睹、壁間所、書、念起最病不、續是藥正抓著瘁處、歷參訪尋、癸丑、寶祐改元（理宗皇帝）建長五（道元入寂）師四十七歲、二月廿八日、登、大梅山、拜常

禪師塔遞遞本國源心者、以曩嘗同參遂問之、參此方還遇明眼知識也、無源心云、無門和尙一代明師應往參見、乃率抵抗之護國無門才見卽擒住曰、我這裏無門從何處入師云從無門處入門、問汝名什麼師云覺心門卽作偈曰、心卽是佛佛卽是心、心佛如如、亘古亘今、酬對數四蒙印可門復召曰、汝來太遲生則擧起扇子曰、見麼師於言下大悟、九月廿八日也、遂問云、拋却一切以何示人門曰覷箇覷底師禮辭門以對御錄二冊幷袈裟一頂付師、甲寅寶祐二、建長六、師四十八歲三月廿七日重謁護國告回鄉意無門用達磨寒山拾得系贊共禎付之二十九日請示末後句門曰便了師便炷香禮拜門復以月林錄幷無門關授之、〇中略師禮辭而出跨商舶以歸尋至博多津焉時六月上澣也在宋首尾六年從葦屋津解纜紀伊湊上岸徑謁高野禪定院勇公卽日擢爲第一座、〇中九師在惠峯會裏居紀綱職久矣告聖一國師曰入宋城歷遍諸知識發明心地利濟群生聖一曰大宋有我師是七世善知識也汝入異域參見佛鑑必得祈證聖一付指敎一簡師懷之登徑山佛鑑已歸寂以爲遺憾矣其書今在興國矣

○按ズルニ覺心入宋ノ事ハ此他ニ白雲禪師住持雲林師啓七十五翁ノ撰ナル圓明國師塔銘及ビ元亨釋書ニ載セタリ、

〔本朝高僧傳十九〕洛東勝林寺沙門思順傳

釋思順號天祐不祥姓譜初學台敎三觀十乘咸罄其蘊寄思禪法航海入宋歷參諸老及見北磵簡禪師命居侍局坐臥著精而有所得既承印記一日告辭簡公贈偈曰粟散王都藐莫知星分碁布海中泜韓未遠須重譯九土雖中共秉彝但見神僧巍跨水弗聞君子陋居夷由余季札高千古更復區々槩蹤爲在宋一十三載歸朝就洛東艸河栁勝林寺唱大慧之禪都下嚮風者多、〇中略

洛北妙見堂沙門道妙傳

釋道祐不詳其氏族筑前州博多人嘉禎年中泛海入宋偏謁諸善知識後依徑山佛鑑禪師研幾參訊一日入室鑑問曰日本國裏有禪也無祐應聲曰大唐國裏亦無鑑深肯之從此一衆矚目淳祐乙巳夏、

告辭寫鑑頂相需讚乃題曰從來震旦本無禪少室單傳亦妄傳卻被道祐等閑覷破便知老僧鼻孔不在口邊漫把虛空强描邊好兒終不使斧鉞妙歸朝隱逸乎洛北妙見堂不與世接建長八年二月五日、寂於東福延壽堂、

〔淨智第四世法海禪師無象和尙行狀記〕文曆元年甲午誕生相城人姓平氏諱靜照字無象謚曰法海禪師弱歲出家適在洛之東福而博學書傳有時斂念於此事聞宋有大善知識建長四年壬子遙渡海到宋徑參徑山佛海禪師卽於言下有省因而嗣法傳衣此年十九歲、〇中略祐四年〇寶丙辰春三月辭師有頌徑山又有送行偈無學亦有無象號之頌矣徑山以法衣自書年月日而付師傳到本朝留在洛之佛心正宗塔下纔侍師徑山五載矣景定元年庚申掛錫於育王山司知賓職有賀頌堅棠林作序虛舟跋焉、〇中略咸淳元年乙丑辭虛堂有頌云十載從師幾訴擧到頭一法不曾傳有無句蕩家私盡萬里空歸東海船本朝文永二年歸朝凡在宋十四年師爲育王知賓之時臨時有禳災祈禱調製疏語什行者以令奉師誦之宋人欲試師之才識竊卷白紙而轉入可漏師喝歎詞了開疏見之白紙也豫識他嫉我於稠廣之中令我慚惶於是暗誦恰如本疏更無差升時有縉紳之曹旣知此擧對彼疏本見之一字無差法事畢而闔衆大奇焉且擎本疏入坐相俱賀之絲之一時諸大老有賀頌以傳于今當斯時也有日本圓海者親聳耳于堂中視之盛事自誓云我歸朝之日建寺奉師永結檀緣歸敬者甚矣後果與師同船歸朝然而圓海留洛陽師歸相陽於鎌倉常葉而建寺曰龍華山眞際精舍今淨智本庵是也圓海亦懷前誓竟布金買六孫王之遺廡地以建寺、六孫王者清和天皇之王子桃園親王也請師以居焉號平安山佛心寺者是也、

〔本朝高僧傳二十淨禪〕肥後大慈寺沙門義尹傳

釋義尹號寒巖順德帝第三子也、〇中略建長癸丑〇五年秋元公〇之道戢化尹卽卷袖遊函夏時年三十七、偏歷諸山謁無外遠虛堂愚退耕寧等諸老皆蒙優稱又躋熊耳峯禮初祖塔三千五百拜、〇中略在宋十餘年而歸首寓博多聖福寺繼如肥後州創如來寺、

〔本朝高僧傳（二十三）淨禪〕洛東勝林寺沙門瓊林傳

釋瓊林、文永年中入宋、參經山虛舟度和尚、舟付傳法偈幷衣、歸居艸阿、韜晦不出、高尚天祐順公之風、嘉元年中、虛舟和尚語錄附商船至、林募緣壽梓、爲之序曰、瓊林昔年絕海遊宋、往來吳越、多侍先師於武林湖山間、每聞火爐頭話、間舉平昔提昌、以其未許學者流通紙襖所錄、才竺峯冷泉兩會語耳、別德三丁年、不見大篇全章、爲限痛切不意、忽獲八會全錄、

〔東福第十世勅賜佛印禪師直翁和尚塔銘〕第十世祖者（東福寺）諱智侃、字直翁、上州人源氏子、寬元乙巳歲誕生、幼而出家爲僧、早聽台教、兼學密宗、既而有教化別傳之旨、更衣遊方、初參建長蘭溪隆禪師、隆一見而器之、侍於左右、且有年矣、俄有南詢之志、乃禮辭而入宋國焉、偏參諸老、乃知法无異味、歸來再侍蘭溪於建長寺、凡有上堂入室、普說小參等語編成錄矣、師再欲入宋國焉、建長因付以所編錄、且欲呈似平生參見諸老、而求印證、而師初謁於大川濟禪師、求校正矣、逮乎歸來、以校正錄呈示蘭溪、溪見而不喜矣、師拂袖便出矣、雖然於後刊行於世者、卽玆本也、（略）中忽然一日付屬後事、（略）中乃端坐示寂焉、實元亨壬戌（二年）〇夏四月十六日也、

〔眞源大照禪師龍山和尚行狀〕師諱德見本名利見、總州香取人也、以郡有龍山、自取爲號、母夢吞日而有身、十三月而生、卽弘安七年歲次甲申十一月廿三日也、（略）中時方師二十二歲、（嘉元三年）〇遂去附商船、抵四明、當乎此時、高麗江南大理等諸國皆爲蒙古所一統、獨吾日本不服、故將不許容、又聞爲釁其抽分之直、不唯禁止商客上岸乃至雲游衲子、亦不得入城門、或有犯者、例以細作人坐罪、師誓曰、古人爲法亡軀、今正是時至也、乃敢於夜半就寢之頃、登雉堞以投身城中、偶墮豪富家庭之中、守衛捕而縛之待旦、家主鞫問因何至此、師求筆紙書曰、我在日本、遠聞天童和尚道風、故來求出生死道也、家主夫婦偕素欽佛法、拜東岩和尚得授衣盂、時岩主天童以爲吾師道風遠被外國、甚喜乃白官、以自宥免罪、攜至太白、具陳前事、東岩亦喜其志於道之太至、而取錄之、改上字爲德、令歸堂大德、十一年、慶元路官與倭國有釁、一城盡灾、由是巡撿於諸寺捕倭僧、天童尤遭重責、既得數十人、載舡船以送之大都、師亦預其數、編置於洛陽白馬寺、凡此地禪苑自來行入室商量、撥牌過禪之規、一夏間或不能過一則話、而退者固多、倘或過三五則至十則過之者爲上科、師獨過百則公案群衆或驚或忌、既而歸澗欲再參東岩、岩既歸寂、竺西和尚繼席、請師職待香事、解之後復游吳門、時東州主虎丘而古林寺隆祖塔主賓相忘、旦々夕々、敲唱激揚禪流之挾天資、以有志斯道者莫不依此、而師頡頏其間、古林最喜、以爲有道韻、師猶自不止上江西疏仰黃龍目擊而過、駐錫於匡廬東林、俾掌藏鑰職、解復游豫章、遡脩川至分寧、高平山董雲巖席、留師分坐、平山遷黃龍、時以雲岩與師厚遇、復會分坐說法、四衆欣悅、職滿閉房掩戶、効陳尊宿之風、天曆己巳、鄉之豐山萬壽虛席、檀越大友公、遣寺僧本禮首坐爲專使、敦禮請師欲爲住持、是歲旱、江淮大荒、流民盜賊捷塗、師以行路難固拒其命、且經營壽龕以岩寺單寮決終焉之志、邑之兜率乃悅禪師唱道之地也、久廢不振、東堂安初心白知州起師補之、固辭不可、遂出赴命、寧州官員諸山歡呼聲嗔、相送出州、旗帳相連、直至雙井、瑞世之賀自古未有如此榮也、（略）中無幾歸心猶動飄然而起、買舟崑山以至博多、實日本貞和五年歲次己丑、時師六十六歲也、

〔雪村大和尚行道記〕師諱友梅、字雪村、自號幻空、越之後州烏鄉人也、世姓源氏、（略）中一夕母夢、（略）中遂有身、果以正應三年庚寅誕焉、（略）中時本邦裔子爭先入元土、參知識、決大事、師纔十有八歲、（德治二年）振錫百城之策、泛海大舶著岸觀光二年、

岷峨集云、始吾來自扶桑東、二年、京國觀光、罷杖頭發崧山、顚路借滸陽歷叢社、

搢紳先生講習琢磨之譽、藉甚而四方參遍到處叢林戶知倒履出迎、風望端肅警動人心、（略）中機鋒威稜庸流畏避、當代名宿莫弗參扣也、端元叟、陵虛谷、東嶼熙、機賓主互換矧、亦朝端名儒乎、一日訪趙氏子昂於翰苑、師揮李北海邕之筆勢、見而驚之、寵貺以一大麝煤、稱得八法、而後登潮（一本作湖）之道場山、

執侍堂頭叔平隆和尚、○略中博學多聞見德尤夥矣、命以六藏關鑰、握塵據猊座、○略中百王一種近○遞恐誤代號外國、不思眼往々罪在吾人、

蓋大元滅宋取天下、纔九十二年、以一統欲及海外國、師之來、師之遭誣者一之心而已、以故一例刑籍國師於雪川之嶽、鞠勘万端、湯火條治不可具陳、有童子曾參無厭足鑼湯爐炭起清風之句、叔平以師故竟亡於獄中、

初蒙古一例刑日本人、師天性華音、叔平以唐人欲令免刑、有苦訴者連累罪之、師書偈幸免矣、而刑吏加白刃師俄朗誦佛光禪師子元遇兵一偈云、乾坤無地卓孤笻、且喜人空法亦空珍重、大元三尺劍電尖影裏斬春風、由是獲免名天下寔大元皇慶二年二月七日、師時廿四歲矣、○略中宥在長安、又三年而朝議遠竄逐於蜀、師志不少屈、○略中諷咏嘲弄十暑不獲歸、槨桑万里念々奮飛、自非風抱大志爲法忘軀、豈臨大辟絨其口受彼大苦而忍死於此、蚤叢魚鳥之荒僻乎、○略中

兩川天官老儒多令佳子弟鼓篋於函丈、受指畫口講者爲不鮮矣、偶有大赦召還、○略中留連長安、復三年矣、一旦老親在夢、歸興浩然茂古林送倡曰、道人海外來、歷涉幾難阻、不唯凌驚濤、益遭世網苦、脫身万死中、尅志在佛祖、有如百煉金繞指色可親、玄機歷落如轉丸、迅手展托胡爲難、万人叢中獨穎拔、一鏃解破三重關、來○來一本作レ皐兩臉鐵色黑、欲話三生緣未得、茶歐放下便言歸爲省慈親走匍匐、床頭主大不假舉、一句臨岐聽吾語、水宿風飡宜善爲、扶桑夜半金烏飛、時泰定四年丁卯○我嘉曆二年秋游九月也、无曆元年戊辰、○我嘉曆三年文宗即位、有命住京兆長安南山翠微寺、

〔孤峯和尚行實〕師諱覺明、號孤峯、奧州會津平氏之子也、○略中應長元年辛亥春歲四十、附商舶入元土、以大元至大二年○二年當作四年舶適到温州、初遇翠徹時、長老號飽參、今亡其名、蓋兀菴寧禪師之嗣也、仍語話次、徹曰、佛不出世祖師不西來時、一著汝作麼生會、師曰、車不橫推、徹曰、只用黃葉止小兒啼耳、師聞之、

平生伎倆蕩盡無餘、瀎不覺遍體汗流、始知從前胡亂穿鑿狀來也、居無何去見本中峯、觀無見義斷崖、岫雲外茂古林諸大宗匠、實當世正法眼藏也、悉被賞職、殊見中峯於天目參禪累日、峯居常示之、以趙州因甚道箇無字也、師乃下語數次、自然抓著痒處、遂與師摩頂、以至惠法衣、次陟天台參無見、見延之居第一坐、稱其所證、○略中末後至護國寺、禮開山佛眼之塔、蓋師之祖翁也、彼住持者、請師補知藏職、凡遍歷飽參、自謂法無異味、乃賦歸歟、還參能州洞谷瑩山瑾和尚、欲探洞上宗風、○略下

〔扶桑禪林僧寶傳〕八建長寺古先原禪師傳

禪師、諱印原、字古先、世居相州、○略中年十三、即剃髮受具足戒、自時厭後偏參諸師、咸無所證入、乃慨然嘆曰、中夏乃佛法淵藪、盍往求之乎、於是不憚鯨波之險、奮然南遊、初參無見、覩和尚于華頂峯、覩語之以大事因緣、無見曰、汝緣不在斯、中峯本公現唱高峯之道于天目山、爐韛正赤、學徒無不受其煆煉、此眞汝師也、汝宜急行、師即往、謁中峯、峯一見遽命待左右、師屢雖見解、峯呵之曰、根塵不斷、知纏縛何、師退涕泣、至於飲食皆廢、峯憐其誠懇、委曲示誨、師聞之不覺通身汗下、無晝無夜未嘗暫捨、積之久、一旦忽有所省、現前世界一白無際、急趍丈室告峯、峯曰、印原撞入銀山鐵壁去也、峯曰、既入銀山鐵壁、來此何爲、師超然領解○中略師辭去、峯再三囑之曰、善自護持、當是時、虛谷靈、古林茂、東嶼海、月江印、諸大老各據一方、師咸往謁焉、諸老見其證悟親切、機鋒穎利、以叢林獅子兒稱之、會清拙澄和尚將東渡、師輔之、其後澄化行於遐邇者、皆師之力也、○略中甲寅○應安七年春正月師示病、○略中遂端坐泊然入滅、世壽八十、僧臘六十又八、

○按ズルニ、釋氏稽古略結集ニ、日本禪師諱印原、字古先、相州藤氏云々ト記シテ其傳ヲ擧ゲ、其文略禪林寶傳ニ同ジ、名聲彼ノ地ニ藉キシコト知ルベシ、

〔大梅山開山月林皎禪師行狀〕師諱道皎、字月林、稱獨步叟、又稱圓明叟、晩稱西山暮翁、族源氏、村上天皇第十一世、久我中納言具房之子也、○略中元亨辛酉○元年冬、師將有南詢之行、上皇、○園花延師受衣盂、其次日上皇賜宸翰、其詞曰、昨夜受業之儀、感悅無極、縱雖隔萬里波濤、同風之旨何有遠近之義、國師

後日可有其號、當時非自專、尤以遺恨併期再會之時者也、明年壬戌、入元國、師實歲三十也、時古林休居老人住金陵保寧、天下學徒輻湊、人以爲不異勇禪師、時師銳志操戈、直入鳳臺之室、一句投機、休居曰、汝知主人翁麼、師曰、不知、休居曰、因什麼不知、師曰、不曾道皎不知佛祖也、不知進前叉手立、休居曰、佛祖爲什麼不知到這裡爲什麼不肯住、師以兩手作擎勢、拋向面前、休居曰、毘婆尸佛早留心直至、而今不得妙、師曰、和尚年老心孤、休居呵々大笑、師告辭造大仰古心誠禪師會下誠付之以典藏之職、未幾再歸鳳臺省勤、休居問曰、近日行履如何、師叉手當胸、休居曰、未在更道、師曰、再犯不容、休居曰、三級浪高魚化龍、痴人猶戽野塘水、師喝一喝、休居曰、過在什麼處、師連喝兩喝、休居曰、過在老僧、師曰、謝和尚老婆心切、休居一日坐次問左右曰、斬爲兩段時作麼生、左右酬答不得、師後而至、休居舉前話、師曰、勞而無功、休居曰、話得是從是師資道契、當本朝嘉曆三年者、天曆元年戊辰正月廿三日、大元天子文宗賜號佛惠知鑑大師、二年己巳、休居舉師居後板、冬節秉拂提唱之語、聞者無不驚懼、故無想和尚寄語曰、道人來扶桑、肝膽金石堅、〇略中師解職之後經日不久、休居告終、師沐休居之提誨凡八年、深契其旨、休居摩胸告衆之日、以法衣付師、故了菴有語曰、月林首座扣道于休居老人之室、深契厥旨、二老如是之語、蓋證休居有妙語傳而師無承虛之弊也、師有拈古之作、休居跋其後曰、此錄乃眞正道流深證實語之能事也、異時流通祖道而能起學者之疾于膏肓、不復疑矣、庚午之春、〇元德二年歸本朝、結茅菴於城西法華山寺傍扁妙峯、

〔園太曆〕延文二年正月十六日

右大梅山長福禪師開山道皎和尚者、於本朝高峯佛國禪師受業也、至大唐古林佛禪師法嗣也、元亨年中、花園院御受業之間、被重師資之禮國師號事、追必可有其沙汰之由、被染宸翰訖、而忽奏南詢之志、遍歷大唐、十餘載歸朝之後、再參仙洞、如舊彌以御歸依之間、被建立御影堂於當寺、眞和元年有臨幸、

〔本朝高僧傳三十三〕上州吉祥寺沙門圓月傳

釋圓月、號中巖、相州鎌倉人、姓平、土屋之族、〇略中文保二年、到太宰府、將入元國、州牧不許、上洛歸寓萬壽絕崖禪師會裏、〇略中正中元年秋、遂達江南、時年二十五、當元泰定二年〇二年恐誤也、是冬、寓雪竇值鄉友全珠侍者、同往吳興參靈石芝公、於天寧、明年、見古林茂於保寧、冬謁濟川楫於雲巖、見龍山會在單位、以故鄉英傑日就參敲、四年夏、往吳門、參絕際中公、甚受温顧、辭謁雪巖欽禪師於淨慈、文曆元年、參東陽輝和尚於百丈、命司記室、時建天下師表閣、月作棟梁文、冬節秉拂陽大稱賞、不幾陽密付受去遊諸刹、借路廬阜、訪龍巖相壑二老、行過鄱湖、見竺田心於永福、所到諸老待以高賓、三年春歸吳門、絕際既逝、作文祭之、初夏偕玄一峯、遍于淛東、駕日本船著博多、本朝元弘壬申歲〇二年也、

〔不聞和尚行狀〕師諱契聞、號不聞、武州河越人、父平氏、母一夕經行、俄生師廊廡之間、乾元辛丑〇辛丑恐誤、即元年也、臘月初八日也、〇略中二十五歲、〇嘉曆壬寅元年附商船到明之家海、復買小舟到台州寧海、陟天台、濟石梁、參覩無見於華頂、游浙見海東嶼於靈隱、謁芝靈石於淨慈、一日遊錢唐江、時官捕異方之人、獲師送於武昌、邂逅拜心竺田于鄂渚、以遂夙心、有詩題館壁云、孤笻遠人異鄉雲、滿耳語音渾不分、唯有簷頭深夜雨、蕭々猶似舊時聞、會高昌王子謫官此州、讀詩有感、召見歡甚、請有司赦之、遂養爲義子、賛內宮所賜釋氏金縷袈裟付師、蓋以撫育遠人之心矣、師受而無喜色、送與帝師殿講主、師主羅罪日誦金剛經一百部、又瀝指血寫法華經六部、高昌王子收以藏之、元文宗皇帝爲梁王時、從金陵謫邸幸武昌、到帝師殿、適講師不在、唯師一人看守而已、王欲展拜、師遽起避之、王推師就坐、且曰、朕拜爲佛氏者、必非拜卿矣、師不獲已受展拜、高昌王子赴召於燕京、欲師俱往、辭以尋師訪道之志未償、而促裝往金陵、謁茂古林于鳳臺、一時名師如卯月江恩斷江、道竺源諸老皆從之、咨決心要、復之杭再參南岸靈石、居三載、石屢命以辨事不從、然寅夕罄誠問道、三十三歲、東明日附書於商估入海者招師、師得書泣辭石、附回舶而東歸、

〔本朝高僧傳三十一淨禪〕京兆東福寺沙門士偲傳

釋士偲號友山始名士愚字友雲後改今名姓藤山城洲山崎人也略中嘉曆三年與法兄正堂顯公同遊大元時年二十八周歷兩浙參敲樵隱逸月江印南楚說古智哲牛石砥無見覩了菴欲夢堂噩之門皆有所啓迪最所密邇者月江南楚也謁月江于眞淨略中去見空林果公于松江時有水災吳中禪刹鐘鼓聞爾行脚者無納屨之地空林念偲異邦之客款留過冬遇之如骨肉因徑來其門殆七年矣是時國僧在元者若石室玖無夢清此山在無涯浩一峯玄古鏡千古源邵等互加鞭勵至正四年偲在姑蘇承天南楚會中居後版冬至秉拂偲錄呈月江江贈偈賞之南楚贈以長偈有序曰扶桑友雲首坐命居第二位說法機圓語活有作者之氣槩職滿東歸異時當大有爲以恢吾宗吾尚翹首東望故說偈以張志云略中至正乙酉夏與此山在公同理歸楫經兩月至博多津當此方貞和元年尋入洛陽

〔本朝高僧傳三十八淨禪〕丹州天寧寺沙門周及傳

釋周及號愚中濃州岐阜人藤姓略中曆應十四年恐四年誤秋乘商船入元明州大守鍾萬戶以爲賊船舳艫數千遮于海上商主通書大守益疑踰年防嚴船中水盡人皆將死及與同侶修圓通懺摩法以禱雨水密雲忽布甘雨大降船中數百人各滿器得活鍾氏奇之許商賈貿易有一商客聞及爲求法來夜棹小舟迓及登岸時月江印禪師居曹源兼程進謁晨參暮叩唯恐不及印公視其舉措兀々如癡書愚菴二字拜偈以贈之及以爲號後自改菴爲中略朝廷勅金山修水陸會了公留及典經藏月江楚石夢堂諸老寄偈賀之石室玖龍山見時々往來互加琢磨及有癸亥集了公序其首儒官虞伯生跋其尾名聲廣達叢林至正十年我正平五年了公示微疾謂及曰來歲孟春吾必取滅殘喘未絕時子速歸日本中略中明年孟春卽休喪閱三月中旬發明州初夏著博多本朝觀應二年也龍山見喜及還相伴上洛直抵天龍拜覲夢窓國師國師欣然慰勞

〔東福四十三世性海和尙行實〕師諱靈見字性海姓橘氏信州橫山縣人也略中師常嘆曰我偏雖參知識心猶有不慊也縮閒吾宗盛支那當入彼地質所悟憤然便于海船入元國冬十月達于明州漢江時順宗至正二年我興國四年也浙東浙西江南江北之勝槩名跡皆攸游歷也初寓嘉興府天寧寺主者陵谷識其機用司藏秉拂兼游印月江了卽休源竺遠等諸大老門蓋自謂無如吾本邦虎關禪師者徑欲歸本朝先於徑山正統菴爲虎關禪師入牌至正十一年三月解纜五月至博多時本朝觀應二年也

〔扶桑禪林僧寶傳八〕佛頂大拙能禪師傳

禪師諱祖能號大拙俗緣藤氏相州鎌倉縣人也略中及大川圓覺寺住持寂後辭父母父欲留之母曰汝既出家乃佛弟子也且參方大事非我所可止也行矣無慮師欣然杖策至博多然膂香祈於圓通大士願早見道率同志數十人汎海達福州當大元至正甲申歲興國六年也初登鼓山繼至溫之江心見無言宣公略中去謁千巖長和尙於伏龍山略中未幾居版首一夕坐至五更聞鐘豁然大悟黎明具威儀入丈室巖望見遽問曰大死底人卻却時如何師進前巖頷之付以中峯國師法衣時至正丙戌六年也遂辭巖謁印月江欲了菴泰行叟證無仰貴無用諸老俱有贈言至正十六年十一年三月解纜五月至博多時本朝觀應二年也

〔隣交徵書二篇〕送壽上人還日本序

克新仲銘

日本壽上人將返其國乞言於嘗所遊者而屬予序上造詣之深蓋不言可知矣略中夫上人由中國而還也宜知中國之事諭其國人而中國之事浩以繁非上人所能悉然則吾所宜言者莫大於是歟其恭共卽字惟我皇元奮起朔方撫有諸夏四夷八蠻罔不臣服幅員之廣疆宇之大雖三代無有也略中禮樂文章紀綱制度燦然可述漢唐而下無有也著令西天佛子爲皇帝師略中今上人之還也有問焉則以斯言告之使而國之人知越裳氏之言爲不誣也上人自號椿庭典藏秀之天寧端恪勤敏有志異日其將鳴南堂之道於日本也歟椿庭名海壽一號大杯南遊元留二十一年源公尊氏之季子云禪寺僧竺仙法嗣眞和中

〔扶桑禪林僧寶傳十〕汝霖佐禪師傳

禪師名良佐、字汝霖、俗姓藤氏、遠州高園人也、○中略嘗遊支那、偏參名宿、掌書記于蘇之承天寺、繼同五山諸大老入鐘山、點校毗盧大藏、其同袍皆畏而愛之、善屬文、有文稿一卷、翰林學士景濂宋公跋其後云、右日本沙門汝霖所爲文一卷、予讀之至再、見其出史入經、旁及諸子百家、固已嘉其博贍、至於遣辭、又能舒徐而弗迫、豐腴而近雅、益歎其賢、頗詢其所以致之者、益來遊中夏者久、凡遇文章鉅公、悉趍事之、故得其指教、深知規矩準繩、而能使文字從、職無難也、汝霖今汎鯨波東歸、以文鳴其國中、蓋無疑矣、嗚呼汝霖禪家之流也、蕩空諸相、祖五蘊四大、猶爲土苴、況身外之文乎、苟執此而不遷、或將與道相違矣、雖然汝霖偏參名山、精于禪觀、其平此義未嘗不知之、○中略時明洪武九年○我授二年春三月也、

〔本朝高僧傳二十淨禪十七〕京兆寶幢寺沙門良佐傳

釋良佐、一作周字汝霖、姓藤、遠州高園人、自少出家奔遊華夷、宗說該道、兼長屬文、聲喧叢社、應安元年、與絕海津公俱入大明、掌箋翰於蘇之承天寺、繼同五山諸大老入鐘山、點校大藏經、同胞皆畏而敬之、又遇文章鉅公研精翰墨、翰林學士宋景濂見佐文稾、而大賞跋其尾焉、太祖召絕海汝霖於禁殿問熊野三山事、賚賜甚渥、洪武九年春同絕海歸、

〔佛智廣照淨印翊聖國師年譜〕建武三年丙子、師諱中津字絕海、字乃全室和尚所命、自號蕉堅道人、土佐州津野人、父藤氏、○略應安元年戊申、師年三十三歲、大明洪武元年二月、航溟南游寓杭之中竺、依全室禪師甚器重之、命俾作燒香、○略四年辛亥、是歲登徑山省全室、和尚延以後堂首坐、師辭不就云々、永和二年丙辰、師四十一歲、大明洪武九年春正月、大祖高皇帝召見英武樓、問以法要、奏對稱旨、又召至板房、○略詔許還國云々、

〔空華日工集〕應安三年十一月三日、與東藏主回自江南、出示諸老送偈、且云、江南大亂、佛法之危、莫甚於斯時、中端侍者、中津侍者、皆無恙、

〔蕉堅稿序〕日本絕海禪師之於詩亦善鳴者也、壯歲狹囊乘艘泛滄溟來中國、客于杭之千歲嵓、依全室翁以求道、暇則講詩文、故禪師得詩之體裁、清婉峭雅、出於性情之正、雖晉唐休徹之輩、亦弗能過之也、禪師乎常所爲詩、凡若干篇、其徒等聞哀爲一帙、題曰蕉堅稿、來求予序、其卷首、余謂禪師三住名刹、據大床坐、以直指之道、開示學者、望重於海內、禪師之聲、於詩、猶土苴耳、○略永樂元年倉龍癸未十一月既望、僧錄司左善世道衍序、

〔翰林胡廬集〕散說

初月潭微時、與寶覺禪師邂逅途中、禪師好相人見月潭壯貌、謂之曰、必貴、月潭乃謝曰、誠如師言、不敢忘德、及其貴、不知禪師處、是時禪師年尚壯、懷南遊求法之志、附海舶入大宋、留者二十年矣、月潭慕禪師德、以其東歸、○略請禪師爲開山始祖、

〔兼敦朝臣記〕應永九年七月四日乙酉、向右金吾禪門、數刻談話、有飲食、被談云、去年自北山殿○義滿足利遣唐使遁世法師、無爲渡唐、歸朝已著筑紫之由注進到來、珍重云々、誠希有事歟、

○按ズルニ、當時僧徒ノ國命ヲ奉ジテ、彼國ニ渡ル者ヲ稱シテ遣唐使ト云ヒシコトハ、看聞日記等ニモ見エタリ、

〔明史三百外國二十二〕日本

良懷○懷誤良氣沮下堂延秩、禮遇甚優、遣其僧祖來奉表稱臣、○略中是年○洪武七年我應安七年七月、其大臣遣僧宣聞溪等、齎書上中書省、貢馬及方物而無表、帝命却之、○略中九年四月、遣僧圭廷用等來貢且謝罪、○略中永樂元年、又遣左通政趙居任行人張洪、僧僧道成往將行、而其貢使已達寧波、○略中十八年○嘉靖七月、義晴貢使至寧波、守臣以聞、時不通貢者已十七年、○略中明年二月、貢使碩鼎等至京、申前請、○按ズルニ、南朝ノ征西將軍ノ府幷ニ足利幕府ヨリ屢、通信ヲ爲シ、其際皆僧侶ヲ以テ使トセシコト見ルベシ、

遊外僧爲使節入支那

〔善隣國寶記中〕予○僧周鳳按國史、○中略大將軍源朝臣義滿、便以肥富爲使者、始通信書獻方物、故大明建文帝、遣禪敎長老天倫一菴來、將軍又遣密堅中、隨天倫一菴行、船未達大明、而建文帝內難、叔文燕王卽位、改元永樂、堅中能通使命而歸、從此連年、兩國使者往來憧々、

〔隣交徵書初篇二〕日本廬山天台講寺照琛侍者、奉王命來覲天朝、被寵賚還國、道經靈山、以字見請、予字之曰大用、期爲吾宗之闡法人也、就書偈以策進、

唯實

拾得自身無價寶、穰々降雨不須求、世間琛貝都難並、例用橫拈得自由、右竺住山惟菴唯實永樂二年（我應永十一年）春正月十有三日

〔相國寺文書〕勅日本國正使圭密副使中立爾國王源道義、○足利義滿忠賢樂善、上能敬順天朝、恭事朝廷、下能祛除寇盜、肅清海邦、○中略今爾將王命遠至京師、達王悃款、敬恭使職、朕甚爾嘉特賜勅奬勞仍賜時果四品、爾其受之、故勅、

永樂五年○我應永十四年五月廿五日

○按ズルニ、圭密等ハ卽チ相國寺ノ僧ナリ、

〔善隣國寶記中〕同○永享五年大明諭日本使

皇帝勅諭日本國使道淵、爾究通佛氏之旨、曉達君臣之義、在彼境內、超於群倫、比者以其國王之命、遠涉海波、來修朝貢、○略中特授僧錄司右覺義之職、俾歸本國住持天龍寺、○略中

宣德八年六月初六日

同八年

皇帝勅諭日本國王源義敎、○略中今遣使中誓等奉表來朝、幷獻方物、禮意勤至、○略中

正統元年二月初四日

寶德三年遣大明表

日本國王臣源義成、○略中方今以允澎長老爲專使、以僧芳貞爲綱司、奉問皇家之安否、兼貢方物之不腆、○略中

景泰二年歲次辛未秋八月日、

日本國王臣源義成

〔允澎入唐記〕日本國寶德三年辛未十月二十六日、遣唐專使允澎、綱司芳貞等辭京、癸酉○享德二年四月二十日、本國一號船、曉泝浙江、平明達寧波府、乃大明景泰四年癸酉夏四月廿日也、內官陳大人、資坐次第領之、予居九號房、九月廿七日、官命入鴻臚寺習禮亭、習朝參禮、廿八日朝參、長安街、玉河東堤、玉河西堤、長安門、承天之門、端門有二象、午門、掖門、左提門、奉天門、見皇帝官人唱、鞠躬拜、起叩頭、起平身、跪叩頭、快走闕左門、賜宴、宴罷、又趨端門、跪叩頭而出、謁禮部院、禮部乃毘陵胡濂年八十餘、十月一日、朝參奉天門見天子、朝儀如前、賜宴闕左門、二日、朝參、正使入奉天門、捧表文、綱司以下立午門、聞大鐘鳴、自左掖門入奉天門、跪拜起、叩頭起、自左掖門出、賜宴于闕左門、午後日本貢馬達京、通事盧圓從僧允邵清啓等、始到于館、四日馬船衆朝見天子于奉天門、賜宴如常、五日朝參、天子御奉天門、觀日本進貢馬二十匹闕左門、賜宴如常、宴罷歸館、官給米麵粉酒菓子醬柴等、七日奏日本九號船一隻、九月十四日到寧波府、

大明景泰五年五月廿二日、一起五十八發杭起寧波府發行次第曰、一起二起、七月十二日朝左對馬島、夕右壹岐島、颶風御潮、一日走百餘里、泊于志賀島、十三日發志賀島、至筑前安威島、十四日晚發蘆屋、日未晚到于長門國赤間關、則吾日本享德三年甲戌七月十三日也、關吏曰、二號今月五日入關、三號船六日方至、七號船十一日到岸、九號船今方來了云々、綱司將急遞符告歸朝于京師、

〔默雲集三〕送肅元西堂赴大明國幷序

前住臨川寺肅元禪師、先是景泰成化之間、入大明國者已三回矣、遠蹈鯨濤不辭勤勞、可謂不辱使命者也、今年又奉國信使持節以往、見者壯之、神物護舟、咸充其願者可卜焉、因贐之以一章云、

休言遠別隔天涯、同軌同文共一家、萬里滄波君熟路、舟中穩似駕輕車、

〔翰林胡蘆集〕送葦洲西堂遊大明

壬子（明應三年）之冬、我國進貢于大明、前相國天澤和尚奉命既行、令嗣葦洲西堂爲副使、以同船事矣、同出管領細川氏之族、而爲正覺國師的孫、可謂宗姓俱高矣、今乃以王事而觀光上國、榮莫以若焉、謹賦

山詩寄呈船窻下、且致別意云々、

日本明朝書一封、君今父子遠相從、奉天門外東方白、可有殘僧坐曉鐘、

〔本朝高僧傳（四十三）〕京兆南禪寺沙門桂悟傳

釋桂悟、號了菴、（略）中文明年中、出世勢州安養、（略）中年八十三、奉使入明、帝詔住育王山、悟臨門云、育王門戶八萬四千、毘盧樓閣、雨華現前、進步云、纔動一步、東土西天、是日遣中使賜金襴僧伽黎、卽拈衣云、

晝錦恩榮北闕天、黃梅夜半不曾傳、育王山頂橫雲霧、無相福田擔一肩、每有上堂、緇白歡呼、公卿縉紳、崇德來謁、正德八年、（我永正十年）解印東歸、諸儒贈言、王陽明序曰、世之惡奔競而厭煩拏者、多遯而之釋焉、爲釋有道不曰清乎、撓而不濁不曰潔乎、狎而不染故必息慮以浣塵、獨行以離偶、斯爲不詭於其道也、苟不如是、則雖皓其髮、緇其衣、梵其書、亦逃租繇而已耳、樂縱誕而已耳、其於道如何耶、今有日本正使堆雲桂悟字了菴者、年踰上壽、不倦爲學、領彼國王之命來貢珍於大明、舟抵鄞江之浮寓館於馹、予嘗過焉、見其法容潔修、律行堅鞏、坐一室左右經書、鉉采自陶、皆楚々可觀愛、非清然乎、與之辨空、則出所謂預修諸殿院之文、論教異同、以並吾聖人、遂性閑情安、不譁以肆、非淨然乎、且來得名山水而遊賢士大夫而從、靡曼之色不接于目、淫哇之聲不入于耳、而奇邪之行不作于身、故其心日益清志日益淨、偶不期離而自異塵、不待浣而已絕矣、茲有歸思、吾國與之文字交者若太宰公及諸縉紳輩皆文儒之擇

也、咸惜其去、各爲詩章以艷飾迴躅、固非貧而濫者、吾安得不序、

〔隣交徵書（初篇）二〕日本了菴禪師膺使命來我皇明、館于姑蘇幾半載、凡士大夫之相與者無不敬且重焉、以其齒德既高口學亦稱、是故耳、昔王摩詰所謂色空無得而不物々、語默無際而不言言者、似爲今日禪師道也、予接遇日久、因賦二詩以贈、一以詠號、一以送行云、

楊端夫

撥門雲霧靈臺湛、著盡工夫豈憚勞、六鑿已空無箇事、一身天地自逍遙、

前輩凋零莫甚今、眼看秋已屬祇林、曉風入多奉天殿、殘月長庚夜々心、

〔隣交徵書（三篇）一〕日本東福了菴和尚語錄序

黃隆（略）中

愛有了菴之祉友東歸坐元、大明成化甲辰歲、（二十年、我文明十六年、）承彼國命、浮舟越海、不辭險阻、而來貢我皇上、沐文明之化、際禮遇之隆、遍歷兩京名寺、博覽南北勝境、口今年乙巳返邸四明、言旋而歸、（中略）大明（成化乙巳歲孟秋既望、賜進士出身中憲大夫四川按察副使四明黃隆序、）

一審渡唐

〔策彥入唐記〕策彥和尚眞蹟

一天文八年四月十九日、五島出船、

嘉靖十八年

一五月二日、著唐島溫州云々、一十五日、太唐通事將太人、來于中流問進貢事、一十六日、定海著、一十七日、上岸見知縣、一十八日、海道問勘合幷袁指揮等事、今日呈最初短書、

十九年

一三月二日、北京著居會同館、一五日、鄧王二大通事來訪、一六日、於習禮亭學禮、一七日、朝參於闕左門、茶飯、一八日、呈表文別幅於禮部、一四月廿八日、洛中諸寺燒香、一五月朔日、朝參領

返牒幷諸人衣裳（有茶飯）　一二日、朝參著唐衣裳禮謝、　一五日、依商從人愁訴呈短書、　一七日、朝參領返書（幷勘合有茶飯）、　一九日、北京起身、　廿六日、巳剋以吳通事渡表文於禮部、　五月六日巳剋、納進貢物於禮部之所主客司、轉條三件送官幷周吳二通事護進貢物詣禮部、相對門司日向守方御卿源三方、　廿六日五更參內謝下程、午後以吳通事獻硯扇等於主客司主客司堅辭退告可下百人之衣裳之由同列衆評衣裳欠欲失舊例之條明日茶飯不可出頭之由、以周吳二通事稟訴于主事云々、種々異見各以遠慮強出頭、　七月廿一日參內領返朝物幷衣裳主事證明只勘渡百人分之衣裳於是同列以周吳二通事再三直訴於寧波五百人餘之衣裳欠了之旨主事答以粗於杭可被下之由、　一廿九日、著南京、　一九月、著寧波

策彥和尙　二番渡唐

嘉靖廿八年卯月十八日、入京、　廿一日巳剋、本京二大通事筆談、　廿三日午時、又三大通事傳禮部同鴻臚寺之命、來敎朝參之禮、　七月晦日、寅剋參乞暇、　八月九日、北京起身、　晩景張家灣

〔隣交徵書二篇　一〕怡齋策彥禪師像讃幷序　柯雨窓

師日本高僧也奉使中華寓于明州有威儀文學予幸辱知於師其徒三英藏主偶出師小影視予予爲之贊曰、

姿溫如璋額珠內藏儒巾釋裳跏趺肅莊琅函時張道心淸凉容止可望蘊畜難量筆翰琳琅詩風曰唐奉表天王時趾賓堂明聲震揚宸寵輝光壯覽勝方倦休扶桑身升陾康壽曰無疆（大明嘉靖二十年（我天文十年）歲次赤奮若端月四明南逝柯雨窓書眞書郎智院藏）

〔隣交徵書三篇　二〕贈日本使釋周良等越還國有序　林懋和

余典客部已三載矣凡四夷君長款于闕下者余悉得以聖天子之命賓禮之（〇中略）嘉靖己酉（二十八年、我天文十八年）日本國使臣釋周良等越奉其王命肅修貢典自夏往秋方克成禮聖天子寵以湛露之筵賚以祥雲之錦咸欣欣然有喜色（〇中略大明嘉靖己酉仲秋之吉賜進士禮部郎中前翰林院庶吉士閩林懋和書于威德堂眞書妙智院藏）

〔隣交徵書二篇　二〕贈專使謙齋老禪師歸日域國序　葉寅齋

日域國限海迷茫國朝例定十年一貢己酉歲當其期彼國遣使擇其行端德邵者爲之領袖謙齋老師昔經獻納望譽有嘉得膺是擧來拜天朝喜動龍顏異錫殊賚榮光燁然事竣將歸（〇中略）謙齋老師人中豪筆底翰灑齋晉陶南承王命貢中朝鯨波萬里奚辭勞一封遙上聖天子龍光電覽稱時髦隆恩不惜千金賜旨傳賢使宜加褒卽今帆歸不可留崇肴餞別鄱江皐十年再會歲月老今宵盡飮須甁酌（賜進士都察院右都御使奉勅巡湖廣鄖陽等處慈水葉寅齋書時庚戌五月吉月鄖士方梅屋屠月鹿董秋田包吉山同贈眞書砂智院藏）

〔續日本紀八元正〕養老五年六月戊戌詔曰沙門行善負笈遊學既經七代備嘗難行解三五術方歸本鄉矜賞良深如有修行天下諸寺恭敬供養一同僧綱之例、

○按ズルニ本文既經七代トハ恐ラクハ寒暑ノ代謝ヲ指スモノニテ七年ノコトナラム又解ニ三五術トハ易ニ通ジ卽チト筮ニ通ズルコトヲ云フナリ菅家文草方伎短長ノ策問ニ國貴三五、欲聞大史之書ト云ヒ本朝續文粹大江匡房ガ西府作ニ短修訪楚尹三五問商瞿トアルニテ知ルベシ商瞿ハ史記仲尼弟子列傳ニ據ルニ易ヲ孔子ヨリ傳ハリシ人ナリ、

〔皇國名醫傳前篇下〕智玄

僧智玄居于下野安蘇郡糟屋鄉嘗赴宋傳醫方後鳥羽帝弗豫奉藥速愈（〇中略）

僧三喜稱導道（號支山又號範翁）人河越人姓田氏父兼綱冠者信綱之後也初入妙心寺參禪又就足利校主利陽學醫後入明受李果朱震亨之術於月湖及恒德孫留學十二年業成而反居鎌倉江春庵又居下總古河（〇中略月湖稱明監寺又號潤德齋）不知何人求法入明寓于錢塘以醫行明景泰三年（〇我享德元年）著全九集六年又著濟陰方、

遊外僧入支那學技藝

〔天開圖畫樓記〕四明天童首坐、雲谷老人諱等陽、號雪舟、本貫備之中州人、姓藤氏、蚤隸洛之万年、師承春林大和尚、天資淳謹而工揮洒、親佩能畫師文公左券、成化四年入大明、歷試名家筆法、名山大川遊殆乎遍四方、更三霜而歸本朝、寓于豐之後州、其所居之宇、榜曰天開圖畫樓、不亦博乎、〇中略前洛東慧峯無價主人了、

〔牛陶藁三〕四景圖一景一幅楊知客筆冬〇中略

雪舟諱等楊軒、號雲谷、乃前僧錄洪德老師之的子也、有僧周文、胸吞王吳、眼睨韋郭、畫中三昧手也、雪舟從之學畫、有寒米青藍之作、〇中略挾藝遠往中華、天子觀其畫、以爲國奇寶、非有詔不得畫、遂命爲天童名山第一座、以旌其藝焉、一朝來歸、聲價十倍而曰、大唐國裏無畫師、不道無畫只是無師、蓋泰華衡恒之爲山、江河淮濟之爲水、草木鳥獸之異、人物風化之殊、是大唐國之有畫也、而其潑墨之法、運筆之術得之心而應之手、在我不在人、是大唐國之無師也、雪舟於藝神品如品實千歲一人而已、

〔隣交徵書初篇二〕日東雲谷長老、冲淡人也、能詩兼畫、而性無所嗜、成化丁亥、〇三年、我應仁元年、陪貢至鄞、予獲與之交、情傾意洽、歡若平生、居無何言旋言歸、懷不能舍、遂賦拙作五十八字、以道別意、伏希唉覽、

徐璉希賢

家住蓬萊弱水灣、丰姿瀟洒出塵寰、久聞詩賦超方外、賸有丹青落世間、鷲嶺千層飛錫去、鯨波万里蹈杯還、懸知別後相思處、月在中天雲在山、成化五年歲次己丑仲夏下澣四明除希賢書（中略）眞書尾張柘植氏藏、

遊外僧將來物

〔傳教大師請來目錄〕進官錄上表

沙門最澄言、最澄聞、六爻探賾、局於生滅之場、百物正名、未涉眞如之境、豈若隨他權教、開三乘於機門、隨自實教、示一乘於道場哉、然圓教難說、演其義者、天台妙法難傳、暢其道者、聖帝伏惟陛下、纂靈出震、撫運登極、北蕃來朝、請賀正於每年、東夷北首、知歸德於先年、於是屬想圓宗、緬懷一乘、紹宣妙法、以爲大訓、由是妙圓極教、應聖機而興、顯灌頂秘法、感皇緣而圓滿、最澄奉使求法、遠尋靈跡、往登台嶺、躬寫教迹、所獲經幷疏及記等、總二百三十部四百六十卷、且進見一十卷、名曰金字妙法蓮華經七卷、金字金剛般若經一卷、金字菩薩戒經一卷、金字觀無量壽經一卷、及天台智者大師靈應圖一張、天台大師禪鎭一頭、天台山香爐峯神送樒及柏木尺文四枚、說法八角如意一、謹遣弟子經藏奉進、但聖鑑昭明、二門圓滿、不任誠懇之至、奉表戰慄謹言、

延曆二十四年七月十五日

〔叡山大師傳〕復命以後、勅國子祭酒和氣朝臣弘世、今大唐請益受法供奉大德最澄闍梨所將來天台法文、方欲流布天下習學釋衆、宜七大寺書寫七通、即給禁中上紙、仰圖書寮令書寫、既訖、

〔性靈集五〕中丞閣下與越州節度使求內外經書啓一首

沙門最澄上表

日本國求法沙門空海啓、〇中略遂乃弃命廣海、訪探眞筌、今見於長安城中所寫得經論疏等、凡三百餘軸、及大悲胎藏金剛界等大曼荼羅尊容、竭力涸財、迹逐圖畫矣、然而人劣教廣、未拔一毫、衣鉢竭盡不能雇人、忘食寢勞、書寫日車難返、忽迫發期、心之憂矣、向誰解紛、〇中略伏願顧彼遺命、愍此遠涉、三教之中、經律論疏、傳記、乃至詩賦、碑銘、卜醫、五明、所攝之教、可以發蒙濟物者、多少流傳遠方、斯乃大士之所經營、小人之所不意、儻遂渴仰、茂績英聲、剋鏤肌膚、山海露澤、萬却粉身、一則節下之修福、何事過之、二則迷方之狂兒、忽覺乎南、今不勝渴法之至願、敢竭丹欵、輕黷威嚴、流汗戰越、謹奉啓以聞、不宣謹啓、

元和四年〇我大同四年四月日

日本求法沙門空海啓

〔上新請來經等目錄表〕上新請來經等目錄表

入唐學法沙門空海言、空海以去延曆廿三年、銜命留學之末、問津萬里之外、其年臘月得到長安、廿四年二月十日、准勅配住西明寺、爰則周遊諸寺、訪擇師依、幸過青龍寺灌頂阿闍梨法號惠果和尚、以爲師主、其大德則大興善寺大廣智不空三藏之付法弟子也、弋釣經律、該通密藏、法之綱紀、國之所師、大師尚佛法之流布、歎生民之可拔、授我以發菩提心、戒許我以入灌頂道場、沐受明灌頂、再三焉、受阿闍

梨位一度也、肘行膝歩學未學、稽首接足聞未聞、幸賴國家之大造、大師之慈悲、學兩部之大法、習諸尊之蹤伽斯法也則諸佛之肝心、成佛之徑路、於國城擇於人膏腴、是故薄命不聞名重垢不能入、印度則輸婆三藏脫曬負戾振旦則玄宗皇帝、景仰忘味、從爾已還、一人三公、接武耽翫、四衆萬民、稽首鼓篋、密藏之宗、自茲稱帝、牢珠顯教靡旗面縛、夫以鳳凰于飛、必窺堯舜、佛法行藏、逐時卷舒、今則一百餘部、金剛乘教兩部大曼荼羅海會、請來見到、雖云波濤汪濊灌風雨漂船、越彼鯨海、平達聖境、是則聖力之所能也、伏惟皇帝陛下至德如天、佛日高轉、人之父、佛之化悲蒼生而濡足鐘佛囑而垂衣、以陛下新御旋璣、新譯之經自遠新辰、以陛下慈育海內、海會之像過海而來也恰似符契、非聖誰測矣、空海雖闕期之罪、死而有餘、竊喜難得之法、生而請來、不任一懼一喜之至、謹附判官正六位上行太宰大監高階眞人遠成奉表以聞、幷請來新譯經等目錄一卷、且以奉進、輕黷威嚴、伏增戰越、沙門空海誠恐誠惶謹言、

大同元年十月廿二日　入唐學法沙門空海上表

佛像等

金剛智阿闍梨影一鋪三幅

善無畏三藏影一鋪三幅

大廣智阿闍梨影一鋪三幅

青龍惠果阿闍梨影一鋪三幅　新付法阿闍梨耶

一行禪師影一鋪三幅

右佛菩薩金剛諸天等像、幷傳法阿闍梨等影一十鋪

法本無言非言不顯眞如絕色待色乃悟、雖迷月指、提撕無極、不貴驚目之奇觀、試乃鎭國利人之寶也、加以密藏深玄翰墨難載、更假圖畫、開亦不悟、種々威儀、種々印契、出自大悲、一覩成佛經疏秘略載之、圖像密藏之要實繫乎茲、傳法受法弃此而誰矣、海會根源斯乃當之也、

〔東寺要集二〕左弁官下東寺

應眞言根本阿闍梨贈大僧正空海入大唐得法文冊子參拾帖安置經藏事

右右大臣宣、奉勅、件法文宜全收經藏、不出國外、令宗長者永代守護者、寺宜承知、依宣行之、不得疎略、

大史菅野朝臣清方

延喜十九年十一月二日

〔弘法大師廣傳上〕大同元年、先是大使賀能歸朝之剋、付一行阿闍梨碑文玄宗皇帝所製、其本奉太上皇〇桓武云々、

〔性靈集四〕書劉希夷集獻納表一首

劉希夷集四卷副本右伏奉小內記大伴氏上宣書取奉進、〇略中王昌齡詩格一卷、此是在唐之日於作者邊偶得此書、〇略中此屬臨池之次寫得奉上、飛白書一卷、亦是在唐之日、一見此體試書之、〇略中貞元英傑六言詩三卷、〇略中謹遣弟子僧寶慧謹隨狀奉進、輕黷宸嚴、伏深戰汗謹進、弘仁二年六月二十七日沙門空海進、

〔後入唐聖教目錄〕入唐學法沙門常曉上

新請來法門幷佛像等事

太元帥本地將部曼荼羅一鋪總五十餘身

太元帥大悲身像一軀

太元帥念怒身像一軀

太元帥化身像一軀

右太元帥者如來之教令輪也、佛爲含情作、故作護未、太元帥形、群邪見形、頭破七分、衆惡聽名、魔道塵散本經云、佛告阿難、若有國王大臣、敬禮誦呪者、其人境土無有惡賊怖難災橫疾疫水旱風霜、國位威德、諸民平泰、若有邑村落、持此法者、莫不蒙利益者、又云若國土衰禍雨降不調、以此太元帥呪、安置城

門上、卽得風雨順時、將鎭國土、四方隣敵、不起逆心等者、然則如法行、國長在安寧、刹那婦人、自得十刹、不可思議也、太元帥之力、今見唐朝、皆依此爲治國之實、勝敵之要、〇略 中

承和六年九月五日

〇按ズルニ、常曉將來スル所ノ經文數百卷アリ、其名目今之ヲ略ス、

入唐學法沙門傳燈大法師位常曉上

〔續日本後紀 仁明〕承和六年九月辛丑、是日、令太宰府進上自大唐所奉請太元帥畫像、

〔後入唐聖教目錄〕靈巖圓行和尚目錄

入唐還學沙門圓行言、圓行載次戊午、銜命請益之列、訪道西海之外、其年臘月得到長安、歲次己未正月十三日、依奏奉勅住青龍寺、幸遇彼寺灌頂教主法諱義眞和尚、以爲師主、〇略 中 所授經法舍利道具等目錄在別、謹以奉進、輕黷威嚴、增戰越、沙門圓行誠恐〇恐下脫誠 惶謹言、

承和六年十二月十九日

入唐還學沙門傳燈大法師位圓行上表

新請來眞言經都合二十六部三十三卷、梵字三部四卷、顯教經論疏章等、都四十部八十八卷、

已上三種總六十九部一百廿五卷、

佛舍利都三千餘粒

付囑物三種

佛像曼荼羅樣都十二種

道具都十六箇

新請來眞言經法

〇按ズルニ、以下經卷數百卷ノ目錄アリ、今之ヲ略ス、

〔後入唐聖教目錄〕慧運禪師請來教法目錄

眞言經儀軌等合壹佰捌拾卷〇略 中

右從大唐將來、佛舍利、梵夾、眞言經像壇供具物數謹錄上、

承和十四年六月卅日

〔天台宗延曆寺座主圓珍傳〕五月〇大中十年、我齊衡三年、晦、廻到越州開元寺、看良諝闍梨、蒙捨與天台法華玄義十卷、剡川石鼓寺天台法華私志十四卷、法華諸品要義一卷、都三十五卷法文、〇略 中 九年〇貞觀 唐温州內道場供奉德圓座主付婺州人詹景全向國之便、贈下則天皇后繡繡四副之內極樂淨土變一鋪、長二丈廣一丈四尺 織繪靈山淨土變一鋪、長一丈五尺廣一丈 付法藏上自釋迦迦葉下至唐慧能之影像二幀子、各廣一丈四尺 其由何者、和尚在唐之時、謁彼座主、〇略 中 于時座主以此靈像、付屬和尚曰、既有匪石之談、因表寄金之款、每到瞻仰、勿以遺忘、和尚見分付、欲請來數千斤綵絲像盤鬱纛旅之中、述懷曰、余渡蒼波爲求法寶、如今求得法文、殆可剩船、若有便李、追欲付送、爰座主點頭而唯然、則不失言約、遂以付送、

〇按ズルニ、古來比叡山前唐院ニハ最澄圓仁請來物ヲ藏シ、後唐院ニハ圓珍請來物ヲ藏セリ、今前唐院ノ物ハ勅封トナレリ、

〔後入唐聖教目錄〕新書寫請來法門等目錄 先東寺法門錄中以外之者也

合一百卅四部一百四十三卷

一紙書十九張〇略 中

大唐咸通六年從六月迄于十月、於長安城右街西明寺、日本留學僧圓載法師、旣求寫雜法門等目錄具如右也、日本貞觀七年十一月十二日、却來于左京東寺、重勘定、入唐請益僧大法師位、

〔參天台五臺山記 七〕熙寧六年〇我延久五年 三月廿三日丙寅、賜顯聖寺新經、聖旨到來如右、

傳法院據日本國延曆寺阿闍梨大雲寺主傳燈大法師位賜紫成尋狀、伏覩聖朝新譯經五百餘卷未

傳ニ日本一、昨雍熙元年、○我永觀二年日本僧奝然來朝、蒙ニ太宗皇帝一賜ニ號法濟大師一、三年還歸、賜ニ大藏經一藏及新譯經二百八十六卷一、見在ニ日本法成寺藏內一、成尋今來欲レ乞ニ賜上件新譯經一、所レ冀流通祝ニ延聖壽一、況成尋曾在ニ顯聖寺一、揀ニ點收贖宮一、中不レ許ニ外國收贖一、是致レ有ニ此陳黷一、伏乞據狀敷奏本院遂具進呈、奉ニ聖旨一今ニ顯聖寺印新經賜ニ與成尋一、本院支ニ錢、

右請ニ顯成寺印經院一、依ニ聖旨一指揮、仍先供ニ報令使一錢數、

熙寧六年三月日

〔參天台五臺山記　八〕熙寧六年四月十三日丙戌、未時新經來ニ與兩箇一、各敷ニ錦覆一、錦八人、擔來一ケ四人官人四人、行者二人、印經院職掌共來、其文狀云、顯聖寺印經院、近准ニ傳法院一印ニ新經一賜ニ與日本國成尋一、內除ニ法苑珠林一百卷一、日本國僧稱ニ本國一已有、更不レ消ニ印造一、外買印造肆佰壹拾參冊、遂勤ニ本院造經行人後延之計一、料到令レ使ニ工料一價子、具レ狀、開坐申ニ傳法院一、便蒙ニ指揮一、依數支給、下ニ院造作一、今據ニ經行後延之狀一、其上件經已於ニ今月十三日一、並已依數印造經裏具如レ後、杜字號至ニ穀字號一、共參拾字號、計二百七十八卷、蓮華心輪廻文偈頌一部二十五卷、秘藏經一部三十卷、逍遙詠一部一十一卷、緣識一部五卷、景德傳燈錄一部三十三卷、胎藏教三冊、天竺字源七冊、天聖廣德錄三十卷、

右具如前、其上件已造了、新經共四百十三卷冊、本院已隨ニ狀差ニ人將擎一赴ニ院送納去一訖、謹具ニ狀申ニ傳法院一、伏乞指揮謹錄ニ狀上牒一、件狀如前、謹牒、

熙寧六年四月十三日

〔日本國千光法師祠堂記〕九月○仁安三年共原重源歸國、以ニ天台章疏六十餘卷一呈ニ叡山法主明雲一、時年三十八、廼宋孝宗乾道四年也、

〔東大寺造立供養記〕日本榮西上人、往ニ天台山一住ニ萬年寺一、經ニ五ヶ年一、以レ種　歸當寺一也、歸朝之時得ニ彼樹葉一而種ニ於香椎宮一、建久元年也○中略唐本一切經七千卷渡レ之、

遊外僧入支那謁皇帝

〔醍醐寺座主次第〕建久六年十一月七日、春乘坊聖人、○源重彼施入唐本一切經於ニ當寺一、○略中建久九年三月九日丙午、星宿木曜、唐本一切經供養、卽櫻會試樂之次供養之、○略中我朝令ニ供養一唐本一切經事三ヶ度也、次興福寺、次東大寺、次當寺、其隨一也、希代事也、

○按ズルニ、醍醐寺志ニ據レバ、此經今尙ホ醍醐寺上醍醐ノ一切經藏ニアリ、

〔元亨釋書十三明戒〕釋俊芿、○略中建久十年四月、○率秀賀二弟、附ニ商舶一泛ニ滄溟一、五月初著ニ宋江陰軍一、○略中其傳來者、佛舍利三粒、律宗經書三百二十七卷、天台章疏七百一十六卷、華嚴章疏百七十五卷、儒書二百五十六卷、雜書四百六十三卷、凡千一百三卷、其餘圖畫碑帖器物等甚多、

〔隣交徵書初篇二〕送ニ空海上人朝謁後歸ニ日本國一

朱少端越府卿直進士

禪客祖州來、中華謁帝回、騰空猶振ニ錫、過海素浮ニ杯、佛法逢ニ人授一、天書到ニ國開一、歸程三萬里、後會信悠哉、

奉レ送ニ日本國使空海上人橘秀才一　○橘勢朝獻後却還

曇靖沙門

異國桑門客、乘レ杯望ニ斗星一、來朝ニ唐天子一、歸譯竺乾經、萬里洪濤白、三春孤島青、到レ宮方奏レ對、圖像到ニ王庭一、

〔善隣國寶記上〕寬弘三年

楊文公談苑曰、景德三年、予知ニ銀臺通進司一、有ニ日本僧入貢一、遂召問之、僧不レ通ニ華言一、善ニ書札一、命以レ牘對云、住ニ天台山延曆寺一、寺僧三千人、身名寂照、二號圓通大師、○略中寂照領ニ徒七人一、皆不レ通ニ華言一、國中多習ニ王右軍書一、寂照頗得ニ其筆法一、上召見賜ニ紫衣束帛一、其徒皆賜以ニ紫衣一、復館ニ于上寺一、寂照願遊ニ天台山一、○略中寂照漸通ニ此方言一、持ニ戒律一精至、通ニ內外學一、三吳道俗以歸向、寂照東遊、予遣以ニ印本圓覺經幷詩一、

〔參天台五臺山記四〕熙寧五年○延久四年十月廿一日乙未、午時院司家主持ニ來院牒一云、傳法院准ニ客首牒一已定ニ今日二十二日一、令ニ日本國僧成尋等八人幷通事陳詠朝見一、所有名下進奉物色、被レ遂ニ一開坐一、希公文廻子等者、○略中熙寧月日○略中

廿二日丙申、卯一點借ニ馬九疋一、幷通事矣、內先入ニ一大門一、至ニ廊下一、馬有ニ安下所一、懸ニ幕暫逗留一、客省官人引

入第二門間、乘馬人數百入門昇殿、拜禮之人等也、次入第三大門經數里、入東花門南廊安下、懸幕簾立倚子、且備饌膳間數千人來見、辰二點客省官人二人來教立御前呼萬歲作法、辰三點以客省官人幷通事爲先立入第四門、漸出庭見拜人、二人幷舞倒三拜、次三拜次三拜、東方一人進出引聲、隨其各三拜也、共著赤衫諸判通判歟聖主居遠和之殿北、而後左右數百人並立其中有負胡籙人數十人、聖主坐銀倚子白銀床、著赤衫日本一服、庭中立、並人數百人、左右以御前爲上列立、次僧等出庭中向南對御立、以西爲上、並立八人、次有一人引聲出引見、次通事進出敬屈呼聖躬萬寶、次諸僧低頭呼萬々歲、次引聲云、賜例物、次從西方經僧前擔渡東方賜衣絹等、卽諸僧呼如前、次引聲講却祇候、諸僧呼如前、次勅使御藥從御前仰某諸寺可燒香宣旨、他勅使從御前來仰可參五臺山了、卽退出畢、至安下所喫齋、種々珍菓菜飯不可記盡、勅使上卿一人來、對坐同喫齋畢、如本出二門乘馬歸本院、見市頭賣買金銀珍寶不可記盡、東府西府各數里、大殿廻廊見過了、卽車入賜物送來傳法院、物數在證文、日本大雲寺主阿闍梨傳燈大法師位成尋等准祇候庫賜到下項對見分物、金羅紫衣一副三件、金羅褐僧衣七副各三件、白絹定一百六十疋、右具如前文領到前項、並足如後異同甘受重罪、不辭牒、件狀如前謹牒、年月日、牒馬人々與錢九百文了、各百文有之、未時院書生三人持來宣旨面奉聖旨、已差使臣令引日本國僧成尋等八人幷惠詢、自今月二十三日後赴下項去處燒香、大相國寺、大平興國寺啓聖禪院、顯聖寺、感慈院、開寶寺、福聖院、

右箚送

同譯經惠詢、幷日本國僧成尋等諸客、依前頃聖旨指揮、　年月日

入內々侍省內東頭供奉官勾當御藥院傳法院李舜奉在判、於御前賜紫袈裟衣裙爲成尋過分也、

延久三年十二月十三日、於日本備中國新山、夢於大內賜此甲袈裟、覺後卽思於大唐國賜紫衣相也、

今如去年夢、七人皆褐色袈裟八人、同八丈美廣絹二十疋也、通事錢三貫文也、諸國人同心各二疋絹、

遊外僧入支那受大師號

與通事了、合十六疋也、中間僧二人、下法師二人被朝見、是希有也、各充賜廿疋、幷裹束已以成富人了、豈異驥尾蠅乎、

〔默雲集、三〕送喬年赴大明國　幷序

乃祖廣照國師、大明洪武年中、航于中華、太祖高皇帝召見英武樓、令賦我邦三山之詩、辱賜和、可謂大法東被之秋也、萬年喬年和尙、迺國師的孫也、一舸飄然、欲覲上國文物之盛、其志可嘉、臨分袂、見需贈言、賦一章、以奉祝途中善爲云、

先人昔日賦三山、萬口喧傳四海間、羨見南游賡昔躅、天門曉色拜龍顏、

〔今昔物語十九〕參河守大江定基出家語第二

今昔、圓融院ノ天皇ノ御代ニ、參河守大江定基ト云フ人有リ、參議左大辨式部大輔濟光ト云ケル博士ノ子也、〇中略道心堅ク發ニケレバ、髻ヲ切テ法師ト成ニケリ、名ヲ寂照ト云フ、世ニ參河入道ト云フ此レ也、〇中略其後寂照既ニ震旦ニ渡テ、思ヒノ如ク、所々ノ聖跡ヲ禮ヌ天皇モ待受テ、止事无ク敬ヒ歸依シ給ヒケリ、〇中略彼ノ國ノ天皇、寂照ニ歸依シテ、大師號ヲ給テ圓〇通〇トゾ云ヒケル、〇下略

〔宋史四百九十一、外國〕日本國者本倭奴國也、〇中略雍熙元年、日本國僧奝然、與其徒五六人、浮海而至、〇中略太宗召見奝然存撫之甚厚、賜紫衣、館于太平興國寺、〇中略二年隨台州寧海縣商人鄭仁德船歸其國、後數年、仁德還、奝然遣其弟子喜因奉表來謝曰、日本國東大寺大朝法濟大〇師賜紫沙門奝然啓〇中略景德元年、其國僧寂照等八人來朝、寂照不曉華言、而識文字繕寫甚妙、凡問答並以筆札、詔號圓通大〇師賜紫方袍、天聖四年十二月、明州言、日本國太宰府遣人貢方物、而不持本國表、詔却之、其後亦未通朝貢、商賈時有傳其物貨至中國者、熙寧五年、有僧誠尋至台州、止天台國淸寺、願留州以聞、詔使赴闕、誠尋獻銀香爐木槵子白琉璃五香水精紫檀琥珀所飾念珠及青色織物綾、神宗以

遊外僧入支那巡禮靈地

其遠人而有戒業處之開寶寺盡賜同來僧紫方袍是後連貢方物而來者皆僧也元豐元年使通事僧仲回來賜號慕化懷德大師

〔元亨釋書十六遊〕釋成尋姓藤氏讐紱之胄也事石藏文慶稟密教延久四年三月乘宋商孫忠船著蘇州界神宗熙宗五年也〇略中六年天下大旱神宗聞尋有密學勅於瑤津亭修祈雨密法尋謂本邦宿德遊此方名尤顯者十數人未有承詔旨也今我攘宋地之災診又爲本國之光華便修法華法至第三日夜雷電閃鳴大雨徹旦神宗遣中使賀慰宣曰乞延修七日霑洽率土尋依勅霖雨三日神宗幸壇所燒香翌日歸傳法院勅送茶果達嘅若干後十餘日賜號善慧大師

〔叙山大師傳〕大唐貞元廿年〇我延曆十三年九月上旬船頭判官等上京但和尚別向天台山卽明州牒送台州其牒詞云勾當軍將劉承規狀稱得日本國僧最澄狀稱欲往天台山巡禮疾病漸可今月十五日發謹具如前者使君判付司給公驗幷下路次縣給船及擔送過者準判者謹牒卽受牒上道同月下旬到台州天台山國淸寺衆僧遞來慰勞歸寺歎曰昔聞西域騰蘭馱梵夾於白馬降邪道於南郊今見東域闍梨渡妙法於滄波拯蒼生於水陸各竭禮敬頂戴隨喜

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年三月廿六日丁亥僧正法印大和尚位宗叡卒〇略中貞觀四年高岳親王入於西唐宗叡請從渡海〇略中登攀五臺山巡禮聖跡卽於西臺維摩詰石之上見五色雲於東臺那羅巡窟之側見聖燈及吉祥鳥聞聖鐘〇略下

〔元亨釋書十六遊〕釋奝然居東大寺學三論又受密乘于元杲永觀元年入宋東大寺送書青龍寺比叡山寄信天台山然持二書著宋地太宗太平興國八年也巡禮勝地歷覩明師〇略中太宗詔問我皇系曆祚然答詞詳備君臣稱嘆賜紫衣辭上五臺雍熙三年上台州鄭仁德舡歸永延元年也

〔本朝文粹十三願文〕奝然上人入唐時爲母修善願文　慶保胤

佛子奝然至心合掌而白佛言奝然心願如來可證明奝然天祿以降有心渡海本朝久停乃貢之使而不遣入唐間待商買之客而得渡今遇其便欲遂此志奝然願先參五臺山欲逢文殊之卽身願次詣中天竺欲禮釋迦之遺跡〇略中老母在堂行年六十其恩是深不得不報佛子拋母欲去則可失孝行携母將留亦可乖宿懷初獨思量之後終相談之母曾無怨貌旣有勸心佛子一歎一泣淚與言落我母不是人世之母是善緣之母也若萬人緩頰苦心而諫之我未必從若一親形言變色而留之我可何遂哉誠勸我之佛道寧非我之慈堂乎佛子有男子兄弟二三人相議曰餘年之水菽者汝之所可營何以及飢寒後生之善提者我之所爲先豈令隨惡趣乎凡棄恩入無爲眞言之報恩〇略中唯願如來永拂魔事將報佛恩敬白

天元五年七月十三日　佛子奝然敬白

〔新古今和歌集十羈旅〕入唐し侍りける時いつほどかへるべきと人のとひ侍りければ

法橋奝然

旅衣たちゆく浪路とほければいさゝら雲のほども知られず　慶保胤

〔本朝文粹九詩序〕仲冬餞奝上人赴唐同賦贈以言各分一字探得輕字

夫人之重別古今一也我朝率土之中遠則一二千里分手之後久亦五六餘年書信易通不期雁足縶帛之秋歸去無妨豈俟烏頭變黑之日〇略中昔仲尼之去周也仁者相贈以言今上人之赴唐也親知各露其膽予是花月之一友贈此蒭牧之二言堂有母儀莫以逗留中天之月宝有歸跡莫以偃息五臺之雲聊記斯文別淚霑紙云爾

〔續本朝往生傳〕阿闍梨成尋者本天台宗之人智證大師之門徒也住大雲寺〇略中爲禮淸涼山私附商客孫忠商船偷以渡海大宋之主大感其德

〔千載和歌集七離別〕成尋法師入唐し侍りける時よみ侍りける　成尋法師母

忍べども此わかれ路を思ふにはからくれなゐの涙こそふれ

〔新古今和歌集九離別〕成尋法師、入唐し侍りけるに、母のよみける、
唐も天のおなたにぞあるときくてる日本を忘れざらなん
〔續後撰和歌集十羇旅〕成尋法師、入唐時母のよめる、
消かへり露の命はながらへてなみだの玉ぞとゞめ侘ぬる
〔後拾遺和歌集八別〕成尋法師、もろこしに渡り侍りて後、かの母のもとに遣はしける、
讀人志らず
いかばかり空を仰ぎてなげくらんいく雲井とも知らぬ別を
〔宋史四百九十一外國〕日本國者本倭奴國也、○略中熙寧五年有僧誠尋、至台州、止天台國清寺、願留州、以聞詔使赴闕、誠尋獻銀香爐○略中綾、神宗以其遠人而有戒業、處之開寶寺、盡賜同來僧紫方袍、是後連貢方物、而來者皆僧也、元豐元年使通事僧仲冂來、賜號慕化懷德大師、明州又言、得其國太宰府牒、因使人孫忠還、遣仲回等貢絁二百疋水銀五十兩、
〔參天台五臺山記一〕延久四年六月二日庚戌未時向學堂謁學頭、上表案文預了、○中略申時、禹珪取表案來、求能書人間、慮外能書冠者來、令書寫了、表文、大日本國延曆寺阿闍梨大雲寺主傳燈大法師位臣某、欲乞天恩巡禮五臺幷大興善寺青龍寺等聖跡、
右某從少年時有巡禮志、傳聞、江南天台定光垂跡於金地、河東五臺文殊現身於巖洞、將欲尋某本處聖跡、而爲大雲寺主三十一年、護持左丞相二十年、如此之間不遂本意、今齡滿六旬、餘喘不幾、若不遂鄙懷、後悔何益、因之得附商客船所參來也、就中天竺道猷登石橋而禮五百羅漢、日域靈仙、入五臺而見一万菩薩、某性雖頑愚、見賢欲齊、先巡禮聖跡、次還天台、修身修行法華秘法、專求現證、更期極樂、所隨身天台眞言經書六百餘卷灌頂道具三十八種、至于眞言經儀軌持參、青龍寺經藏糺其訛謬、伏望天恩早賜宣頭將遂素意、臣某陳表以聞、

熙寧五年六月日　大日本國延曆寺阿闍梨大雲寺主傳燈大法位臣ム上表、
〔參天台五臺山記二〕六月○熙寧五年我延久四年七日乙卯、國清寺送杭州返牒案文、
台州天台山景德國清寺
當寺、先去今年五月十五日、有明州客人陳詠帶杭州公據、引領日本國僧成尋等八人、到寺燒香、本僧後稱本寺、是智者流教道場之地、欲要就看經一泊○泊恐誤伯日畢、供養羅漢、齋僧宣懺訖、遂令六僧却還本國、只留小師一名、在身邊侍養、本僧稱、遊五臺後還本寺、三年誦經修法華秘法、本寺爲未蒙上命指揮、未敢安存其成尋等、却經本州陳狀乞帖安存、幷乞本州公據、發遣客人陳詠帶前來公據、使衙檄納本寺、已蒙州帖下本寺、安存日本國僧成尋等八人、在寺安下、讀經已訖、令客人陳詠將帶本州公據、前去檄納、謹具狀申聞、
知府陳詠伏候台旨、謹錄上、牒件狀如前、謹牒、
熙寧五年六月日
〔參天台五臺山記五〕同四年○延久、宋熙寧五年、十一月廿七日壬申、卯三點、出繁時驛行衙、申一點、到著寶典軍寶興驛、未時始入滅山谷、入軍初門、始見東臺頂、感涙先落、過數里、入軍門、三重城垣如州城、軍東有興國寺下院、入宿驛、見壁有記文云、大原文叔同諸弟、挈家往五臺、求文殊宿此、熙寧壬子○五年季夏念十日故誌、念二日登於東臺、求見其文殊、覩其聖境甚妙、未時已來現於五色祥雲幷其圓光、至申時現其編身之光、出於山谷、瞻禮、至於昏暮返廻、廿八日癸酉卯時、從眞容院送馬八疋、軍驛馬二疋、人々乘登山、先行谷十里、次登坂、最以峻嶮、時々下馬徒行、雪十月中下旬雨下、凍氷馬足難駐、谷間五里有地

台州天台景德國清寺綱維僧鴻忍
監寺掌教跡賜紫仲文
福寺主掌金寶賜紫利宣
寺主掌卿晝臨壇賜紫仲芳

鋪、兵士各住止、谷三十里、坂十五里、登山頂北壇傍路也、先下馬拜北臺、遙拜西臺、中臺、南臺、至于東臺、隔山不見、從岑漸下十里、諸僧來迎、以都維那爲首、坂口小堂、副僧正乘馬來、次諸僧列行、捧幡八流、五色也、寶幢二、打鉢僧八人、摠數百人許來、先於堂點茶、先文殊供養物、依寺主命、取積輿上、敷錦輿內、金銀絹如先日色目、鏡髮又銀二兩、龍腦香一筥、薰陸香三兩、渡與已了、香輿加名香了、諸僧列行五里步行、日本人乘馬漸行、時參臺下半眞容院、置文殊寶前了、申一點、入安下房、莊嚴甚妙也、重々以色錦等、所畫幔帳之敷坐、先行浴室沐浴了、次入堂禮佛燒香、堂內莊嚴不可思議、七寶眞珠充滿、佛前立禪床、終夜小師皆歸房了、於途中西堂頂現五色雲、使臣先見之告、予次見之也、堂中諸僧行者有其數、而文殊供兩品合行、直界供養燒種々香、次如意輪供、次法花法、一時經第四五了、終夜於禪床睡、夜无小便、思最奇異也、皇太后宮法花經奉供養了、十二月一日乙亥、辰一點、參寶章閣燒香、下地藥師佛十六羅漢、上階殿盧舍那佛丈六像、圍繞葉上千釋迦、圍繞四千銀菩薩、次左延壽王菩薩丈六像、圍繞三千菩薩銀像、次右長壽王菩薩丈六像、圍繞三千銀菩薩、合一万、幷次參集聖閣、下地千手觀音三大像、上階殿五髻文殊菩薩丈六像、十六羅漢、觀自在、幷次參僧堂、文殊菩薩三堂、加階四處、共百文錢上獻、次參無言常坐僧耘和尙坊拜見了、既經廿年云々、午時參副僧正坊齋、三人使臣通事同喫、齋後馬十疋、寺指南僧省認、爲前引、八人通事參大平興國寺、本名白鹿寺中臺半腹也、去眞容殿五里、先禮文殊閣丈六像、本大平興國寺也次禮渾金經藏、次登上殿禮一萬菩薩、次禮三千金佛閣、皆以七寶作堂舍、重閣廣大伽藍、寺主賜紫崇暉和尙儲珍菓藥、生年八十二、語云、廻五臺五十八度、燒左手无名指、供養文殊於東臺、見文殊圓光頭光攝身光、幷見一萬菩薩於南臺上、見金色世界云々、身輕聲高、最可云聖人之、次出寺下坂一里、禮金剛窟、文殊菩薩宅、禮窟穴二人、燃松入穴取土了、燒香禮拜、穴前有井名文殊井、窟上有等身文殊像、眷屬圍繞、與國寺幷窟八百文獻上了、次禮大華嚴寺、廣大伽藍也、○中略入夜還了、琦表白送日本國院返牒持來、文云、大宋國河東道代州五臺山大華嚴寺眞容、幷院文殊聖容殿、當殿今月廿八日、有大日本國延曆寺阿闍梨大雲寺主傳燈大法師位大宋國賜紫僧成尋、賚到大日本國皇太后宮降來先帝御書經卷、妙法蓮華經一部八卷、无量義經一卷、觀普賢經一卷、阿彌陀經一卷、般若心經一卷、右前件經、依教領得於文殊師利菩薩眞容面前、如法安置、永充供養、所集副利、廻向大日本國先皇帝、伏願覺心超悟、通明佛性之源、○中略

大宋國熙寧五年十一月日

五臺山眞容院如菩薩殿講經律論沙門省岳等廻向○十三人署名略

二日丙子、卯二點還向、馬十疋、行者四十人、副僧正被催送、即來坐安下亭、暫談話後還本房了、五日乙卯卯時從府被送粥、辰一點、與使臣通事、共參府謁大卿、以通事樂通言、最好人也、點茶二度、湯藥一度、卽送驛有齋酒、路食別被送餞餡五十隻、砂餡五十隻、糖油油餅五百箇、素油餅五十箇、散子五箇、使與二佰文錢了、卅日甲辰、卯時以通事參五臺山、慶悅表奉御藥許了、午時通事還來云、侍從內被出遲來、但表被納了、

〔小右記〕長和四年六月十九日丁卯、大宋國知識使僧念救來請智識物、爲表敷散物□□件物等呆○呆恐誤集左相幕府、○藤原道長注一紙可被送者、七月十六日、右衞門督○懷平示送云、昨日參左相府雜物等、被預入唐僧念救、卿相已下智識物取集被送云々、

○按ズルニ、百練抄、長和四年五月七日ノ條ニ、近日又大宋國上人念救來朝有知識事トアリ、然レドモ引ク所ノ小右記ノ文、及ビ日本紀略同年五月七日ノ條ニ、入唐僧寂昭、元燈、念救云々トアル文ニ據レバ誤ナリ、

又按ズルニ、智識物トハ結緣ノ爲ニ、錢穀ヲ佛寺ニ寄進スルモノニテ、續日本紀天平十九年九月ノ條ニハ、奉盧遮那佛知識トシ云ヒ、同二十年二月ノ條ニハ、進知識物人トシ云ヘルガ如クニシ

遊外僧募知識物而行支那

遊外僧入印度

テ、其他諸書ニ散見セリ、サレバ知識物使僧ト云フハ、我ガ國人ノ知識物ヲ、彼ノ國ノ靈場ニ奉ズル使者タルヲ知ルベシ、

〔頭陀親王入唐略記〕貞觀三年三月、親王被許入唐、六月十九日、發自池邊院南行、御宿巨勢寺、別當僧平海率徒衆時迎、（平海此親王御弟子）親王甚卑下、不要僧徒之迎候、經歷此寺廿日、于時七大寺長宿和尚、朝夕鳩集、七月十一日、出自巨勢寺、指難破津、名僧數十許人、遂從相送到大和國葛上郡舊國府、爰親王駐馬揖謝僧徒云、從此應被却廻、卽僧徒下馬拜別、皆垂淚云、僧等齒傾暮再展何日、親王答云、彼此好在隨緣相見、其晩到難破津、便債得大宰貢綿歸船二隻、十三日駕船、八月九日、到著大宰府鴻臚館、于時主船司香山弘貞申符、卽大貳藤原冬緒朝臣筑前守藤原朝臣貞庭等、率隨身騎兵百餘人、到來頂拜存問、于時大唐商人李延存在前居鴻臚北館、大貳明旦歸府、留貞庭朝臣云、求其間結番遞候、親王我望非如此、今須早去、九月五日、去向壹岐島、島司幷講讀師等亦來迎、圍饒（○饒恐繞誤）親王彌厭此事、□□左右自彼渡著小島、（此小島名云班島云々）於是白水郎多在、仍不細、更移肥前國松浦郡柏島、十月七日、仰唐通事張支信、令造船一隻、四年五月、造船已了、時到鴻臚館、七月中旬、率宗叡和尚、賢眞、惠蕚、忠全、安展、禪念、惠池、善寂、原懿、獻繼、幷船頭高丘眞今等、及控者十五人、（此等並伊勢氏人也）柁師絃張支信、金文習、任仲元、（三人並唐人）建部福成、大鳥智丸、（此二人並門人）水手等僧俗合六十人、駕船離鴻臚館赴遠値嘉島、八月十九日、著于遠値嘉島、九月三日、從東北風飛帆、其疾如矢、四日三夜馳渡之間、此月六日未時、順風忽止、逆浪打艫、卽收帆投沈石、而石不著海底、仍更續儲斷綱下之長五十餘丈、纔及水、此時波濤甚高如山、終夜不息、船上之人皆惶失度、異口同音祈願佛神、但見親王神色不動、曉旦之間、風氣微扇乃覩日暉、是知順風乍嘉行矴挑帆隨風而走、七日午剋、遙見雲山、未剋著大唐明州之揚扇山、申剋到彼岸丹奧泊、（右丹奧明州池名也）卽落帆下矴見其涯上、有人數十許、喫酒皆脫被坐倚子、及舶之來著皆驚起、各衫群立涯邊、見張支信問由緣、支信告云、此日本國求法僧徒等、於是彼群居皆感歎、（○中略）此歲大唐咸通三年九月十三日、明州差使馬李閑、點撿船上人物、奏聞京城、其年十二月、勅以符到云、須收彼器、早隨故許著越州、五年彼州觀察使鄭（暉略）更爲實錄、轉以言上、五月十一日、巡禮所々求法、從容蒙親王敎云、近來歷問天師之質我疑者、就此州節度使殈陶許入京之奏者、爰陶許奏時被許入京、符九月到來、十二月、親王、宗叡和尚、智聰、安展、禪念、及與房任仲元、仕丁、文部秋丸等、駕江船牽索傍水入京、但賢眞、惠蕚、忠全、幷小師弓手柁師水手等、此年四月、自明州令歸本國、畢、然親渡淮至泗州普光寺、此僧伽和尚入定寺也、緣拜、河凍不得進御、仍蹔寄住件寺、多錢物供養和尚靈像衆僧、六年二月中旬、得凍解、駕江船汴河者買鞍馬自陸入京、但宗叡和尚依有宿自汴州相別取河中府道向五臺山、同晦頭、親王至洛陽掩留五日、尋師聽讀无人敎授、卽出自定斯過天津福橋白馬寺槽等、五月廿一日、到長安城入自春門、安下西明寺、卽本國留學圓載法師、奏聞親王入城之由、皇帝感歎、仰請來阿闍梨令決難疑、經六箇月問難闍梨不能擊蒙、因更令圓載奏可渡西天竺、且事勅許官符、施行廣州、亦訖與房、此年十月九日、於長安承仰事、獨身却廻淮南、請取處々寄附功德雜物、或有不早還者、或有詐相爭者、由斯通狀揭府被詐令糺之間、宗叡和尚咸通六年、自長安歸來云、件雜物早請取可向廣州者、與房此論得雜物欲忝起廣州之間、任仲元將敎書來之、令得與房、不遠進發有期不可稽留、仍正月廿七日、率安展圓覺秋丸等向西已之須停起來、早駕李延孝舶、本國者因宗叡和尚與房等、同年六月、延孝舶自大唐福州、得順風五日四夜著値嘉島、但智聰法師尚住大唐不來、仍略記如件、

〔眞如親王入唐略記〕高岳親王（平城天皇太子、母贈從三位伊勢繼子、從四位下勳四等老人母（母恐衍）女也、）大同四年四月十三日、立爲太子、弘仁元年九月十三日、廢皇太子出家、淸和貞觀三（○三一本作四）年入唐、法名眞如、陽成元慶五年十月三（○三一本作十一）日、自唐申遷化由、到流沙於羅越國亡云々、

〔三代實錄（四十陽成）〕元慶五年十月十三日戊子、是日頒下所司曰、無品高丘親王、志深眞諦、早出塵區、求法之情、不遠異鄕、去貞觀三年、自辭當邦問道西唐、乘査一去、飛錫无歸、今得在唐僧中瓘申狀、偁親王先

過二震旦一欲レ渡二流砂一風聞到二羅越國一逆旅遷化者、雖二薨背之不一レ記、而審問之來可レ知焉、〇略　中　十五年、親王男大和守從四位上在原朝臣善淵、前肥後守從五位上同安貞等、上レ表請親王入唐後、多歷二年序一、歸朝之期已過、存亡之分難レ決、而偏準二平常一、猶受二封邑一、靜而思レ之悚競難レ耐、伏望早被二返收一、將レ免二謗議一、勅存亡難レ卜、何許來請焉、親王身殞中途一神馳二半月一、昔爲二千乘之皇儲一、今作二單子之旅魄一、彼菩提之求何必出レ戸、元厭二世心一深甚哉苦行、〇下略

〔二中歷十三名人〕入唐

眞如親王　眞觀四入不レ歸　渡二天竺一云々

〔閑居友上〕眞如親王天竺にわたり給ふ事

昔眞如親王といふ人、いまそかりけり、ならの御門の第三の御子也、〇中略　親王はものならふべきやまとの國の人にて、圓載和尚といひし人の、唐にとゞまりたりけるが、親王のわたり給よしをきゝて、御門に奏したりければ、御門あはれみて、法味和尚といふ人におほせつけられて、學問ありけれど、心にもかなはざりければ、つひに天竺にぞわたりたまひにける、錫杖をつきて、あしにまかせてひとりゆくことわりにもすぎてわづらひおほし、さてやう〳〵すゝみゆくほどに、つひに虎にゆきあひて、むなしくいのちおはりぬとなん、このことは、親王の傳にも見え侍らねば、さるしいれぬるなるべし、昔のかしこき人々の、天竺にわたり給へる事を、さるせるふみにも、大唐新羅の人々は、かずあまたみえ侍れど、この國の人はひとりもみえざんめるに、この親王のおもひたち給けん心のほど、いと〳〵あはれにかしこく侍り、昔はやすみさるまうけのすべらぎにて、も、のつかさにあふがれきといへども、いまは道のほとりのたびのたましひとして、ひとりいづくにかおもむきたまひけんと、返々もあはれに侍り、

〇按ズルニ、此事ハ撰集抄ニモ、玄弊三藏幷眞如親王渡天事ト題シテ載セタリ、又醍醐抄ニモアリ、

古事類苑

宗教部二十五

佛教二十五

僧尼總載下

外國僧朝鮮僧弘法

〔日本書紀十九欽明〕十五年二月、百濟遣下部杆卒將軍三貴、上部奈卒物部烏等、乞救兵、仍貢德率東城子莫古、代前番奈率東城子言、（略）中僧曇惠等九人、代僧道深等七人、

〔日本書紀二十敏達〕十三年九月、從百濟來鹿深臣、（闕名字）有彌勒石像一軀、佐伯連（闕名字）有佛像一軀、是歲、蘇我馬子宿禰、請其佛像二軀、乃遣鞍部村主司馬達等、池邊直水田使於四方、訪覓修行者、於是唯於播磨國、得僧還俗者、名高麗惠便、大臣乃以爲師、令度司馬達等女島、曰善信尼、（略）下

〔元亨釋書十六〕釋慧便、高麗國人、敏達十三年、蘇馬子奏取百濟彌勒石像、於石川宅側、創殿安置、時無奉香火者、使梁人司馬達等四方尋求沙門、於播州得似比丘者、問之、對曰、此方不敬沙門、故我混俗耳、乃便也、馬子貴爲師、

〔日本書紀二十一用明〕二年四月丙子、天皇得病、還入於宮、群臣侍焉、天皇詔群臣曰、朕思欲歸三寶、卿等議之、群臣入朝而議、物部守屋大連、與中臣勝海連、違詔議曰、何背國神敬他神也、由來不識若斯事矣、蘇我馬子宿禰大臣曰、可隨詔而奉助、詎生異計、於是皇弟皇子（皇弟皇子者、穴穗部皇子、卽天皇庶弟、）引豐國法師（闕名也）入於內裏、物部守屋大連耶、睨大怒、

〔日本靈異記考證上〕豐國（蓋謂韓國也、非斥豐前豐後、猶下仲哀紀謂韓國爲資國、神功紀云財寶國財國金銀之國、應神紀云金銀蕃國上也、神代紀亦云韓鄕之島是有金銀、用明二年紀云、皇弟皇子引豐國法師入於內裏者、亦蓋謂韓國僧也、）

〔日本書紀推古二十二〕三年五月丁卯、高麗僧惠慈歸化、則皇太子〇厩戸師之、是歲百濟慧聰來之、此兩僧弘二演佛教一、並爲二三寶之棟梁一、四年十一月、法興寺造竟、〇略中是日惠慈惠聰二僧始住二於法興寺一、十年閏十月己丑、高麗僧僧隆雲聰共來歸、二十三年十一月癸卯、高麗僧惠慈歸二于國一、

〔元亨釋書十六遊〕釋慧彌、推古十七年四月、百濟人、赴二吳國一、其舡漂流至二肥後州一、州吏告二大宰府一、府以聞、勅二令其舟人送一レ本邦一、時彌沙門道欣等、慕二國化一、上表請留、詔居二元興寺一、

〔日本書紀推古二十二〕三十三年正月戊寅、高麗王貢二僧惠灌一、仍任二僧正一、

〔元亨釋書一傳智〕釋慧灌、高麗國人、入レ隋受二嘉祥吉藏三論之旨一、推古三十有三年乙酉春正月、本國貢來、勅住二元興寺一、其夏天下大旱、詔レ灌祈レ雨、灌著二青衣一講二三論一、大雨便下、上大悅、擢爲二僧正一、後於二內州一創二井上寺一、弘二三論宗一、

〔元亨釋書一感進〕釋義覺、百濟人也、本朝征二彼國一時、伴二軍士一來、身長七尺、博究佛乘、居二難波百濟寺一、一夕誦二摩訶般若心經一、〇略中覺誦レ經、光從レ口出、〇略中此事齊明帝之時也、

〔日本書紀二十天武九〕十二年七月、是月始至二八月一旱之、百濟僧道藏雩之、得レ雨、十四年十月丙子、百濟僧常輝封二三十戸一、是僧壽百歲、庚辰、遣二百濟僧法藏優婆塞益田金鍾於美濃一、令レ煎二白朮一、因以賜二絁綿布一、

〔元亨釋書九感進〕釋道寧、百濟人、白鳳十二年八月、天下大旱、勅寧法雩、効レ雨大注、

〔續日本紀八元正〕養老五年六月戊戌、詔曰、〇略中百濟沙門道藏、寔惟法門、神領釋道棟梁、年逾二八十一、氣力衰耄、非レ有二束帛之施一、豈稱二養老之情一哉、宜二所司四時施一レ物、絁五疋、綿十屯、布二十端一、

〔日本書紀二十推古一〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢二曆本及天文地理書幷遁甲方術之書一也、是時選二書生三四人一、以俾二學習於觀勒一矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聰學二天文遁甲一、山背臣日並立學二方術一、皆學以成業、十八年三月、高麗王貢上僧曇徵法定、曇徵知二五經一、且能作二彩色及紙墨一、並造二碾磑一、蓋造二碾磑一始于是時歟、

朝鮮僧傳文學技藝

支那僧弘法

〔元亨釋書十六遊〕釋福亮、吳國人、受二三論于嘉祥一、齊明四年、內臣鎌子、於二陶原家精舍一、請二亮講一レ維摩法經一、

〔元亨釋書一傳智〕釋智藏、吳國人、福亮法師俗時子也、謁二嘉祥一、受二三論微旨一、入レ此土一、居二法隆寺一、盛唱二空宗一、白鳳元年、爲二僧正一、道慈智光皆藏之徒也、

〔元亨釋書十六遊〕釋神叡、唐國人、居二元興寺一、講二唯識一、〇略下

〔續日本紀七元正〕養老元年七月庚申、神叡爲二律師一、

〔續日本紀八元正〕養老三年十一月乙卯朔、詔二僧綱一曰、朕聞、優能〇能原作レ鈍、據二一本一改、崇智、有レ國者所レ先、勸二善獎一レ學、爲レ君者所レ務、於レ俗既有、於二道宜一レ然、神叡法師幼而卓絕、道性夙成、撫二翼法林一、濡二鱗定水一、不レ踐二安遠之講肆一、學達二三空一、未レ漱二澄什之言一、阿智用二二諦一、由是服膺請業者已知實歸、函丈提レ敎者悉成二宗匠一、〇略中宜施二食封各五十戸一、並標二楊優賞一、用彰二有德一、

〔類聚三代格三〕詔、釋典之道、敎在二甚深一、轉輕唱禮、先傳二恒規一、理合二遵承一、不レ須二輒改一、比者或妄尼自出方法、妄作二別音一、遂使後生之徒積習成レ俗、不二肯變一レ正、恐濫二法門一、從レ是始乎、宜レ依二漢沙門道榮、學問僧勝曉等轉經唱禮一、餘音並停、

養老四年十二月廿五日、〇又見二續日本紀一、

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、勅、唐僧道榮、身生二本鄉一、心向二皇化一、遠涉二蒼波一、作二我法師一、加以訓導子虫、令レ獻二大瑞一、宜擬從五位下階、仍施二緋色袈裟幷物一、其位祿料一依二令條一、

〔元亨釋書十六遊〕釋道璿、唐國人、居二東都大福先寺一、留學普照、榮睿諭誘赴レ東、天平七年來、勅館二大安寺西唐院一、璿善二禪律一、于レ時本朝乏二戒學一、朝廷請爲二戒師一、璿不レ倦二授受一、嘗曰、所二以成一レ聖必由二持戒一、常誦二梵網其音清亮如一レ出二金石一、聞者感動、〇略下

〔續日本紀十孝謙九〕天平勝寶六年正月壬子、入唐副使從四位上大伴宿禰古麻呂來歸、唐僧鑒眞、法進等、八人隨而歸朝、

〔續日本紀二十（淳仁）一〕天平寶字二年八月庚子朔、其大僧都鑒眞和上、戒行轉潔、白頭不變、遠涉蒼波、歸我聖朝、號曰大和上、〇下略

〔續日本紀二十四（淳仁）〕天平寶字七年五月戊申、大和上鑒眞物化、和上者揚州龍興寺之大德也、博涉經論、尤精戒律、江淮之間獨爲化主、天寶二載、留學僧榮叡業行等白和上曰、佛法東流至於本國、雖有其教無人傳授、幸願和上東遊興化、辭旨懇至、諮請不息、乃於揚州買船入海、而中途風漂船被打破、和上一心念佛、人皆賴之免死、至於七載、更復渡海、亦遭風浪漂著日南、時榮叡物故、和上悲泣失明、勝寶四年、本國使適聘于唐、業行乃說以宿志、遂與弟子二十四人寄乘副使大伴宿禰古麻呂船歸朝、於東大寺安置供養、于時有勅、校正一切經論、往々誤字、諸本皆同、莫之能正、和上暗誦多下雌黃、又以諸藥物令名眞僞、和上一々以鼻別之、一無錯失、聖武皇帝師之受戒焉、及皇太后不念所進醫藥有驗授位大僧正、俄以綱務煩雜、改授大和上之號、施以備前國水田一百町、又施新田部親王之舊宅、以爲戒院、今招提寺是也、和上預記終日、至期端座、怡然遷化、時年七十有七、

〔唐大和上東征傳〕大和上、諱鑒眞、揚州江陽縣人也、俗姓淳于、齊人髡人後、其父先就揚州大雲寺智滿禪師受戒學禪門、大和上年十四、隨父入寺見佛像感動心、因請父求出家、父奇其志許焉、〇略日本天平十四年歲次壬午時大和上在揚州大明寺、爲衆講律、榮叡普照師至大明寺、頂禮大和上足下、具述本意曰、佛法東流至日本國、雖有其法而無傳法人、本國昔有聖德太子、曰、二百年後聖教興於日本、今鍾此運、願大和上東遊興化、大和上答曰、昔聞南嶽思禪師遷化之後、託生倭國王子、與隆佛法、濟度衆生、又聞日本國長屋王崇敬佛法、千袈裟便棄施此國大德衆僧、其袈裟上繡著四句、曰、山川異域、風月同天、寄諸佛子、共結來緣、以此思量、誠是佛法與隆有緣之國也、今我同法衆中、誰有應此遠請、向日本國傳法者乎、時衆默然、一無對者、良久有祥彥進曰、彼國大遠、性命難存、滄海淼漫、百無一至、人身難得、中國難生、進修未備、道果未到、是故衆僧咸默無對而已、和上曰、爲是法事也、何惜身命、諸人不去、我卽去、耳祥彥亦隨去、爰僧道興、道航、神崇、忍靈、曜祭、明烈、道默、道因、法藏、法載、曇靜、道選、幽巖、如海、澄觀、德清、思託等二十一人、願同心隨和上去、要約已畢、始於河東造船、揚州倉曹李湊、依李林宗書、亦同撿校、造舟備粮、大和上、榮叡、普照師等、同在既濟寺備辨乾粮、且云、將供具往天台山國清寺供養衆僧、是歲天寶二載癸未、海賊大動繁多、台州、温州明州、海邊並被其害、海路塞公私斷行、僧道航云、今向他國、爲傳戒法、八皆高德、行業肅清、如海等少學可停却矣、時如海大瞋、裹頭入州、上採訪廳、告曰、大使知否、有僧道航造舟入海、與海賊連、都有若干人、辨乾粮在既濟、開元大明寺復有百海賊入城來、時淮南採訪使班景倩聞卽大駭、便令人將如海於獄推問、又差官人於諸寺收捉賊徒、於既濟寺搜得乾粮、大明寺捉得日本僧榮叡師、並送縣推問、僧道航隱俗人家、亦被捉得、並禁獄中、〇略中僧榮叡等、既是蕃良久見水動、入水得榮叡師、並送縣推問、僧道航隱俗人家、亦被捉得、並禁獄中、〇略中僧榮叡等、既是蕃僧、入朝學問、每年賜絹廿五匹、四季給時服、兼預隨駕、非是僞濫、今欲還國、隨意放還、宜依揚州例送遣、時榮叡普照等、四月被禁、八月方始得出、其玄朗玄法從是還國別去、時榮叡普照同議曰、我等本願爲傳戒法、請諸高德、將還本國、今揚州奉勅唯送我四人、不得請諸師、而空還無益、豈如不受官送、依舊請僧、將還本國、流傳戒法乎、於是巡避官所、俱至大和上所、計量、大和上曰、不須愁、宜求方便遂本願、仍出正廬八十貫錢、買得嶺南道採訪使劉昌隣之軍舟一隻、雇得舟人等十八口、備辨海粮、〇略中僧祥彥、道興、德清、榮叡、普照、思託等一十七人、玉作人、畫師、佛刻鏤、鑄寫繡師、修文鐫等工手、都有八十五人、同駕一隻舟、天寶二載十二月、擧帆東下、到狠溝浦、被惡風漂浪擊舟破、人總上岸、潮水來至人腰、大和上在

烏蓋艸上、餘人並在水中、多寒風急甚太辛苦、更修理舟下至大坂山、泊舟不得、卽下至嶼山、住一月、待好風發、欲到桑山、風急浪高、舟無著岸、無計可量、纔離嶮岸、還落石上、舟破人並舟上岸、水米俱盡、飢渴三日、風停浪靜、泉郎將水米來相救、又經五日、有還海、官來問消息、申請明州大守處分、安置鄮縣山河青王寺〇中略天寶七載春榮叡普照師從同安郡來下、至揚州崇福寺大和上住處、和上更與二師作方便、造舟買香藥、備辦百物、一如天寶二載所備、同行人僧祥彥神倉、光演、頓悟道祖、如高德清、日悟、榮叡、普照、思託等、道俗一十四人、及化得水手一十八人、及餘樂相隨者、合有三十五人、六月廿七日、發自崇福寺至揚州新河、〇中略凡在海中經十四日、方得著岸、〇中略至端州龍興寺、榮叡師奄然遷化、大和上哀慟悲切、送喪而去、端州〇中略後移開元寺、普照師從此辭大和上、向嶺北去、明州阿育王寺、是歲天寶九載也、時和上執普照師手、悲泣而曰、爲傳戒律發願過海、遂不至日本國、本願不遂、於是分手感念無喻、時和上頻經炎熱、眼光暗昧、爰有胡人言能治目、遂加療治眼遂失明、〇略中天寶十二載歲次癸巳十月十五日壬午、日本國使大使特進藤原朝臣清河、副使銀光錄大夫光祿卿大伴宿禰胡麻呂、副使銀青光祿大夫秘書監吉備朝臣眞備、衞尉卿安倍朝臣朝衡等來延光寺白大和上云、弟子等早知和上五遍渡海向日本國將欲傳敎、故今親奉顏色、頂禮歡喜、弟子等、先錄和上尊名幷持律弟子五僧、已奏聞主上、向日本傳戒、主上要令將道士去日本、君王先不崇道士法、便奏留春桃原等四人、令住學道士法、爲此和上名亦奏退、願和上自作方便、弟子等自有戒國信物、船四舶行裝具足去亦無難、時和上許諾已竟、時揚州道俗皆云、和上欲向日本國、由是龍興寺防護甚固、無由進發、時有仁幹禪師從務州來、密知大和上欲出、備具船舫於江頭相待、大和上於天寶十二載十月廿九日戊時、從龍興寺出至江頭乘船下、〇中略相隨弟子、揚州白塔寺僧法進、泉州超功寺僧曇靜、台州開元寺僧思託、揚州興雲寺僧義靜、衢州靈耀寺僧法載、竇州與元寺僧法成等一十四人、藤州通善寺尼智首等三人、揚州優婆塞潘仙童、胡國人安如寶、崑崙國人軍法力、膽波國人善聽、都二十四人、〇中略廿日〇十二月乙酉午時、第二舟著薩摩國阿多郡秋妻屋浦、廿六日辛卯、延慶師引大和上、入太宰府、天平勝寶六年甲午正月十一日丁未、副使從四位上大伴宿禰胡麻呂奏、大和上到筑志太宰府、二月一日、到難波、唐僧崇導等迎慰供養、三日至河內國、大納言正二位藤原朝臣仲麻呂、遣使迎慰、復有道璿律師、遣弟子僧善談等迎勞、復有高行僧、志忠、賢璟、靈福、曉貴等、卅餘人迎來禮謁、□□四日、入京、勅遣正四位下安宿王、於羅城門外迎慰拜勞、引入東大寺安置、五日、唐僧璿律師、婆羅門菩提僧正來慰問、宰相右大臣大納言已下官人百餘人來、禮拜問訊、後勅使正四位下吉備朝臣眞備來宣詔曰、大德和上遠涉滄波、來投此國、誠朕意喜慰無喻、朕造此東大寺經十餘年、欲立戒壇傳受戒律、自有此心、日夜不忘、今諸大德遠來傳戒、冥契朕心、自今以後授戒傳律一任和上、又勅僧都良辨、令錄諸臨壇大德名進禁內、不經於日、勅授傳燈大法師位、其年四月、初於盧舍那殿前立戒壇、天皇初登壇受菩薩戒、次皇后〇光明子皇太子〇孝謙亦登壇受戒、尋爲沙彌澄修等四百四十四人授戒、又舊大僧靈祐、賢璟、志忠、善頂、道緣、平德、忍基、善謝、行忍等八十餘人僧、捨於舊戒、重受和上所授之戒、後於大佛殿西別作戒壇院、卽移天皇受戒壇土築作之、大和上從天寶二載始爲傳戒、五度裝束、渡海艱辛、雖被漂廻、本願不退、至第六度過日本、卅六人總無常退心、道俗二百餘人、唯有大和上學問僧普照、天台僧思託、始終六度、經蹈十二年、遂果本願來傳聖戒、方知濟物慈悲宿因深厚、不惜身命所度極多、

〔宋高僧傳十九明律〕唐揚州大雲寺鑒眞傳

釋鑒眞、姓淳于氏、廣陵江陽縣人、〇略中時日本國有沙門榮叡普照等、東來慕法、用補缺然、於開元年中、達于揚州爰、來請問、禮眞足曰、我國在海之中、不知距齊州幾千萬里、雖有法而無傳法人、譬猶終夜有求於幽室、非燭何見乎、願師可能輟此方之利樂爲海東之導師乎、〇中略眞乃慕比丘思託等一十四人、買舟自廣陵發經律法離岸、乃天寶二載六月也、

〔本朝高僧傳五十七淨律〕和州招提寺沙門法進傳

釋法進、支那國人、王氏之子、少歲出家、涉遊講肆、後從鑒眞和尙進具、串遍三藏、精于台律、出世揚州白塔寺、丕振律藏、天寶初、隨眞之東渡、風飡水宿、備嘗辛岨、本朝天平勝寶六年、達于南京、聖武上皇特加寵遇、七年春、東大壇成、爲國授戒、進爲和上、尋任律師、明年夏、上皇崩、孝謙帝命爲薦福導主、任大僧都、進於眞公、有師友之分、德行尤邵、直恒欽之、及其遷招提、令進司戒壇院、進天賦聰睿、善通和語、在于東大之唐禪院、講梵網經疏、及戒本疏、羯磨行事鈔、比丘尼鈔、疏尼義鈔、慧光略疏、知首大師廣疏、法礪中疏、是謂律之五大部三要疏也、又隨衆請講天台三大部四遍、此方學者渴聞眞教、如久旱逢初雨、進初洋中屢厄風濤、祈海神曰、無恙得至、必建寺報焉、繇是創佛國寺於吉野山、講授戒法、遊化讃州、至多度郡宿於民家、夜間隣舍聞嬰兒誦佛頂呪、人初不解之、謂呱呱聲、進意異之、信宿呪聲如前、詰朝謂其父母曰、此兒非凡流也、佗日當弘大法、善育之、後如言、卽弘法大師也、寶龜九年九月二十九日、示寂、春秋七十、平生述作多爲烏有、今有梵網經注、沙彌經鈔等、嗣法者衆、聖一慧山、其上首也、二師共支那人、一公居佛國之第二世矣、

贊曰、聖武之時、南京戒壇成、而詔僧正良辨錄法進如寶之臨壇十大德、二靜亦厥之人也、

〔日本後紀（二十四嵯峨）〕弘仁六年正月己卯、少僧都傳燈大法師位如寶卒、大唐人、不知何姓、固持戒律、無有缺犯、至於呪願、天下絕疇、局量宏遠、有大國之風、能堪一代之壇師者也、

〔本朝高僧傳（五十七淨律）〕和州招提寺沙門如寶傳

釋如寶唐土人、高奇俊慧、早師鑒眞、削染服業、僅納息慈、從眞東渡、從事戒壇招提之際、進退有度、受具足戒、綜覈諸部、住下野藥師寺、戒行冰雪、聲望遠敷、緇素欽尙、移招提寺、闡揚律教、講演之外、檀興成績、啓建大殿、安丈六盧舍那佛、桓武帝與后妃太子、就寶受戒、當時公卿傾忱承教、延曆二十三年春、寶奏曰、招提寺者、天平寶字三年、大唐鑒眞和尙、爲聖武皇帝所建也、爾來十五年、雖曆律藏、未有披閱、休望賜省牒、弘傳講學、制可、乃置筵講律、以爲永式、嵯峨天皇弘仁四年、賜封五十戶、給僧粮、寶上表謝思、明年五月某日化、壽九十餘焉、

和州招提寺沙門法載傳（眞環 法顒 仁韓）

釋法載、眞丹國人、受具鑒眞三藏、踪徽、出住揚州靈曜寺、高張律網、啓迪學者、天平勝寶癸巳東來儀刑峭拔、望有遠致、天平寶字之季、住招提寺、弘律布教、某年月示寂、神足眞環、戒學入徽、續住招提、枝葉蔭森、今南京之以律系者、皆載之後也、又釋仁韓、釋法顒者、支那國人、久從鑒眞、戒行教學、共聞一世、嘗從眞公之來化、在招提寺、昆贊師道矣、

和州招提寺沙門義靜傳（雲靜）

釋義靜、受鑒眞之戒傳、住揚州與雲寺、眞公東遊之日、棄衆從來、潔己訓物、勵力毘尼、後補招提、僧俗仰風、以檀貿購藏經、建輪藏於招提、又釋雲靜、唐國人、研戒玉於鑒眞之室、居泉州超功寺、弘持毘尼師範一方、眞公東行同來、或侍戒壇、或傍招提、靜心匠天然工、自彫盧遮那丈六像、安于招提之大殿、梵相端嚴、見者敬肅、其像今存焉、〇略 中

和州大安寺沙門思託傳

釋思託者唐國沂州人、王氏、仙人瑯琊王喬之後也、青衫才警、嘗夢與文殊善財遊妙喜世界衆香國土、因傾心佛教、玄宗勅隨鑒眞于大雲、剪髮納戒、益研經律、兼涉文學、住台之開元、居天台山、天寶二年、從師東遊、數逢海厄、勞晝復計、四回造船、五次浮海、〇略 中 遂以天平勝寶六年春、詣聖朝、勅於東大寺、行戒壇法、護鵝之賓、門垠肩聯、一日唐道璿律師訪曰、公律學有緒、使吾門中閑漢語者、聽諸戒疏、託於大安寺唐院、爲忍基常魏等講法勵疏、寶龜元年秋八月四日、稱德帝崩、葬於和之高野山、詔爲法筵導師、託記眞公之行績、撰東征傳、文約事詳、而有悼眞公傷曰、上德乘杯渡、金人道已東、戒香餘散馥、慧教法門中、託延曆季年以七十餘謝世焉、南衆傳云、空海就託受三聚戒、蓋此時當時之俊傑、依付於法進、思託二師學經律、空公亦爾與〇略 中

讃州屋島寺沙門慧雲傳（慧眞　慧達　慧常　慧喜）

釋慧雲、號空盌、不記氏、唐國人、早從鑒眞剃髮習學、高才偉器、名聞海岱、隨眞公來、納具東大、住戒壇院、居第五世、移屋島寺、爲第一代、敎授四方、來學爭席、空海初就雲學毘尼云、又有慧良、慧達、慧常、慧喜四師、共支那人、從侍鑒眞、稟滿分戒、律儀秉彝、學通台敎、隨眞師來、進退乎東大招提之間、而威儀可見焉、

和州東大寺沙門忍基傳

釋忍基、不詳氏產、或云、唐國人、受業道璿、後從鑒眞、受具足戒、依附十餘年矣、常歎息託遊刃戒篇、天平寶字三年、於東大寺唐院、講演礪律師四分戒本疏、學侶津湊焉、

唐國開元寺沙門法成傳

釋法成、唐國人、弱冠神秀、拜鑒眞和尙、納息慈戒、決五篇七聚之疑、究一心三觀之旨、開法於賓州開元寺、大轉法輪、聞和尙東渡、解印同船、嘗遍苦辛、來於此土、

〔元亨釋書（六淨禪）〕釋義空、唐國人、事鑒官齊安國師、室中推爲上首、初慧蓁法師跨海覓法、吾皇太后橘氏（○橘嘉智子）欽唐地之禪化、委金幣於蓁、控聘有道尊宿、蓁到杭州靈池院、參于國師、且通太后之幣、國師感嗟納之、蓁曰、我國信根純熟、敎法甚盛、然最上禪宗未有傳也、願得師之一枝佛法、爲吾土宗門之根抵、不亦宜乎、國師令空充其請、空便共蓁泛海著大宰府、蓁先馳奏、勅迎空館于京師東寺之西院、皇帝仁明賚錫甚渥、太后創檀林寺居焉、時々問道、官僚得指受者多、中散大夫藤公兄弟其選也、蓁再入支那、乞蘇州開元寺沙門契元、勒事刻琬琰、題曰日本國首傳禪宗記、附舶寄來、故老傳曰、碑峙于羅城門側、門楹之倒也、碑亦碎、見今在東寺講堂東南之隅、

〔扶桑略記（二十四醍醐）〕延長三年十月七日丙寅、令伊望朝臣給勘唐僧湛譽智琮等給物文、仰唐僧長秀、衣服食料宜量令宛給、左大臣令申云、湛譽智琮等相從來時、其事分明、實雖唐人、太宰府未申其由、且以穀倉院物、令給食料、同白米二斛、略准湛譽例、衣服年給絹二疋綿十屯准智琮例、六年戊子三月廿日、勅遣淑光朝臣於左大臣許、給勘唐僧沙彌等給料例文、仰唐人僧長秀、自公家准前例可令給料事、前年仰穀倉院令給、而彼院屢稱無物不行、一日自院給長秀、仍所改仰也、

〔佛祖統記二十三〕法師子麟四明人、五代唐清泰二年（我承平五年）往高麗百濟日本諸國授智者敎、

〔蘭溪和尙行實〕釋道隆、宋國西蜀涪江人也、姓再氏（略）入浙見範無準、冲癡絕、簡北磵諸大老、皆無所契、漸屈陽山依無明性禪師、性室中擧東山牛過窻櫺話、隆聞有省、嘗聽東僧之盛稱國光及禪門之草昧、常志游化、遂以淳祐六年、乘商舶著宰府、本朝寬元四年丙午也、乃入都城寓泉涌寺之來迎院、又杖錫赴相陽、時了心踞龜谷山、隆掛錫於席下、副元帥平時賴聞隆之來化、延居常樂寺、軍務之暇、命駕問道、平帥乃啓、巨福之基趾構大禪苑、請隆開山、說法東關、學徒奔溪佇聽（略）居十三年、遷平安城之建仁、都下緇素欽挹禪化（略）寬元上皇（後嵯峨）聞隆道譽、召見宮中、隆奏一偈曰、夙緣深厚到扶桑、忝主精藍十五霜、大國八宗今鼎盛、建禪門廢仰賢王、上皇嚮隆之護宗之志、經三歲返建長、福山寢室之後有池、池側有松、其樹條直、一日斜偃向室、衆僧怪之、隆曰、偉服之人居松上、與我語、我問住何處、對曰、山之左鶴岡也、語已不見、以其人之居、故松偃耳、諸徒曰、鶴岡者八幡大神祠所也、恐神來此耳、自此其徒欄楯其樹、名曰靈松、徒屬中有流言者、因此爲甲州之行、北地之胥吏氓黎、幸隆之寬讁、隆亦曰、我爲法跨海入此國、只周旋皇畿侯服而已、不遑誘導遠陬也、偶罹于讒誣而猥于羯獠、是我弘道之素也、天龍豈有意於此乎、甲之居猶洛之數、又還相主龜谷山、六群之徒謗吻未合、再成甲行、又還壽福、弘安元年孟夏歸于福山、秋七月示微疾、至二十四日、書偈辭衆而寂、

〔元亨釋書（六淨禪）〕釋道隆（略）中府奏乞謚賜大覺禪師、本朝禪師之號始于隆也、

〔東巖安禪師行實〕師名惠安、號東巖、播州人也（略）中同年（正元元年）兀庵和尙來朝、是則太守崇公（道崇卽北條時賴）先見蘭溪和尙染指於禪味、故志轉增進、如渴飮少鹽水、重遣專使尋訪明師、正信內發、正師來應是和尙自初祖正傳二十六世、無準和尙上足與別山斷橋西岩等並駕、時號四詰、先住南禪靈岩兩刹、將

上、五峯、是不、應、我國、但依崇公信心來、崇公圓寂後、果歸朝、兀庵始到建長、掌國大守最明崇公懷香來參、力勸端坐受、炷拜了復進前覆云、弟子在、大宋、曾禮拜和尚、今者多幸再拜尊顏、兀庵見其語異、即握起拳頭云、吾雖年老、尚拳頭硬在、又問、和尚尊年多少、兀庵云六十三、崇云、弟子不問者箇年、兀庵仍竪拳頭云、莫是這箇年麼、崇擬議無語、兀庵使竪三拳、崇折然領詰云、某蒙和尚拳、歡喜無量、兀庵云、不得作拳頭會方就座、少歇而辭、弘長二年十月十六朝、最明啓問曰、弟子近日坐禪、見得非斷非常底、兀庵曰、參禪只圖見性、若見得惟方得千了百當、崇曰、和尚方便指示、兀庵曰、天下無二道、聖人無二心、苦識得聖人心、即是自己本源自性、崇曰、道崇無心、兀庵曰、若眞箇無心、則堅窮三際橫徧十方、萬古流通、眞至今日、若見此性、直下便見也、良久云、還見麼、崇云、森羅及萬象、山河大地與自己無二無別、兀庵曰、青青翠竹盡是眞如、鬱々黃花無非般若、崇公言下忽然契悟、通身汗流、乃曰、弟子二十一年、旦暮望令一時已滿足、感泪數行、作禮九拜、兀庵即起、佛前燒香、與之印可、即將法衣付之、爲說付法偈、

我無佛法一字說、子亦無心無所得、無說無心無得中、釋迦親見然燈佛、〇下略

〔東福紀年錄〕龜山天皇文應元年庚申

宋寧兀庵來朝、聖一喜其至、延之、待遇甚渥、〇略中

平元帥時賴、聞寧道價、□歸相陽、居巨福山、未幾遷住持位、

〔元亨釋書六淨禪〕釋普寧、號兀庵、宋國西蜀人也、幼年祝髮、〇略中時宋地北虜橫放、雖寺院輒受虐、偶本朝道舊、講五峯之法義、屢附商舶、時々聘招、景定二年庚申、泛滄海順帆不艱、速達博多、寓聖福寺、即文應元年也、尋至帝都、東福聖一迎接掃客位、延之、待遇甚渥、京師緇素、奔波瞻仰、副元帥平時賴、聞寧道價、迓歸相陽、寓止巨福山、住持蘭溪者、寧之蔣山舊友也、相見喜慰勞問、副帥信嚮日煽、〇略中逮退歸其子時宗領、副帥差部從、送到西府、文永二年也、風帆無恙達、明州、

〔大通禪師行實〕禪師、諱子曇、號西澗、〇略中浙東道台州路仙居人、〇略中年十七歲、度宗咸淳改元乙丑也、是年秋八月、石帆衍和尚赴、詔自、吳之承天、移、淨慈、師徑往入、室參問、資緣契會、頓止、奔馳侍、香山中、六年庚午春二月、石帆有、旨領、天龍、師隨侍行也、七年辛未、有、本朝副元帥平公時宗鈞命、石帆和尚、以、法語一段、勉、其行、航、海而來、即文永八年也、師年二十有三、覲、光上邦、及、入東府、建長蘭溪、東福聖一、各闢、徹軒下、榻相待、宋第十六代少帝德祐二年丙子春二月、北元革、宋、師歷、於八白、弘安元年戊寅再回、元朝、世祖老皇帝至元十五年也、

〔佛光禪師塔銘〕佛光禪師、會稽鄞人、許伯濟之子也、〇略中德祐初、度宗子、幼主立、改、德祐、辟、地雁峯、大兵忽臨、白刃交、師顏、師堅坐說法不、顧、衆斂、兵作、禮而去、〇略中明年還、天皇依、一公、而宋亡、〇略中明年夏五月、日本有、賢大夫、曰、平將軍、時宗、者、遣、使來迓、慨然赴之、六月、當云八月、至、日本、平將軍而下、傾國郊迎、入主、建長寺、將軍躬執、弟子禮、〇略中越五年、當云四年、平將軍建、寺云、圓覺、復延、師主之、一據講席、群鹿咸集、因號、其山曰、瑞鹿之山、〇略中至元二十三年、丙戌、弘安九年、庭前桂橘忽夏枯、師曰、吾將逝矣、九月三日、手書別、諸方、至夕擧偈竟、端坐而逝、後三日葬、其骨、閣維無、骨、與塔銘序中可、見、建長之後山、

○按ズルニ、宋ノ亡ブルハ、彼ノ國德祐三年ニシテ、我弘安二年ナリ、翌年卽チ弘安三年五月、時宗ノ聘ニ應ジテ來朝セシナリ、

〔元亨釋書八淨禪〕釋祖元、宋國慶元府人、姓許氏、〇略中明年復、四明、天童一環溪請歸、第一座、己卯之年、吾建長虛席、副元帥平時宗、具、疏幣、航、海聘、名宿、明牧以、元充、遐招、環溪授、佛鑑法衣、元拈起曰、師兄世尊傳、金襴外、別傳何物、咄過在汝殃及、我、乃披、衣、五月離、太白、六月著、太宰府、乃弘安二年也、八月到、相陽、平帥執、弟子禮、邀入、福山、待遇日渥、五年冬、圓覺寺成、命、元爲、開山第一祖、開堂之日、群鹿臨筵、元爲、吉祥、卽名、山以、瑞鹿、示、衆曰、參禪須是打、併胸中、淨潔去、卻情識中所、重、單々只將、自己、參取、自己既是自己、因甚參、自己、蓋緣、爾被、知見解會日夜差排日夜纏縛不、能、得、解脫不、能、得、出頭、此是第一種牢獄、〇略中四年、〇安弘春正月、平帥來謁、元采、筆書、呈、帥曰、莫、煩惱、帥曰、莫、煩惱何事、元曰、春夏之

間、博多擾騒、而一風纔起、萬艦掃蕩、願公不爲慮也、果海虜百萬寇鎭西、風浪俄來、一時破沒、○略 中 先三年、平帥擒縅紙乞法語、元書鎖口訣預識、帥不委也、寇平後、帥問曰、海寇風蕩、和尙自何先知乎、元笑曰、更過兩年、說與太守、然又鎖口訣中已寫呈了、後三年平帥卒、九年八月、元語首座照無象曰、吾有一事、辨在季秋、照曰、何事、元笑而不答、月末示疾、九月三日、親書遺書、別太守及諸方、亡慮數通、晩以偈示衆、○略 中 置筆逝、年六十一、

〔東明和尙塔銘〕師諱慧日、明州定海沈氏子、生於趙宋咸淳壬申歲、○略 中 爲直翁之嗣、閱六載、屬日本馳書禮請、乃登其舶、逾年而至、卽己酉歲、爲日本延慶二年也、明年、最勝園寺平氏演公、○北條貞時 以師主禪與、又明年、移圓覺、未幾就此地、卽圓覺之隴西也、作菴爲休藏之所、卽以白雲名之、以示不忘其舊之本、菴成、戒暫休退、而屢被遷易、相陽諸刹、寄迹殆盡、莫能久臥、所謂建長壽福及玆山者、爲五山之列、莫不再三以至四五、曆應庚辰、於建長爲五登焉、至六月、疾退處慈菴、問疾者塡門、酬酢迎送如平居無恙、弟子求眞贊法語者、無不應之、十月疾病、親製檀那故舊遺書者數、越明日夜漏欲盡、問侍僧以卵堵已成否、曰已成、師曰、畢竟事作麼生、侍僧莫能復對、乃與小師圓旨首座答問罷、卽欲脫去、侍僧展紙請遺偈、師揮手却之、不從、請弗止、不得已而書曰、六十九年、有生有死、古渡雲收、青天在水、擲筆而化、卽是月初四日卯時也、世壽如偈、

〔本朝高僧傳二十 淨禪 六〕相州建長寺沙門慧日傳

釋慧日、號東明、俗姓沈氏、○略 中 建武二年秋、後醍醐帝下勅、爲朝廷上堂、日乃陞座祝聖、躬曆應三年、以府命復往建長、爲第五登焉、

〔本朝高僧傳二十 淨禪 五〕京兆南禪寺沙門正澄傳

釋正澄、號清拙、元之福州建江邑劉氏子、○略 中 著博多濱、乃嘉曆元年矣、明年正月、入平安城、副元帥平高時、遣專使迎請住建長、行華夏製規、鐘鼓改

響、○略 中 堂中衆滿五千指、平帥施粮二千石、以資食輪、居三載、移淨智、○略 中 住職四載、退閑於福山禪居菴、元弘三年、後醍醐天皇龍馭回雒、詔證住建仁、賜莊田若干畝、居三載、與衆同苦甘、一日帝詔證入大內、命主南禪、澄堅辭而退、尋天使捧紫封而到、始拜恩命、凡住南禪前後兩回、際時孔難、集衆提唱、一如建仁、信州太守源貞宗、小笠原氏 欽澄道貌、就受戒法、執弟子禮、敭開善寺於本州伊賀良縣、迎澄爲開山第一世、住二載、擾退鼓陞堂、自持拄杖、徑歸東山禪居菴、朝廷有旨再董建仁、澄辭以疾、詔三至、乃就焉、湖海雲衲歡喜踊躍、曆應二年正月十日、俄嬰微疾、○略 十七日逝世、齡六十有六、

〔本朝高僧傳二十 淨禪 六〕京兆南禪寺沙門楚俊傳

釋楚俊、字明極、元明州慶元府黃氏子、○略 中 至順庚午、俊年六十九、應書幣東渡、當元德二年矣、乃入上都、後醍醐帝聆異邦名德、召宮、○略 中 明日遣中使、賜佛日燄慧禪師號、勑建禪之廣嚴寺爲第一代、續抵相州、平帥高時、請住建長、○略 中 不幾奉詔遷洛之南禪建仁、釋氏宿碩、儒宗儁彥、望風而至、以建武三年九月二十七日、寂于建仁方丈、

〔太平記 四〕俊明極參內事

去元亨元年ノ春ノ頃、元朝ヨリ俊明極トテ、得智ノ禪師來朝セリ、天子直ニ異朝ノ僧ニ御相看ノ事ハ、前々更ニ無リシカ共、此君禪ノ宗旨ニ傾カセ給テ、諸方參得御志オハセシカバ、御法談ノ爲ニ、此禪師ヲ禁中ヘゾ被召ケル、事ノ儀式、餘ニ微微ナランハ、吾朝ノ可恥トテ、三公公卿モ出仕ノ敷ヲ刷ヒテ、蘭臺金馬モ守禦ノ備ヲ嚴クセリ、夜半ニ燼燭ヲ傳テ、禪師被參內、主上醍醐 紫宸殿ニ出御成テ、玉座ニ席ヲ薦メ給フ、禪師三拜、禮訖テ香ヲ拈シテ萬歲ヲ祝ス、時ニ勑問有テ曰、棧山航海得得來、和尙以何度生セン、禪師答云、以佛法緊要處度生セン、重テ曰、正當恁麼時如何、答曰、天上ニ有星皆拱北、人間無水不朝東、御法談畢テ、禪師拜揖シテ被退出、翌日別當實世卿ヲ勑使ニテ、禪師號ヲ被下ル、時ニ禪師、向勑使、此君雖有元龍ノ悔、二度帝位ヲ踐セ給ベキ御相有トゾ被申ケル、

今君爲武臣因テ、亢龍ノ悔ニ合セ給ヒケレ共、彼禪師ノ相シ申タリシ事ナレバ、二度九五ノ帝位ヲ踐セ給ハン事、無疑思食ニ依テ、法體ノ御事ハ、暫ク有マジキ由ヲ、強テ被仰出ケリ、

〔笠仙和尚行道記〕日本國建長禪寺笠仙禪師、實自保寧出、諱梵僊、字笠仙、雅稱事々禪子○略中中華古明州象山縣徐氏子、○略中登徑山、會明極赴日本之聘、挽師偕行、師追念保寧、冀時當大化日本之記、因徑之、己巳○元年德五月、離福建度海、六月、至本國、關西掌國諸官迎勞勤至、館於大慶宅江守大江氏直菴、卽欲以豐州萬壽處師、僧意曰、大名已達京師未可也、庚午○元年德居京、二月、至關東館於建長、相摸太守平氏高時、一見如平生懽、明極住建長、師爲第一座、別駕藤氏之子高景爲極弟子、以御前南禪々寺奏師瑞世、意在嗣極、師笑而却之、大江氏知師不赴南禪復以萬壽聘師、亦不赴壬申、大江氏淨妙起師、高景峻阻、平氏曰、惟我命、開堂日辨香、爲保寧拈出、直菴欣然致賀、泊平氏亡源氏當政、兄尊氏仁山弟直義古山、尤篤於師、爲其母夫人、延之私第、兄弟侍焉、供饋無虛時、寺之前迫於官舍、一夕兵燹夷爲廣墟、古山盡請以屬寺、開拓門徑爲一方偉觀、甲戌○元年建長直菴亡遺命、復以萬壽延師、源固留而遷、論起、師主淨智入寺、賜官幣三萬地三千畝、乙亥、○二年建武賜天柱峯下故址爲壽塔、其山下瞰大海、絕類楞伽山、師樂其勝、作楞伽院、榜曰心地要門、燕居之所、曰一粟乾坤、曰語心堂、曰含暉室、曰最勝岩、絕頂作亭曰妙高、日以楞伽爲事、戊寅、○元年曆應吏部侍郎大江氏泰故直菴之子、承先志、以關東三浦無量壽禪寺命師開山、己卯、退淨智、稱疾居東堂、辛巳奉旨、仍住御前瑞龍山南禪々寺、以四月十三日開堂演法、中使繕錄以進、昇本寺于五山之上、七月二日、大納言兼征夷大將軍仁山僧左武衞將軍古山入寺飯僧、請陞座開堂、加嘆而去、逾年遠引、重請入寺、由是相寺之宜、鑿陂瀦水、輦土爲山、左環右抱、路經其中、山曰瑞龍、陂曰豢龍、亭曰鎖春、寺以日裕、境以日勝焉、癸未○二年康永五月、太上天皇○嚴光臨幸、對御談玄、龍顏大悅、賜饌曰、師其加餐、毋親朕也、海內榮之、師固自若耳、未幾勇退、被旨於本寺建壽塔、亦稱楞伽院、乙酉、○元年貞和仁山施田資香鑑、丙戌、○二年貞和春、受眞如命、令住建長、丁亥、○三年貞和入寺、凡禪林典禮悉

行之、禪後昆見古道顏色、戊子○四年貞和四月、以疾謝事、居布金館、七月、回淨智楞伽院、問疾者至、剛應如常、初八日、戶部侍郎憲顯藤氏來訊、歸告仁山公長子左典厩將軍義詮君、翌日捨安房州正木鄉田庄若干、以贍其塔、弟子輩悲泣競求眞贊、師隨手應之、既而治命畢、大書祇夜泊然而逝、

〔本朝高僧傳三十〕京兆南禪寺沙門永璵傳

釋永璵、元國四明人、東陵其號也、○略中常志遊扶桑、而無由渡海、至正十一年春、崑山客謂曰、大倉縣有往日本一舶、璵欣然整包附載來過、風順濤穩、經二旬餘著博多津、本朝觀應二年也、憩聖福寺、秋七月、入都、謁夢牕國師、牘其遠涉、延館西方蘭若、待遇深懇、會玄無極謝天龍事、國師亦坐病牀、卽屬璵以寺務、○略中璵後住相之圓覺建長、化導甚盛、貞治四年五月六日、吉祥而逝、塔於南禪寺西雲菴、朝廷崇德勅謚妙應國師、牘其遠涉、延館西方蘭若、待遇深懇、會玄無極謝天龍事、國師亦坐病牀、卽屬璵以寺務、

贊曰、禪祖之來、自支那者、亡慮十有五人、皆是一時英傑也、歷僊五岳、宗規傳世、璵公殿後、求唱新豐曲、謔妙應光國慧海慈濟禪師、○略中

贊曰、禪祖之來、自支那者、亡慮十有五人、皆是一時英傑也、歷僊五岳、宗規傳世、璵公殿後、求唱新豐曲、謔妙應光國慧海慈濟禪師、○略中

贊曰、禪海之深、雖不及古、而非今時明僧之類、然觀其署述間、有所蔽於詖辭、爲璵公慙之、學者詳焉、

〔隱元琦老和尚塔銘〕師諱隆琦、號隱元、閩之福清人、姓林氏、爲八閩望族、世守詩書、簪纓濟美、父名德龍、母龔氏有賢行、好施、生子三人、師其季也、甫六歲、父客於楚、未遑攻讀、九歲入學、迥異凡兒、恩父久客未歸、家道式微、遂業耕樵、以供母承歡、以孝聞、常靜夜坐臥松陰、仰觀天文星月有感、因萌學佛之心、比壯母欲爲聘室執不從、惟以尋父爲念、於是繭足直抵豫章、至金陵歷覓三載、杳無蹤跡、附香船至南海普陀山、朝禮大士、隱求尋父之願、至其地、見佛境殊勝、凡心冰釋、以爲人生功名富貴、如太空浮雲、唯成佛作祖、方了大丈夫事、卽投潮音洞爲茶頭、日供萬衆、略無難色、後歸省母、親母奉佛茹蔬、及母終子道已盡、出家之念益決、閩中黃檗賜紫鑑源禪師知師慧性夙具、遂度剃落、時年二十九歲也、自是矢志精修、光揚佛道、凡天下勝刹名山、智識耆宿、有一德可師者、莫不歷參請益、究徹玄徽、時密雲悟和尚費隱容和尚、父子同時名震海內、適密開法金粟、龍象畢集、不下萬餘指、遂往參依、日契玄機、歎爲異目、閱六載

辭歸、住靜獅子巖、及費主席黃檗、擯居版首、於是道益高、德益厚、親承記囑、遂得臨濟正傳、會黃檗虛席、衆延師補之、以多年荒圮之道場、一旦重興、儼然東南一大禪林、皆師之力也、後之浙省覲費和尚於金粟、留主崇德福嚴、移長樂龍泉、再回黃檗、前後十七年、所至之地、緇素雲集、凡名公鉅卿耆英碩德、參叩問道無虛日、師不立奇異、隨機導化、無論賢愚高下、得一言半語、皆能了悟自心、誠禪宗之指南、救時之藥石也、迨大清順治癸巳〇十年、當我承應二年、冬、扶桑國長崎興福住逸然會公、特奉王命、差僧古石聘師東渡、師念乾坤一體、大道無私、彊域雖殊、佛性不異、遂於甲午〇三年承應夏六月、航海而東、時波濤洶湧、舵工失色、師從容、書免參二字、浪遂平、海族數十萬、附舟而行、七月五日登岸、則瑞光燭天、咸言乃師入國啓化之徵、於是首開法與福、越明年、移崇福、秋應攝州普門賜紫龍溪大德等請、說法當寺、蓋日國禪宗、自宋蘭溪隆倡起之後、數百年間、寥々不振、及開師至、如撥開雲霧、皎日當天、舉國感激加歎、以爲古佛重臨菩薩再生也、六七年間、隨機普化、咸渴歸誠、萬治戊戌〇元年冬、之江都、大將軍〇家綱德川延見、寵遇異常、而酒井空印閣老、暨列州牧伯參謁、皆恨相見之晚、既而大將軍傳命留師、行化賜地洛南大和、建立梵刹費金錢鉅萬、丹碧輝煌、何異珠宮寶殿、復捨莊田爲齋糧、以垂永久、師仍以黃檗山萬福禪寺爲名、不忘本也、辛丑〇元年寬文秋、進寺、禪林儀制、燦然一新、會太上法皇〇後水尾晏居之暇、留念南宗、嘗詔開法、卽奏開、皇情大悅、朝士京尹時預法會、居四載、頗倦推拂、乃退休松陰堂、法皇尋以佛舍利幷御香黃金等、親洒宸翰、爲製讚曰、賜隱元禪師、迄延寶癸丑〇元年三月下旬、示微疾、四月二日、法皇降詔慰問、特賜以大光普照國師之號、師遙爲頂謝、越明日未刻、乃書偈坐化、世壽八十有二、〇略中嗚呼佛教自入中華、二千餘年矣、歷代祖師祖承、中間善知識大宗師、不過度化一時、或倡和一方、未有如師出群拔萃、傳臨濟三十二世之正脈、爲扶桑百千萬年之宗祖、十方瞻仰、三代楷模、故道非佛不明、法非王不尊、從來天子國王宰官皆爲靈山一會儼非師道德高深、安能以心傳心、如水投水無感而不應哉、

〔普照國師年譜上〕大清世祖皇帝順治八年辛卯〇我慶安四年師〇隱元六十歲春、付卽非一、重修上善塔於桑池園之左、夏鳳山也嬾圭長老應日本崇福請舉爲座元秉拂、未幾東渡、厄於水、師悼以偈曰、悶來窻底嘆離騷、衆角何殊鳳一毛、不忍睡餘混細壑、通身手眼出洪濤、是後師應日本一段因緣實基於此、〇略中

明曆治年乙未

師六十四歲、解制後差僧、通書候徑山費老和尚、略曰、日本所請原爲鳳山圭首座弗果、其願再請於某、似乎子債文還也、前承座下嚴訓、卽修書辭之、不意去冬復差僧親到黃檗懇請再四、念其誠至故許之、第某生平雖無過人、惟一味率眞爲人、亦有率眞者從之、故遠遊異域、與家舍無二、在此在彼、無非擴充和尚之道也、老和尚得書喜甚、顧謂衆曰、元長老達應無虞、吾道東矣、特書正法眼藏一幅、如意一枝、法帖一函、併手簡以復二月建興福山門、扁其山曰東明、〇中略三月廿二日、受崇福檀越請以了圭首座先年公案、〇略中是夏、興福崇福兩處安居、海衆雖多規令肅然、洞宗鐵心大德參見、〇略中七月望日、兩處解夏、會竺印上座齎賜紫龍谿大德等書請師住攝州普門、師曰、老僧年邁、遠涉洪濤、以踐長崎之信、足矣、那堪又遠應乎、卻之至再、既而二鎭主及竺印懇請不已、乃許之、〇略中八月初九日、應普門請辭衆上堂、是夜宿諫早、鍋島信濃太守命舟迎接、〇略中十六日、推舟下關待風、偶閱西湖圖、嘆曰、諒此生不能再到矣、九月初五、至大坂江口、會高麗國朝貢至、觀者如堵、師不及登岸、易小舟沿河而上、明早龍谿大德率衆迎進普門、說偈示衆、忽有靈鳥遠座數匝、止屏上頻鳴、移時方去、一衆嘆奇、未幾京君板倉防州太守造謁謙恭致重、恨相見之晚、尋同寺主等請師開堂祝國、由是碩德高士聞風而至、

〔普照國師年譜下〕萬治元年戊戌

師六十七歲春、示慧林西堂丹羽玉峯居士、法語作南禪開山大明國師眞讚、大坂性印諸檀信請藏經至、師說偈云、杖藜指處印文開、寶藏三千特送來、一句廣含無量義、法輪常轉在蓬萊、六月、黃檗住持慧門沛公、同檀越等復命使致書延師回山、而徑山老和尚催簡亦至、師一々裁答、七月、寺主江府回、欲延

師彼中行化、師力拒之、堅請至、再、勉從其誠、九月初六、啓行、人馬皆從上發也、十八日、至江府寓天澤寺、士民參謁無地、以容師毋論貴賤、以平等慈接之、十一月朔旦、國主○德川家綱延見於西宮、未幾辭回、承賜衣金、師爲放生作福、用綿國祚、酒井空印閣下值考遠忌、延師至長安寺、拈香問法要、又稻葉美濃守閣下搬養源寺落成、請爲世尊安座、次過海福寺、獨本上座請師爲開山、示以偈廿八日離天澤雲谷大德延至紹泰寺、臘月八日抵參河州、水野監物居士接入城留宿、問答機緣一則、十四日、到普門、師向有相州鎌倉禮塔之念、時逼歲暮不果、乃作東渡諸祖讃十二則以表同志也、○中略

寛文十三年癸丑

師年八十二歲、正旦書偈囑獨本源、齋後杖笠巡寮云、老僧托盌行脚去、侍者相岩云、與和尚一文錢、師呵々大笑、二月三日、上皇○後水尾降旨問法、師奏答稱旨、賜錦織大悲像、副以御香、○中略是日○十九日當大士誕日、師坐龕中、謂衆曰、老僧他日委息、當停龕三年然後入塔、下午示微疾、廿二日、爲嗣法獨照圓題自賛、侍者梅谷題彌陀像、三月朔日、門弟子幷護法宰官問候者接踵而至、師應答如常、初六日、示梅嶺侍者偈、忽顧衆云、汝等許多來者裏作麼、總無一人賛得、正是父子上山各自努力時也、遂遺語幷偈寄福唐黄檗及諸護法、勉其護念祖庭、三十日、上皇遣使存問、進謝恩偈云、廿年行化寓東方、屢受洪恩念不忘、珍重上皇增壽算、西來正法付敷揚、下午、囑左右散道具、乃曰、老僧去後汝等有志扶持法門者、當以法門爲重、以道自責、不可循俗、苟求聲利、自喪至德、若不依吾訓、非吾眷屬、四月朔日、師念行化此方、蒙大將軍賜地開山、檀恩不淺、特書偈致謝云、西來萬里老桑門、賜地開宗感國恩、今日功圓恭致謝、河山位鎮永長存、初二日、上皇特賜大老普照國師之號、聞師疾不起、嘆曰、師者國之寶也、倘世壽可續、朕以身代之、其尊崇如此、

〔續日本高僧傳五　淨禪〕城州黄檗山性瑫傳

釋性瑫、字木菴、俗姓吳氏、支那國泉州晉江人也、○略中崇禎二年、禮開元寺印明和公剃染、時年十九也、

○略中大清順治四年、掩關于紫雲、翌年謁隱元于黄檗、○略中十一年冬、永春縣諸士紳翰林確菴張公等、請瑫出世于象山慧明寺、明年春、囑寺鐵山西堂自回紫雲、夏六月、承召東渡、蓋當本朝明曆元年、先是、薩謙師弟東渡、住長崎分紫山、及瑫登岸相迎居之、時年四十五也、寛文元年、寓新黄檗、三年冬結制、衆將五百員、瑫與卽非首衆于兩堂、臘月開戒會、擢瑫爲羯磨、翌年秋九月、繼席黄檗、爲第二世、八年、幕府賜白金及良材、新建大雄寶韋駄殿禪悦堂、十年夏五月、勅黄至山特賜紫衣一襲、是年、端山居士粉瑞聖寺於江戸、請爲開山祖、瑫命山爲紫雲、示不忘舊居、無何回檗、山延寶二年、再住瑞聖、冬十二月、開三壇大戒、緇素受者不可勝計、明春擧鐵牛機公、補其席、瑫已七十、自主席本山十又七年、王臣嚮化、龍象滿筵、殿堂門廡煥然一新、八年春退席入紫雲院、清隱長養、五更寒暑、貞享元年春正月、舊痾復起、自知期至、召南岳宗公懇囑後事、十九夜顧謂衆曰、老僧行期已逼、汝等不得遠離、宗哭留曰、願師少住世、瑫曰、釋迦不現長年、況老僧乎、宗請末後句、瑫曰、一切空寂、萬法無相、此卽老僧末後句也、宗曰、大衆謝和尚慈示、瑫良久顧視左右、怡然而逝、實貞享元年正月二十日丑時也、留身三日、肌膚柔輭、頂有暖氣、藏全身於萬壽塔、閱世七十四、法臘五十六、嗣法者五十餘人、所著有廣錄三十卷、併續錄七卷、信州象山、作州千年、豆州高勝、參州永福、崇爲開祖矣、

○按ズルニ、異國往來略譜ニハ、明曆元年七月、木庵長崎ヘ來トアリ、

〔先哲叢談續編一〕戴曼公、名笠、字曼公、號荷鋤人、明杭州人、○略中曼公歲向五十、天下騷擾滿眼虜塵、不勝慘憤、乃往長水之語溪、晦養踪跡、時有粤人招致曼公、乘桴浮海、快滌煩襟者、癸巳上春發帆、三月、直著崎嶼、是爲承應三年、鎮臺橘正述甲斐庄喜右衛門請淹留於此、馳書上乞、曼公在崎一年而辭歸、是爲蹈海之啓行矣、翌年甲午七月僧隱元、應徵聘東渡、將大振錫黄檗宗旨於此土、偏求堪書記之任者、曼公歎曰、將至耳順、命有幾何、矢心脫白、以畢殘喘、狀求出家、乃歸之薙髮、○略中曼公隨從隱元、總七年、後辭歸崎嶼、寓于興福寺、或居福濟寺、或寓廣壽、而數省覲隱元、不減其

初、寛文十二年壬子八月省于莞道而還、途中病起、〇略中春秋七十七〇略中侍者護命等護葬於莞道黄檗山、〇略中高天漪從游曼公數年、東到之後追思負恩之深、常欲得一區之間地造營祠堂、距于都城五十里、河越治下野火止邑有一大刹曰金鳳山平林寺、故閣老河越侯之所建立也、其子院聯芳軒頗有隙壤、天漪就其住持僧靈峯及其徒默雲者、而相謀、造弔舍、題曰戴溪堂、〇略中舍側建石碑、天漪自製文、

〇按ズルニ、朱禎桐縣志、佩文齋書畫譜等ニ、戴笠字曼公、杭州人、乘桴入海、後不知其所終ト記セリ、コレ等ハ彼ノ國人ガ、曼公ノ我國ニ遁レシヲ知ラザルニ由ルモノナリ、

〔異國往來略譜三〕明曆三年丁酉

一明國の禪僧卽非渡來

〔先哲叢談續編一〕戴曼公〇略中

寛文五年乙巳三月、僧雪峯名如一、字卽非、浙江紹興縣人、東渡無幾開山於豐後州廣壽、遙東曼公虛座以待、時曼公在宇治、輒翻然往、不禪餘喘、操觚之任、懃勞不息、雪峯感其志、特就山中造營精舍、以爲憩息之所、曼公寓此、自扁曰白雲堂、

〇按ズルニ、檗山記錄ニヨルニ、宇治萬福寺住職二十一代マデハ支那僧ニシテ、コノ內十四代ノ龍統棟禪師十七代ノ祖眼明禪師、十九代ノ仙巖嵩禪師ノ三師ハ、日本人ナリ、而シテ二十一代ノ大成漢禪師ハ天明四年二月十日ニ遷化シタリ、此後、支那僧ノ渡來ナシ、

一明國の禪僧傳

〔續日本高僧傳一法本〕常州祇園寺沙門興儔

釋興儔、字心越、一號東皐、明杭州金華府蔣氏子、母陳氏、崇禎己卯八月廿八日生、投吳門報恩寺禮俗叔斂石公雍染、初依覺浪、康熙戊申〇八年參翠微濶堂、居二載、堂問狗子話、儔將啓口、堂一喝、如此者七八次、他日又入室、堂喝出、平生疑碍氷釋、堂印證付偈曰、無紋印子量虛空、印破虛空繼堂風、吾門種草常垂秀、東傳耀後示千鴻、時年三十三也、會明淸移鼎、隱西湖永福寺、有明僧澄一、住崎陽興福寺、聞儔

名望、遠攄讓席之心、而儔亦有乘槎之心、因應其請、得々東來、我延寶丁巳〇五年也、是時有異派僧嫉儔法化、睨視不敢親近、竟以不測事誣儔、閉之幽室、將終其身矣、于時水戸中納言光國源公、學綜儒佛、崇尙信義、聽其厄於奸僧、憤然論奏廟堂、乃脫其難、遠遣車騎迎來水戸、營構祇園寺、〔善曰天德〕請爲開山第一世、於是有總寧丹心、大中連山、青松如實、經山獨庵、龍泰、鰲山、慈德丹嶺等爲之左祖、毘贊宗猷也、元祿壬申冬開堂、雲衲輻湊一千七百人、〇略中元祿九年秋示徵疾、源公來問候、儔諄々囑以衞道、公愴然而訣、九月廿九日、辨愚痴齋召吳雲西堂付衣偈、晦日倚椅顧視左右曰、五十有餘年游生死海中、擺手沒巴鼻、喝一喝坐逝、壽五十七、臘四十七、

贊云、儔公、禪餘遊戲翰墨、巧書善畫、生動活潑、灑々落々、謂之文字般若、亦可也、

〔古畫備考十一釋內〕心越禪師、〇略中印文、有鷲峯野樵樵雲西湖一人黑樵之字、

〔續日本高僧傳五淨禪〕攝州佛日寺沙門性機傳

釋性機、字慧林、俗姓鄭氏、支那國福州福淸人也、宋一拂先生生介公之後、〇略中順治六年、直抵黄檗參謁隱元和尙、元一見器許、卽進僧堂力究、趙州布衫公案、屢就心盤卽非二公請益、〇略中機年四十六、倚元到于長崎、元公初開法於東明、次移聖壽及普門、機領原職、或任綱維、參扣不敢少廢、適罹腹疾、愈加淬礪、忽打翻藥銚、通身汗下、乃曰、趙州布衫今日看破了也、疾亦遂瘳、元證明擧爲西堂、寛文中、靑木侯創建佛日寺于攝津、請元和尙爲開山、元命機至之、〇略中寛文五年、黄檗木菴和尙戒會、請爲羯磨師、〇略中延寶八年春、承釣旨住黄檗山、法雷大震、翌年老病交作、〇略中是秋開毘尼壇、七衆受者五百餘人、〇略中仲冬十日、剃浴更衣、吉祥而臥、翌日〇略中奄然終焉、天和元年仲冬十一日也、〇略中春秋七十三、〇略中

遠州初山寶林寺沙門性瑩傳

釋性瑩、字獨淇、俗姓陳氏、支那國福建莆田人、宋丞相陳俊卿之裔、明孝廉御史茂烈公雲孫也、〇略中大淸順治八年夏參隱元和尙于黄檗、〇略中二十七歲隨元應化此方、激揚師道、寛文三師、元開法黄檗、瑩

任西堂分度秉拂翌年應遠州近藤語石居士請、〇中略便行、夏六月相處于初山、建立精舍、五年冬十一月、開堂拈香大樹法幢、一住十八載雲行雨隨龍象蝟集、次赴上野創國瑞寺、天和二年春、承旨繼席于黃檗、接衆十一年、開戒兩次、雖住持事繁、律身精嚴、兼修淨土、日課彌陀經四十八卷、禮佛三百、或五百返、恒持佛號、未曾暫停、元祿九年、遂退隱于獅子林、遠州語石居士數請回山、十年二月、再開菩薩戒於初山、受者萬餘人、〇中略是秋諸師爲營壽于希年、營禪誦禮懺、未嘗暫停、衰朽已極而無微疾、身心怡悅、常面西坐、寶永三年正月、〇中略泊然坐脫、享年七十九、嗣法圓通、成悅、峯章等若干人、所著有語錄三十卷、矣、〇中略

黃檗山東林菴沙門性善傳

釋性善、字大眉、支那國溫陵晉江許氏子也、父瑞宇、家衰客遊于日東、善事母李氏、孝謹、及母卒、乃依舅氏、遷居玉融、與龍田良治禪歸締方外交、長齊薰修淨業、聞隱元和尙居邑之獅子巖、乃往投之、時年十七、元一見器許、尋爲剃度、號曰大眉、〇中略順治十一年元應日域請善先啓行預爲區畫、雖乾坤鼎革之秋、如人無人之境、夏六月、元蒙仙巖藩主備舟護送、直到長崎者、蓋善扶助之力也、首自與福崇福次遷福元、每任維那整理禪規、綽有體裁、寬文元年、新開萬福禪寺、善轉都寺、督造梵宇、極力經營、禪林禮樂、內外肅然、二年秋、辭職、結茅于山中幽邃處、榜曰東林菴、鑿池栽蓮、日修禪誦、自有廬山之致、〇中略十年、黃檗開三壇戒、請爲羯磨師、延寶九年、隱元戢化、善伴龕百日、衣不解帶、食不下咽、每擧首瞻像、悲淚滿目、師資機感出於天性、自是善亦厭世矣、七月末、偶染微疾、嘗念鐵眼禪師所募刻大藏之版、未有鎭藏之處、乃捨東林爲寶藏院以貯藏版焉、十月、初祖忌、梅嶺雪公入室、善自知病不可起、以國師所傳衣拂親付、既而病勢沈重、面諭諸徒曰、吾火後將骨灰水葬、不得留指甲許、造塔占常住地、貴世間財無益於事也、火滅烟飛、吾之能事畢矣、〇中略十八日把筆書偈曰、住世五十八年、了却人間報緣、而今撒手歸去、大千世界坦然、擲筆趺坐、少頃泊然而逝、延寶元年十月十八日午時也、世壽如偈、僧臘四十二、所著有

東林夢語矣、〇中略

攝州國分寺沙門性派傳

釋性派、字南源、俗姓林氏、支那國福唐福清人也、年甫志學、禮無淨璋公于黃檗爲沙彌、乃事隱元禪師、〇中略順治十一年隱元東渡、侍師而來、爾後才名徧于神州、侍元公二十餘年、以香林稱之、寬文八年、開華藏院於檗山之左、兼建慈光堂、〇中略延寶元年逮元唱滅、重編廣錄、修補年譜、心喪既畢、遊歷畿內及關東諸勝、八年秋、應攝州國分寺請、寺聖武天皇所勅建、而天竺菩提仙那開基也、元祿元年夏四月、東大寺公慶上人重興大佛殿、設千僧齋、請派拈香、以當法會首領、抑大佛殿開創之際、菩提仙那從今之國分應請而稱開眼導師、派今應之、蓋不忘所自也、無何國分殿閣、門樓房舍、燦然改觀、三年秋八月、開堂演法、一時名宿降臨側聽、是多結制、大開爐韛、鍛鍊學人、五年春、到正與寺、寺主覺峯曜公請於陞座、崇爲中興祖、未幾回山、退居高壽軒、擧柏堂首座繼天德席、六月二十五日、書偈座脫、世壽六十二、戒臘四十八、嗣法印光晏鐵梅香等若干人、所著有鑑古錄三十卷、芝林集二十四卷、並行于世矣、

五雲峯漢松院沙門性獅傳

釋性獅、字獨吼、俗姓朱氏、支那國福州府鎭東衛人也、〇中略年方二十、與依止師腰包頂笠、參黃檗隱元和尙、〇中略順治十一年、元應此方、獅年三十一、輔佐東來、三遷法社、未始不勩其勞、密鍊潛鞭、益臻玄奧、〇中略寬文元年、元移居宇治、獅領堂司、未幾擢爲監院、晨昏攝衆、孜々扶化、十一年秋、就五雲峯下建漢松院、以懷終焉之志、明年辭職住院、〇中略延寶中、元將圓寂之際、付以法衣幷自贊遺照矣、〇中略元祿元年十一月十六日、書偈曰、我是西來吼比丘、扶師東海振宗猷、閱世六十五歲戒臘五十三、門人啓峯明寂傳、字道本、號茝亭、又號竹林、享保中來寓瓊浦、〇長崎國人以詩送者三十九人、各自書爲一小卷、有桃

〔隣交徵書初篇二〕送茝公和尙應聘東岐幷求喝政二首詩略〇

支那僧爲使節渡來

華潭水四題字、今載一人眞書、平安三井氏藏、

〔濟北集十〕一山國師行狀

師諱一寧、號一山、大宋國台州臨海縣胡氏子也、〇中略大德二年、〇當我永仁六年我商船薄明州、太元國主、初有狙窺我之心、故辛巳戰艦數盈十萬、然風濤一夕破蕩狼狽、是以恐我國之神靈、贏志未歇、屢畫奇謀、爲此方傾鄉佛乘、欲聘有道衲子、勸誘以爲附庸、愚溪既當其任、然老病未遑發、偶聞商船至、欲成先策、遴選俊髦、臺評湊師卽勅、宣慰使阿答剌相公遣一省郎及慶元府判官僧錄司知書昌國知州僧正司知書等五十餘人入寺、出宣慰使手書及僧錄司官書曰、皇帝聖旨下省府、賜師金襴衣及妙慈弘濟大師號、泛溟波到日本、通國之好、乃以衣帖付師、軟語慰勞、師思不可逭受之、明日一行官將師到府、府官僧官皆在焉、細說通好之事、而付元朝信書一通、又差官吏五人侍衛、蓋備師之逃匿也、尋燕參政公來、持國主詔旨及省部文書宣讀了、急請登舟、歸寶陀宿、一日行官吏差三船送日本舶、於是乎風浪鼓蕩、檣折柁摧、修補僅成、進馳三四日、到高麗絕徼、又速奔一日、出沒濤山浪嶽間、飄簸而著于博多、本朝正安元也、舶主以書白元帥府、府議曰、敵國命使不活矣、或曰、宋僧之入我土多挾道術也、傳聞、寧公元國望士、其受重寄、又可知矣、而又出于抑逼也、且夫沙門者福田也、有道之士無心於萬物也、在元國元之福也、在我邦我之福也、豈必區々慕子卿之節哉、若長朽于窮裔、非吾土鄉比丘之素也、因茲追赴相陽、而猶居僻處未入府寺、東方緇白、初聞師鋼居大盡焉、及其來、奔波禮謁只恐後、山內寓舍門外如市、十二月七日、主福山大道場、叢規肅如、萬衲鑽仰、府主耳其提唱、悔中塗稽滯矣、會曇西澗謝庵山事、府命命師權之、兩山一矩翼如也、已而辭建長、獨正圓覺席、又四歲、偶以昏眩疾退居壽藏、府帖再領建長、病魔荐孽、退休保養、府命以鹿峯壽塔其地狹隘移于巨福右掖杉谷菴成名玉雲、蓋癡絕祖其塔菴號玉山、頑極考雲西並取扁焉、不忘本也、老拳長杓翛然自怡、然旦望禮賓邁福鹿主人也、無何又起領淨智寺者四凉燠矣、正和二年、圓規菴寂龍山、龍山宮寺望高輦轂、初建治太上皇〇後宇多聞師德譽、覬見未由也、於是乎、勅元帥府召師、補南禪之缺、師老難于羈旅、而詔旨府命逼而不容辭、來領山務、太上皇洊入山問道、搢紳之儔、蹙頻戶外、輦下道俗喜叢社之有人、然老病侵尋懶於槌拂、數上表解院事、太上皇眷遇優渥不允、以故一再潛去、其遁越州也、宸書慰諭促回、文保元年秋、恙瘵彌留、十月益革、太上皇幸寺、蹕龜山廟塔、時々問疾、二十四曉手染遺表曰、頓首法皇陛下聖駕幸本山、寔緇門觀光也、某不幸臥疾數日、百體舉而不仁、不能瞻望龍顏、大變時至幼質將攝潛攄忠情、入無生三昧耳、年月日、臣僧某頓首、表獻于廟堂、又書偈曰、橫行一世、佛祖飲氣、箭既離絃、虛空落地、置筆而化、壽七十一、太上皇得表蒼皇幸寢室、趺坐儼然、宛如生也、君臣嗟悼、太上皇便賜宸奎、贈圖師之號、

〔元史二十成宗〕大德三年三月癸巳、命妙慈弘濟大師江浙釋敎總統補陀僧一山齎詔使日本、詔曰、有司奏陳、向者世祖皇帝嘗遣補陀禪僧如智及王積翁等兩奉璽書、通好日本、咸以中途有阻而還、〇中略補陀寧一山、道行素高、可令往諭、附商舶以行、庶可必達、朕特從其請、

〔善隣國寶記上〕應安六年癸丑、大明洪武六年、

瓦官寄天台座主書曰、〇中略蓋前兩年、皇帝凡三命使于日本、關西親王皆自納之、于時以祖來入朝稱賀、帝召天寧禪寺住持祖闡、瓦官敎寺住持某、命曰、朕三遣使于日本者、意在見其持明天皇、今關西之來、非朕本意、以其關禁非修不通故、欲命汝二人、密以朕意往告之、曰、中國更主建號大明、改元洪武、鄉以詔來、故阻於關西、今密以我二人告王知之、大國之民、數寇我疆、王宜禁之、商賈不通、王宜通之、與之循唐宋故事、修好如初、又命曰、朕聞、其君臣上下、咸知奉佛敬僧、非汝僧不足以取信、彼有禪敎僧欲訪道中國、悉使之來無禁、惟汝二人往哉、無忽、卽賜之三衣與十八淨物之切於用者、又恐至彼言語不通、選關東禪僧之在中國者、得東山長老椿庭壽公、中竺藏主權中巽公、以其參方有行、命貳以行、某謂通國使命、佛所戒也、使無補于佛之敎而欲犯佛之戒、某雖死弗爲也、今皇帝既以我爲可信而遣之、則是

我持不妄戒也、勸人禁寇、不盜戒也、修兩國之好、使商賈交通、民安其生、兵不加境、不殺戒也、持佛之戒、而使帝者使、則是爲佛之使也、故承命之日、以此而不辭云々、五月廿日命舟四明、五日至五島、五日而抵博多、

右大明天寧寺住持仲猷諱祖闡、瓦官敎寺長老無逸諱克勤、奉使來、久寓筑紫、因瓦官寄日本天台座主書中、所述如此、先是三度遣使、齎詔書來、然關西不通之、故命瓦官天寧兩長老、直告來意耳、太祖眷々於日本可觀也、

〔夢觀集一〕送勤無逸使日本

大明建國如虞唐、萬方玉帛朝明堂、五百僧中選僧使、奉詔直往東扶桑、〇略中白河關高玉繩下、天上靈梅移北野、八衮神師解豢龍、十歲小兒知習馬、自從日姓開封疆、履地不敢稱天王、一君四相贊吁咈、本支百世同蕃昌、讀書不貴論王霸、上下唯知尊佛化、尚想兵殘五季餘、全奉台書後中夏、故人自是我宗傑、北峯印燈垂六葉、此行豈誇專對才、要播玄風翊王業、

〔翰林胡蘆集〕明德八年、進貢于大明、同九年八月、迎大明之舶、九月五日、接大明之使天倫禪師一庵講師於北山別業、儀仗甚盛矣、大明老皇帝、封以王者之號、

〔翰林胡蘆集〕以大明正使堆雲大和尚韵

和漢通書唐以還、不容雨嗇與風慳、龍齡鶴壽今幷按、老子出關師入關、

〔翰林胡蘆集〕大明正使堆雲大和尚、有書見寄、自三條而府而至、披之則八句與小律在焉、又告有急便、

卒次韻奉寄、相逢一唉、翹足以待、恕之、

旅泊移船浦々雲、天涯人事杳無聞、乾坤一氣初相合、郡縣兆民今正分、筆下九州兼四海、僧中大策又高文、殘星數點雁橫處、起托封書先問君、

〔續善隣國寶外記〕於相國寺

欲把酉來問老兄遠勞桑海訪蓬瀛、話餘先進清茶飲、東院千狀萬古情、

和

西笑承兌

何圖陋室接師兄爲國爲民浮大瀛、且喜今朝作交會、相逢一刻總多情、

和

景轍玄蘇仙巢

國隔東西心弟兄感師海水慕登瀛、瓊筵時有雨華美、何以新詩不寫情、尤喜高僧到梵宮、語言未解意相通、遙超江海忘勞苦、誰爲國家成大功、靈岳佛經停遺敎、徑山祖意弘宗風、似無遠近自他隔、日本朝鮮一榻中、

慶長十年乙巳、朝鮮和使松雲大師僉知孫文來朝、於伏見城禮聘、內府家康公、將軍秀忠公、相國寺西笑和尚以僧錄司招大師祗待之、次唱和詩、

〔杏林雜話〕戴曼公杭人、少學舉子業、遊虞舍、時雲林龔廷賢年八十餘、尚强健爲醫、曼公從之遊、盡傳其術、明亂棄儒冠而隱焉、後歸我在崎、舉應吉川氏之請、往來於長防之間、其臣池田嵩山通稱七兵學書於曼公、曼公審其爲人、因謂曰、我有治痘禁方書、欲悉授子、子學之三年、必臻其妙、嵩山拜而受誨、遂大著於世、其書大旨、淵源乎龔氏痘疹全幼錄云、

曼公博學能詩、兼工篆隸、嘗在崎、逢舊友喜賦、〇略申海內學書者最多、而高玄岱獨極其蘊奧、曼公晚年慕僧隱元、遂爲徒弟、更名性易、而爲醫如舊、曰濟物是佛心、道本廣大、無所不在、其治不規規成法、而得驗每多云、寬文十二年終于菟道、

〔二老略傳〕黃檗隱元、其徒數十人長崎に至る、隱元立書の事を卽非にもとひたるとなり、卽非の書は筆法にならひあり、黃檗中の善書なり、獨立は隱元の書記なり、元來俗人にて、俄に剃髮して、日本に來る故に、法の事は疎しとなり、尤晉人の法はなし、且撥法を用ひず、故に雪山先生も、方外の友となしたれども、書の事は問はずとなり、

雪山先生〇肥後國細川家醫官北島三

印度僧

〔續日本紀十聖武〕天平八年十月戊申、施唐僧道璿、波羅門僧菩提等時服、

〔扶桑略記拔萃聖武〕或記云、同年十〇天平八年七月、天竺婆羅門僧菩提始來本朝、天皇建東大寺、爲開講供養、勅書曰、屈請行基大德、右奉爲大佛供養講師、屈請如件、辭曰、沙門行基謹言、不堪奉仕大佛會講師事、右從南天竺國可來觀自在井、願相待可被請用講師者、天皇感念、止事待來之間、南天竺迦毗羅衞國（私云、迦毗羅衞國、是南天竺如何、非婆羅門僧菩薩爲講文殊師利菩薩、自天竺至大唐五臺山、時老翁逢路告云、文殊爲利衆生赴日本國、爰菩薩感念戀慕、爲遂本懷、進來此朝、

〔南天竺婆羅門僧正碑〕僧正、諱菩提僊那、姓婆羅遲、婆羅門種也、〇中略冒險經遠、遂到大唐、唐國道俗仰其徽猷、崇敬甚厚、于時聖朝通好、發使唐國、使人多治比眞人廣成、學問僧理鏡、仰其芳譽、要請東歸、僧正感其懇志、無所辭請、〇中略以天平八年五月十八日、得到筑紫太宰府、〇中略仍勅住大安寺、供給隆厚、公王英彥、莫不宗敬、行基又率京畿緇素兩衆五十餘種、前後合三度僧正諷誦華嚴經、以爲心要、尤善呪術、弟子承習至今傳之、〇中略以天平勝寶二年、有勅、崇爲僧正、大法申斯紹降、群生以之回向、雖道迹未彰、而時英咸謂已階聖果、但夜壑貿遷、閻浮業謝、以天平寶字四年歲次庚子二月二十五日夜半、合掌向西、辭色不亂、如入禪樂、奄然遷化、卽以同年三月二日、闍維於登美山右僕射林、春秋五十七、

〔元亨釋書十方應〕釋菩提、南天竺國婆羅門種也、遙聞支那五臺山文殊師利靈應、發本國、駕小舟入唐、〇中略天平八年七月、行基法師奏曰、當迎聖僧、聖武帝詔禮部、鴻臚雅樂三僚向難波津、基從一百沙門、共官僚於海濱、調音樂、莊儀仗待之、須臾、西海波面小舟泛々漸近有二梵僧、〇中略勅館大安寺東坊、〇中略東大寺銅像爲開眼導師、號婆羅門僧正、天平寶字四年二月廿五日、

〔拾遺和歌集二十哀傷〕大僧正行基、よみたまひける、〇中略南天竺より、東大寺供養にあひに、菩提が、なぎさにつきたりける時よめる、

靈山の釋迦のみまへに契てし眞如くちせずあひみつるかな

外國僧歸化

外國僧雜載

返し

かぴらへにともに契しかひありて文殊のみかほあひ見つる哉

婆羅門僧正

〔元亨釋書十方應〕釋佛哲、〇〇林邑國人、〇中略伴菩提來、本朝樂部中、有菩薩拔頭等舞、及林邑樂者、哲之所傳也、

〔日本書紀二十推古〕二十二年五月丁卯、高麗慈惠慈歸化、則皇太子、〇戻戸師之、

〔續日本紀二十淳仁〕〔〕天平寶字二年八月癸亥、歸化新羅僧卅二人、尼二人、男十九人、女廿一人、移武藏國閑地、於是始置新羅郡焉、

〔帝王編年記八推古〕廿一年十二月、皇太子〇戻戸年四十二、遊行於片岡山、時飢者臥道陲、仍問姓名、而不言、太子視而與飲食、卽脫衣裳覆飢者、而言安臥也、則歌曰、

斯那提流耶、片岡山爾、飯爾飢天、臥留旅人、哀於夜那志、飢者賜衣裳幷歌、卽奉和歌曰、

班鳩乃、富乃緒川乃、多江波古曾、吾大君乃、御名於忘禮女、明旦遣使令視飢者、既死、太子大悲、則葬埋於當處、數日之後太子曰、先日飢者、非凡人、必眞人也、開棺觀之、唯遺衣裳不見屍骨、太子令取其衣、如常且服、〇中略飢者達磨和尙也、達磨、南天竺國香至王第三子也、

〔元亨釋書一傳智〕菩提達磨者、南印度香至王第三子也、蕭梁普通元年庚子、來支那、與武帝說第一義、〇中略其後八十有六年、吾推古二十有一歲癸酉、遊此方、〇中略其太子之所築墓今尙在焉、俗呼其地號達磨墳、

〇按ズルニ、日本書紀ニ、膩戸太子ノ片岡ニ遊行セシ時、飢人ニ衣ヲ施シヽニ、ソノ飢人死シテ屍骨ナク、只前ニ賜フ所ノ衣服ノミ殘リシコトヲ載タレド、達磨ノ事ナシ、蓋シ達磨ノ死後ニ、壙中唯隻履ノミヲ存セリト云ヘルニ由リ、附會セシモノナルベシ、而シテ日本書紀ニハ、太子ノ歌ヲ載セテ、斯那提流、箇多烏箇夜摩爾伊比爾惠氐、許夜勢屢諸能多比等、阿波禮於夜那斯爾、